四月十五日増刊

女學世界

さゝましの家風

第十二巻
第六號



女學世界定期增刊 さま〴〵の家風 第拾壹卷第六號 目次

玉環






元祖
最上醤油
上
開業貳百六拾七年
宮内省御用達
日英博覧會に於て
太平洋博覧會に於て
最高名譽大賞受領
釀造元
千葉縣銚子港
濱口合名會社
電話銚子二一番　振替口座五〇二一番

女(甲の四)

天女



女（乙の一）

●大隈伯爵令夫人御賞讃
●村井弦齋令夫人御賞讃

定價一瓶：金貳拾錢
送料荷造共金五錢

御化粧料
皮膚の營養品

早稻田の華

本品は植物より採取したる、溶解性蛋白質にして、在來の化粧料と異り、一度之れを、塗沫すれば、直に皮下へ注入せられ、皮膚の營養光澤を增し、天與の美質を保ち、皮膚のあれ「ヒビ」「アカギレ」「シモヤケ」「日ヤケ」「海水ヤケ」等に患む事なく最も「おしろい下」には「おしろい」ののりよく美顏となり給ふべし

大隈伯爵令夫人曰く「誠に結構なものが出來ました之れで皆さんが美しくなられて世々の美人國と言われたいものです」

村井弦齋令夫人曰く「先日頂戴した、化粧水を試みに子供の「シモヤケ」に付けましたら大層よく利ます何卒今少々送つて戴きたい」

皮膚の營養だに足らば、天然の美容を備へらるべし

東京市牛込區早稻田卷鶴町
製造發賣元　尾崎兄弟商會
舊大隈伯爵家養鶏場

東京市麻布霞町
糠精總賣元　南信堂藥舖
口座東京七八五〇番

東京日本橋(水天宮前)象印齒磨本舖安藤井筒堂
口座東京二一九五〇番

東京市京橋南傳馬町　大西白牡丹
口座東京九二一九三番

京都西洞院花屋町　糠精特約店　高橋龜次郎
口座大阪一〇〇四五番

特約販賣店

◎賣捌所は全國の賣藥店化粧品店雜貨店にあり

●診察時間毎日午前八時より午後九時迄院長診察

梅毒りん病　生殖器諸病　神經衰弱症　婦人病　わきが　ぢ

東京淺草瓦町
廿八淺草橋通
瓦町停留場横

中央醫院

りん病・梅毒・婦人病

子宮病　血の道　月やくとまりたる病　子なき婦人

腦病　生殖器病　神經衰弱

記憶力減衰　思考力等　生殖器病萎縮　遺精早漏　夢精發育不充分症等

わきが・ぢ・疾・皮膚病

ただれぢ　あなぢ　きれぢ　でぢ等　にきび　たむし等

▲病狀記し郵券六錢送れば其病を速治する專門醫中央醫院々長處方の特効新藥說明書を送る

東京市淺草區瓦町廿八番地
淺草橋通瓦町電車停留場横

中央藥院

女(乙の二)

女(乙の三)

日本一の味淋



富士山は其の容姿を誇りとす

万上味淋は經濟と美味を誇とす

一壜五十錢で能く三四十人前の調理に適す

万上

釀造元 堀切紋次郎

販賣所は到る處の酒店にあり

宮内省御用達

天下一品

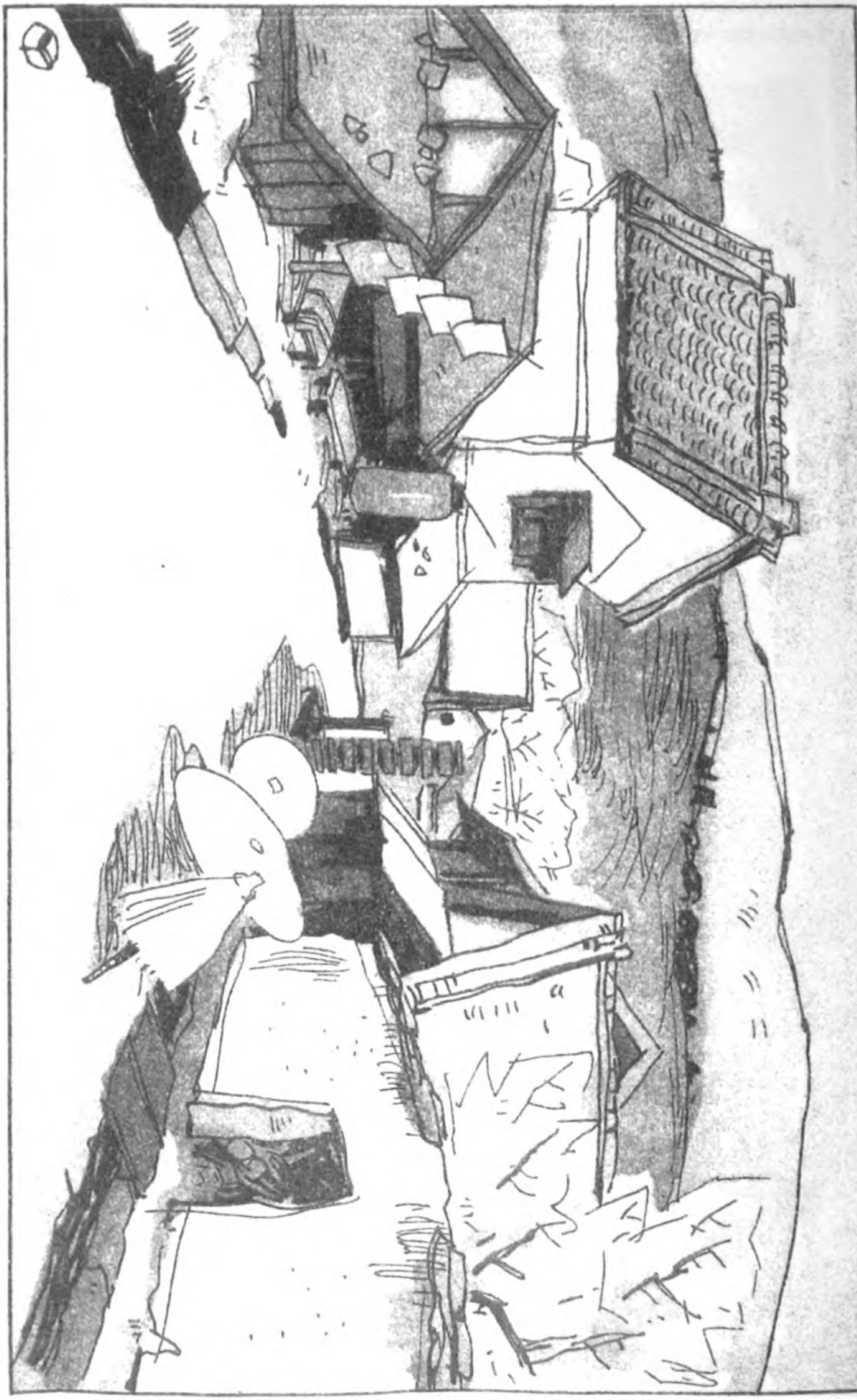
萬

最上醤油

釀造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醤油店に有之候

女(乙の四)



春晝



（丙の一）


美顔水
美顔水
色黒くとも
お顔の生地
あらくとも
歎き給ふな
美顔水在り
⊙色を白くし
⊙きめを細に
⊙つやを出し
⊙顔のあれ
⊙にきび
⊙そばかす
⊙吹出物等を未發に防ぐ
⊙又高等化粧用美顔水にて白粉は溶ば白粉は能く「のび」能く「のり」て美しきお化粧容易くでき上る事妙なり
本舗桃谷順天館大阪出張所

女(丙の二)

▼博文館圖書陳列所……館内にあり▲

癲癇症(てんかんびやう) 自療新法(じりやうほう)

余が多年の經驗學識上創製の特効新藥及心理療法に基く癲癇症ヒステリー性疾患の自療新法也●詳細は郵券封入照會●申込所京都市粟田口町三條南

元帝國醫科大學助手 ビーエッチ、シー 川崎近雄

男ちゞれ毛 女くせ毛

赤毛は何程の難毛も直に根本的矯正黒化良き艶の出る最新發見奇液を郵券封入申込の方に敎授し誓て美髪に治して差上升

東京麻布區材木町 岩阪澄子

禿(はげ)、脱毛(ぬけげ)、薄毛(うすげ)、生際(はえぎは)惡き(あしき)人(ひと)試(こゝろ)みよ……

東京皮膚病院發明山崎製

毛生液(モウセイエキ)



本劑は第一毛をはやし、ぬけ毛を止め、髪の毛はへぎは眉毛髪等の薄きをこく生じ皮膚病でき物ヤケド跡はげ其他あるべき所に毛なきに用て毛はへる事請合

○藥價三十錢、五十錢●特製一圓、二圓●送料六錢

本舗 東京市日本橋區馬喰町二丁目 山崎愛國堂

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇藥發明の爲め全治せる故世の同病者を救ひ度き志願に付望の方は郵券二錢封入にて御照會あれ

東京府下大森入新井村 川名助次郎

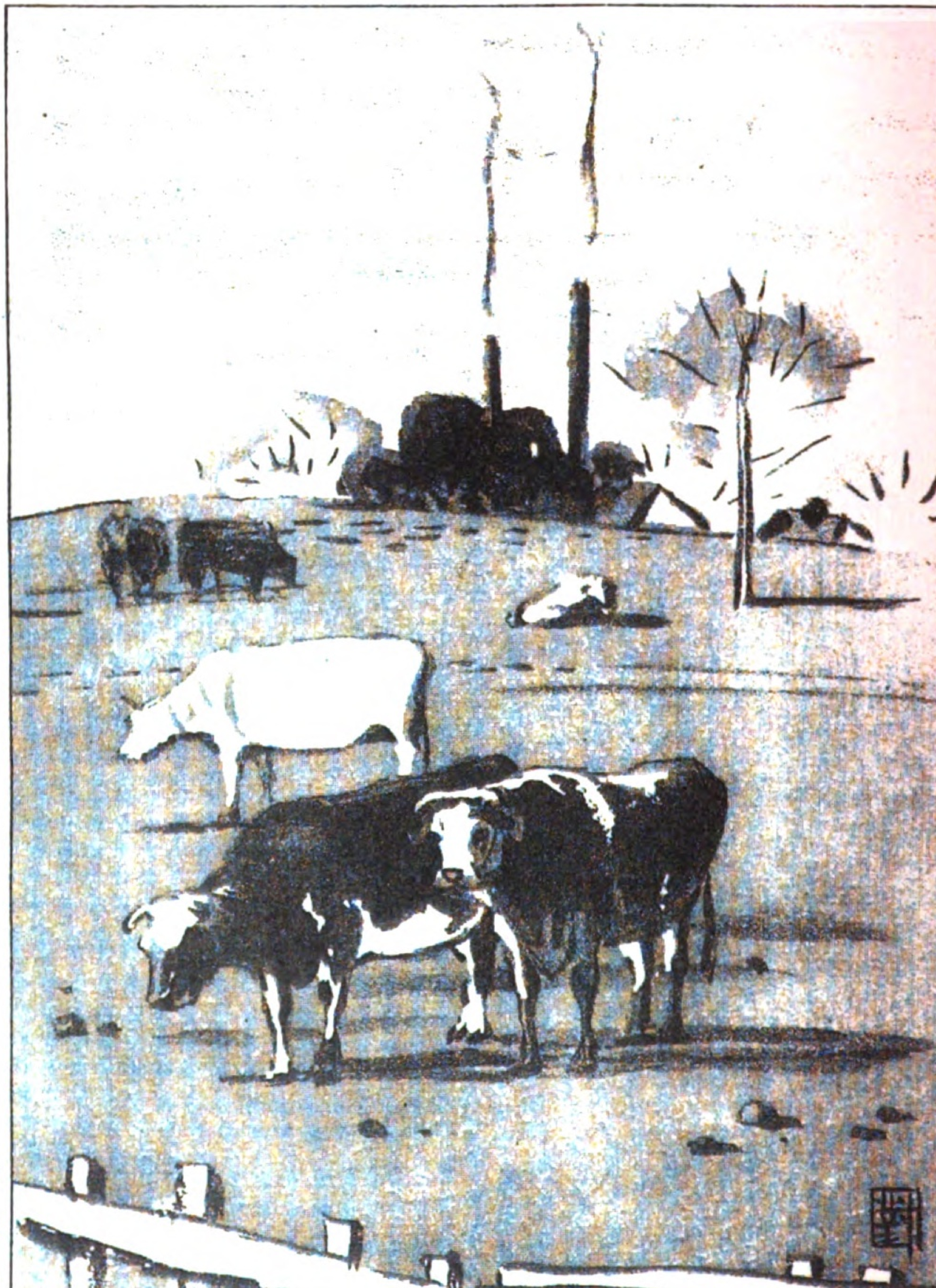
私立 東京女醫學校 生徒募集

◎五月一日新學年開始◎入學資格高等女學校卒業生に限る
◎入學願書提出期限四月廿八日迄

東京牛込區市ケ谷河田町(電話番町二〇一九)

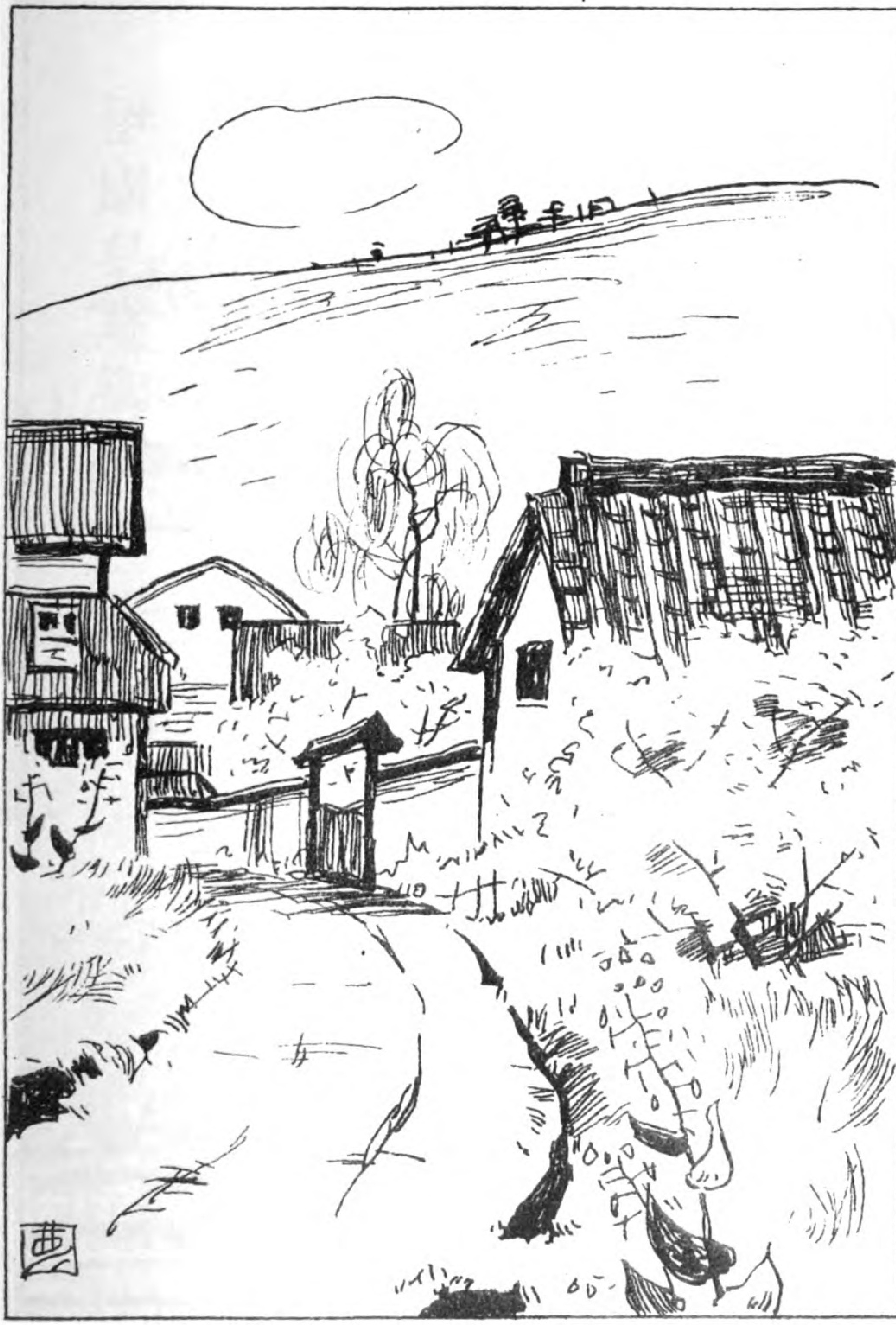
女(丙の三)

のどか



清水勘一筆

驛路の春





女(丁の一)

文章世界 第六卷第五號 增刊 （杜鵑號）

文章の研究と作法

▼作　法▲

現時の文章。新らしき情緒。思想の涵養。辯難攻撃の文。今の論文家。現時の小說。寫生文の面白味、新傾向の句、ブランデスの論文。現時の短歌、修辭の工夫。平面描寫の意義。型。月並とは何ぞや、觀察の仕方、新味ある山水、靜止せる對象と活動せる對象。說明式と描寫式、追懷、情緒、憧憬、日記の書き方。生活の日記。感想の日記。事實の日記。書簡の革命期。候文の書簡の運命。口語文の權威。讀書法。其の他數十項、

▼研　究▲

必讀の歌書。必讀の俳書。必讀の軍記。必讀の詩集。必讀の漢籍、必讀の辭書。其他各方面の必讀書數種を擧げて懇切なる解題をなす。

▼文話五篇……………文壇の大家

▼小　品）誌友の作品中、優秀なるもの數篇を
　公開狀）拔く。

▼インキ壺……………田山花袋

▼春季文壇の一瞥……………前田晁



（四月十五日發行）

菊判紙數二百八十頁
口繪石版寫眞版豐富
正價金廿錢
郵稅金二錢

東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

女（丁の二）



家庭美顔術用

化粧具箱販賣

金拾圓以上各種
説明書送料二錢

東京市京橋區竹川町十二番地

衞生美顔術　理容館本部

電話新橋三八〇四
振替口座東京一四一〇

東郷大將、片岡大將、上村大將題字
加藤中將、伊地知中將、小笠原大佐序文
海軍少佐　水野廣德君著

此一戰

菊判洋裝四百頁、ロコタイプ版寫眞版石版等　定價金壹圓
海戰關係圖二十六枚挿入其他本文挿畫數十圖　郵稅十錢
【附錄】公報、死傷者人名表等

▷大好評＝忽ち三版◁

鳴呼日本海海戰！東郷大將が「皇國の興敗此一戰に在り」と令するや士氣猛然として振ひ戰はずして既に敵を壓せりと云ふ本書題して此一戰と云ふ亦内容を見ざるも既に肉躍血湧の感なくんばあらざるなり著者は當時水雷艇長として戰に參與し偉功を樹て役後命を受け軍令部に於て海戰史の編纂に從事したるもの然れども官撰の戰紀は自ら簡明正確を主とするを以て專門家以外之れを咀嚼せずして止むべきを憂ひ乃ち本書を著せり書中戰前彼我の狀況より悽愴壯烈の戰況を敍する最も戰にして詳其の彼我戰略の巧拙軍機の粗密を縛れ大和魂「スラブ」魂を論ずる遺筆の雄勁誰れか軍務に從事する人の此の才筆あるに驚かざらんや小笠原大佐本書に序して曰く「卷を開けば君が燃犀の見と椽大の筆とは相俟ちて日本海海戰の光景咄々眞に逼り一搆一縱設者をして乍ち怒り乍ち泣き乍ち笑ひ趣味津々たるの間に於て不知不識忠烈の士氣を涵養せしむ」と近く六週海軍紀念日を迎へんとするに當り敢て之を江湖の諸彥に薦め且つ本書を以て此の振古未曾有の海戰を子孫に傳へられんことを望む

東京本町　博文館　振替口座東京二四〇番

女(丁の三)

洋裝の好季節



❀何故に子供の洋服が流行するかと申せば和服よりも手が掛らないで代價も安くて立派に見えると云ふ理由

❀何故に中野屋へ御註文になるかと申せば第一スタイルが宜く價も安く永年の經驗上御客樣の心になつて親切に相談相手になつて造て呉れると云ふ理由

注意 ◎東京市内御註文の御方は電話本局二九〇一番。端書なれば神田鍛冶町へ御申越し下されば畫形と切れ地見本持参早速御伺ひ御容姿に恰好いたす様調進致します

東京出張所 地方係　東京神田鍛冶町 (電話本局二九〇一)

中野屋洋服店

本店…横濱相生町五(舊辨天通四)電話三四四番

デリケート化粧水の好季節



❀花と美を競わんと思ふ御方は一度御試みなさい當店が責任を以て販賣する輸入原料故他に類なし

◉女學世界愛讀者には無送料とす

價 大金五十錢 送料八錢 / 中金三十錢 見本拾錢

夫人と令孃



鍋島侯爵世嗣夫人禎子（黑田長成侯令妹）　同侯爵第五令孃尙子

令嬢かゞみ



上圖、海軍々醫總監　本田忠夫氏令孃清子

下圖、海軍中將男爵　赤松則良氏令孫濱江子

家庭整理の指導

當代第一流の女子教育家編著

家庭百科全書

近時婦人教育の普及するや、女流の才學は一般に著しく進みたりと雖も、尙ほ之を日常家庭の上に施こすに臨み、輙もすれば實際に適せざるを憾むこと多し。是れ學校に在るの日には概ね理想の學修に止まるが故に、實際の應用に臨み、或ひは學ぶ所高尙に過ぐるか、然らざれば未だ十分ならざるの憾ある所以なり。若しも家庭に教師ありて一々實際の問題に就て指導せんには、世の賢妻賢母は言ふも更なり、未だ在學中の女流學生達の爲にも如何に裨益の多かるべきかは、敢て多言を須ゐざることながら、人ごとに家庭に教師を聘するが如きは、得て望むべからず。是に於て本書は最良なる家庭教師たる目的を以て編述發行し、敢て婦人教育の缺點を補はんと欲するなり。

全部五十册＝每月一回發行

和裝美本◉紙數各三百頁
石版彩色口繪一葉
挿畫十數個
正價一册金四拾五錢
郵税一册金八錢

- 第一編 新家庭訓　三輪田高等女學校長 三輪田眞佐子女史著
- 第二編 四季料理　宮中御用料理師範 大日本割烹學會々長 石井泰次郎君著
- 第三編 裁縫指南　女子高等師範學校教授 喜多見佐喜子女史著
- 第四編 和洋菓子製法　東京治庖會講師 龜井まき子女史著
- 第五編 茶道と香道　水原翠香女史著
- 第六編 諸流生花指南　琴松園文雅君 松幸齋理常君 共著
- 第七編 育兒の務　醫學士 田村貞策君 朝夷孤舟君 共著
- 第八編 簡易治療法　新潟縣高田高等女學校教諭 藤井靜子女史著

- 第十五編 家屋と庭園　內山正如君著
- 第十六編 魚鳥家畜の飼養　農業世界記者 鹿野化骨君著
- 第十七編 女子作文法　遠藤ふみ子女史 松崎ふく子女史 共著
- 第十八編 子女の教養　私立高等女學校長 棚橋絢子女史著
- 第十九編 家庭の趣味　文學士 大森兜山君著
- 第廿編 家庭遊戲法　高橋忠次郎君 松浦政泰君 共著
- 第廿一編 書道手引　歌道書道專攻大和會々長 井田秀生君著
- 第廿二編 歌の手引　大和田建樹君著

販賣用電話 本局二六二〇　發行所　東京日本橋

婦女必讀の大全書

第九編 **禮式と作法** 女子高等師範學校教授 佐方鎮子女史著

第十編 **惣菜料理** 赤堀吉松君 赤堀峰吉君 赤堀菊子女史 共著

第十一編 **編物指南** 女子技藝實踐學校編物科主任 三木とみ子女史著

第十二編 **婦人の生理と衛生** 青山學院教授 牧野清子女史著

第十三編 **教育お伽噺** 少年世界記者 木村小舟君著

第十四編 **女徳の養成** 前田長太君著

第廿三編 **刺繍術指南** 刺繍術專門 磯村大次郎君著

第廿四編 **摘み細工指南** 山田興松君著

第廿五編 **新式化粧法** 藤波芙蓉君著

第廿六編 **室内裝飾法** 近藤正一君著

第廿七編 **衣服の調整** 石崎篁園君著

第廿八編 **洋樂手引** 東京音樂學校助教授 前田久八君著

第廿九編 **兒童訓話 母の智識** 少年世界記者 木村小舟君著

本書は子女の教養に資せんが爲に、四季日常の科學問題を、最も趣味ある筆致を以て記述し、之に加ふるに適切なる寓話、及び唱歌をも挿入したれば、讀誦の裡知らず識らずに、一般の常識を涵養せしむべく編纂したり、世の母姉諸君は必ず一本を備へざるべからず。

第卅編 **東西名婦の面影** 高須梅溪君著

本書は著者が新時代の女性に向つて健全なる思想と優雅なる感情とを吹き込まんために東西を通じて最も傑出せる貞婦孝女賢婦女傑等數十人を捉へて新しく平易に描寫したるものです書中に收められた婦人は何れも波瀾多く變化に富んだ生涯を送つたものゝみですから、事實そのものが活きた小說で之を寫した筆も亦繪のやうに美しくあります一度本書を繙くと一氣に讀ませられて而かも忘れ難い良感化を與へられます挿入した多くの書と金言とは又た有益多趣最も深い印象を與へるでありませう

本町三丁目 **博文館** 振替貯金口座 東京二四〇番

花卉應用裝飾法

花は如何にして挿すべきか
花は如何にして盛るべきか
花は如何にして飾るべきか
花束は如何にして造るべきか
襟挿は如何にして拵ふべきか
室内の花卉裝飾は如何すべきか
店頭の花卉裝飾は如何すべきか

机上の花卉裝飾は如何ずべきか
違棚の花卉裝飾は如何すべきか
花の水揚は如何すべきか
水無くして花を挿すは如何に
香の無き花に香を持たせるは如何に
植物の葉は如何に裝飾さるゝるか
食卓の敷花は如何にすべきか

前田曙山君著

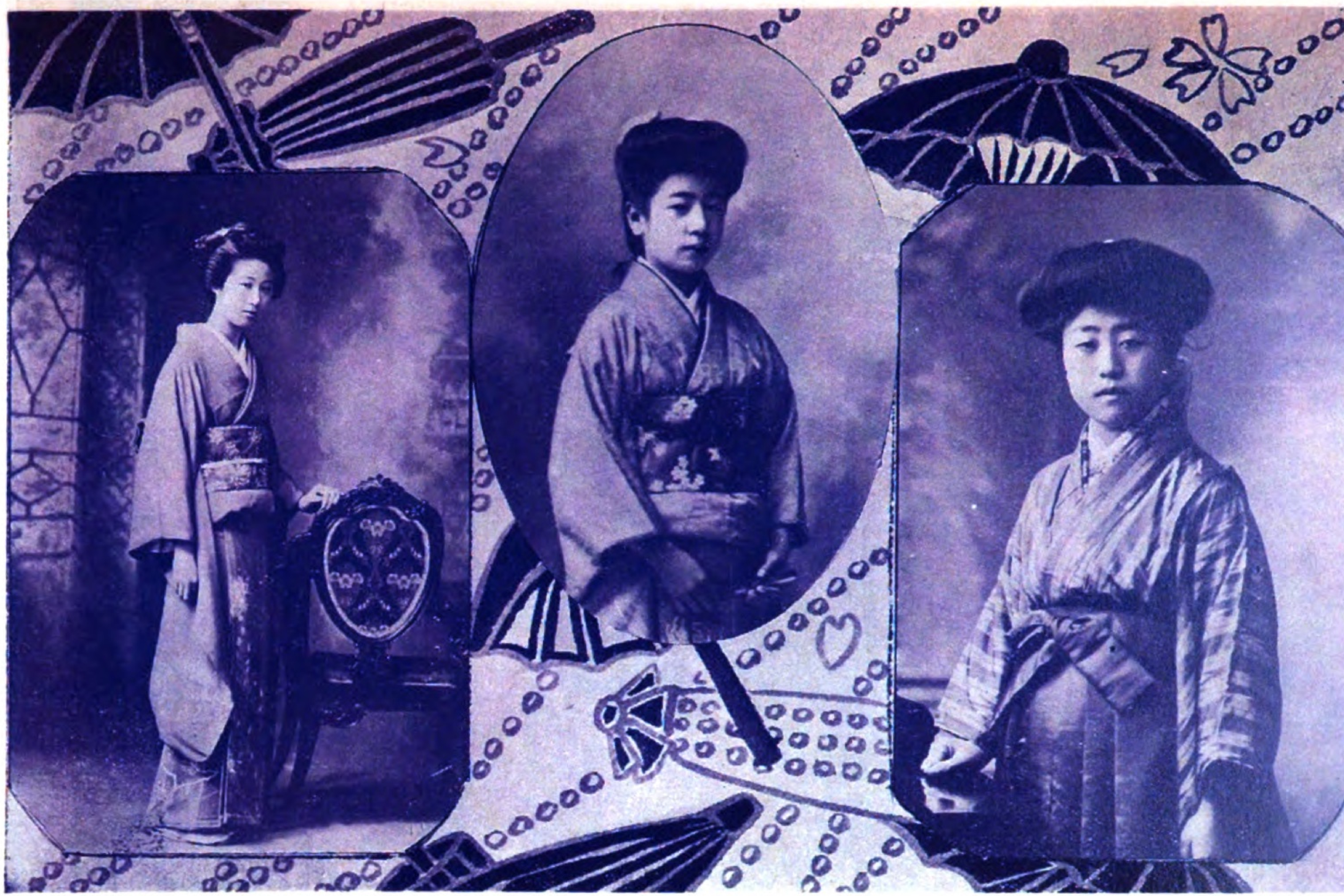
本書を一讀すれば
菫蒲公英は元
より路傍に咲く
赤のまんまも

直ちに採りて
金殿玉樓の
裝飾となし
得べし

菊判クロース製
南京綴三百頁
定價九十錢
郵税八錢

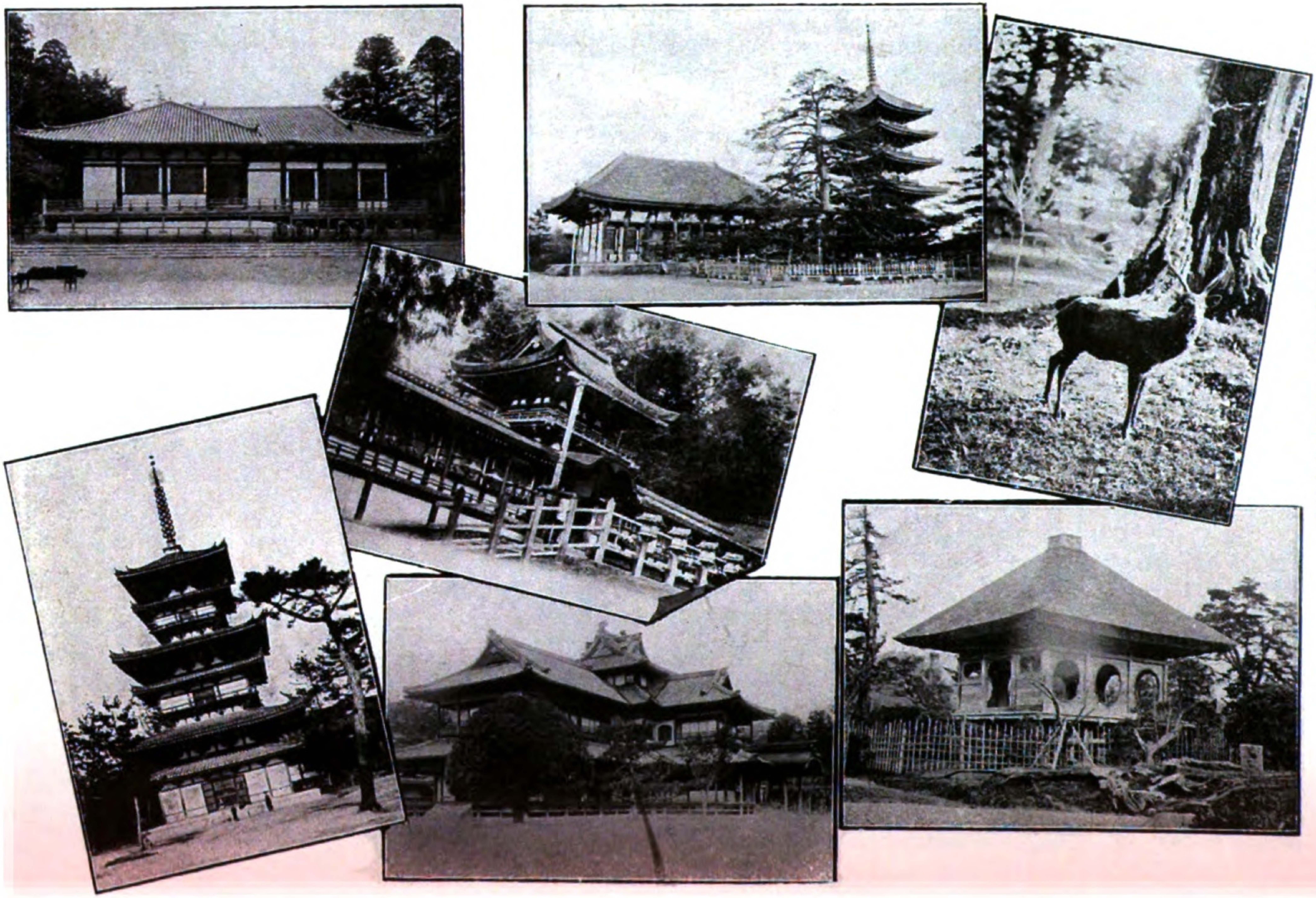
東京日本橋本町三丁目　博文館　振替口座東京二四〇番

令嬢かゞみ



右、海軍少將　齋藤孝國氏令孃淸子
左、陸軍少將　濱谷在明氏令孃操子
中、錦鷄間祗候　中島永久氏令孃とく子

奈良の名所



中央春日神社の本宮、上段右同社の鹿、中興福寺の五重塔、左東大寺の三月堂、下段右春日野の圓窓堂、中奈良倶樂部、左藥師寺の東塔

宮中御歌所寄人
中邨秋香先生著

文鑑 千草の錦

増訂八版

菊判和裝美本
定價金七十錢
郵稅十錢

本書は男女學生の模範となるべき美文、記事、紀行、論說、消息、物語體等無慮數百篇を選出せられ之に加ふるに當代諸名流の文を以てせられ、特に上欄には要語數萬を載せ作習の模範と應用とに供せられしは他に其比を見ざる最良の文鑑也

帝國大學文科教授 佐々木信綱先生著
宮中御歌所寄人 大口鯛二先生書

女子消息文のゆきかひ

鏑木清方意匠
木版上半紙摺
定價金六十錢
郵稅六錢

本書は現代歌學の大家佐々木信綱先生が多年苦心の末に成りたる消息文を優雅なる書體の師として鳴る大口鯛二先生が習字用にと特に書かれたるものなり、先生が獨得の艶麗なる文章は簡單にして明瞭に而も文例盡く振假名付となし直ちに採りて實用に適す、高尚優美なる製本は文と書と相待ちて錦上更に花を添たるが如し、世の令孃淑女方必ず一本を机上に備へざるべからざる絶好の女子消息文範なり。

女子大學校教授 鹽井雨江先生著
學習院女學部教授 小野鵞堂先生著
女子大學校教授 中村春堂先生著

新體女子用文

大倉耕濤意匠
木版上半紙摺
定價七十五錢
郵稅八錢

本書は作者鹽井雨江先生が在來の書翰文の陳腐、冗長、輕薄、無趣味なる弊を打破せんとの苦心に成るもの、詞藻の清新、眞情の流露、趣味の津々、眞に書翰文の好模範たり上欄には諸種の手紙の作方をも示さる書は斯道の大家小野鵞堂、中村春堂兩先生が靈妙の手腕を以て大字小字に書き分けられ特に振がな付にせられたるものにして其艶麗優美の筆は習字の龜鑑たり、斬新なる文章と相俟つて明治新時代を飾るの花たるべし乞ふ江湖の令孃淑女方疾く机上の好伴侶として朝夕愛讀の榮をたまはらむ事を

宮中御歌所寄人 中邨秋香先生作
學習院女學部教授 小野鵞堂先生書

新編手紙
女子消息文のてほどき

男子用 木版半紙摺無類の美本
男女各一册
定價四十五錢
郵稅六錢

本書は中邨秋香先生の新作にして書簡文獨習者の爲に通俗平易なる實用の文題百餘種を總振がな付にせられたるは他に其比を見ざる處、特に小野鵞堂先生が大字に書かれたれば習字の手本として此上もなき良書なり

新編書簡文例
新編女子書簡文例

男子用 木版半紙摺頗高尚優美
男女各一册
定價六十錢
郵稅八錢

本書の文例は現代の文豪中邨秋香先生の腦漿より迸出せしものなれば、一言一句津々たる、趣味あり繁に流れず簡に失せず、擬古に陷らず流俗に同ぜずして眞に今日書簡文の好模範たり、加ふるに書は筆硯界の巨擘小野鵞堂先生の手腕に成りしものなれば又習字の龜鑑として上乘の書なり、特に上欄類語數千句を掲げ書簡文を作習せんと欲する人をして自由自在に意を達せしむるの便に供せられたるものなれば、新編書簡文諸式と相俟て斯道の完璧と稱すべきなり

發兌元 東京市京橋區中橋廣小路六番 振替貯金口座四千百〇九 前川文榮閣

女(己の一)

冒險世界 第四巻第六號 增刊 □□

當世學校生活

大判紙數百廿八頁 口繪石版寫眞版入 ● 四月十五日發行 ● 定價十五錢 郵税一錢五厘

タッタ十五錢で東京の學校の活事情がスッカリわかる本！

口繪＝東都諸校の實況みな新たに寫せしものを集む！

立志小説 書生一代記

押川春浪

- ▼赤門より一筆　青學者
- ▼學校亡靈譚　潮風生
- ▼各校ぬすみ聞き　天魔生
- ▼四疊半の王様　神田生
- ▼早大豪傑 潜龍窟　△△子
- ▼神田諸校評判記
- ▼東都の運動界概況
- ▼圖書館の評判書類
- ▼陸海軍の四校　天風生
- ▼最近の慶應健兒　ＯＫ坊
- ▼ストーム記　一高生
- ▼現代名物書生番附
- ▼各校の秀才錄　てうふう
- ▼私學不平集　理詰屋

最新最詳 東都學校案内記

河岡潮風

トムブラウンの「學校生活」と云ふ本を讀んだ人は、あの汚ないラグビーの寄宿舍が、どんなに英國の文明につくしたかを知るであらう。年を經て舊師アーノルド博士の墓參りをした、名士の心の内は定めし昔を懷ふ情が溢れてゐたらう。現代の學生諸君は次の時代には、日本を背負つて立つべき人々だ。その學校生活はどんなものか。お互に研究して見る必要があらう。それはく碎けて面白く書いてあるよ！

東京博文館本町

文藝倶樂部 第十七卷第六號 增刊

判紙數三百十[illegible]
口繪極彩色錦繪
及艷麗なる美人の寫眞版十數葉挿入

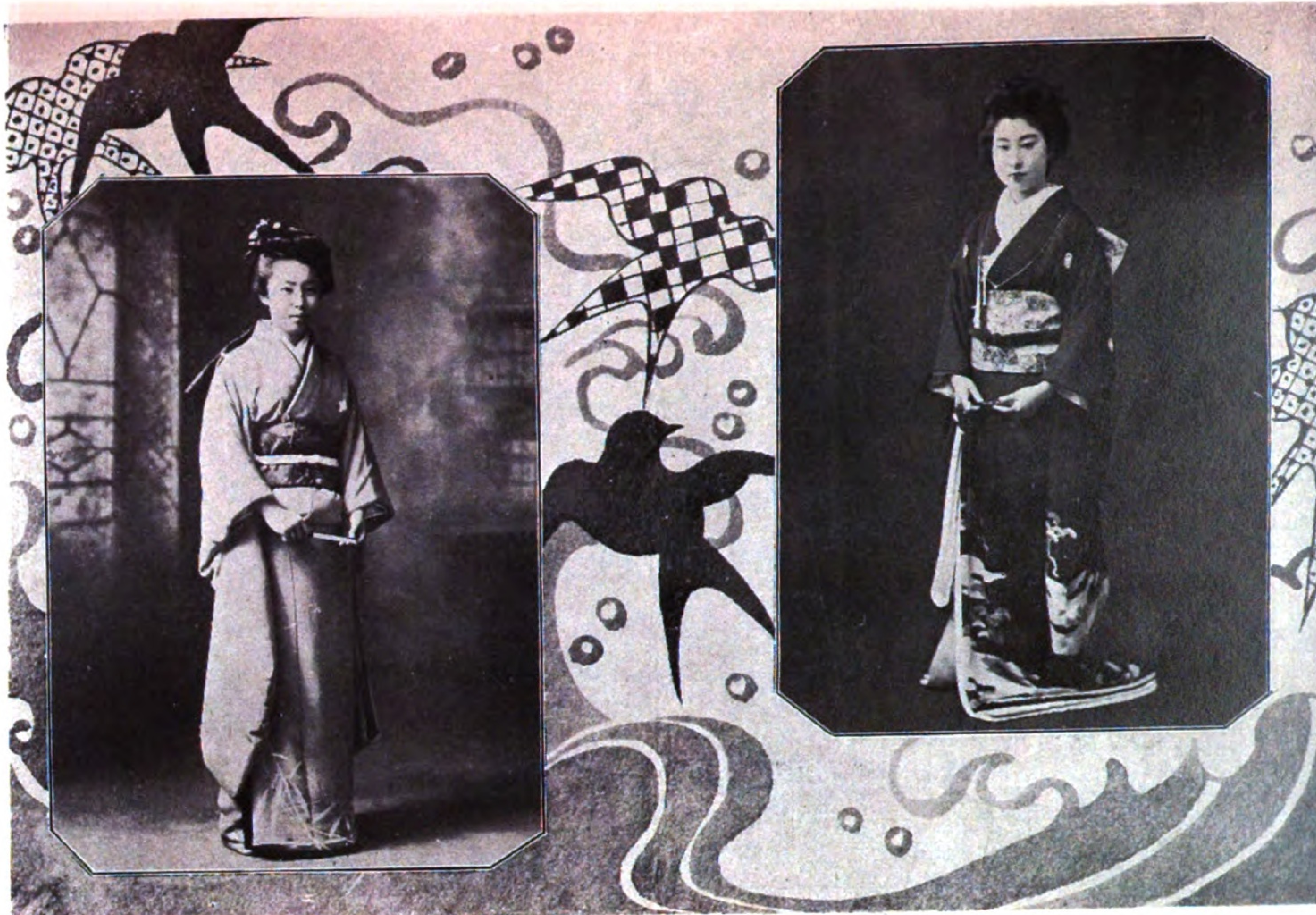
正價金二十五錢 郵稅二錢五厘

首無女、五人殺、行李詰死人等、兎角世間は物騒ですが天網恢々疎にして漏さず、惡人の末榮えた例は有りません。本誌は四月十五日を期して、「勸善懲惡白浪集」を發行します。之に依つて惡人もその行ひを改め、不孝の子が孝行に成る様な事實が、百人の中に一人でもあるならば、編者の幸之に過ぎません

目次



夫人と令嬢



右圖　帝國ホテル支配人　林愛作氏夫人

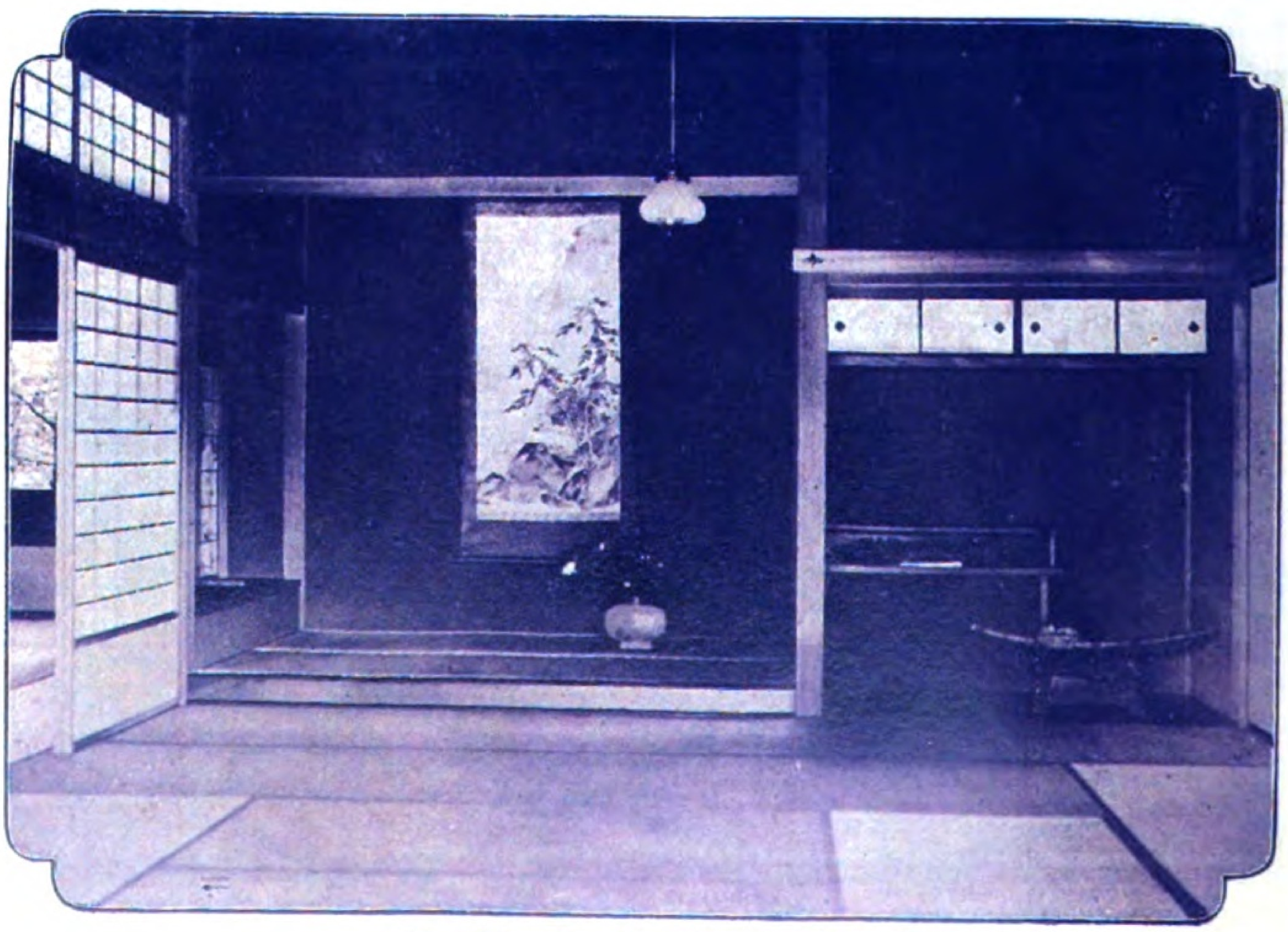
左圖、愛知縣紳商永井太左衛門氏令嬢

クラスメート(東京女學館)



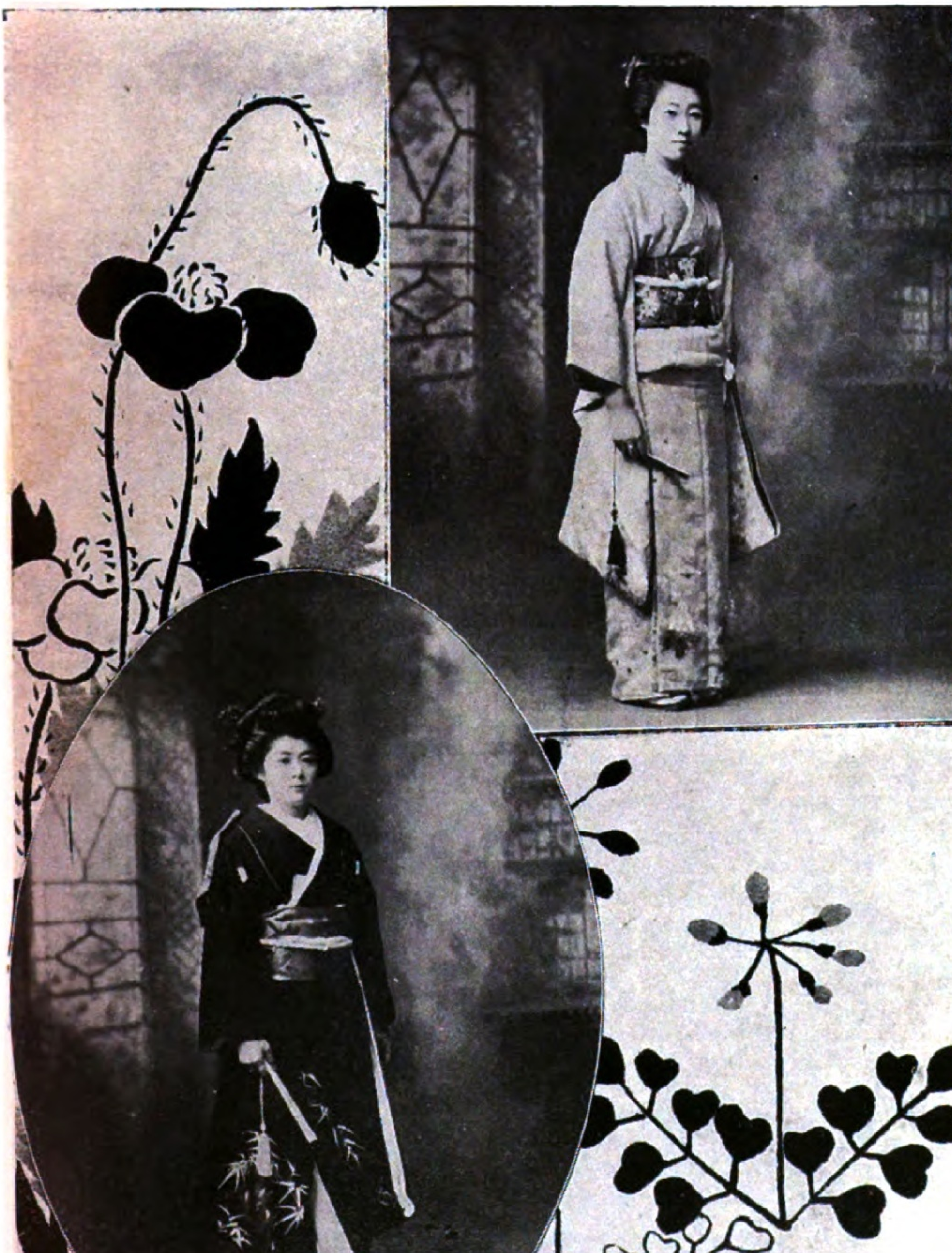
數寄を凝らせる住宅





餘情ある室內裝飾

令嬢かゞみ



上圖、工學博士　須田利信氏（郵船會社監督長）令嬢すみ子
下圖、永井久一郎氏（郵船會社橫濱支店長）令嬢ゑつ子

少女世界

▽少女世界 第六巻第六號 増刊



菊判紙數百廿八頁
口繪石版寫眞版澤山
正價十錢 郵税一錢

○四月十日發行○

さくら草はやさしい花です。その花よりもやさしくて美しい少女世界の増刊號を御覧下さい。さまざまの面白い物語と、麗はしい口繪とは、必ず諸嬢に深い感じを與へることゝ信じます

◉花ちる下‥(口繪の色版)
◉二度刷寫眞版……八ページ

(記　　事)

▲少女對話 芝居狂……巖谷小波
▲少女雜感……沼田笠峰
▲當選の少女小說……
▲學校だより
▲昔のクラスメート
▲花の窓より
▲少女の日記
▲卒業紀念
▲野より都に

その他、文章、和歌、俳句など、さまざまの有益な面白い記事があります。賣り切れぬ中にお讀み下さい。

東京本町 博文館

英語少年 第一卷第五號 春期增刊

僕の一日

四六二倍判紙數四十頁
舶來上等紙石版極彩色
亞鉛凸版六度刷其他寫
眞銅版及電氣版畵插入

正價 十錢
郵税 五厘

四月十日發行

「僕の一日」は太郎と云ふ一學生が朝の起床から夜の就褥迄の一日の生活を一擧一動毎に、美しい挿畵と分り易い英文とで說き明したもので、此間に朝の冷水浴や登校の割引電車や學校での稽古や遊戯や歸宅後の復習や散歩や友達の來訪などは云ふに及ばず、英語で電話をかけることや日記を認めることや又英語演說の通辨をすることや夜活動寫眞を見に行くことなど面白い記事が澤山あります。特に伯父さんからの小包が屆いて之を開くと美しい畵葉書や面白いポンチや英語一口咄が出て來る所は記者と畵工とが苦心の頁です。ツマリ、初等程度の英作文と英會話とを獨りで樂しく稽古するやうに編んだものです。賣り切れぬ間に御購めなさい。



▼大懸賞‖英語考へ物▲

東京本町 博文館

女(廣の三)

趣味ある記事と花園の如き寫眞とは本誌の特有

日曜畫報

四六判四倍大本文（光澤紙）廿四頁●寫眞版及木版挿繪澤山●本文二色刷乃至六色刷

正價一冊拾錢
郵税一錢

●雜誌や新聞にては到底企及し難き趣味ある記事と各國各方面に亘る繪畫や寫眞の着色刷は宛然紅紫白花の花園に絢爛を競ふが如し

●社會各方面の週間出來事を奇拔に皮肉に觀察論評し之に關する多數の寫眞繪畫は極めて鮮麗なれば新聞を讀まざるも時世に後るゝ憂なし

●本誌を繙けば茶前茶後の座談に窮する事なく新奇にして上品なる話題は無盡藏に特に旅行の伴侶としては天下無類の重寶なるべし

●毎週日曜日の發行なれば不絕全國書籍雜誌店の店頭を飾りて普く世人の要望に應じ得べく尚青年男女の讀物として推奨し得るは勿論なり

東京本町 博文館 振替口座東京二〇番

（戊の四）



さま〲の家風

女學世界增刊

第拾壹巻第六號



女天下の家庭

紅梅

え〻、家族と申しましては只今の處、お祖母樣と兩親と兄樣と私と、次の方では乳母や‥‥これはお祖父樣御存生中から今日まで、モウ四十年の餘も勤めて居りますので、今では私達同樣の格に成つて居ります。それに車夫が一人、女中が五人、外に玉といふ可愛らしい三毛が一匹、つひ此の間四匹生みましたのが其の儘居りますから、此の合計が十二人プラス五匹ですわね、オホヽヽヽ。マア默つてお聞き遊ばして頂だい！

父樣は毎日、〇〇銀行へ御出勤！宅の大黒柱は七十四歳に成られるお祖母樣！男勝りのお氣性でして、未だ〱確乎して被居る。名目こそ隱居ですけれども中々嚴しい方なので、父樣でさへ、之は‥‥と思ふ事があれば、第一番にお祖母樣の御意見を伺ふといふ位、親類内の利者と言はれてる小田樣や稻垣樣なども、お祖母樣の前へ出ては、一言も浮かりとは仰しやらない。勿論家事一切は母樣がお指圖なすつて被居います。エ、兄樣ですか！理科の方ですのよ。

家族の趣味？え〻、お祖母樣初め兩親とも藝事が大のお好きで、私なんか五つの年から、みし〱と仕込まれました。お芝居も毎月大抵欠かさず遣つて頂きます。え〻、無論歌舞伎ですよ。

萬事華美な遣り方ですから、一寸箱根あたりへ出かければつても、他人樣お誘ひしなくつてさへ、藝人の三四人も連れていらつしやれば、直ぐに何や彼やで十四五人には成つて了ひます。お祖母樣は、モウ箱根が

大好きで被居つて、湯本の福住には、毎年夏季を一月ほど滯在つてお出でに成る。私達の考へにすれば、海と違つてあゝいふ處ですから、お倦きに成りはしないかと思ひますけれども、さうでも無いと見えまして：：私が死んだら、骨だけは箱根へ持つて來て埋めてお呉れよなんて、仰しやる位、尤も、父樣の方でも加減をして、一週間も經てば東京から又二三人新しい顏振れをお遣りに成つて、前からの人とお替へなすつたりするものですから、一月許りは直に過ぎてしまふんですわね。

夫について面白い話が有りますのよ。昨年の夏でしたけれど、矢張り十五人許りの同勢で參りましたの。さて三日目あたりに、未だ知らない人も交つては居りましたし、それに赤坂の伯父樣が、皮膚が少しお惡いので湯の花澤に暫く滯在つて居らねば成らないといふので、お送りをしがてらに、皆で早朝から七湯めぐりを致しましたの。何にしろ例の連中ですから、それはもう途中も滑稽澤山で……。紀の國やで小休みしてから、さて歸途に就かうとしますと、伯父樣つたら急に淋しく成るもんですから心細がつて、『僕はもう、構はないから皆と諸共に歸らうかねえ。』なんて弱い音を出すんですもの。やう〱何とか彼とか因果をふくめてまつり、込めては來ましたけれどね、一行の山籠がトンと息杖を突いて、すらりと門に立ち並んだ時、入口の柱につかまつて、此方を羨ましさうに見送つた時の伯父樣のお顏といふものは……とんと島流しにされた俊寛のやうでしたつてね、歸京つてからも一つ話しに成つて居りますのよ。ほゝほゝゝゝ。

別莊？　鈴川に有りましたのが、餘程以前の海嘯に綺麗に流されて了ひまして、今では鎌倉と大磯だけに御座います。

さう〱千代子樣のお宅も鵠沼でしたわねえ。やつぱり、我が庵は松原つゞき……とでもいふやうな…鈴川も好い處でしたよ、富士の姿は目の前ですし、道中双六でも御存じの通り、原、吉原へは直ですし、

海が荒いので海水浴だけが難かしう御座いましたけ……。主に夏中だけ參つて居りましたけれども、朝は早く素はだしで砂地に下りて草のつゆを踏んで歩きますのよ。よべの星の名殘りをばかり、白々と輝くのを、ひやり／＼と亂しながら、澄み切つた空氣を吸ふ時の清々しさつたら……何に譬へたら好いでせう。

月ほの暗い宵まぐれを、其の頃は未だ惡戯盛りの兄樣や從兄なんぞがしめし合せて、砂地にいくつも落し穴を拵へては、其の中へ、何處から取つてくるんですか蛙や蟹なんかを入れて、上へ屋根板をのせて、ふうわりと砂を掛けては置き／＼しますのをそれとは知らずに海岸へ行くといつちやア私たち初め女中なんかも能く飛び込んだものでしたよ。時には我とわが計略におち入つて、兄樣達が飛んだ滑稽も演じる事などが御座いますの。

お風呂から上つて、皆お夕飯でも濟みますと、さあ夫からが大變で、各自の藝くらべ……手品が初まる、落語を遣り出す、義太夫やら劍舞やら、却々賑やかなものですから、東京に居るのとちつとも異りませんでした。けれども、まだ其の時分彼所には餘り別莊が有りませんかつたものですから、夜中などにフト眼が覺めますと、それは／＼淋しくつて、音するものは松の聲と浪の音ばつかり……。

此樣な風ですから、間は兎も角も、正月とか盆暮には俳優やら相撲から藝者衆なんかの出入りは、隨分はげしい方ですのよ。

けれどもお祖母樣はだらしい無い事はお嫌ひで、平常はちつとも無駄は成さらず、糸一筋、綿一つまみでも、ほんのさゝやかな品までも大切になさつて、よく丹精をなさいます。是がお祖母樣の主義！ひいては家風とでもいふのでせう。

一寸した事のやうですけれど、ほどき物を致しましても、私なんかもよく申される事ですが、解いた絲を長いのと短いのとに分けて、短いのはつないで毬にして置きますし、長い方は揃へておいて、ほころびを綴る時やお布巾を刺す時なぞに用ゐます。女中なぞが目

見えに参りました折に、此の解物をさせて御覧なすつて、後で御自分が爪でぐうつとしごいて見て、其所に絲屑なり綿屑なり附いて居りますと、すぐに呼びよせて、「斯ういふ處を人に見られるのは、女の一番恥とするとですぞ。」と、夫からようく注意をなすつて、悪い處はみつしりとお直しなさる。



お中元やお歳暮の進物について來る札紙一枚でも反古にはなさらす、しごいておいて采配の束に交へたりこよりにして置いたりして、熨斗や水引も夫々箱に納めておいて、一つでも無駄に放つて置くといふ事はなさいません。萬事が此の通りで、時には手を下して草むしりを成さるし木の葉もお拾ひに成る。お丈夫なのも、此のまめつたく成さるのが基なんでせうけれど、斯ういふ風に朝夕の事はつまやかに氣をつけていらしつて、さあと云ふ時にうん

と華やかになさる――家内中が皆此の型にはまつて居ます。

濱町へ嫁らしつた姉樣なんぞも、お祖母樣には隨分隨分嚴しく仕込まれたものです。私なんか時としては側に居てハラ〳〵する位にもお小言は仰しやつた。が、今ではお目にかゝる度に、『今日兩親の氣に入られて人樣とのお交際にも骨が折れず、家事を執るのに仕損じの少いのは、皆お祖母樣のお慈悲ですのよ。富美ちやんもお小言を辛いといふやうに取つては大變な間違ひです私なんか今と成つて見ると、もつと〳〵お小言の數を澤山きいて置けば好かつたと思ふ時がありますよ。くだらない小說を讀んで居る暇には、お祖母樣の仰しやる事を、鉛筆と手帳もつて傍から寫しておく方がいくら好いか知れやしません。』なんて、染みじみ仰しやる事がある。

お祖母樣は腹からの江戸つ兒で、氣のお輕い、そして總ての仕口が淡々として水のやうな心意氣の方です。今の某伯爵、其の頃のお大名〇〇樣へ、十四の年から十七歳まで三年間、舞ひと長唄とでお小姓に上られたといふ。お邸奉公をなすつた方はお年を召しても何處か艷々として美しさが殘つてゐるものですわねえ。夫は地に踊りがある故でせうけれども、起居のしとやかさ、物ごしの格好の好さ、總ての取りなりがきりりとして居て氣が利いて居て、我知らず見惚れて了ふ事などがよくありました。私達にやかましく仰しやる丈にお手も却々うつくしくお書きなさいます。

汀の橘の花が霰のやうに散つて、宵暗の空にほととぎすの羽袖がかをる五月半のある夜、私は離れの茶室に、お祖母樣がお焚き遊ばした夕風の香をなつかしうきゝながら、錦繪やものゝ本で見るより外は、想像にばつかり疲れて居た大奥のさまを、血潮高鳴る胸の底までそゝられるやうに、恍惚と成つてきゝ入つたのでした。お祖母樣は、長い銀のお煙管に福壽草をつめながら、和かい頰に深く皺をよせてお話しなさる。

殿が謠をお好み遊ばすので、春雨の糸がしめやかにもつるゝ宵などには、つれ〴〵のお心やりにと、お能

役者をお召しに成る。其の時のお使ひの役がお祖母様で、（其の頃は吉彌と呼んで被居つたさうな）繪にあるやうなお腰元姿で雪洞を手に、紅白重ねた裾を捌いて、春淺く冷いお廊下をお鈴の口までかよはれたといふ事から、朋輩と諸共に御祐筆の許へ集つては、お文のかきやうを敎はつた事やら、雪の積つた朝などに、大勢でお築山の上下に別れて雪投げをして遊んだ事や、辛かつた事、樂しかつた事を、交々話してきかせて下さる。



お殿奉公といへば、すぐに尾上やお輕を連想する。そして艶やかな優すがたを思はせる。丁度、淺みどりの和らかな春ぐさを踏んで陽炎にでも包まれて居るやうな心地……此様な時には、お祖母様のお顔がそれはそれは美しく若やいで見える。

お祖母様は、お若い時に、何が一番お樂しみでしたの？』つてうかゞつたら『さうさねえ、先づお芝居だ

つたらうかねえ。私達が騷ぎやつて行つた頃には、まだ猿屋町に三軒しか小屋が無かつたがねえ、夫も今のやうに短い時間のうちに澤山見られるんぢやなくつて、朝もまだ暗い中から初まつて、やつと三幕かそこらのものを、夜も可成り晩くまでかゝつたものだよ。夫でも好きな人たちは、三番叟から見なくつちや氣が濟まなくつてねえ、仕度やら何やらで、夜つぴて寢ないやうな騷ぎをしちやア行つたものだよ。』それから初まつて、芝居の中も昔は斯うだつたの、顏見世が如何の紫帽子に振袖姿の女形が美しかつたの、お茶屋で拵へる幕の內やお煮染が旨しかつたの、歸途にお茶屋からお客を送つて來る時の大きな提灯が、趣があつて美いものだつたのつて、話しの緖は夫から夫へと伸びて行くので、私は美しい繪卷物でも見るやうに夢見心地にじつとして聞いて居る事がありました。

　此樣な話を始終きかされて居る處から、自然と夫に染み込んだのでせう、私は何方かといへば古風が好きで、髮なんぞも、束髮よりは桃割や高髷が大好きです、幼い時はよく稚兒輪に結つて居りましたつけ……。エ私の好きな人格ですか？やつぱり女らしい中にキリッとした處のある、江戶つ兒肌の方が好きです。

　此の間も母樣が『富美はモウ肩揚を卸さなくつちや可笑しいよ。私と並んで御らん、一寸も違ふだらうよ。』つて被仰るから『實際に如何してこう脊丈ばかり伸びるんでせうね、兄樣つたら獨活の大木だなんて被仰るんですもの、モウ少し肥つて、而して是より成人ならないといふ藥は無いかしら……』つてお話ししてたら、來合せて被居つた姉樣が『富美ちやんなんか是といふ程の氣苦勞は無し、年中黃金世界で居るんだもの、だからずん／＼成人なる筈だわね。』つて被仰つてたつけ……。斯うした朝夕を送るのも、皆父樣のお力に依るのだ。私はまだ、苦勞といふものを知りません。もう／＼愉快に、滿足して、今の幸ある身の上を、深く／＼神樣に謝して居ます。



昔を偲ぶ武士氣質

吉野の里

兄様が中尉に御昇進なすつた時父様と母様とが彼人にも妻を持たさにやならぬと云ふて入らしたのを側で聞いてどうぞ早くよい嫂さんが出來ればよいがさてどんな方が來て下さるだらうとはや其嫂さんを想像しては何だか嬉しくつて仕方がなかつた其以來度々この事が話しに出て母様も内心大變あせつて入らつしやる御様子だつたけれ共雇人か何ぞ頼む様に出入の誰れにも彼れにも話しすると云ふ譯にはゆかないものだから親類の方や御同役の方々がお見えになると如才ない話しのついでにはそれとなくお洩しなされて入らした。

それで方々からいふて來て下すつたけれ共やつぱり帶にや短し襷にや長しとやらどうも此方がよくても彼方がいやと仰しやるし又此方も父様が却々昔堅氣な武士の根性がのかないものだから色々と詮議が嚴しい折角八九分通り極まつてゝもあと一分でいけなかつたりほんとに此様にむづかしい物かしらと思つた親の役目も大抵ではないわ。自由結婚とかいふて當人同志約束した人等は頭からいけないと思つて入らつしやるんだから兄様もよく其を御承知で父様母様のよい様にと少しも關係なさらぬ萬一間違ひの有た時自分が貰つた者だと一人で心配せにやならぬけれ共親に貰つてもらつたのだつたら其責任の半分は親に有るからなんて云ふて入らつしやる父様は父様で又例の十八番をお出しなさる抑も幡祖から引續いて正しい家柄でこゝへ移つてからでも三百年になる舊家だ其時植ゑた二本の松苗が今この通り庭の東西に一對青々と緑の色もます〱濃

く榮え誇つておる雄松は一抱へにも足らぬが雄松は二人抱へても廻らぬだらうこれが家の柱とも云ふべき物でこれに對しても決して〳〵祖先傳來の正しき系圖に汚點を付てはならぬ一旦貰つて家の人と成つた以上どんな事が有らうとも歸した先例は今迄にない子や孫の代になれば知らぬ事我眼の黒い内は平民との縁組も許さぬといふて入らつしやるすると士族ではあるが商業家へお嫁入りなすつた姉さんが今時武士は食はねど高楊枝等と一世紀も昔の事云ふては通る者ですかなんて笑つて入らしたそして非常に敬神家で先祖思ひ一にも先祖二にも先祖が出る年々の先祖祭りには宮司を招んでのりとをあげ親類知人を皆よんで宴を張るのが年中行事の一つだゝから佛の氣は藥にし度てもなく私等宗旨が何だか御詠歌だのつて一寸とも知らぬ。今でも玄關の長押には槍が掛てあるし床の間には兜が置いてある傳來の鎧兜に太刀箱お祖母さんの持つて入らした緋房の懐劍雙六盤に小さい二個の骰子に至る迄皆昔をしのぶ俤で此等へ風を入れ書物の土用干するのも年中行事の一つだいつかも土用干の時懐劍を帶へ挾んで見てお祖母さんがお宮仕への昔を思つてゐたら兄樣は兄樣で大きな刀を振り廻して叱られた事も有た昔の珍らしい物が澤山出てるものだから、子供が皆面白がつて騷ぐ曾祖母樣の手紙も有たお家流の綺麗な書き振り私等亂暴な走り書き等恥しい。



仁禮子爵母堂

父様は頑固一徹ではあるけれ共又一方非常に度量が廣く誰れに對してもいつも溫顏子供でも父樣の恐い顏見た事はない程だもの縣廳でも事務の字引だとて若手の肩書の有方でもすぐ父樣に聞きに入らつしやるだつて歸つてゐらして着換の時でも一枚々々上衣から脱ぐかたはら御自分が疊んで簞笥の中へおしまいなさる晩酌二合が無上のお樂しみ又句をお好みなされお茶もおすき火鉢で鐵瓶の松風きき乍ら杓を掛けて一人で盆立して賞玩して入らつしやるお手前拜見なんて弟が面白がつてどうも結構なお茶咽喉へ固りが引かゝる處等いかにもお立派なお手前でなんていつも大笑ひ。夏白い團扇で風を送りながら（白團扇風新しく思ふなり）とか正雄さんの御榮轉と聞いては（螢雪の功あらわれて司召）なんて即座につけて入らつしやる。

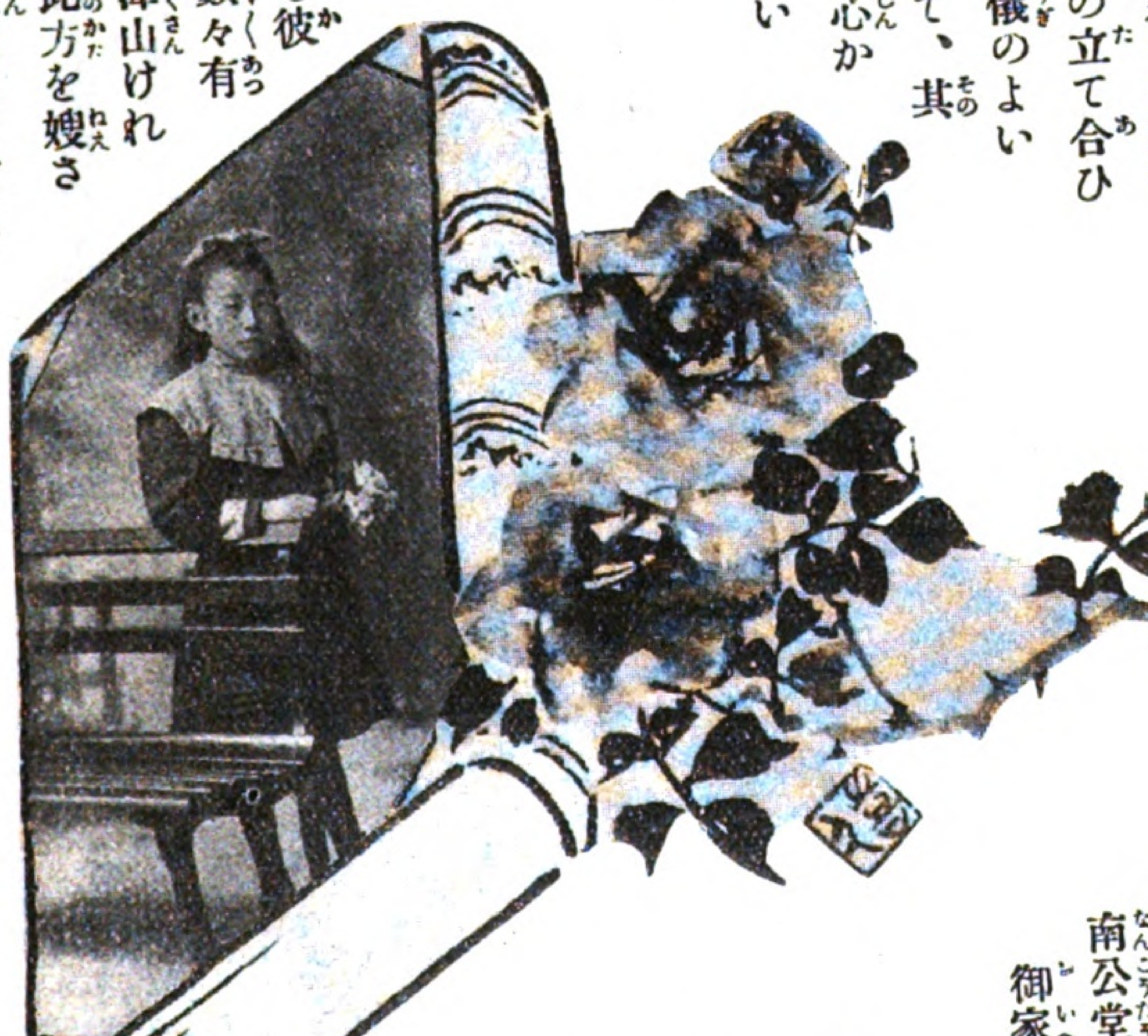


津輕伯爵夫人

母樣はどちらかと云へば樂天主義の淡泊な氣質で平等主義とでもいはふか人に隔てをするのが大嫌ひ誰れでも區別なく如才なく御話しなさるから隨分人の出入も多く一寸おなじみになるといつ迄も／＼御出でになる御馳走でも拵へて御酒差し上る時などは自分から盃をあげて客にもお勸めするから否でも應でも十二分召し上るだからどうも愉快な家だ入りよい家だとて皆樣おなじみも深くなるばかりそして一點の秘密といふものがない義理なんていふ成分は一つも交じつてゐない恐らく今こゝに嫂さんと云ふ異成分が混じてもすぐこの溫かい渦中に融解してしまふだらう家へ入らつしや

る嫂さんはきつと〳〵其幸福を御感じなさるでせう姉さん所等は姑樣は後妻だし小姑は皆繼子だしお舅樣迄が皆お互に義理の立て合ひ讓り合ひで上邊はほんにお行儀のよいきれいな靜な家庭の樣に見えて、其内心の冷さ溫味は少しもなく心から愉快に思つた事は一日もないと始終愚痴して入らつしやるやがては私も此の春風に滿ちた家を出てはどんな荒海へ乘り出す事かといつ迄もいつ迄も家にゐたい〳〵。

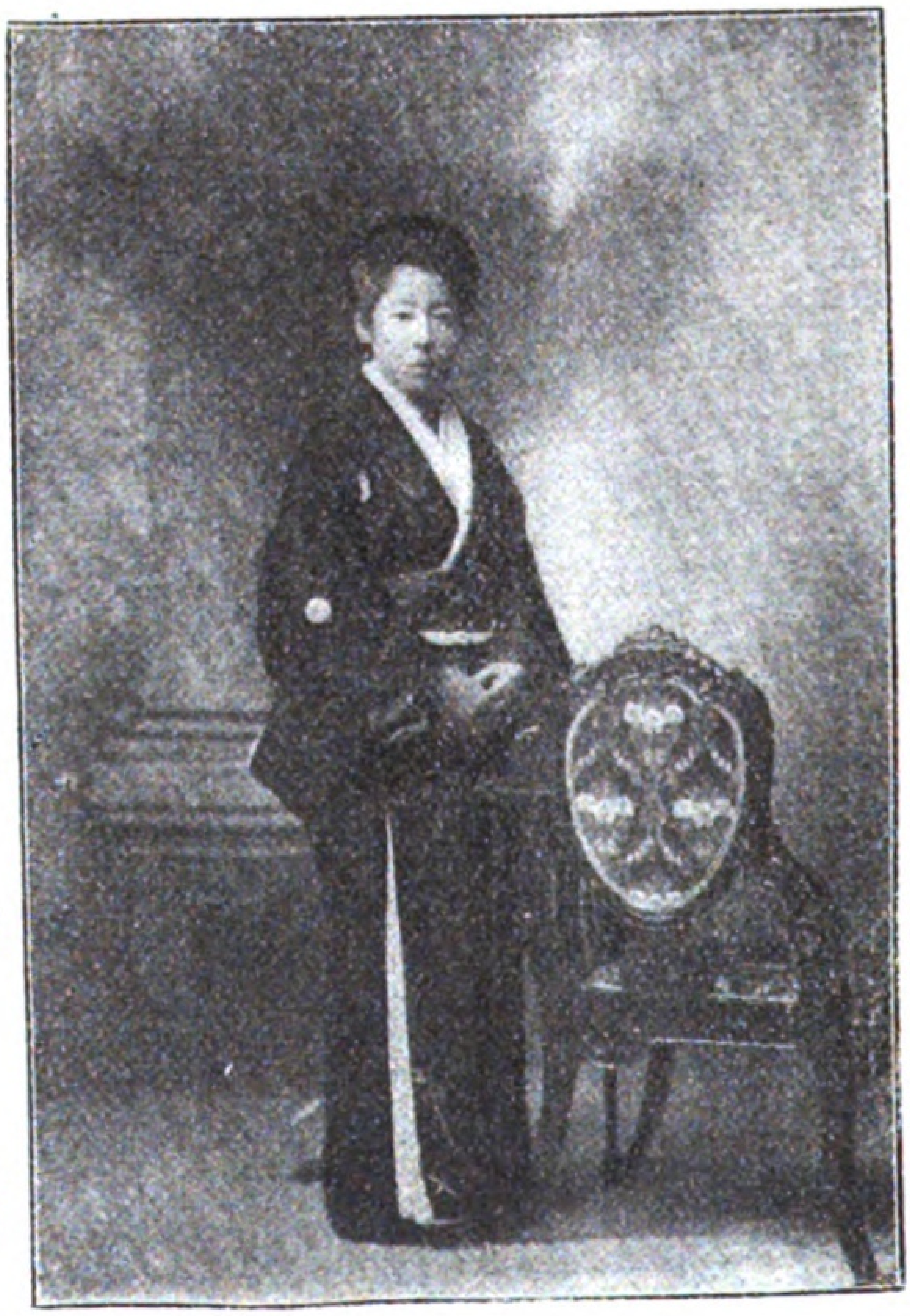
嫂さんに付ては誰樣からも彼れ樣からも候補者の話しは數々有た寫眞迄見せて頂いたのも澤山けれ共數ある學校の中でもさて此方を嫂さんにと思ふ方は少ない其當人はよくても親の職業が氣に入らなかつたりこれなれば血統家柄申分ないとしても合性が惡かつたり年廻りがいけなかつたりお父樣も其當時は幾度となく周易の南公堂へ御通ひなされたか解らぬ其中御家は鄕士で血統もよく當人の品行も容貌も此上なしで而も不動產が澤山お有なさる方からの御話しが八分通り調つて母樣も非常に進んで此方へ力を入れて入らしたのに父樣は頑として不釣合は不緣の基御好意は誠に嬉しいがあと先き〳〵の御交際が出來ませんとてきつぱりお斷りなすつた其時こそ初めて父樣と母樣とはよほど感情を惡くなつすた樣に御見受けした。



薔薇花

昨年六月に今の嫂さんの話しが初まつて双方お互に

詮議立て彼方も色々と竊に此方の模樣をお調べなされ此方も四里もの遠路を度々出掛ては他所ながら十分さぐつた上やつぱり御縁があつたか十二月廿六日には結納と迄運びました母樣が私をおよびなすつて此方知つてるかと寫眞をお見せなされた、オヤ優さんだわ私より一級上よおとなしくつて活潑な方成績はどうか知らぬけれ共御顔も人なつかしいいゝ方よ此方と極まつてと伺つたら廿六日には結納を取り交す筈になつてると仰しやるマア其程迄になつてたかしら彼方なら私も滿足するわ誰れに對しても大きな顔が出來るわと嬉しかつた此度お正月にお目にかゝつたらどんなお顔なさるだらう未來の妹と思つて下さるだらうか等と色々な事考へた



前内相原敬氏夫人

來年の四月卒業だから其上で正式と定まつた。

＊　＊　＊　＊　＊

四月の二日はいよ〳〵兄樣の御結婚家に取つては記念日色々な準備に此の四五日は夜もろく〳〵寢むらぬ今朝も起きて見ると早料理人が二人も來て親類の誰彼や雇人等臺所を引くり返した樣な騷ぎ竈の前や井戸端流し本等黒い頭で埋まつて皆面白さうにしやべつては笑ふ聲が姦ましい昨日は植木屋が庭の手入れをしたから夜が明けた樣になつて長閑に晴れて鏡川に姿を映す筆山の景色も今日は又格別に鮮明に見え庭のひがん櫻は今を盛り仁作が打水に手洗鉢の水も綺麗になつた。

お早うござります今日はお目出度存じますと髮結の

お定さんだまだお綺麗でござりますけれ共とて元結ひをブッと切る結ひ慣らして置なければとて一昨日初めて結ふた島田髷重くて〳〵後へ引つけられる様だつたが漸う慣れた結ひ上げてほんとにようおうつりになります事一段お見上げ申しますよつて自分の手を賞めてるか母様も後から横から眺めて入らつしやる此度はお嬢様の番ですねー揚げ帽子おかぶりなさるのも早でござりますよ。こんなお轉婆では仕方がない髷の手前でもおとなしくならなくちやと母様のお聲マア何とでも仰しやれお嫁になぞ否な事と心の中で云ひながらお座敷へ行く昨日一日がゝりで挿した中床の松其枝ぶり



露國大使夫人

を直して霧をふき掛て置く父様は朝からかゝつて床の上へお先祖祭りと同じ様に代々の御靈を飾り付けなしあそばしたお神酒にお生物供へ一對の榊に清めの水一人で頭が下る様だ、家は島臺だの熨斗臺等は用ゐず三々九度の盃の變りを御靈前にて夫婦の堅めをなさるこれは父様の考案で弟曰く山口流の神前結婚式だとでも宮田の伯父様も大變稱賛して入らしたわ神聖でおごそかでいゝつて、嫂さんの入らつしやるのは午後三時そろそろ着換へに取かゝるお晝過ぎにはお荷物が着た簞笥三棹に長持二棹釣臺一棹五荷のお拵へで離れ座敷の八疊に一杯になつてる兄様は今朝から居る處もないとて彼方へうろ〳〵此方へ

うろ〳〵して入らしたが、遂々弟をつれてお出ましなすつたきりお歸りがない男つて呑氣な物だわ自分の大事を人事の樣に思つてゐるもの秀夫〳〵つて母樣一人で氣をもんで姦ましく云ふて入らつしやる。

可愛らしい桃割れの綾ちやんが入らした小豆色の振袖召して今日はお酌の大役をなさる、そゞろ思ひ起す七年前正雄さんお結婚の時のこの役目は私だつたお祖母さんが片肌ぬぎになつて結ふて下すつた前づとの稚子髷銀の前ざしに紫の振袖だつたあの時はお祖父さんお祖母さんとお揃ひだつたのに今迄入らしたらどんなにおよろこびか解らぬのに。

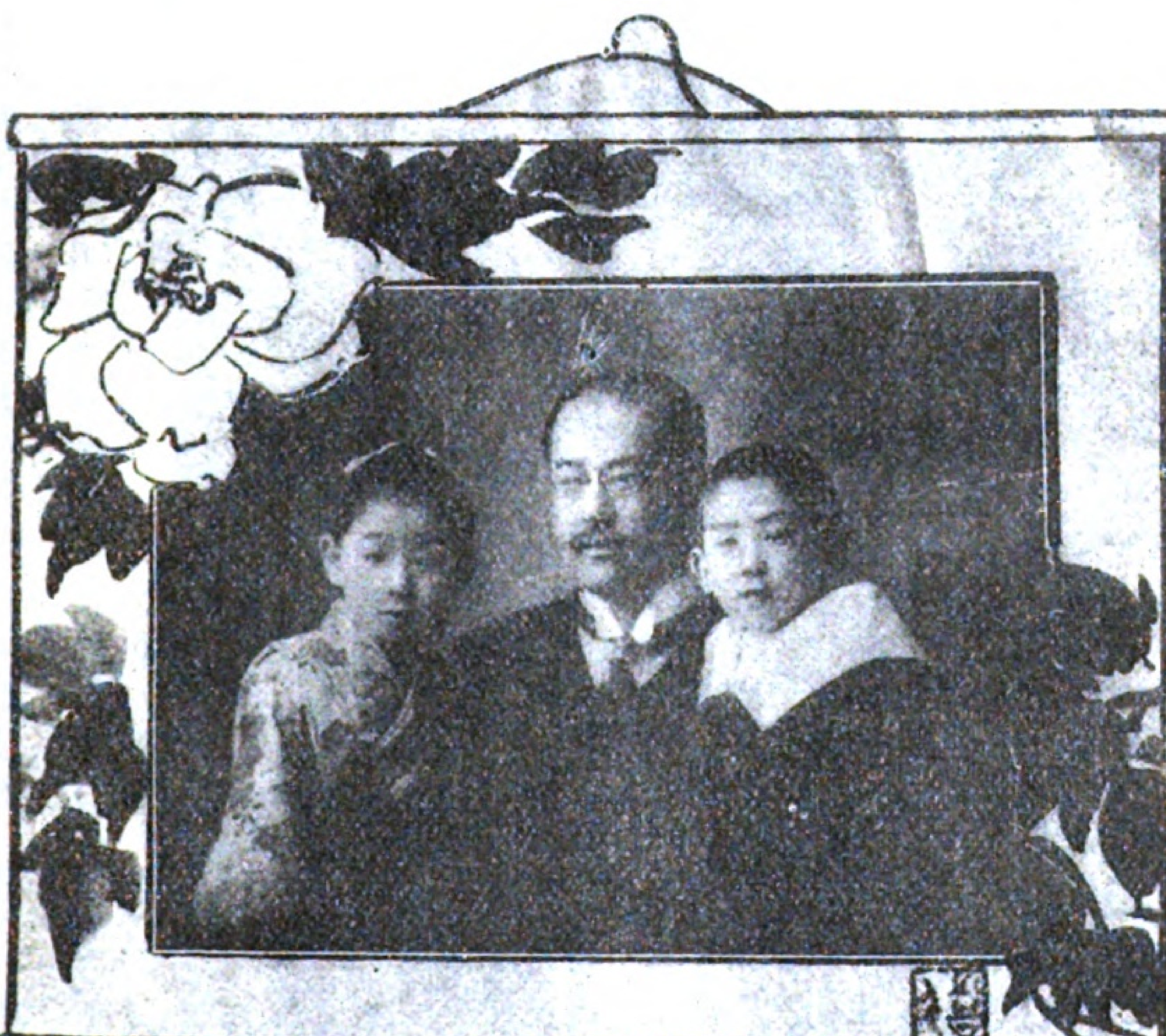
萬事の準備は整つたもう間もあるまい門前は人の山内玄關迄も入れ込んで來てゐるやがて車の引つゞく音人の動搖格子戸の音臺所でごて〳〵してた人迄馳り上つて障子や襖の陰からひしめき合て窺いてる媒妁人濱田の御夫婦に嫂さんの御兩親其あとに花恥かしき花嫁姿白無垢重ねに薄桃色の襠裾長く純白薄絹の揚げ帽子をもたげうつむいて金簪のひらめきほんとに梅花の精が拔き出したのではないかと思はれる定席におつきなさると此方の襖引き開けて陸軍中尉の禮裝いかめしき兄樣が神前へ御坐りなされ榊を手に清めの水をはらひ柏手の音おごそかに禮拜なされて左側へ御坐りなされたすると嫂さまは付添人に助けられて同じく靈前へ御禮拜の後兄樣と向ひ合せにお坐りなされろお酌は無邪氣な綾



姿見かゞみ

さんのお神酒を兄様より嫂様へと幾千代かけて末長く壽き參らせて御夫婦の御盃遊ばした本の席へ直つては親々兄弟の御挨拶本膳も濟んではお色直しに兄様は羽織袴嫂様は梅鼠縮緬の裾模様いよ／＼酒宴となつた濱田のをぢ樣は聲張り上げて高砂やこの浦船に帆をあげてつきもろともに出しほのをくり返しておうたひなされめでたくこゝに式は擧げられた。

明日は嫂様の衣裳見せ簞笥長持の中のもの皆出して見せる近所は勿論隨分還方からもくるであらう來た者には土産として子供には花簪大人には、糠袋等與へるのが習慣又明晩は友人知人への披露の宴これも隨分面白い騷ぎが初まるだらう家内震動して天上の鼠が眼をまはすかも解らぬ又例の父様が（三度諫めて聞かざれば腹に窓開け死出の旅）を御唄ひなさるに相違ない死出の旅等とは縁起でもないお止しなさればよいが正さんの劍舞に兄様の芝笛土居さんの阿保駄羅經も無論の事千枝さんのお琴をと云われたらどうせうかしら。



柳澤伯と令息令孃

明後日は又お里歸り嫂さまは此方から結納としてあげたお納戸色白菊の裾模様の御重ね私は藤紫の地に

白梅の枝垂れ咲きの總模様に裾には清き流れに鴛鴦の
あそんでゐるふり袖思ひきり立流なものだ。
それが濟めば一週間程の間親類へ御禮廻りやお墓拜りなすつたら兄様と共々に蜜月の旅花の都東京の任地へと赴かれるあゝ何だかお羨やましくなつたわ東京が戀しい。

奇妙なる結婚式

▲波羅門教ではいよ〳〵男女が結婚する事になると、先づ其事を印度八百萬の神に奉告する、而して結婚式の第一日には新郎新婦が天蓋のある床の間の樣な室に東方に向つて坐つて居ると、既婚の婦人達が其上に樟腦を燃やして照すのであるが、是は印度の惡民の間に隻眼の者から睨まれると災があると云ふ迷信があるので、其の魔除けの爲めである。

▲第二日に新郎はゲンジスの神聖なる河水で身を淨める爲めベナレスと云ふ所に順禮したいと申出る。然し大概の場合では新婦の父の懇願によつてこの順禮は思止まる事になる、而して立會の僧侶は順禮の思立の奇特なる事を稱し、其れと同時に奉納の十四旒の旗を受取るのである、此等の旗は新郎が其の純潔な事と罪惡を犯さないと云ふ事を表徴したものである。

▲三日目になつて共白髮の末まで變らぬ印にとて新郎の右の手頸と新婦の左の手頸とに絲を結び着ける、すると岳父は新郎には大毘濕奴神の面影があると云つて其れに供物をなし、新夫婦の頭から水を灑ぎかける、次に新郎は金製の裝飾物を新婦の頸に結び着ける是は新婦が生涯の記念にすべき寶である、この儀式が終つて後アグニ神に犧牲を供へ、新夫婦は互に手を取合つて七度祭壇の周圍を繞り、而して又七歩を歩む是は永劫渝らぬといふ夫婦の固めの記號である。

▲四日目に占星家が來てアランドハチと云ふ星を指して新夫婦に向ひ互に操を守らねばならぬ事を懇ろに說き諭す、夫れから夫婦は始めて一緒に食事をなし、互に米を撒き合ふ、其晩に又行列があつて親族や朋友が寄つてアラチイ神を祀つて再び惡眼の魔除けを行ひ、新夫婦の練つて行く後から其頭の上にランプを振り翳す。



囚はれたる下町娘

すゞしろ

ふと聞けば五時、まだ電車の通ふけはひのなく、四邊は死だやうにひつそりしてゐる。三時と四時の打つたのを知らない處を見ると、それでも二時間程眠たと見える。姉樣はと見れば彼方面、お眠つてのか覺めてのか息も聞えず、どこが二人の境とも分かぬ程袖と袖との押重つたお對の夜具の脊は小波程の搖ぎも見えない。黑天鵞絨の襟に連なるぬば玉のお髮、欄間から射入る曉の弱い光線に高髷の化粧元結ばかりが浮いたやうに白い。母樣のお目覺迄はまだ間もあり、今一寢入りしやうと思つて目を閉いでも思ひは廣告の灯のやうに頭の中を絶えず馳廻つて、どうしても眠られない、あなたこなたへと寢返りばかり打つけれど――。

昨夜――と云つてもほんの二時間前――はほんとにほんとに悲しい不思議な晩だつた、生れて私は十九年姉樣は廿年、あんなに、あんなに心から泣たのは始めてだつた。父樣がおかくれになつた時も私達は泣た、けれどもそれはほんの子供心に、いはゞ機械的に、若くは人眞似に過ぎなかつた。私は白狀するが父樣に死なれた事は今は勿論、其時とても大して悲しくはなかつた又何の不利益も感じなかつた。舊い家に育つた私達は親は只――其内にも父親は――尊ぶべきものとのみ敎へられてゐたから、世間の親子のやうに親しみと云ふものは少しもなかつた。乳母を一番隔てのない者に思つてゐたが、それも漸々大きくなると、忠義一圖な昔物は何の力にもならない事を知つた。私の一番々々好きな、力とも寶とも思ふのは姉樣!、姉樣の方でも恐らく私をさう思つてゐらつしやるだらう、だから私達

には餘り友達がない、それは家の風が餘り交際などする事を悦ばない爲もあらうけれど又一つには、姉妹互に取交す暖かい心持が外に友を求める必要を感じない程充實してゐるのだらうと思ふ。家が不自由がないから一つの物を半分づゝと云ふやうな經驗こそないが、始終同じ服裝をして密接てばかりゐる爲に學校でもお稽古でも、よく双生兒々々と云はれた程であつた。ああ懷かしい好きな姉樣、又そなたへ寢返りすればすやすやと先刻の儘「あゝかうして枕並べるのも……」と思ふと命の消る日を數へるやうな氣がして堪らない、なぜ大阪へなど入らつしやらなければならないだらう

昨夜私が、

「店の名前や世間の信用がどうして生の娘より尊いんでせう？、母樣も隨分薄情だ」、と云つたら、それ迄默つて寂しく笑つてゐらしつた姉樣が夜具の袖に顏を隱してお了ひになつた。母樣を薄情と罵つたのは私が惡かつた、けれども母樣は餘りお人が好過る、後見だらうが何だらうが伯父樣などに御自分の娘の事を干涉させるのが惡い。伯父樣は頑固な嫌な人だ、無教育だ、私達處女の純潔と云ふものを理解するだけの教育がないのだ、あの人は姉樣の貞操を疑つた惡魔だ、あの人で澤山だとも！、あの死だ鰯のやうな目玉は餘りお金の光りにばかり見惚れた爲かも知れない。

「お房はおれの眼鏡に叶つて三谷家の跡を取るのだから——」つて、あの腐つた目玉でぢつと見据ゑられた時には私は襟元へ蛭が落ちたやうな氣がした。三谷家が何であらう、財產が何であらう、廿歲にも足らぬ娘の友に冷たいお金や店の看板は餘りに寂しいではないか、私の爲には姉樣に勝る寶はない、あのわからずやの伯父樣でさへ父樣のお死去當時には「仲よくしなよ、仲よくしなよ、お前達二人は永久に三谷家の人間なのだから」、と頭を撫でゝは云つたではないか、それを今になつて養子迄極つてゐるものを廢嫡して他家へ出すなんて、あゝ私はくやしい、伯父樣が憎らしい。だけども不思議だ、姉樣が役者買するなんてどうしてまあそんな噂が立たんだらう、そして其煙のやうな噂の爲

に母様が泣たり伯父様が怒つたりすると云ふのも解らない、又實際廢嫡する程それ程姉様に罪があるなら再び世間へ顔は出せない筈なのにS——家と云ふ大阪屈指の資産家へ堂々とお嫁にやるのはどうした譯だらう考へても〳〵私には解らない。今度の騒ぎの中で一番偉いのはあの忌はしい風説を立てた人だどんな人か知らないが口から出まかせの一言に三谷一家の人々が慌てたり騒いだりする處を見たら嘸面白がつて今頃は笑つてゐるだらう、そして一番惡いのはUさんだ、あの人さへしつかりしてゐてくれゝばいゝのに伯父様の機嫌とりに『どちらでも』なんて男らしくない。『恩になつた三谷家の爲にさへなる事なら私は決してお錦ちやんとかお房ちやんとか望みはございません』と云つたとやら、何て見識のない男だらう、お錦ちやん〳〵とペコ〳〵してゐたのも姉様を愛したのではなく〳〵、あの人は三谷家の財産にラブしてゐたのだ姉様や私を欺いてゐるのだどうしてかう私の周圍には嫌な人が揃つてゐるのだらう、遠からず姉様は他家の人になり、母様はお年を召すと私は漸々此人々に接近しなければならないのだ、けれども私は



断言する、決して□とは結婚しない、伯父様の強意見にも母様の涙にも是ばかりは負けないつもりだ、昨夜姉様に誓つた事は必ず行て見せる。あゝそんな強い事は云つても私は姉様を救ふ事は出來ないのか!、世間から誤解され許嫁の人に欺かれ、力にしてゐらつしやる私や母様を遠く離れて姉様は知らぬ土地へ、知らぬ家へ……、

涙は雨滴のやうにほと〳〵と枕紙に落る。

「お房ちやん醒てるの?」と不意に姉様のお聲がする。闇の中はほの暗いけれど涙の顔を振向るのが嫌で後向



の儘、

「も…起きませうか」、と云つたが鼻が詰つて變な聲だつた。それぎり二人とも押默つて夜具のさやぐ音ばかりする。

朝の光りが漸々進むにつれて外を通る人の足音や、家々のハタキの音が繁くなる。

「起きませうか」、「起きませうか」、と云てるうに姉様が先へお起になる、私も續いて起て雨戸を明るとパッと射込む光線に夜具の八丈が金のやうに光る。おゝいゝお天氣、石燈籠の傍の紅梅が開いた。

湯殿へ行くとすみがお湯を取てくれる、ざつと顔を洗つて了ふと例のやうに氣が晴々して今迄の暗い心持が遠い日の夢のやうに消えて行く。けれどもあゝ、鏡の前へ坐ると目の腫た變な顔が映る、姉樣のお顔も氣味の悪い程靑い。

「今日は私が佛樣の番だつたかしら」と云ふと、「あゝ私だ」と姉樣機械的にお立になる。佛樣へ御飯上るのと部屋の掃除するのとを私と姉樣が一日交代にするのであ私も早速掃除して火燈口の處で振返つて見る。茶がゝるつた一間の床、掛花活の蓮翹は姉樣のお手際、窓際に据た二脚の机の前には紅の勝た友仙メリンスの對の座蒲團、立派な座敷と云ふではないが明暮姉樣と共に勉强したり遊んだりするパラダイスだと思ふと云ひしらず懐しい、あゝそれもゝう先が知れてゐる……。

茶の間で御飯食べながら母樣が、

「今日は好お天氣だから何處かへ出かけませうか」、と仰る、何處にしやう彼是にしやうと評議最中に店の新藏と柴田とが朝の挨拶に來る。店の者で奥へ出入りするのは此二人ぎり。柴田は金兵衛と云名なのだが姉樣のお名と音が通ふ爲に殊に名字を呼でゐる。新藏と同年位なのだが慢性トラホームで目がしよぼ〳〵してゐる故か老爺々々して見える、柴田さんは無筆だ〳〵と人が云ふけれどまさか、是だけの店を取締る者が無筆では勤まるまいと思ふ、けれどもどうだか私は店向の事はちつとも知らない、それより私はお叩頭の長いのに弱つてゐる、先廊下の外から、「御免蒙ります柴田でござい」と聲を掛る、それからやそら襖を明て「御機嫌やう」と丁寧に頭を下る、それから靜に膝を向かへて「お錦樣御機嫌よう」、又向直して「お房樣御機嫌よう」何でも顔が見えてから私への挨拶迄は十分位かかる。Uさんがよく活ミイラと云ふけれど眞に毎朝版行で捺たやうだ。

十時頃になると手水のお湯が湧く、晩は晩で又お風呂に入るのだから此朝の手水は誠に私は迷惑なのだが昔から日課の一つでしかたがない、そこ〳〵と濟して髪をとかす、ローマは母樣がお嫌ひだからルキザに卷

く。姉様は頭が痒い〳〵つて毛筋でぐい〳〵お掻きになるもんだから髷が曲つて了つた。壊して了ふと仰るのを止て、元結をかけ直して後を掻て上る、何ていゝ髱つきだらう、私も幸に毛は多い方だが髱つきは到底姉様に及ばない、人がよく『どちらがどうだか解らない程似てゐらつしやる』、と云ふけれど丸で異ふわ、姉様は品のいゝお顔だし私は目ばかり大きくつてお轉婆お轉婆してゐる。

『又お客様でもあるといけないから早く着物を着かへませうよ』、と仰りながら姉様依然坐つてゐらつしやる、お眠が不足で氣が重いらしい、あゝ惡い、私が惡かつたのだ。餘計な事云はない方がよかつたに。

『何を考へてるの？』と仰る。

『え…、何處かへ行きませう』、とごまかす。私達は學校を出てからと云ふものは何處へも出られない所謂箱入娘の境遇であつた、それが今度姉様が大阪へ嫁しやるに付て、『東京とも當分別れるのだから』、と云ふ理由の元に外出を許された、さあ出られるとなると行きたい處は山程、徒に撰擇に時を費してやつぱり出ない日の方が多い、あゝそれも暫しの間今に結納が濟むと姉様はS――家の預り物といふ格になるので輕々しく外出などは能なくなるのださうだ、何て馬鹿々々しい事だらう一人の人間を品物と間違へてゐるのだから嫌になつちまふ、でも姉様はまだ品物としてゞも認められてゐるだけがいゝ、私などは腹を立うが涙を流さうが舊い人達は笑ふだけでテンから相手にしてくれない。まあしかたがない時節を待つばかりだ、其代り時節が來たら見よ！、長い間の壓迫をウンと撥返しやるから。

『さあ行きませう』、と紅筆からりと鏡臺の抽斗を閉て立つ。『おゝびつくりした』、と仰るのを、『御免遊せ、私ほんとにお轉婆ねえ』と手を引連て部屋へ行く。

次の間で晝着と着替る、茶の間へ行くともう十一時、母様は火鉢の前にむづかしげなお顔して乳母と何か話してゐらしつたが私達が入て行と、『まあ折を見てねえ角立ぬやうに云つてやつておくれ、ほんとに困るねえ』と話を切てお了ひになる、乳母は『宜しうございます』

と意味の有さうな笑を殘して立て了ふ、何か婢共が失策たのであらう。私達三人は出先の相談で物事も手につかずお午になつて了ふ。御飯食てゐる處へUから電話が掛る『お二方の中どちらでも』、と云ふ取次の口上餘程『どちらでも』が好と見える、姉樣のお顏には不快さうな色が表れた、私だつて嫌、誰が出てやるものか！『食事中でございますから御用なら伺つて置ませう』と云はせる。

みきがお膳片付てゐる處へ伯父樣がやつて來た。母樣や姉樣は急いで蒲團をお外しになつたが私はどういふ譯か此人の顏を見ると尊敬する氣が起らない、簡單なおじぎを一つしてついと立て了つた。

部屋へ入つて机の前に坐つて見たが何だか氣がぼんやりして物事が手につかない、雜誌の口繪を無意味に眺めてゐる處へ姉樣が入つていらつしやる、伯父樣何喋つてゐて？』、と伺ふと『何つて……』と困つたやうな御樣子。外は好お天氣で塀の外を行く駒下駄の音や靴の音や話聲が、いら〳〵した胸に絶間なく響く、伯父樣が早く歸つたらそれから支度してゝ出かけたいと思つてゐるのだが姉樣は諦めてゐらつしやると見えて裁縫をお



出しになる、白いお手の間から針がピカリ／＼と、地のいゝ糸織を走り絹糸がシュッ／＼と冷たく泣く。新しい着物が出來る度に必ず一しよに裁ち一しよに縫てゐたのだが此糸織を始として是からは姉樣のお召ばかり出來る事であらう。額に手を當てぢつと思ひ入つてゐると、見てゐる寫眞版の灰色が漸々暗くなつてボーツと好心持になつて來る「お房ちやん／＼」と云ふ聲が耳に入ると机の上に突てゐた左の肘が動かない程痛い、「氣分が惡いの？」、と



姉樣心配さうに顔を御覽になり、「眠くなつちまつて：：」とテレ隱しに笑ふと「私も」と仰る。「まだおやつぢやないぢやないでせうねえ私お茶が飲たいわ」と云ふと「茶の間へ行て飲でゐらつしやいな」、「嫌、伯父樣がゐるから私裏でも縫ひませうか」と蒲團を眞中へ持出して針箱を明ると赤の糸が少しきりない。「捲て頂戴な」、と仰るので束を取出して姉樣のお手へ掛ける。風と云ふ程にもない空氣の搖きに中庭の紅梅が幽に匂ふ。



冷い目で見た人の家

玉露女

知り給はずや、ダンヌンチオの死の勝利!!! 妾がハートを流るゝ血潮は最後の際迄妾が所物、其一滴をも君が爲めには流しはせじ、口惜しくば來ませ君と雪降り積る鹽原の山深く某文學士の君を誘ひ給ひし明子の君、

御母君が新聞記者に宅の明子は誠に勉強家で御座いまして、とほこり給ひしと紙上に見えましたが、あれが若私の家のやうな家風でしたら、とても／＼。

私なんか凡々平々と人となつたのも此家風の力あづかつて大したものですわ。何しろ私も禪學でもして膽を練り天晴れ自我を發揮しやうと思つたつて、紺の御袴でも借りて來てお机の前にお線香立てゝ一時間も坐つて居やうもんなら。

「蝶さん何を納まり返つて居るの平生は學校があるから日曜には是非午前の内に襦袢とお腰とは自分で洗濯しなければいけませんよ女と生れて肌着を人に洗つてもらふのはほんの幼少い時だけですよ、それから日曜のお晝だけはお臺所も手傳つて少しはお料理も覺えないと困りますよふだん出來ないからね、女は何でも上手でなければ一人前と云はれないのですからね、運動の爲めだと思つて大掃除もするがよし人の肩のもみやうもけいこするがよし。」と御姉樣が呼びに入らしつて仰有るし妹は妹で

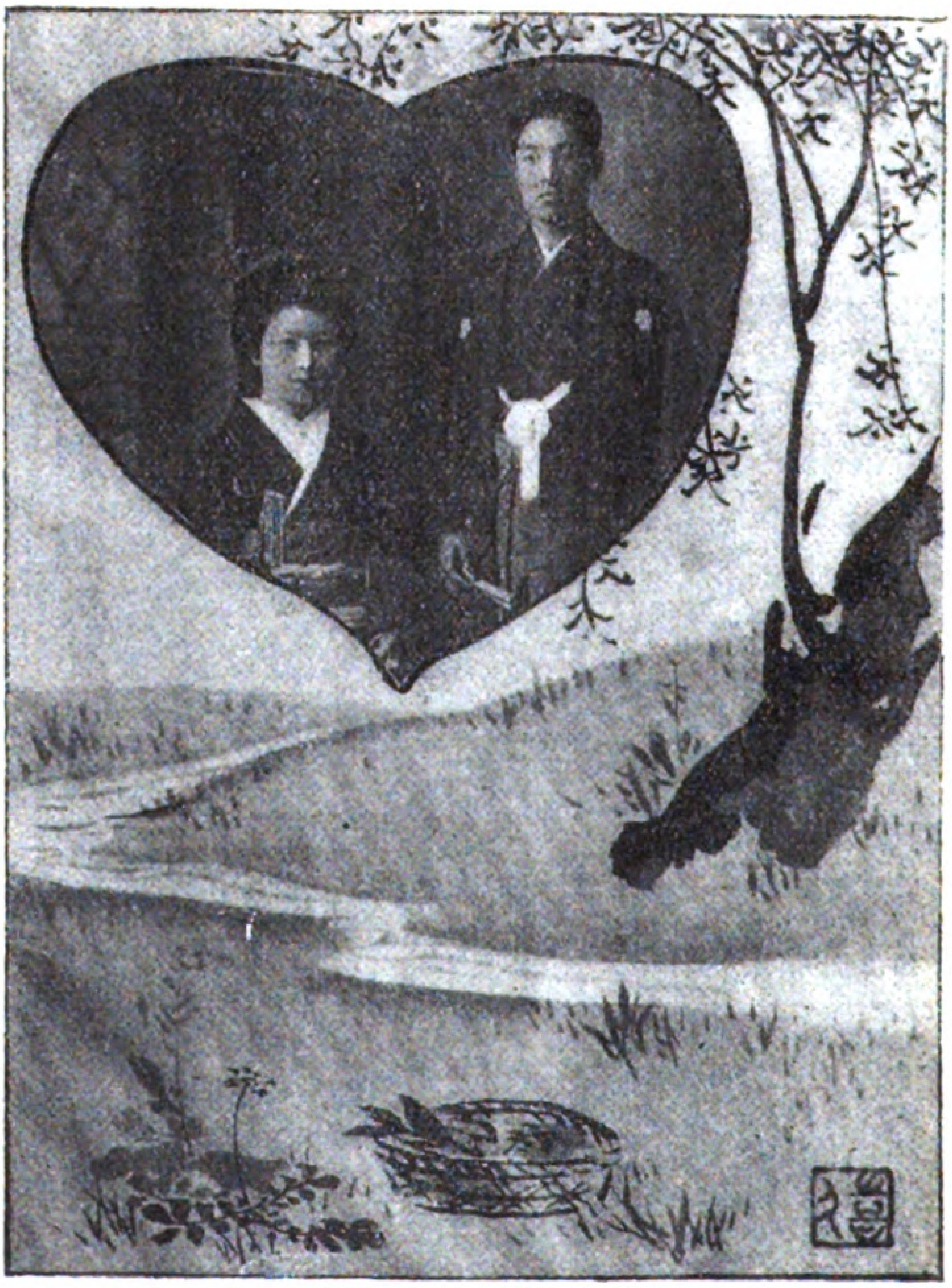
「あら姉樣お線香立てゝ掃除屋が參りまして？ 香をたきませうよ、くさければ……」

つてな風でせう我の女にもなれませんわねエホヽヽ

ホヽヽ。

「此家はお母様が女王だからねお母様さへ大事に仕へて呉れゝばいゝからね」と春の君武夫の御言葉に固より利潑の浪子朝に夕に行届きたるお世話申しても猶血に泣きて死ぬ不如歸のやうな家風もあれば。

「子息の嫁は私の嫁ではないから私の世話はしなくてもいゝから夫の世話をよくして二人仲よくして居てくれゝばよい」と仰有る春子夫人のやうなハイカラな御姑様も御座す世の中。



新婚の春

私と御一緒に或學校を卒業したお友達の中でも新聞を讀ませると生意氣になるとて新聞一つ見る事もなく年中大丸髷に美しう化粧して黒紋付の御羽織しとやかに坐つて入らつしやる御新造様がありますの。私がいつぞやはる〴〵御訪問申上た時も御兩親様はじめ御兄弟迄まるで一世紀へだてたやうなお固い方で私には牛肉を二里許り遠くから取らせて食べさせて下さいましたが頂いてしまつてふと氣が付くとお臺所の傍のお膳立の間をお女中が一生懸命にふいて居るぢやありませんか。

「牛の油で歩くのに氣味が惡いと云ふのですよ」と其お友達が仰有つた時は恐縮してしまひましたねエ

ほんとに、けれど奥床しいぢやございませんか、其お家中の禮式の正しい事長幼上下の區別の明らかな事と申したら、それは〳〵拝見して居ても美しい位で物を仰有るお言葉の節かな風なんて當世日本武士道すたれた東京市中の社會のメチヤメチヤの家庭なんぞでは夢にでも見られや致しませむ。

それに引かへ百合子様の御幸福せ、旦那様は百合子さんとお呼び遊ばしお母様は百合さんと仰有る。お御足の悪いお母様は年中お部屋にお閉こもりで若御夫婦は日に一度もお見舞ひ遊ばさぬ時もありますの、日曜日にはお二人で必らず御出掛け、常の日でもネクタイ一筋位の買物にもお二人御一緒。月清き夕手を組むでのそゞろあるき、小説の口繪のやうでございますつて婆やがおほめ申して居りましてよ、それで時折は百合子様お晝眠を遊ばすのですつてそれは矢張り御主人様のお好みで衛生の爲めなのでございますつて、婦人がいつ迄も容色美しく長命するにはお晝眠を致さなければいけないつて佛國の名女優の説なんでございますよ。



新婚の春

エ？

お子様がお出來遊ばしたらお晝眠どころか夜

分もお起きになる事であらふつて？

イヽエ飛んでもない!!!　乳母をおをき遊ばしますわ

けれど時にはお二人して乳母車の中にお可愛いゝの乗せてお散歩でもなさろうと云ふ時はそりや旦那様が車をおひき遊ばしてよ？　エ道の悪るい處へ來ると大變ですつて？　何故エ？　奥様のお手を取つてお先きに渡してそれから乳母車をまた渡すでせうつて？　それは勿論よ、弱き者をいたわるのが文明の世の紳士のほこりでございますわ。



登かれば後ろになりぬ春の山　（碓嶺）

緋の燃ゆる夜着の掛衿牡丹花の冴え〴〵と眞白き胸も露はしてお乳をもませて居る歌ちゃん。年は十七、時の大臣の御情け美しき身に餘りて先月幾日玉のやうなお坊ちやんを産みましたらお乳が凝つて痛くつて〳〵と月の眉打寄せて早速招きよせたお乳もみのお時さん、

お乳がはねますからおタオルを一つとお附添のお美代に申ましたら

「イヽ事よはねたつてかまやしないわ、こんな衣服!!!」と黒地に白の粗い粗い雨絣のお召の袖をやけに引くと下には紅黄亂るゝ

友禪の長じゆばん。丁度お見舞に來た新橋のきよ香姐樣が、「殿樣は？」つて聞きますと、「面白くないから來なくつてよ、何今に坊ちやんが笑つたり這つたりなさるやうになればやつて來るさ、其時分にや私だつて帝國座へでも何處へでも行かれるやうになるわ雁治郎さんも來るしねエ、アヽ姐さん早く起きられるやうになりたいわ、横になつて毎日々々天井とにらめつくらちや辛氣くさくつてよ、」と情けなさうな聲を出すの木目と云ひ木口と云ひ申分ない此お妾宅の天井板一枚を眺めても殿樣の御恩を思ひ出しさうなものでござんすが、つてこれはお時さんが姉のお乳をもみに來た時のお話なのでございますよ、張りと意氣地のあの社會の風もまた一つ變つて居りますねエ、こんな氣樂な世渡をして居る人々があるかとおもふと○○○先生のやうに一唱鬼神を泣かしめ一讀卷を措く能はざらしむるやうな立派なお作物をお書きになるお手で七人のお子さんをお一と手にお育てになり足袋のつくろひや、およだれ掛けの御洗濯までも遊ばすやうな奇特なお方もあつてまつたく勿體なさに涙こぼるゝ次第でございます。



花の世や家にありては家櫻　（葛三）

以上は今の世のさま〲の家風について話した時家庭の事には門外の蝶さんが云つた言葉。何事も思ひのまゝの藝術家も何處かの風の吹きまはしで氣に入らぬ事でもあつたと見え思ひ切つて惡まれ口をたゝいて歸つたこと……私のやうな高等女中とちがつてお孃樣生活で不平な月日もあるまいに、どうしたのやら……

……、

然しあゝ云はれて見ると成程世の中はむづかしいもの私などにいつも夫は「外へ出ればよけいな事を聞いたり見たりして衣服がほしくなつたりどこかへ遊びに行く氣が出たりしていかん子供を育てて飯を甘味く食はせてくれゝば女房の役はすむ、女子師範の講義だの女子大學の科外生だのと本ばかり買つて見たがつても必要はないよ」と仰有るのであきらめては暮て居れど蝶さんなんかに比べたら生の意義は殆ど無い蝶さんにするどく評されゝば嗚呼何と笑はれる事やら……うるさい世の中にはつくづく飽きました。



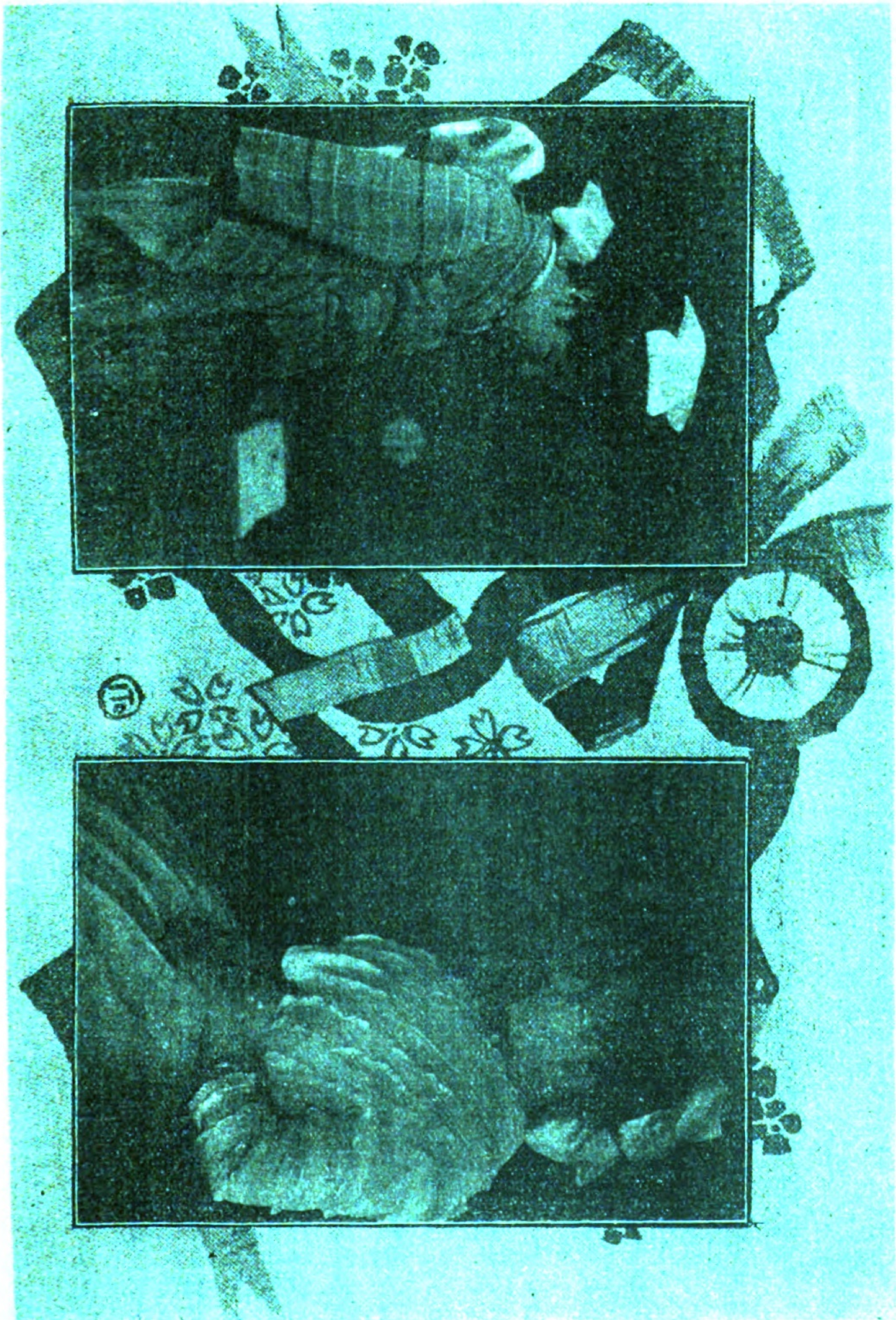
姉と妹

霞立春野の雲雀何しかも思ひあがりて音をやなくらん　（眞淵）

くれやらで霞にとまるかげみれば夕日も花を惜む也見　（景樹）

程もなきまがきの野べも自づから家離るれば面白き哉　（千浪）

花ごよみ





覆面したる主婦

高松美佐子

先日は草餅をどうも難有う、長屋門の前の土手で摘んださうですね、本當にいゝ匂ひがいたしました、がねえ餘り芳しくもなかつたのは一緒に着いた深く深く封じられたお手紙、私は文さんの心を疑はずには居られません。何故貴女は平和な家庭を趣味がないと仰るのです。ともすれば東京の叔母さんの處へでも逃げて行つて一修行、と云つた樣な口吻が見えますが、貴女は貴女に愛を濺いて下さる夫、慈愛をかけて下さる御兩親、其方々に背いて迄も自分の儚い希望を滿足させやうと思ふのですか。一體何が不服なのでせうか。まあゝれ程までの手紙を寄す位だから理由のない譯でも御座いますまいが、それはもうほんの胸の曇りなのです、霽れた後に見れば可笑しい程根柢のないものになつて了ひます。

そりやわたしだつて此家へ來た當座は貴女の一倍かけて厭な思ひもいたしたのです。御覧の通り宅へはあの樣に人が出這入つて居るんでせう、それも皆酒屋者と云つて一種の渡者なのです。もう世間の飯を喰倦きた者ばかりですから、却々どうして人の顏色ばかり窺つて居る奴が多くて一筋繩には行かないのですよ。けれども一家の主婦となつて見れば厭でも應でも此荒くれた人達を使つて行かねばならないのです。それが家の家風として一家の主婦たるものは、他の大家の奥樣の樣に一室に閑居してお茶をたてたり、四季折々の草花でも生けてつれ〴〵の節は日あたりいゝお座敷で、古い浮世繪を風雅に貼つた小屏風の側に、座椅子によつていらしやるお姑樣のお慰に、草双紙を讀む位

が能――私も初はこの位と豫期して嫁いで來たのですが――とばかり思つて居らないのです。朝から晩まで元旦から大晦日迄一日として緩りとした事はありません。それに宅では昔からやつて來た家例として店で量賣をするのです。まあ解り安く云へばコップ酒を賣るのです、と云ふと東京あたりでよく見る一寸一杯を聯想して厭らしい感が起りますが、決して宅では營利的にやつて居るのではないのよ。貧しい勞働者が脂と汗とで取つたお錢を集めやうといふのではなく、先祖が此業によつて身代の基を作つた事を忘れない爲めと、憐れな下層の人々の胸を暖め生活に苦んだ其痛手を暫しでも忘れさせやうと云ふ考からなのです。其故宅では一人について一杯――二合五勺位這入る俗に片口と云ふものです――外賣らない定めなのです。ですからさう大した散財をする譯でもなく勞働者は大枚八錢のお金を鏡の樣に光つた上り框に投げて行けば、當節では寒浸し寒い頃は湯豆腐位でいゝ氣持になつて端唄で歸つて行けるのです。

ですがね其接待役は主として主婦の役目なのです。私達はよく學校に居る時から社會に出てから困る〳〵と云つて學藝會の幹事、園遊會の接待役に無理に出されたものでしたが、いくら家風だと云つて一杯賣のお給仕に出なければならないと聞いた時、たゞでさへ母親戀しく里戀しく今頃文ちやんや昇さん等は何と噂し合つて居るのでせうと其事ばかり思出して居た矢先ですもの私の小さい心はぶる〳〵と慄いました。

それに初は生憎お嫁さんを見て來るんだ〳〵と云ふ調手で我れも我れもと來るので流石に廣いお店も一杯に込み合ふ樣な譯で、私は本當に泣きたくなりましたつひ馴れないものですから量るのにもお酒を醱す、餘り人が居るので面羞ゆく胸ばかり焦つても氣は茫として居る、で五十錢銀貨を出されてつい釣錢を間違ふ。「お内儀さんお釣が餘計だせ――祝儀にくれると云ふなら難有く戴いて置くが」と注意されるはつと思ふと如何していゝか解らない。と愛想のいゝお京さん――佐倉へ嫁つた娘さん――が何とか造作ない挨拶をして

居る。其當座たら全くお話しのやうでしたよ、一寸した用で藏へ行つて見る、廣い天井には大きな梁が恐しい程横つて居る。大樽の中の酒の醗酵する匂は切に鼻を衝く。古シャツ一枚の藏の人等は希臘人の彫刻を見る樣に足を踏張つて醅を掻きながら、高々と唄を歌て居る。聲は廣い藏の中に響いて妙に恐しく感せしめる。これでも用があれば日に何遍となく行かなくちやならないのですもの本當に厭になつて了つたのよ。朝起きたつて鏡臺にも緩々向つて居られないのです。お三どんを使つて幾十人分の支度をする。それが濟んでほつと一息吐く間も食器を洗ふやら、洗濯物の差圖、八百屋が來る、魚屋が來る、一々奥へ伺つて見立てをする。其中に晝の支度にかゝる、毎日々々の惣菜の苦心、學校で習つた料理法なんぞは全く此臺所には無用の長物なんですよ。毎日天麩羅や鹽魚ばかりは喰べさせても置けず、と云つて大抵標準の極つて居る豫算からでは甘いものは些ばかりしか附けられず、その取合せの苦心は世間馴れぬ身に



は堪へましたよ。其當座は謙て望んで居た新婚の喜びなんぞは二の次三の次、何處へか逃げて行つて、羨望的にお祝を述べて行くお友達の手紙も、何だか空言を聞く樣でした。

文さん其頃の私の不平たらありませんでしたよ。若し貴女が私とずん／＼文通する事の出來る齡でしたら毎日親展と銘打つた手紙が二三通行つたかも知れませんよ。けれど時は人間の心を外圍に調和させる唯一の力です。嘗ては歌も詠み美文も綴つたその細い指に煮物箸を握るのが苦痛で／＼仕方がありませんでしたが今は却つて樂しみになりました。俗化したと云ひませうか趣味が退化したと云ひませうか、私は孰方でもよく當つて居ると思ひます。けれどもか樣な言葉は男の側に用ゆべき者で、女の場合に於きましては家庭化した即ち家風に順つたと云ひたいのです。一體に古くから傳つて來た家風と云ふものは兎角若い人々には敬して遠けられ易いものですが、私は此場合女の身としては謹んで順ふといふのが一般に穩當な仕方だらうも思ひます。これは狹い私の經驗から割出した考ですが、今幾代も續いて來て幾多の人々の思想を宿して來た所謂古い家風と、若い人々の欲するまあ新しい家風とを較べ見ますれば、どうも後者の方が危い樣に思はれます。何故かと云ひますれば永年續いて來たものは、善かれ惡かれ其家を保つ事には適して居たものと認められますが、新しく出來たものは單に御自分の趣味や思想に適つて居ればい〻と云ふだけで、家庭の支持にはどうかと思はれます。と云つて私は家屋は木と萱で造りなさい、これが數千年間人を住はせて來たといふ保證があるからすべてこれによりなさいと云ふ譯ぢやありません。美しいカーテンの垂れて居る洋館に、夕陽が華やかに映えて大理石が白く光る――と云つた樣な宏壯なる構造を誰が呪ひませう。同じ意味で華美なる家風にのみは萬人が萬人依る事が出來ません。これが男の方ですと萬難を排して理想に突進すると云ふ事も一つの快事でせうが、私達女にとつては如何にして理想に達しやうとするよりも如何にして家風に適す

る様にするかゞ取るべき賢い道であらう思はれます。北國の兎は冬になれば白くなると云ふぢやありませんか。移い易き情を持つて居ると云ふ事は、天が弱きものに與へた特權なのです。そりや本當なんですよ、私は今では却て毎日の仕事が樂しく仕事が多ければ多い程、致甲斐があつて宜い様に思はれるのです、矢張北國の兎なんですね。

文さんだつて今の處ではどうしたつて自分の氣風に合つた——考へる事思ふ事の安らかに宿るべき家風を望んでいらしやるのでせう。けれどもね茲が考へて見なければならぬ處なのですよ、いゝですか文さんが理想に向つて進んだとしてね、其處に障害があつても猶初めの望みを堅く取る事が出來ませうか——高い木の上へ木の實を取りに昇つた子供が中途で足を辷らさうとした時でも猶木の實が欲しからうか。私の考では文さんは矢張木登りをするよりか白い兎になる事の方が上手ぢやないかと思はれますよ。さうしたつて滿足といふ點には變りはありませんよ。ねえ文さん養蠶をやるたつてそれぞ好きにする様にしたらいゝぢやありませんか。そ



うして糸を引く事を覺えて自分で織るのもいゝ樂しみぢやありませんか。面白くないつまらないと云ふのは我儘なのです。

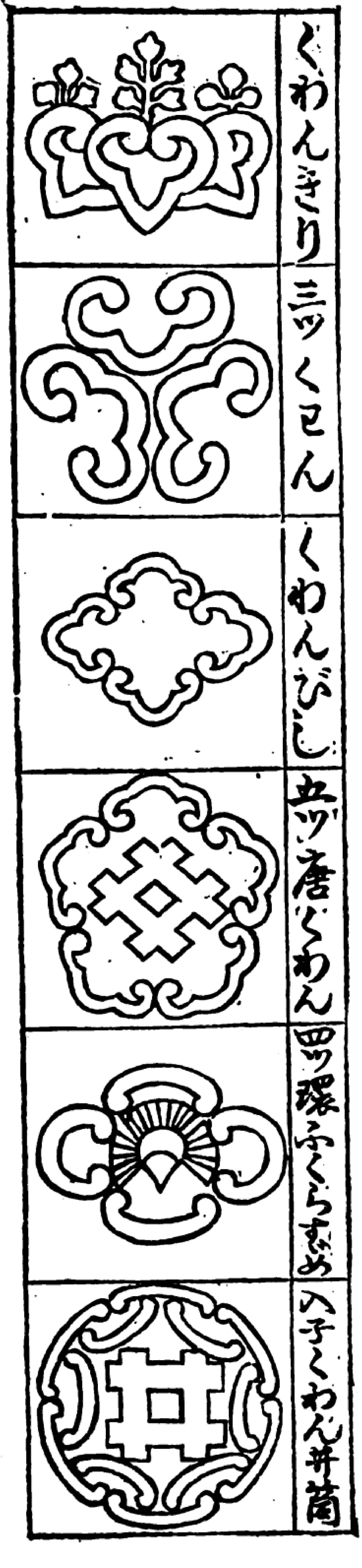
　キリストも云つたではありませんか、本當に我がもとに來て眞の神の惠に浴さんとするのには生れ變らなければならぬ、結局精神の改革を必要としたのです。御同樣に文さんだつて眞に樂しい家庭の人となるのには、矢張り家風に適する樣な氣風にならなければ駄目です。

　かう云ふと難しい樣ですが、要は辛抱と云ふ二字です、さうして居る中に時と云ふものは自然に貴女の心を一變してくれます。

　どうかね姉さんの頼みだからさうして頂戴な。もう貴女の方では毎晩蛙の鳴く聲が聞えるでせうね、私始終さう思つて居るのよ貴女の處の裏は大變に廣う御座いますから、あの周りへ白楊樹でも植ゑ山羊でも飼つたらいゝでせう。春の日なんぞにあの遊んで居るのを見ると長閑で宜う御座いますね。さうすると町から牛乳を取るよりも趣味があつていゝでせう。

　里では皆さんお變りはないですが、私は遠いので滅多に行かれませんから貴方がお出でなすつたら宜しく申して下さい。

銑の意匠





樓上の寶

野末庵子

人の家にはそれ〴〵特色が有ります。食道樂だとか着道樂だとか又は平民的だの貴族的だの、其他種々さまざまで御ざいまして果して何がよいのか惡いのか判斷がつきませぬが、まあ私の幼稚な頭で考へますには、××さんの御家庭などが吾々の爲には、最も有益な參考の材料でせうと思ひます。

御家族ですか、御夫婦に美子さん英勇さんと云ふ十二に六の可愛いお子さんと、幾年も使ひ慣れた忠實な老婢と都合五人、御主人は某中學の敎授です。此のうるはしい家風を御紹介しやうにも、私の拙い筆では十分一も寫し出されませんが、幸ひ先日參上りました時奥樣が「ホヽ、そんなにこんな家がお羨しいんですか、別に苦心も何もありません、只皆が心を曇りなく毎日暮して行くだけですもの、ぢや私の日記をお目に掛けませうね、私共には秘密と云ふものが有りませんから何人にでも見て頂けますの、その替り奇拔な事も面白い事もない、眞個に斉な事ばかり書いて有りますよ」と仰つてお貸し下さつた日記がこゝに御ざいますから、其一節を拔いてお目にかけませう。

△△日　春の朝のすが〳〵しい事、身も心ものび〳〵する樣、裏の梅林で鶯が鳴いて居る。

臺所では老婢がかたこと朝飯の用意をして居るので美子を起して雑巾掛に手傳はせ、私は二階二間と下の八疊を掃除して清らかな朝の空氣を入れた。茶の間のチャブ臺に茶碗が並んで、美子が獨で髮を結つて終つた頃主人がにこ〳〵して起きていらつしやる。其後から英勇が可愛い顔を出す。父樣から着物きせて頂いてきまりよくつて。

お豆腐のお汁に美肴で手輕な朝飯がすむと主人は一寸新聞讀んで御出勤、美子もお隣の久江さん誘つて小學校へ行く。英男は玩具の電車もつておとなしく遊び出したので私は昨日からの主人の羽織を縫ひ、老婢は洗濯にかゝる。屑屋が來たから先日古切を取りあつめて拵へて置いた子供羽織二枚に紙屑を拂つたら九十五錢これは、直に貯金箱に入れてしまふ。

晝飯の後仕舞して居ると來客の聲がするので、急ぎぬれ手拭き〳〵玄關へ出て見ると、此は又思ひ掛ない、先日婦人會で初對面の三村の奥樣。うかゞひますよとは仰つたが、まさかこの遠い所をと思つて居たのに、なんて嬉しいお心の方だらう。座敷では餘り窮屈だから失禮をもかまはず直に私の部屋へ。

梅のかをりがすう〳〵して折々鶯の聲も聞える南窓の下で、手製のカステラでお茶を差上る。お話は婦人會の事から初まつて家庭の事にうつり、私が家内中の着物は勿論たま〳〵餘所のまで縫つて上るお話をしたら

「あなたはよくそんなにお手が廻ります事、私だつて働くつもりですけど……」て仰るので

「奥樣は物を考へて被居るからいけないんですよ私は考へてる間にどん〳〵働きますから仕事は面白い程片付きますし、體も極丈夫ですそして、一生懸命働いた後は實によい氣持ですね」

と申したら、くびを動かして默つて私の顏を見つめていらしつた。

小さいお子さんの着物が切れて困ると仰るから、いつそ洋服になすつたらと、英男のと同じ型を新聞紙で切つて上げたら大そうお喜びなさる。ほんとに優しい氣の置けない好い方なのでもう十年ものお交際のやうに打とけて色々とお話に花を咲せて了つた。三時頃お歸りなさるとき

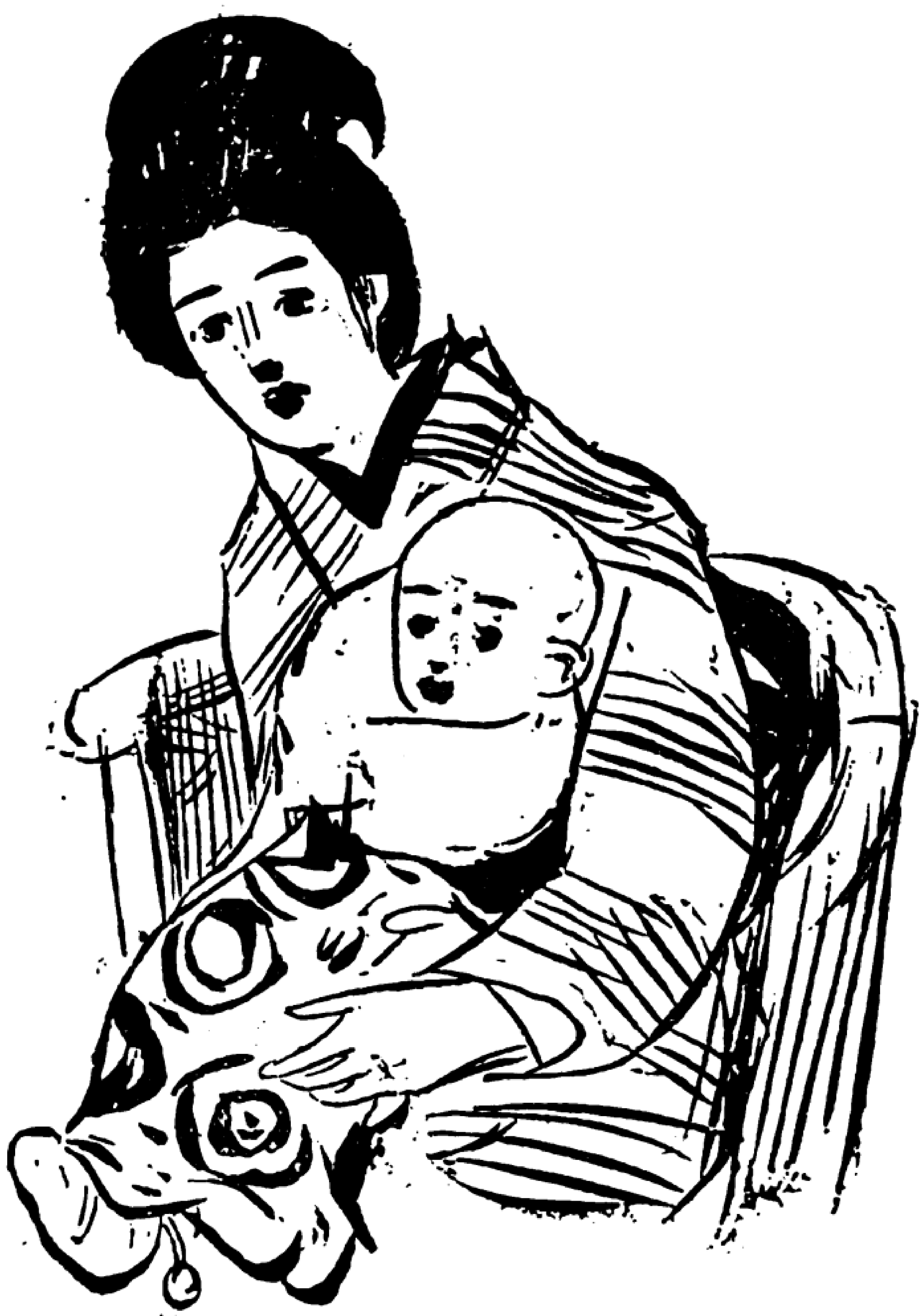
「奥さん眞個に樂しう御ざいました」を繰り返しくりかへし仰つた、お世辭もあらうけれどこう云はれると心の底からうれしい。

主人が御歸宅なすつたので洋服をたゝみながら今日

のお話すると「それは樂しかつたらう、何でも客は心安くもてなよが一ばんだ。此方のあつかひ樣で人はよくも惡くもなると仰つた。

晩のお菜は玉子のふわ〳〵に鹽引鮭。食後美子が今日學校でお習字が上手だつて先生に褒められて嬉しかつた話やテニスに勝つた事など聞いて子供二人は先に寢ませ。老婢もよんで三人してお茶のみながら世間話そして十時にねる。

△△日　いゝお天氣。まあ一晩のうちに表庭の櫻がぱツと開いて目のさめる樣、三枝ばかり折つて佛壇へ供へたり、床も挿す。



例の通り主人と美子を送り出したのち、老婢は英男を連れて裏の畑へ小松菜摘みに出掛、私は櫻の下で張物する日當りがよいから張るそばから乾いて、忽ち二枚ぶり了た。縁（腰かけて雜誌を讀んでると藤本（呉服屋）が來た。

霞御召にウヅヲ縮緬、紋羽二重やら鹽瀨やらさては高浪織とかコブラン織とか、名もろく〳〵知らぬ立派な丸帶やら、目もくらむばかりなのに、商賣慣れた番頭は油ぬつた樣によく滑る

口で、流行だの配合だのと女の心を動かす樣にベラベラ喋口り立てるので、暫しは煙に卷かれて居たがやつとの事で立板に水の口上をこちらから切上て、隅にまるめて有つたメリンスの半襟を四ッ（近所の娘さんへのお愛想にと思つて）と綿ネル五尺（主人の襦袢の袖）とを買つてかへした後でホッと一息。

それは私だつて女だもの、あんな結構な物見せられて欲しいと思はぬ事はないが、私はかう云う欲の起つた時はいつも自分の身分を考へる、月給四十五圓やそこらの敎師風情の妻や子に、お召の重や友禪縮緬が着られる道理もなし、よしんば無理算談をしてそんな姿してあるいたつて、世間の人は何と云ふ、あれは借金の形身だとか又は不正の金でとか云つて後指を差すだらう、又春の樣に平和な此家庭も忽ち荒凉たる冬の世界と變りはすまいかあゝ恐ろしい事〳〵、私は女の大敵とも云ふべき虛榮心を抑へる丈の力をさずけて下さつた事を深く〳〵神に感謝する。

「春爛漫の花の色、紫匂ふ雲間より、紅深き朝日かげのどけき光さしそへば――」

妙な節まはしで秀男が唱つて居る。

餘りのどかだから庭下駄引掛て裏へ廻ると、淺黃手拭で頰かむりしてお茶摘に餘念ない老婢のそばで英男が蝶追ひまはしながら唱ひつはねつ嬉々として遊んで居る。

一寸可愛い頰へキッスしてやるとわあーと抱きつく。

まあ二三日のうちに麥のゝびた事、三町も四町もづらつと打續く靑々した麥畑にゆるい風が渡ればサワザワザツと小波たつて其うつくしい事何にたとへやう、實に自然の風景程人の心を洗ふものはない。

私も白手拭を姉樣かむりにしてお茶摘を手傳う。

午後は緣側へ私も老婢も裁縫箱も持ち出した。

三時が鳴つたのでお湯を沸して居ると美子が歸つてお腹が空いてよとの訴へ、丁度主人もお歸りになつたから直にお茶にする、今日のお八つは礒部煎餅、老婢は齒がないから別にお饅頭をやると「眞個に御親切樣

に……」といつもの口癖を吐いて老人の涙もろくも袖をぬらして居る。

夜になつて主人に今日の買物をお目にかけると、

「欲しい物が澤山あつたらうに……お前もなか〳〵吝いな」



つてお笑ひなすつた。が其微笑のうちにひと方ならぬ御滿足のほの見えるを感じた。

△△日　いつも〳〵よくお天氣の續く事。

老婢は庭の草とり、私は朝から家内中の敷布を洗濯した竿にかけ渡すと、晴れきつた空に眞白い布が榮えて、ひら〳〵春風に翻る様は藤本の新柄陳列を見るよりはるかに心地がよい。

前の道を諸方の店の掛取りが忙しさうにあるく。

家は氣樂なもの、その時〳〵に支拂つて仕舞うから月末だつて平日と變りはない、一體月給取りの身分で通帳を置くなどは贅澤すぎると思ふ。通帳を置けばどうしても時々お金のいらないにまかせて、餘けいな品までほい〳〵買う、それがわづかばかりだと思つても積り積つて月末には大したお金になるのだ、私は實にそれが恐ろしい。幸ひ主人も私の現金買に賛成して下さるからどこまでも此主義で通さうと思う。

主人がお歸りになつて今月分の月俸を渡される。

其内十圓を直に取りのけて置いて貯金箱をあらためると三圓五拾錢になつて居つた。ほんとに塵も積れば山となる、屑物拂つたお金でも馬鹿に出來ない。十圓にこれをたして都合今月の貯金は十三圓五十錢これは主人が散歩がてら僕が預けて來やうと、子供二人連れて郵便局へ持つて被居しつた。

夕食後私は殘り三十五圓を、豫算通りに費目分して袋へ入れて仕舞つてやつとこれでひと安心。

窓の外で主人が「いゝ月だ」よと仰るから、子供も老婢も連れて表の芝生へ出る。十三夜ばかりだらう、薄つすり霞んだ月が花たわゝな櫻の枝に掛かつた風情、内藤樣ぢやないが眞個に掛ねなしの一刻千金――。

そよら〳〵と吹く風に、いゝかをりがすうとして來る。詩と云はうか、畫と云はうか、暫しは夢心地。

思へば私等はよい月日の下に生れたものである。夫婦とも〳〵健康の賜を得て、子供も日に〳〵大きくなるばかり、召使う老婢さへまめ〳〵しく心に何の憂もなくて毎日この美しい自然を友に活動して居るこの仕合せ、何の寶がこれに及ばう。

あゝ、我が一家は幸福である。平和である。

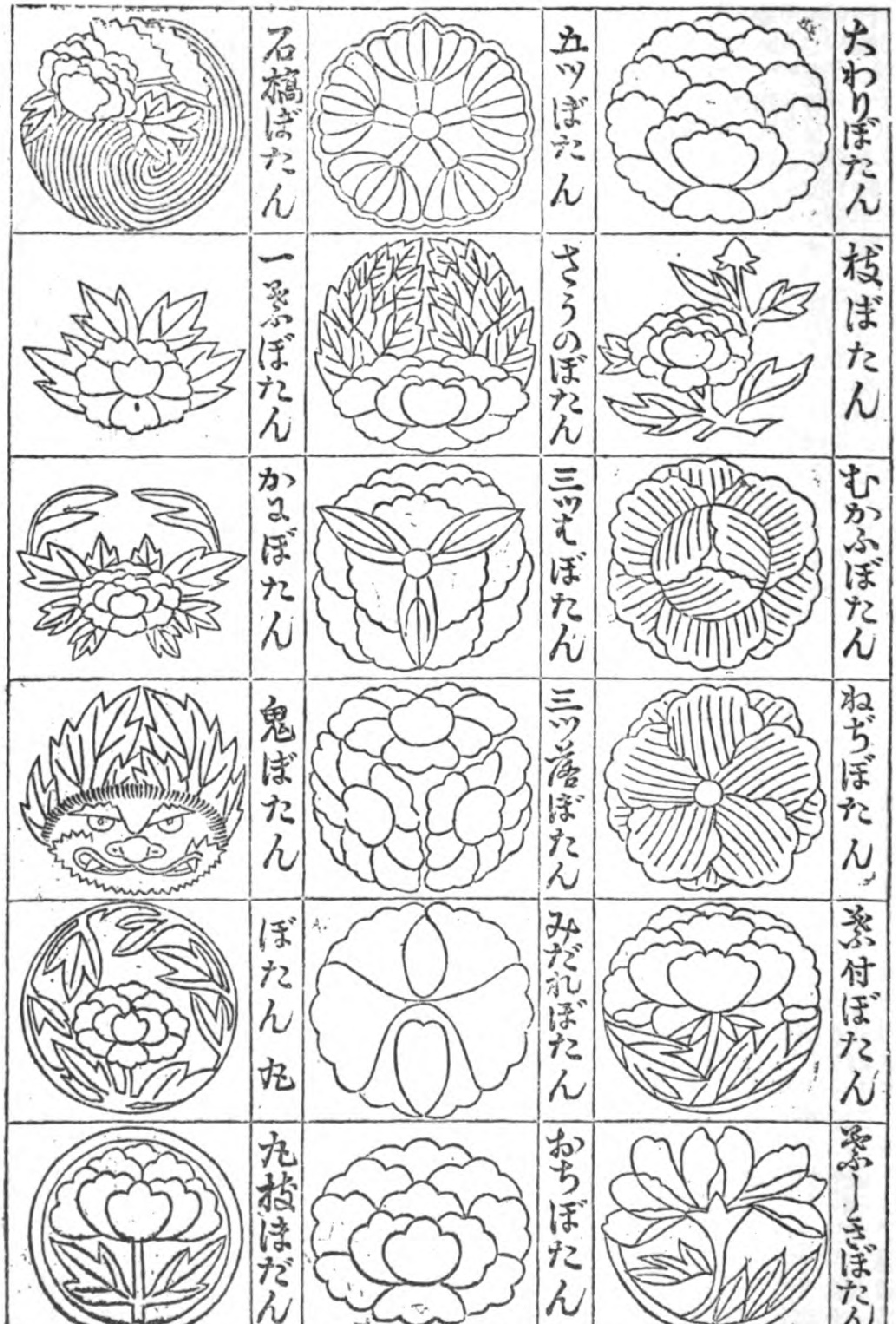
おゝもう月も大分傾いた。どれ戸締をし　に安らかなりし今日を謝し、又來ん日よりの幸福を祈つてやすみませう。

……………………

右の日記を見ましても、その麗はしい御家庭の有樣が解りませう、これと云ふのもみな主婦たる方の心掛一つです。私は密に心に思つて居ります。この樣に忠實なそして優しい快活な婦人にはその美しい性情を愛でゝ、神が人の羨やむスヰートホームを與へ給ふのであらうと。



ぼたんの意匠


大わりぼたん
五ツぼたん
石楠ぼたん
枝ぼたん
さうのぼたん
一えふぼたん
むかふぼたん
三ツはぼたん
かよぼたん
ねぢぼたん
三ツ落ぼたん
鬼ぼたん
えふ付ぼたん
みだれぼたん
ぼたん丸
えふしきぼたん
おちぼたん
丸枝ほだん

子供と親

與謝野晶子



○私の宅では十歳になる長男の光が午前四時半から五時の間に第一に目を覺して女中達や書生を起します。私と子供等の總てとが起きて仕舞ふと大抵午前六時が鳴ります。良人は永年不眠症に罹つて居て何時でも目が覺めて居る樣な人ですから、朝は少し遲く迄床の中に居て疲勞を恢復させ、寢ながら十種程の新聞を讀んで仕舞つて、七時半頃に起きる習慣になつて居ります。瓦斯で炊事を致しますから、長男は六時半迄に一人で先に朝飯を濟ませ、七時には辨當を持つて學校へ出て參ります。特に早起をする樣にと命じた譯でも無いのですが、學校へ參る事が好きなものですから自然に早起の習慣が附いて仕舞ひました。尾籠な事を申す樣ですが、長男は小學に參る樣になつて以來、一日も缺かさず朝起きると直ぐ大便に參ります。之は學校の制服が洋服ですから、一年生の時分に學校で便所へ參つて過失を致さない樣にと考へまして、入學前に唯一回催眠術を施して毎朝用便を致す樣にと云ふ暗示を與へたのが妙に効驗があつて、數年間の習慣になつたのです。丁度只今は小學の入學期ですから、初めて小學へ入つた御兒さんのある御宅では斯樣な事も御參考になりませう。催眠術を下手に施しては却て害がありますから其れにも及びませんが、毎朝上圊する習慣を少し氣を附けて實行させると宜しいでせう。

○宅では力めて子供等と一緒に食事を致します。事々しい膳拵へなどを致さずに飯臺を二つ並べて、其上で

皆が同じ物を頂くのですが、どちらかと云ふと兩親は食べないでも、發育盛りの子供達に滋味に富んだ物を擇んで頂かす樣に致して居ります。子供達は他所で食べる物がおいしいと思ふ樣なさもしい癖を附けまいと考へまして、經濟の許す限り月に三四回特別な馳走を手づから致して遣ります。と申して貧しい中で致す事ですから例日の惣菜に何か一品か二品か餘計に拵へるのに過ぎません。又子供達に食物の好き嫌ひを云はない樣に注意し、良人から女中まで隔て無く同じ惣菜を頂く樣に致して居ります。私の生家の父が鄕里で名高い美食家であつた爲、自然その感化を受けた私には今も好き嫌ひが止まないのですが、嫌ひな食物は初から私の分丈調へないで置きます。其れが爲に私だけ外の物を特に頂くと云ふ樣な事は致しません、私は有り合せの物で濟ませて置くのです。主人と家族とが食事の時間を別にしたり、食物の調理を主人丈別に品數を殖したりとする無駄な手數と贅澤とは、生家の例で私は懲々して居るのです。

○子供の躾方は放任主義を採らず、さりとて極端な干涉主義でも無く、私ども兩親から受ける自然の感化を土臺とし、其上に適度の制約を加へ、親どもに於ては間斷の無い注意を拂つて居りながら、わざ〳〵子供を敎訓する場合には好い機會を捉へて成るべく暗示を與へるやう、本人自ら反省の餘地のあるやうに言つて聞かせます。過失などは卽座に叱り、良人が思ひ切つて體刑を加へる事もあります。長男を育てる頃は子供の數の無い時分でしたから、萬事に注意する事が出來ましたので、其れ丈の甲斐のある子に育つて參る樣に思はれます。唯非常に貧しい極度の時に生れた子で一二歲の時に度々病氣も致し、營養の良くない體質を致して居るのが憐でなりません。二男からは體育の經驗を得ましたので比較的達者に育つて參ります。精神上の敎育は子供が殖えるに從ひ長男に致した程周到な注意は施されないのですが、長男の感化を受けて何れも素直に育つて參りますのは以外な經驗を致しました。初めて生れた子を可愛がるのは人情ですけれど、其初め

ての子の愛に溺れて仕舞はず十分兩親の敎育の態度を確にして注意深く育てて賞けば、其れが大變あとの子供の敎育に影響するものなのです。

○子供等に依賴心や僥倖心や人任せにするづるい心などを起させない樣にと思ひまして、子供達の事は出來る範圍で成るべく自身で致させます。其れには私ども兩親が元來さう云ふ癖が附いて居りまして、自分の衣服は自分で出し入れし、自分の蒲團は自分で始末すると云つた風であるのと、長男が又其癖が附いて居て、自分の机の中は自分で整理し、自分の寢衣は自分で着替へると云ふ風に致しますので、外の子供が自然それを模ねる樣になります。寢みますにも生れた日から長男初め何の子供も別に床を取つて單獨に寢かせ、自身の體溫で暖まる樣に致させ、寒い時節には湯婆を各自に入れて遣ります。其れで午後七時が鳴ると皆が爭うて自身の寢床へ這入り、誰一人寢ぞろを申す子は御座いません。斯う云ふ事が大變快活な氣象を養ふ事になり、傍の者に取つても非常に手が省けて始末がよいのです。親戚などには母親とで無いと寢まない子があつて、其れが世間普通の例だと申しますが、宅の子供は赤ん坊の時から偶ま添寢をして遣らうと致しても却て煩さがつて寢付かないのです。一體に晝間でも抱いたり負したり致さない事に癖を附けて居ります。夜中に小用を致しますにも宅の子供は滿二歲前から單獨に起きて來て虎子で致します。宅へ來る人達が此習慣に驚いて、其れ迄にするには非常に骨が折れたでせうと仰しやるのですが、私達には格別骨が折れて居ず、ほんの少しの注意で最初長男にさせた事が外の子供にも感染して仕舞つたのです。最も『兄さんの通になさい』とは何かに附けて外の子供達に申して居ります。

○又子供達に自尊心を養はす爲に『自分は上品な立派な人間になるのだ』と云ふ事を敎へ、其上品な人間と云ふのは、正直に物を云ふ事、自身の事にも又人の事にも注意して淸潔にする事、其れから立派な人間と云ふのは學問が良く出來て、世界の上の萬事の筋路が明確と解る事、どんなに微細な技術でも、高尙な職業で

も、低い賤しい勞働でも出來る事であると言ひ聞せます。美くしく、面白い、作つた譬喩のお話として神様や佛様の事を聞せますけれど、一切宗教がヽッた話は致しません。又人を臆病にする話、即ち妖怪の話なども致しません。稀に滑稽な材料として致す事がある位のものです。お伽噺は兩親で作ッて聞かせます。模範になる人物の例には歴史上の人をも引きますが、寧ろ子供の印象を確實にするには現代の人の方が効果が多い様に思ひますから、成るべく只今の人を例に引きます。

○又『人は凡てに秀れて居ない人でも何處かに一つか二つの感心すべき長所があるものだ。其長所に氣を附けて其人を敬ふ様にするのが上品な人の心掛だ』と言ひ聞かせて、女中でも出入の商人でも、宅へ來られる多くの人達に就ても、其長所を注意する様に致させます。

○又私どもは特別に親を尊敬せよと云ふ様な事は申しません。何人をも尊敬せよ愛せよと云ッて置きますから、兩親も乞食も皆同じく愛すべき人間だと子供達は考へて居て、乞食をせねばならない様になッたのは、病身な爲に働けないからで、學問をさせて呉れる親が無かッた爲か、又自分で懶けた爲か、何れにしても氣の毒な事だと同情して居るのです。私の宅の子供の缺點は此同情心が勝ち過ぎて涙脆い事です。一つは文學的な空氣の中に育ッて自然に感情的な感化が過ぎたのでせう。其れで兄弟喧嘩などは餘り致しません。喧嘩と云ふ事は人情の曲折を知る助になりますから、少しは致す方がよいとも考へるのですが、稀に致す事があッても直ぐに下品な事だと氣が附いて、雙方で謝罪ッて居ります。下品だと云ふ事を太層恥ぢますから、外の子供が品の無い遊びをしたら、來客の中に下等な詞遣をする人があッたりすると、宅の子供の方で顏を眞赤に致します。兄弟同志潔く謝罪ると云ふ習慣は私の宅では不思議な事で無く、兩親も過失をすれば子供に對して鄭重に謝罪ッて居るのです。

○其れから五箇條の御誓文の御趣旨の通、廣く智識を

世界に求めて、思想の上に國境を設けさせぬ樣に注意し、自分は世界の一人だと思はせ、從來は歐羅巴人が賢かッたが、今後は日本の天子樣の臣民が世界で最上の人に成らねばならぬと敎へます。併し何う云ふ職業の人に成れなどとは少しも申しません。立派な人は何んな事でも又幾通の事でも喜んで勉强するものだと云ふ風に考へさせます。長男は四歲位の時から葉書の古いのと鋏と糊とを與へて置きますと色々の切子細工を拵へて弟や妹に呉れます。畫も好きですから毎日曜に藤島先生のお宅で遊半分に敎へて頂きます。又四歲位から物の勘定を習はせましたので長男も二男も數學の才に富んで居ります。斯う書いて參りますと大分に干涉主義の樣に見えませうが、實際は口に出してこせこせと矢罵しく申すので無く、隨分放任主義に育てて居る積なのです。小學から歸ッて來れば勝手に遊ばせて置いて復習などは一度もさせません。但し兩親は子供の知らぬ間に小學の敎科書を讀んで置きますから、子供が學校で何を習ッて居ると云ふ事を心得て居て、時時話の序に質問をして子供の記憶と注意とを新しくして遣ります。一體孔子の敎とか誰某の修身書とか云ふ物は時代に適せぬ所も多く、廻りくどくもあッて、子供には兩親の敎育が何よりも大切だと思ひますから、良人も私も常に自然の活きた模範にならうと努めて居ります。其れで此十年間子供の爲に併せて親自身をも敎育した結果になッて居るのです。之は却て子供に對して感謝せねばなりません。

○も一つ子供の事を申しますと、宅では間食をさせません。菓子とか果物とかを必ず食後に直ぐ與へます。之が爲に何の子供も殆ど腸胃を害した事が無く、全く腹痛を知りません。芝居とか寄席とかへは一切遣はしませんが、音樂は經濟さへ許せば聽かせても習はせても遣りたいと思ッて居ます。私は自分の子供が何になるか全く考へても見ないのです。身體を健かに育てゝ中學程度の敎育まで親が面倒を見てやれば、其れから先は自分で好きな方向に進むであらう。其時に兩親としての義務は學資を用意して置いて遣る事だと思ッて居

るのです。其れから子供の教育に盡す親の力の乏しいのを内心で恥ぢこそすれ、子供に孝養をして貰はうなどゝ云ふ希望は少しも有ッて居りません。子供が大きくなつたら兩親は別居して飽く迄自營を續けて行くべきものだと考へて居ります。子供は親の從屬物で無い親とは掛け離れた『立派な新しい世界の一人』だと思ひます。つひ申す事が我子の自慢に爲ッて仕舞ひました。やはり親は子供よりも馬鹿ですね。

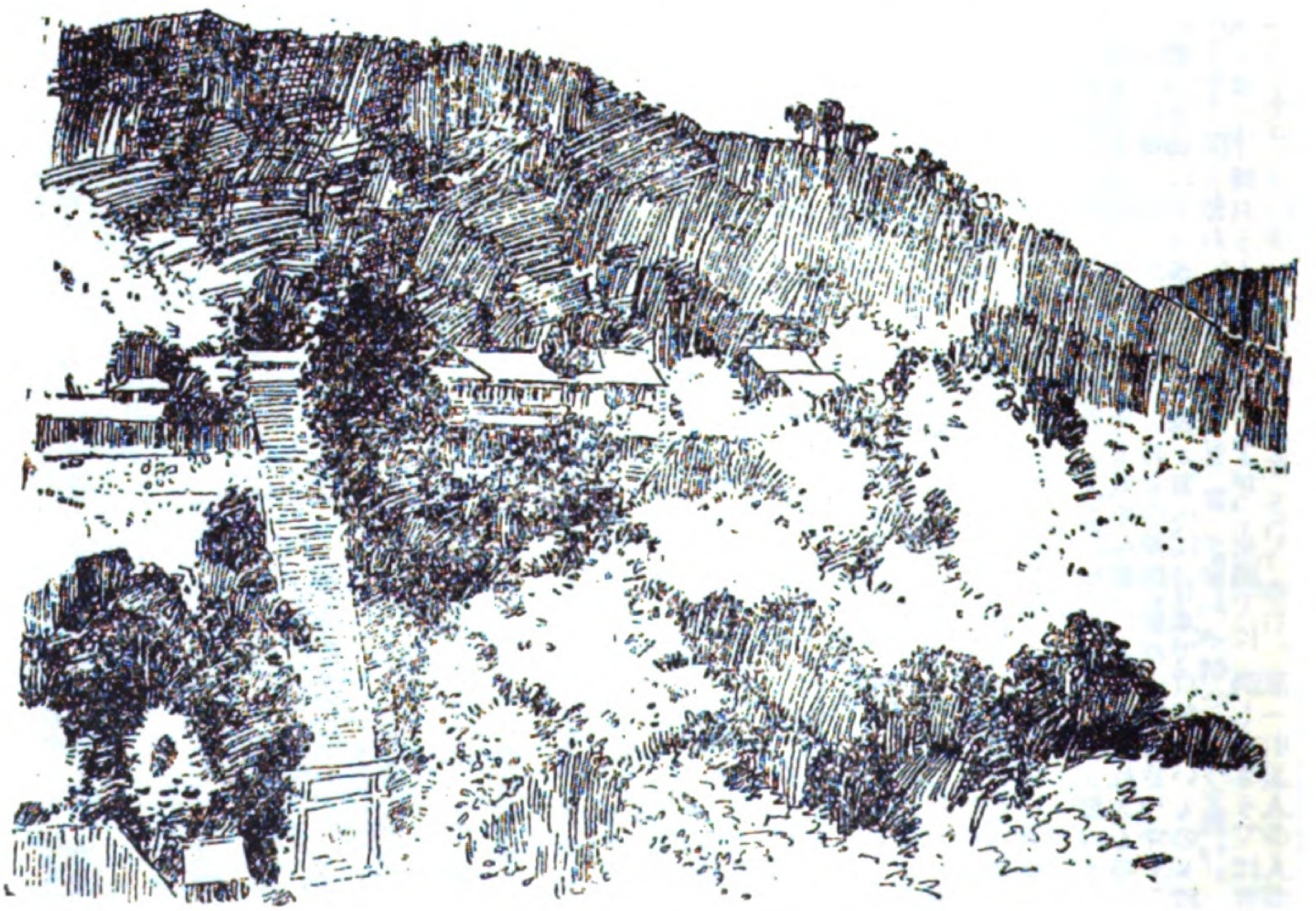
○私の宅には舅姑も老人も無く、諾册二尊が國を開かれた樣に全く私ども夫婦が單位になッて新に作ッた生活ですから、古くから傳ッた家風と云ふ樣な物は少しも有りません。物質的には隨分と困りも致しますが、精神上には私共も子供も比較的多くの自由を得て居ります。

三吉野は青葉にかはる岩かげに山下照しつゝじ花さく　秋成

松陰をを暗しとてや岩つゝじ己れ打出で火をともすらん　千浪

隅田川堤のさくら飛吹けば雪をかつぎて蛙なくなり　千浪

光なき朧月夜のいけ水の上にうきてもなくかはづかな　景樹



大和談山神社



米國の日本苦學女生

渡米の容易く出來た頃には私の方から渡航者を一ヶ月に五六十名づゝも送つた事があります。其中婦人は、シヤトル市のフワイツさんと言ふ老婦人が、我が國の女子の爲めに婦人ホームと言ふを建てゝ下さつたので、此方から單身の女子も向ふへ渡つても其人が迎へにさへ出て居れば、無事に上陸を許されたのです。御存じの通り、亞米利加は女の少ない國ですから、まう女と見れば、美醜にかゝはらず、老若を選ばず、うまく騙して汚らはしい女にすべくごろつきが港に押しかけて居て、却々危險で、夫とか兄弟とか確とした出迎人がなければなかなか單身では行かれません。しかし其のフワイツさんが受取つて下さるにしても、政府間にはちやんと約束がしてあつて、若し此婦人ホーム中から一人でも汚れた行をする女が出れば、一人に附いてフワイツさんが五百弗を支拂ふと言ふ事になつて居つたのであります。然し幸ひと其婦人ホームに入る我が國の婦人にそんな事をする樣なものは一人もなく、成績が誠によろしう御座いましたので、向ふでも非常に信用されて、其當時續々と女の渡米者を出しました。

渡米した婦人がどういふ事をして居るかと言ひますと、其土地々々によつて異ひますが、割合に秋は職業の多い期節で、果實の農園にいくらも婦人に適した事があります。譬へば蜜柑の產出地加州などに渡つて居る婦人であれば、摘んで來た蜜柑の一つ〳〵を其會社のスタンプを押した紙に包んで箱につめる事は婦人の役であります。之は多く苦學生の職業で、米國の婦人も亦雇はれて來てゐます。葡萄の產地では葡萄つみに雇はれてゐますが、秋日和の暑くなく寒くない日光を受けつゝ、廣い〳〵農園で一定の時間だけ働いて、二弗三弗のお金を得て歸る時の嬉しさは、日本の貴族のお孃樣がたが金に餘つての遊學よりも言ふに言はれぬ苦學の味があるさうです。

夫からずつと下流社會の婦人に成りますと、田舍の地に行つて、日本人の働いて汗に成つてきたシヤツや襦袢を洗濯してやつて、一日三弗位かせいでゐますが、日本婦人の利益の事は、日本で貧しい世帶の切り廻しをして居つたお蔭で、却々西洋の婦人の氣の付かぬ細かい所に經濟が出來て宜と言ふ話です。

春夏秋冬を問はずいつ行つても双手を擧げて歡迎されるものは富豪の家の下婢に入る事です。下婢と言へば日本では賤しいものゝ樣に主人も思ひ下婢自らも思つてゐますが、米國では決してさうでは有りません。下婢も職業の一つで、其立ち働きは大工が家を建て會社員が會

社へ出るのと同様なので、かへつて上品な事になつて居ます。それで富豪の事ですから立派な部屋を與へられ、食べるのは向ふで喰べて一月廿弗(六十圓)位を得られるのであります。而して學校へ行きたいと言ふ人は、朝の八時から午後の四時まで暇を貰ひ、一週間三弗位を與へられますので、此に多くの日本婦人は非常に精勵して居ります。お金を多く殘して歸らうとする人は、時間を向ふへ捧げればなりませんし、學問を頭に蓄めて歸らうと思ふ人はお金を少なく得る事を承知でなければなりません。

聞く所に依れば日本の下婢は非常に向ふの婦人に愛されるさうですそれは向ふの下婢は直ぐに權利とか義務とかを口にして、時間外であれば時間外として手を出さないが、日本婦人はそんな場合快く働くので其人情の厚いのと、温順にして忍耐のある所が喜ばれるのでおります。(島貫しか子女史)

嫁ぐ人の心得

此頃の若い女子がお嫁に行くとなると、第一に先方の財産を心配し配遇者の人物なんかはまづ第二位第三位とふ云ふ風で御座いますが是は誠に淺墓極まる考へで、一時の幸と永遠の幸を全く轉倒した者と云はねばなりますまい。女子が嫁ぐとなれば、兩親もあり、然らずとも一家の人々が種々と考へて呉れるには違ひありませんが、「怎麼樣談があるがお前の考へは如何か」と聞かれた時は、第一に其人の人物は如何ですと聞く位に、自分丈けは着實な考へを持つて頂き度い。

而して縁づいた上は、決して自分の榮耀榮華を望まないやうに、樂より歡樂を願ふのは人の情ですから、それが必ずしも惡いと云ふのではございませんけれど、徒らに物見遊山許り望むのは、一家の主婦としては間違つた希望では御座いますまいか。何卒妻君となつた人の希望は良人を助けて一日も早く立派な家庭を作り上げ度い、浮いた幸でなく、心の幸に充ちた家風を作り度いと云ふ事であり度い。

家政上の注意としては、第一に良人の家の收入を考へて、豫算を立て日用品を調ふべき事、女中を使ふ等と云ふ考へは毛頭有つて欲しくない事です。假令女中を使ふ身分であるとも、主婦が自ら臺所にも立ち常に女中は補助者に過ぎ無いと云ふ觀念を持たせなければなりません。

舅姑の有る無しに拘らず、嫁いだ家の家風を考へ、惡い習慣が有れば矯めるのは勿論好い事ですけれども、害の無い限り其家の家風を守る樣に有つて欲しい。若し舅姑があれば、舅姑は八釜しい者だ等と云ふ觀念を持たず、自分の父として又母として隔てのない眞心で仕へたら、嫁姑の間の不和等が如何して起りませう。

自分が習つた事に就て家政上にそれ〳〵理想もありませう。然し經驗の無い理想は役に立ちませんから、先づ謙遜な心になつて自分の希望や理想に反しても經驗のある家内の長者に從ひ、徐々に自分の理想

を調へ實現する樣に心得て頂き度い。

先日或相當な身分の若奧樣が、お料理をすると云つて慈姑を八百屋から取り寄せました處、注文の分量より多いからと云つて慈姑を二ツ八百屋に返しに行つたと云ふ話を聞きました。是れは節儉の意味を誤つて考へた者で、斯樣な場合には餘分に買つて置いて無駄にならぬ工合を考へる丈けの智慧が欲しい者でございます。(佐方鎮子女史)

豆腐の滋養的價値

人間の養分として主なる物は、蛋白質と含水炭素と脂肪との三種ですが、之を豆に就いて調べて見ますと、脂肪は牛乳に及ばず、含水炭素は米に及ばず、唯蛋白質に至つては頗る多量に含んで居て、又た吸收作用も至つて佳良です。然るに吾人の日常の食物中脂肪を採り得る者は幾らもあるし、米は毎日食つて居るから、此等の常食の外補食物として豆類を用ゐることは學理上極めて好都合だと思ひます。私は由來豆腐好で、豆腐は殆ど毎日毎食用ゐて居る位ですが、是は却々製造方に巧拙と良否があるので、私が最も愛用して居るのが一軒ありますが、若し違つた家のを取つて居れば、直ちに之は違ふと云ふ事を食ひ別ける位に成つて居ます。

唯豆腐に最も惡いのは苦汁を用ゐて固めることです。苦汁は硫酸鹽ですから、消化を害することが夥しいので、苦汁を多く用ゐれば用ゐる程良くないのです。彼の時々固い豆腐に買ひ當る事がありますが、彼れは即ち硫酸鹽の多い證據で、豆腐を少し多量に食つて下痢するのは硫酸鹽の中毒です。然るに苦汁を用ゐないで豆腐を固める極めて簡單な法があるのですが、世間の豆腐屋が未だ之を知らない樣です。何でもありません苦汁の代りに酢を用ゐれば可いのです。普通の食酢でも醋酸でも可いです。尤も是とても多量に用ゐれば矢張り胃を害しますけれども、日常我々は酢物さへ食つてる位ですから、豆腐を固める位の分量ならば何でもありません。

其から豆乳と云ふものが此頃流行り始めましたが、幸に昨年の秋頃から適當な人を得て完全に其試驗を私の教室で行ふ事が出來ました。其は特許豆乳とか云ふので、普通の豆乳に加工して例の臭味を去た物ですが、其販賣者自身が試驗の材料に成て與れましたので、極て精確に行ふ事が出來ました。期間は十七日間でしたが、第一期は豆乳のみで五日間、第二期は常食で五日間、第三期は常食に豆乳を補食せしめて四日間、第四期は再び常食に復して二日間、以上十六日間、次に第五期は牛乳に常食を加へて一日試驗して見ました。試驗の方法何かは全部私が指導して私が監督の下に熟練なる助手二名を指定して遣らせましたが、結果はなか〳〵好いやうです。(後藤醫學博士)

婦人の容姿と習慣

文明國の婦人の心掛と云へば、身體髮膚を淸潔にして、衣服は云ふまでもなく、時の流行物を用ゐ、髮の結い方、髮飾り、履物等即ち頭の先から足の爪先まで一點の非難のないと云ふ事を心掛ければならぬ。此の點に就ては、流石に歐米の婦人は、更に非難の餘地がない、一體婦人が容姿を飾ると云ふ事は、最も必要なる事で、外國婦人が極めて華かな粧裝を凝らすのは、之れが爲めで、日本婦人は老年となるに從つて、淡泊な裝ひをするけれど、外國婦人は却て老年に及ぶに從つて、濃厚な裝ひをなすると云ふ風で、草花で飾立てた華かな帽子を目深かに冠つて居る所を見ると、五十歲の老婆も慥に十歲位は若く見える。

而して此の帽子は如何なる席上でも、冠つた儘で失禮にならない。此邊が即ち外國婦人が成るべく容姿を若く見せやうと云ふ巧みな遣方である。これに付いて面白い話しがある。先年東宮殿下が日光へ行啓のあつた時、御警衛の巡査が、一人の外國婦人に向つて、脫帽せよと云つたけれど、遂に應じなかつた。日本婦人も將來新進國の婦人として立つ以上は、現今の束髮に花簪一本を挿す位では、到底滿足は出來まいと思はるゝ。何時かは花で飾つた美しい冠り物を頂く時節が到來するであらう。

可愛らしい子供が平常口を開いて居るのは、甚だ見苦しいものであるが、之れは病的であるのもないではないが、大部分は習慣であるから、親の心掛一つで、如何樣にも矯正が出來る。それは別に難しい事はない。若し常に口を開いて居る子供が家庭にあるとすれば、父兄等は勉めて口を結べ〳〵と注意すれば、何時かは習慣となつて口を結ぶ樣になる。是は電車の中などでも口を開いて居る子供を澤山見掛けたものであるが、近年は著しく減少したのは全く敎育普及の爲めであらうけれど、地方へ出ると未だ中々口を開いて居る兒童が澤山ある。

又近年婦人の步容姿勢と云ふ事に大に注意を拂ふやうになつて來た結果、從來内輪に步む婦人が、追々減少するのは誠に喜ばしい事である、全體人間が步行する場合に、右肩を上げたり、左肩を下げたり又は前屈みになる姿勢は、大槪子供の口を開くのと同じ譯で、習慣であるから、如何樣にも矯正する事が出來る。現に姿勢の矯正方を醫科大學へ賴みに來て、立派な姿勢となつたものも却々多いのである。

家庭に對する要求

（第一）兒童敎育に對して趣味を有つべし。家事繁忙なりとの理由の下に放任的態度に出づるは實に思はざるの甚しき者なり。今の父兄には己が愛兒が學校に於て如何なる狀況の下に敎育せられつゝあるかを知らざる者極めて多數にて、一度も學校の門に入りたる事なしといふ人も少なからざる樣なるが、こは果して親たる責任を盡し居るもの

なるか疑はざるを得ず。

（第二）早成を希ふ事をやめよ。尋常一年に入學せしめて、話方が上達したり、頓智よく發達せり、級長になりたりとて喜ぶ父兄甚だ多し。これ甚だ喜ばしからざる現象にて目前の成功を望んで一生の計をなさゞるものなり。徒らに小才物を作るをやめて大器晩成を希はざる可からず。

（第三）小言を言ふ勿れ。家によりては所謂嚴格といふ事を誤解して六七歳の幼年時代より萬事につけて八釜しく小言を言ふ者あり。御飯がこぼれた、着物がよごれた、言葉遣が悪い等の小言を列べて教育をなすは、他人よりは坊ちやんは御行儀がよい、温和なり等の讃辭を呈するやも知れざれども實際に於ては、大切なる兒童を殺して育てつゝあるものなり。

（第四）鷹揚なる子供を造るべし。小言を排斥して萬事鷹揚にやるべし。何を言ふも小學校時代は體育時代なり。體育は人の未成品時代―幼年時代―に施すべきものにして、成人の後には功果極めて尠し。智育に偏したる教育は兒童の腦髓を腐らすべし。學科の成績點を顧慮する勿れ。腕白に鷹揚に育つべし。

（第五）親の慈悲を施し損ふ勿れ。何事によらず兒童の自立に訴へて行はしめて、傍より監視すべし。意味ある放任をなすべし。

（第六）嚴格なるべし。規律的に嚴格なるべし。小言を交へずして起居動作を活潑に快活に指導し締りある筋肉を作り勤勞せしむべし。これは父兄の模範によるべし。

（第七）家産の貧富を兒童に訴ふる勿れ。金滿家には故らに兒童に對して金滿家なることを吹聽するものは多からざらんも、貧しき生活をなしつゝあるものは、家庭の内情を幼稚なる兒童に訴ふるもの往々あり。これ消極的方法にして却て兒童の向上心を殺ぐものなり。（上野卓爾氏）

在米日本婦人の生活

米國東部各州に在る我國女子留學生の主なる者は、文部省留學生の外は、私費生で、女子英學塾、女子大學、青山女學院、其他各宗教女學校出身の婦人が多數で、學校に於ける腦力乃至學力は如何かと云ふのに米國の女子に劣らない成績であつて、米國の社會からは常に歡迎の手を擴げて迎へられ、愉快な學生々活をして居る。學習の科目は家政學だとか、生理學だとかゞ多く、文科が少いのに就ては、一女子は斯う答へた、「私共も文科に進み度いのですけれども、何分自國語で學ぶ米國の女子と一緒になつて進めませんから」。最も成功して居るのは英學塾出身の人達である。彼女等の歸朝後の希望は先生になると云ふのが多い。

學生でない婦人の狀態は如何か云とふに、多くは實業家の妻君であるが、大方一つのフラット（宅房）を借りて住み、二度西洋食一度日

本食位な食事振りをして居るが、十中八九殆んど上流と呼ばれる人でも却々下女を置くのは難かしいので、妻君が子供の世話から、食事、買物、洗濯迄も手一つに爲るので、社交界に出るなどの暇は少い。尤も到る所日本人倶樂部があるので、日本人の奥様同志の交際はする。桑港の日本倶樂部長は牧師の寺澤久吉氏だが、此妻君は稲子(四八)と云つて、永井領事夫人、津田梅子さんの妹さんの安孫子夫人等と共に同地社交場裡に却々活動して居る。

米國で日本のやうに女中を使はうと思たら大間違ひである。米國では一週間下女の賃銀丈けが五弗から六弗位で、其上日本女子のやうに朝から晩迄ノベツに追ひ使ふ譯には行かない。氣に入らなければサッサと出て行つて了ふ見幕だから、中流以上の家庭でも下女一人使はふと思へば大抵の事では無いから、在米の奥様は下女代りになつて、日本では何處〳〵のお孃樣とも言はれろ人が、籠を抱へて青物買ひにも行けば、肴屋へも行くと云ふ風だ。然し彼地ではそれが少しも恥ぢない。

次に寫眞結婚の事を述べやう。在米男子の多くは勞働した結果所謂成功者となつたので、家庭を持ち度く思ふと寫眞結婚を行る。それは桑港なり沙港なりに世話人があつて、其人の手を經て男子の寫眞を日本の女に送り、又日本から女の寫眞を送つて双方の寫眞で見合ひをして、好いとなれば女の籍を入れて了つて、米國に居る甲の男子は乙の女子を嫁に貰ひ、其で波濤萬里を隔て戸籍上の夫婦が出來上る。そこで女が渡米となると、政府では夏人の許へ行く妻として旅行券を下付する。而して女は遙々と米國へ嫁入る。男子の方では其お嫁さんが來るか來るかと待ち構へて、船が着く棧橋へ出迎へる。女の方でも寫眞の主は何處かと思つて探がして早速上陸となると、米國の移民官が「ドッコイ「貴女は何の爲めに來ました」となる。「ハイ私は結婚の爲めに來ました」。そこで男子に向つて「貴方は此婦人と結婚しますか」、「ハイ勿論です」となる。「ソンナラ茲で結婚式をお擧げなさい」と云ふ事になつて必らず牧師を立ち合はせて、其男女は今乘つて來た船の客室で花嫁花婿となる。そんな組が幾つもあるので、今でも牧師立會料が三弗と定つて居る、所が何分寫眞上の見合であるから、遙々日本から來て本人を見ると、思ひ設けぬ下等な男子であつたりする事もあるので、女は其儘サヨナラと日本へ引き返す事もあるが、此寫眞結婚も其の三分の一位は先づ〳〵好い成績で、平和な家庭を造つて居る。

(元田作之進氏)

印刷局の女工

午後五時頃神田橋内を通ると、必ず流れる樣に引きも切らずゾロゾロと數限りもなく婦人が常見附外へ出て行くのを見掛ける。而も是等の婦人は年増もあれば、小娘もあつて、其風體さへ頭こそ同じけれ、前垂掛、袢天、コート、ショール抔と千差萬別なるに驚く位である。

是れは改めて云ふ迄もなく、印刷局に通勤せる女工千五百人が、已に其日の勤めを終へて家路を急ぐのである。是等女工の仕事は、普通の活版印刷物を始めとし、紙幣、公債證券、印紙、郵便切手、同葉書、郵便貯金通帳等の印刷で機械の運轉等は男工の領分に屬するけれども其他は殆ど此女工の手に成るのである。

紙幣の如きは未に機械に依て印刷されるけれども、人手を要する所は女工の手に依るので、本年度即ち昨年四月以來今までに出來上つた紙幣の總數は約千六百萬枚(内五圓千四百七十萬枚、十圓百三十萬枚)との事であるが、幾百となく銅板印刷機の据並かれた處に男女入交つて之を印刷し出した時には、一見繪紙か何かの樣で紙幣らしくもなく、又其資格も備つて居ない。謂はゞ未だ魂が入つて居らぬ樣なものである。此魂を入れるのは女工の仕事で。女工は之を一枚々々に截斷して番號を記入し、國庫局長等の印章が捺されて紙幣の資格が出來るのである。

最も大仕掛けに印刷されるのは葉書で、一日の需要總高が二百萬枚(十二月の如きは二百五十萬)である一事でも想像される。是は七十二枚掛けール四臺と、輪轉機二臺で印刷が終ると、女工が一枚々々に表裏を檢め、夫から百枚づゝ之を束ねるのである。何しろ一日に二百萬枚を右の如くするのであるから、見ても實に目の廻る樣で、先づ左手に一束の葉書を持ち、右手にて手早く一枚づゝ臺上に下すと同時に表をも裏をも檢める處杯の巧妙さは、寧ろ機械以上である。又切手も印刷されてから女工が裏面の糊附けを始め、目打をする事になつて居る。

是等女工の勤務時間は、日の長短に依り九時間若しくは十時間で、其賃金は十三錢以上五十錢までゞある。尤も十三錢は十二三歳の少女で、十七八歳以上の者は皆二十二三錢以上を受くる事になつてるが多くは嫁入前の者であつて、謂はゞ嫁入仕度の爲め働くといふのであるから、隨つて長く勤續する者が少なく當局者も常に頭を惱すとのことである。

八十の手習ひ

精神一到何事か成らざらんで、年を取つても志さへあれば、何んでも出來ぬといふことはない。然るに多くの老人連に、其の境遇改善の策を聞かしても運命開拓の術を語つても、異口同音に「それは洵に結構であるが、奈何せん此年では」と云ふ。早く隱居癖に囚はれたる日本人には特にそれが多いやうである。

そこへいくと西洋人は違つてゐる。老て益々壯である。近頃英國の村落で九十歳の高齢に達した人が、臨終のとき遺言を書いたが其の筆蹟は實に見事なもので、見る者は皆な驚いた。處で此の老人は何うして斯く能筆になつたかと云ふに、數年前病氣のとき娘から讀書を習つたのが學び初めであつた。八十の坂を越えての手習始めとは實に珍らしい。



封建時代の夢語り

白桃

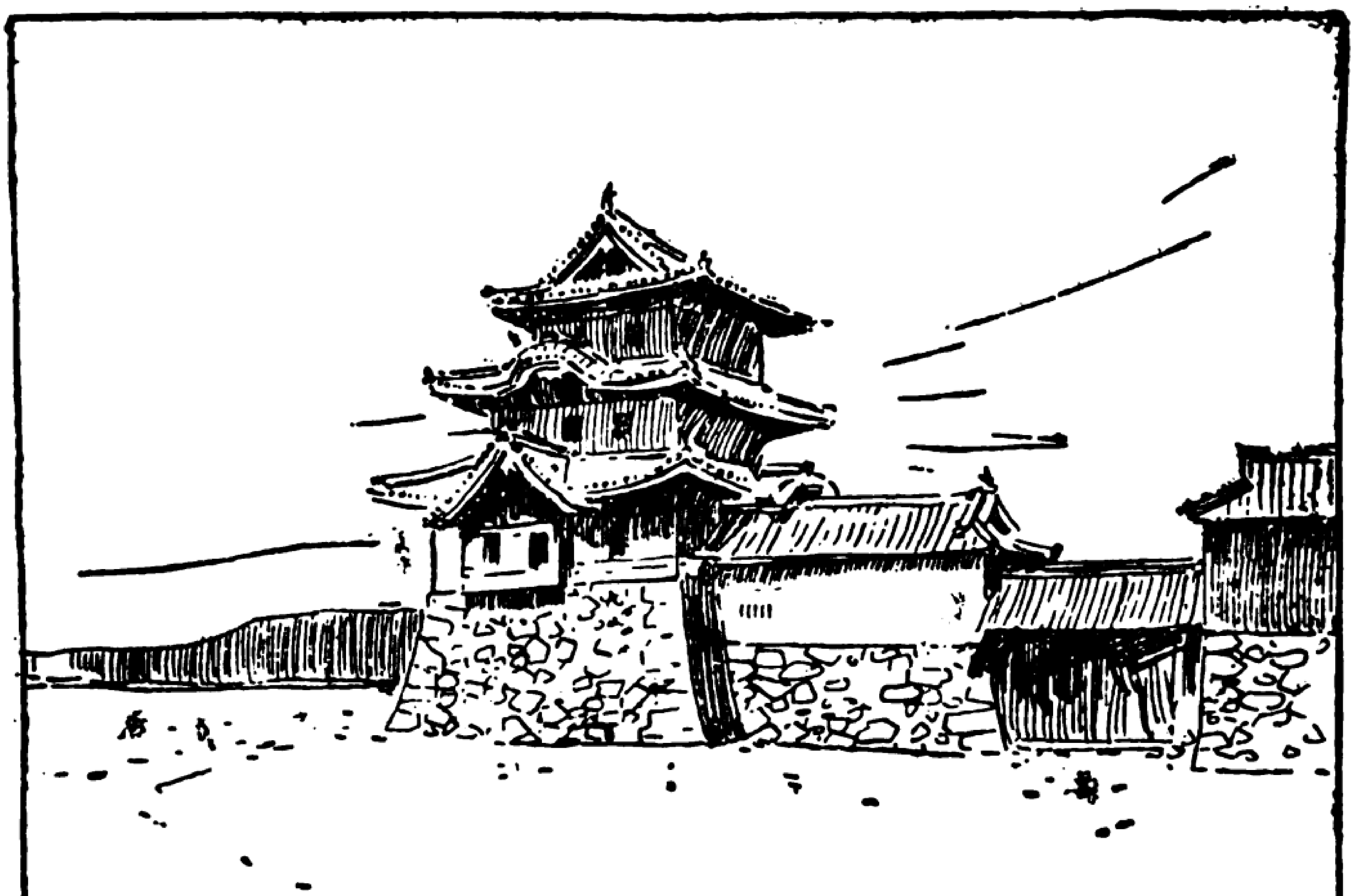
酒屋へ半里豆腐屋へ十町と云ふ山奥に住んでまだ親がゝりの私不自由のないかはり何に憬るゝと云ふ面白味も覺えず實に平々凡々たる生活、野心もなければ不平も起らずまことに呑氣なは田園生活では御座います殊に私は境遇に感化されたのか交際ぎらひの變屈者現代に後るゝ事數十歩と申す難物です、で此難物を産み出した家庭を發表するのも面白からうと思ひまして私の小兒時代には天保式のお祖母樣が居られました。私は暇さへあると日當りのよい四疊半で繪双紙を讀んで居らつしやる祖母樣をつかまへては昔のお話〱とねだるのでした。まあ奇妙な子だねえ老人の樣に昔話々々て何がそんなに面白いのだらう、もう口がすくなる程幾度も話すのにと、よく、笑はれました、お祖母樣のお話はほんとうに何時も同じお話ばかり、大祖父樣が劍術のお稽古をなさる時の話や、東海道五十三次のこと、箱根の關でお調べの時關守が駕籠の扉を開くと片はづしにお襠といふ上品な女中がしづ〱歩んで來て駕籠の中を見て「少女一人相乘はこれなく」と云つた事や、御殿女中は服裝でお位がわかる、匹田入の模樣は餘程高い方でなければ着られなかつた事をしまひには百物語だとか鍋島樣の不明の御門などゝお化のお話になるのでした又江戸役者の噂をよくなさいましたつけ、其内で今に耳に殘て居りますのは瀨川何之丞とかいふ役者は男ですが女形ですから平生から女の樣に髮を結び着物も帶も女の樣にして子供にもをばさんをばさんと呼ばせて唯女にならう〱と注意したから名

高い立女形になつた、だから何をするにも其事に熱中する心懸けが大切だと仰有いました、尤な事だと思つて今に覺えて居ります、又八犬傳や、白縫物語、田舍源氏など幾度も〳〵、お繪說していたゞきましたから、諳記する程覺えました、こんなにして私はお祖母樣に育てられましたから、今にまだ封建時代を戀しく想ふのでございませう、私は其時分から此んな事を思つて居りました、私は武士の子だから他人にまけてはならないなどゝ、小さい頭に考へるのでした。

私の家は田舍士ではありますが、小藩ながら八百石の家老格、常に七八人の男女を召使ひ、お祖父樣全盛の頃は、隨分とぶ鳥落す勢であつたとやら、併しそれは家格です、實際は又違ひますところで當時の御新造樣、即ちあの私のお祖母樣は深窓ふかく、たれこめて、なか〳〵お顏を見る事も出來なかつたさうです。お里は江戸の劍術師範望月左近の家柄で、諸家樣の殿樣を始めお弟子も大層澤山あつて隨分派手な御家風であつたのに、私の家は田舍侍とて格式こそよろしいが暮し向きなど雲泥の差ひ、萬事萬端非常な相違なので、お祖母樣は隨分お困りなさつたさうです、お祖母樣は上品な美しい方で、琴、生花、茶の湯、裁縫などはお美事であつたさうですが、お料理はなさらないし、箒をお持ちなすつた事がない、つぎの當つた足袋ははかない、所謂お芋の煮えたも御存じないと云ふ方ですのに此方の生活程度はと申しますと其れは又案外なもので想像も及ばぬ程質素なものでした噓の樣だと申しましては母が笑ひますが當時一石の米が三兩二歩だつたと云ふ事です、東海道の宿賃が天保錢三枚、茶代が一文の定りでした、で、此所では百石取りでは味噌菜食へぬと云ふ位で宅などではお肴を食べるのは一月に一二度位でした。收入の少ないのに位倒れで格式ばかりよいものですから不用な人も置ねばならぬ樣になつて經濟は隨分苦しかつたのでせうね、屋敷が廣いものですから裏に茄子や大根などを作らせてそれを日々のお菜にあてた位であつたさうです、生活の方法も亦簡單なもので主人や主婦が經濟を持つことなく勘定方と云ふ

者に一任して置くのださうです、すると其人がお倉米の受取から、賣拂ひ迄一手で處理するので家政上では主從轉倒主人は勘定方の當がひ扶持で暮すのです、所が此勘定方が不正直な人ですと、よい加減な事をして己の懐中を肥やすと云ふ樣な事は少なくなかつたさうです、金錢の出納で間違の出來易いのは昔も今も變りませんのねえ。またよくそれを知つて居ても知らないふりなさる位でした金の勘定など云ふと頭から賤んだ時代ですから――馬鹿らしいぢやありませんか自分の金を他人がいゝ樣にして居るのに知らぬ顔するなんて武士はくはねど高楊子とは此んなのを云ふでもありますまいに――と申樣な家風でしたから姫樣育ちのお祖母樣は身も細る樣に思つたと仰有いました、外の事は辛抱するが食物丈はと仰有つてお江戸風にお砂糖をお用ゐになるので、秋田家の食物は甘いと評判だつたさうです、女中などでも奉公するなら秋田さんへと申した位でした。

此お祖母樣には女二人男一人の子がありまして總領



封建時代の面影（讃岐高松城）

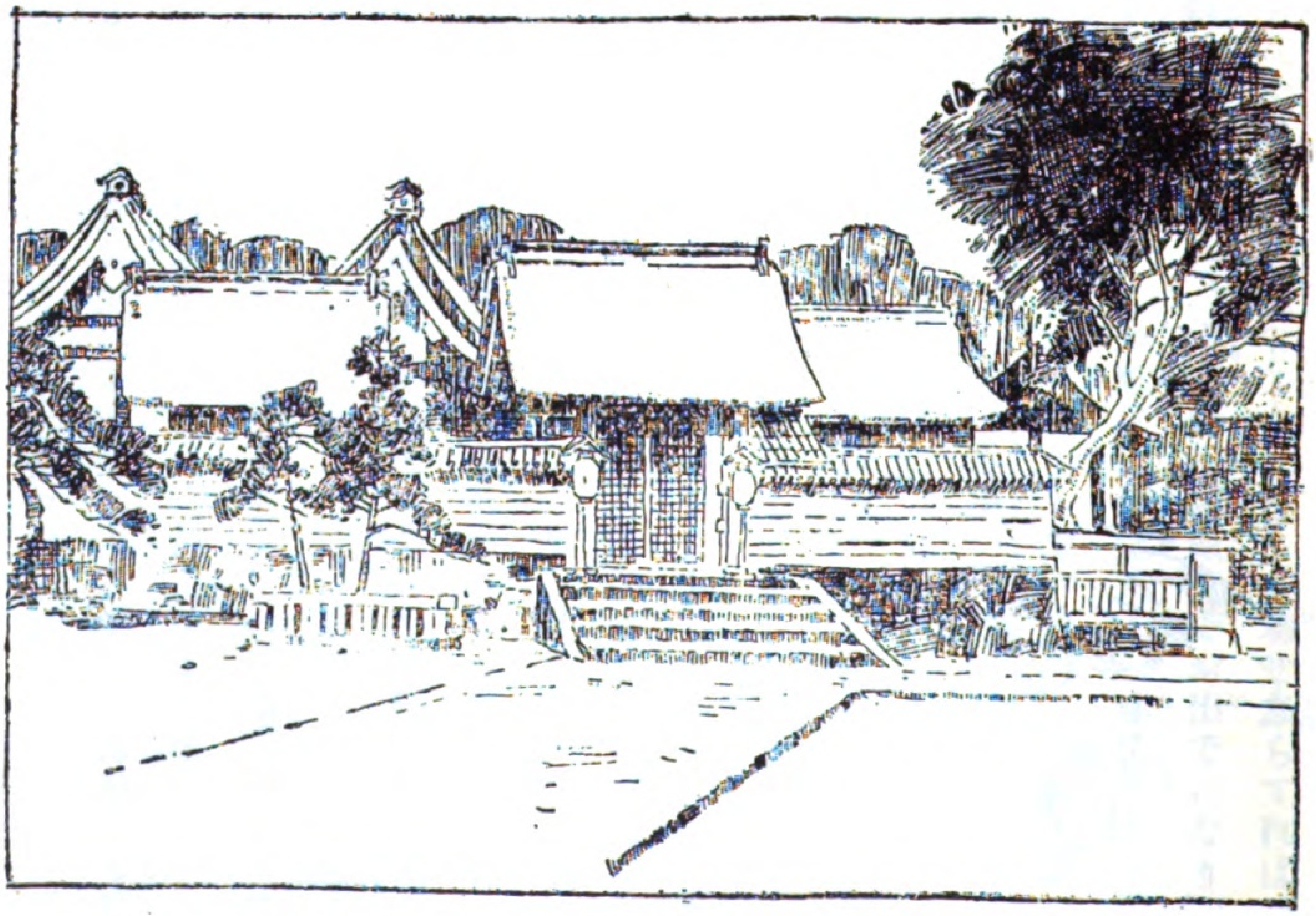
の伯母樣はずつと以前に同藩士の方へ嫁がれましたが、例の全盛時代の寵兒ですから、氣風から習慣迄すべてお祖母樣其儘の型に出來てゐましたのでお妾などによい樣にせられて如何も甘く納まりませず遂に二三度も緣かれて漸く今では町人ながら富豪に家に落着かれました、時々伺ひますと着物やお芝居のお話で持ち切りで私などはお話の合はない方ですからお遠々しくなつて居ります、次の小伯母樣は又打て替つたお性質幼い時から學問がお好きで世界國盡などをお祖父樣に敎つても直ぐ覺えてお仕有だつださうですお祖父樣もお氣性を見込んで明治の初年京都に開かれた女子英語學校に入學おさせなさいました、此校は日本での女學校の始だと申す事でした、これは小伯母樣の十二三歲の時だつたさうです、お祖母樣がよく仰有いましたつけ、宅の子は是迄お錢を持たせた事がないものだから小伯母樣が寄宿舍へ入る時なんか大さわぎで、落すといけないと云て銀貨を半紙にべた〳〵張りつけて、幾枚も持たしてやつたが、それでもお金の價を知らないものだから、度々失ふ事があつた、今の子供は三つ四つでも銅貨と銀貨の値を知つて居る、恐ろしい世の中だと驚いて居らつしたが門閥崇拜時代と金錢萬能の現代とは比べ物にならない筈ですわ、お伯母樣は大層よくお出來になるので海外遊學の御相談のある最中お祖父樣俄の御逝去嗣子の男子(私の父樣)は漸く十三歲だつたので伯母樣の留學は中止となりました、其時はもう廢藩になつた時ですから伯母樣のお勸めで父樣は慶應義塾へお入りになり伯母樣は女敎師となつて一家を保護して下さいました

世が世なら太刀はくべき腰にお辨當さげて父樣が銀行通ひなさる樣になると母樣をおもらひになりました、一二年の後には伯母樣が結婚なさいました、此伯母樣は人格の高い方で常に私の崇拜してる方ですがいつも私に「人は何をするにも難かしいと思ふ方さへ取れば失敗しない物だ」と仰有いますが御自分も評判のむづかしい家庭にお緣きになつたのでしたが見事に成功して今では四人の子の母として實に圓滿な理想の家

庭を作つて居らしやいます、亦母様は坊ちやん育ちのお父様を良人にもち姫様型のお祖母様やハイカラ式の伯母様の間に立ちて随分苦勞もなさいました、しかし、よく忍耐して甘く此難關を切り拔けがやて舞臺は一變して母様の代となりました。

さあそれから母様は專心一意家風の改新と財政整理に努力なさいました、母は柔弱に流れた封建の餘風を一掃しなければならないと人々の左迄はと止めるのも聞かず晝夜の別なくよく働かれました、其上機織糸つむぎ提灯張、などの賃仕事もなさいました、かう云ふ風でしたから今迄華美で放任主義であつた私の家は俄に嚴格主義努力主義とかはり家族の精神上に少からぬ變化を與へられました、風を望んで方々から娘の躾方を依賴する者が澤山出來ましたが多くは斷つて數名を限つて裁縫手藝等を敎へて居りますが技藝よりは品性が大切だとは常に母様の持論でございます。

そんなに家庭に激變をさせてよく平和が保てたものと思ふ方もありませうが、根が家大切親大切との赤心



宇佐神宮勅使の松

から出た事ですから自然其誠心が通じたのでせう、こんな大改革をなさつても賞めこそすれ惡口する者は一人もなかつたと申ます、矢張母樣が敏腕なのでせうよ私の家庭は何時も春風習々として至極暖なものでした其れも其筈私の家には秘密といふものがありません又金錢に淡白なのも家庭平和の基でした、土曜日とかお誕生日などには一家の老若團欒していろ〳〵の遊びをするのでしたお髭の生えた父樣が蛙ヒヨコ〳〵三ヒヨコピヨロなんか仰有るしお祖母樣が向うの山へ提灯が唐人つけて行なんて仰有るものですからお腹の皮をよりましたつけ。いつでしたか兄樣の發言でアミダ引をした事がありましたのよ其れが又お祖母樣には大層珍らしくつて面白かつたと見えまして次の團欒の時「又此間の念佛食べをしませうね」と仰有るのですもの皆吹き出して仕舞ひました、母樣は今代の敎育はありませんが武家育で一種習し難い氣概がありました又子女の敎育には注意して居らつしやいました、母樣の敎育要項(とでも申しませうか)は辛抱と至誠とを基として物吝しみするな人に迷惑をかけるな、などでした辛抱強い證には宅には女中が永く居る事です病氣など特別の事情の外は結婚する迄は勤續します又早起をきびしく申してぐづ〳〵して居りますと「朝寢する狐は鷄にありつかず」なんて仰有いました、兄は士官學校出身の下級將校で一昨年女學校出の才媛と結婚して別居して居ます、兄の家庭ですかそれは申しますまい唯さへ鬼千匹と名のついてゐますのに若し口がすべりでもすると大變ですから――私はねえ何時もお前は口から先きに生れたのだらうと云はれてますのよホヽヽヽ。



現代に取残された一種の女

若紫



お枕頭の岐阜行燈も持ち去られ日は次第に三竿に昇らんとする頃お家さんは緋の玉糊縮緬にもえぎ羽二重の鏡ぶとんからやう／＼お出まし、先づ一ぷく召し上り、常々箸より重い物は持たぬと御自慢なさるれど、之れのみは苦にもなされぬ伸べ金の煙管で、スパリスパリお次に控へたる私に

「もう何時や」

「只今八時打ちまして御座います」

と八丈棒縞の丹前（どてら）後より着せ参らすれば、静静とお廊下傳ひ、主家のお湯殿までお出でになり、お手水すみて直ぐにお風呂にお這入り、糠袋でザットお磨きがすみて今度はクリームでスッカリ摩擦あそばす其れかあらぬか下樣では梅干の何のと悪口云はるゝ六十近いお年頃の樣でもない、未だ水々として居る、お湯がすみて七つ下りでは有るがお召縮緬の着物と、お被布にお召換へ、足袋まではかせて上げると、二階のお化粧室にお出でになると、日毎お風呂の間に呼ひよせ置く髪結おたつ、くせ直しのお湯をとつて待つて居る。

「お家さんお早ふ御座います」

三日目のお結ひ日間はなでつけのみなれど、スッカりくせを直し、毛を一本／＼揃へる樣にするから、結ひたてと少しも變らぬ、其れがすむと廣くもあらぬお庭の御散歩、幾戸前かの土藏の間をクネリ／＼、それでも築山もあれば泉水もある、山には作り物の鶴の雌雄遊べり、水には緋鯉金魚のかず／＼はつらつと浮ぶ

りです、石燈籠の數は十幾つ、ほんの箱庭的だけれ共御自慢の一つの植木好き、バラの鉢が二三十並んで居る、一寸毛拔の入り相な草二三本ぬかゝるのが精の山で、あちこちブラ〳〵、隅に松葉の一本も落ちて居やうものなら、それこそ大變、次に佛前で一寸お經を上げられ、さて食事は丁度九時過ぎ、朝のお獻立は此人不思議にお粥がお好きと見え、三百六十五日、朝はそれ玉子燒、奈良漬、梅干、佃煮などおひな樣のやうに本膳に並べて召し上る。

「賄呼んでお呉れんか」

お召に應じて賄婆さんはデブ〳〵肥つた體を重さうにして來る。

「おひるにはなアおすもじ作らへて、お精進でもよいさかい」

六疊二間の此離座敷、紫檀の長火鉢の前に縮緬のお座ぶとん二枚重ねて、銀瓶がチン〳〵音立てゝ居る、茶ぶたの上には金々した九谷の湯呑がふせられてある床の上には八重櫻が遠州流の總流しで挿さつてある、違棚には人形だの、造花だの、時計だの、繪葉書だの飾り附凡てコッチリ好み、惡くいへば醫者の屋形といひたい位、奥床しい處は一つもない、之れだから大阪婦人は趣味がないといふのだ。金ぶち眼鏡ごし新聞のひろひよみあそはしながら、何かお目に止つたやら餘に

「ボン〳〵は」

一人息子の仙太郎樣今年廿五のお嫁さんもあり、此秋にはお父樣になる人を、未だボン〳〵と呼ばれ、可愛ゆく〳〵少し低氣壓の時などボン〳〵のお顏さへ見せてもらへば忽ち晴天となるのです、お家さんの低氣壓ときたらお話にならぬ、全く廿越した私が泣き度なる位、恐れ入るのぢやなくて、馬鹿らしくなつて、餘り分らぬお小言、イヤ我まゝの八つ當り、たとへば二三日雨が續いて、鬱陶しくてつまらない、折角咲きかけたお庭の櫻がだいなしになるといつた時、私達におこつて見たつて何とも仕て見やうもありはしないけれ共、又御機嫌のよい時にはお嫁さんにお琴彈しさせ

泰眞　若草山



御自分もお若い頃のおたしなみの歌なとうたわれ、其れは〳〵面白いのです、其他お好なものはお芝居と旅行、其れも氣保養は表向き、實は四季の召物の見せびらかしたさです、芝居は毎月〳〵かはり目毎かゝさず皆さん成駒屋はんが大のおひいき、ウッカリ成駒屋がなんて云はうものなら大叱られです、見様見眞似で日常の手つき、首のふり方、眉目の表情、芝居を見るやう、お廊下は花道といふ風でお通ひあそばす、いつかもお家さんが來客の時、左手を懐に入れ片手を桐の胴丸のお火箸につき、コウ少しそり身になつて

「娘およしが……」

とおいひなされた音聲の抑揚から身ぶり、成駒屋にそつくり、よくもお覺そあそはしたとおかしくて〳〵、わざ〳〵娘をつけなくてもお客様先刻御承知だのに、凡てがこういふ風に何處迄も形式的なのですから、心の誠といふものが見えなくて御損です、も一つ小間物なり呉服屋なり參りますと、アレもコレもと何もかもとつてお置きに成ります、私は正直にヒヤ〳〵と思ふ

位、もとより安價なものはお目にとまらず、ザット見た許りでも百圓以上ですもの、さすがは大家は違つた者だと、感歎して居ります、番頭さんも頭をスリッケスリッケ、有り難ふ御座いますの、十遍もくりかへして歸ります後に私をお呼びになり其内二ッ許りおとりになり、あとのはイヤに成つた返してお出でとの仰せ、オーヤ〳〵私こそよいめいわく、返すといへばよい顏はいたしません、人情ですもの。

「お家さん旦さんがお越しで御座います」

と申上ると、もうお顏をくづしてガラス越し御寮人樣とお二人づれのお姿を、ニコ〳〵見て入らつしやる、初め御寮人さんといふのは御良人とかいふ旦さんの事だと思つたら、奥樣の事なのです、京都の金滿家のお娘さんだ相で、却々おしとやかです、お家さんのお手前お平生着は糸織位よりお召しにはなりません、お白粉をコッテリと、赤い手がらの丸まげ重さうに、それは〳〵人形の樣に美しい方です、お家さんが之れも御自慢の一つで、來客でもおかまひなし

「一寸嫁の髮を見ておくれやす」

勿論惡くいふもよくないには定まつて居るが、餘り馬鹿にほめ過ぎます、私共にになら兎も角

お庭ではお二人、駒下駄輕う飛び石傳ひ

「明日あたり花が見頃やなア」

「へーきれいでおすなア」

まだ御寮人さんは京都言葉がぬけんのですお家さんが待ちかねて

「ポン〳〵出て居まつせ、一寸之れお見」

成程金五百圓也、右御寄附下され何某殿お二人共得意滿面にあふれて居る、慈善でなくて僞善なのですかういふ事新聞に出されるのが一番うれしいのです、矢張り道樂の一つです、然しこんな道樂はイクラでもよろしい、人がよろこびますから。

これから天氣はよし氣候はよし大急ぎ仕度して十一時の汽車で濱寺に行かうやないか」

と今日はお家さんの日本晴れ

「私は贊成ですがお前は」

御寮人様可愛い目をパチクリさせながら世話しおすなア

私は土藏から皆さんのお召物出してお召がへのお手傳ひやる、平生からいつも美しくお化粧が出來て居りますから、造作はない、私も紫矢がすりに白茶の帶キチンの立矢の字に結び、お定まりの雪駄をはくと、お家さんは鏡山のお初の樣なと仰る、私は又御寮樣の紋織のやうな大島紬にお召の半コートが何ともいへぬ金紋の自用車がお玄關にまはされ、お召使一同ヅラリと並んで

「お早うお歸り……」

表はソレ某さんのお出かけと、近所合壁の人だかり其れでもさすが大阪第一等の場所柄、素見すものなどは一人もない。

一等車の中は上流人士のみですから左程目にも立ちませんが、濱寺の御散歩には行きかひの人が目引き袖ひきする中を、お家さんお鼻高々と料理屋にお這入り御注文はと女中が伺へば、御馳走は家でたべあきて居る、珍らしくない何ぞアッサリした物でとのお申つけ歸りにはお菓子からお肴の殘りまでスッカリ折箱に詰めて持つてお歸り、お土産の代りとなされます一寸氣の弱い者には出來ぬ事です。さうかと思ふとお茶代過分のきゝめか、亭主始め女中達までほんに槌で庭はくお世辭、お家さん殊の外の御機嫌で。

「よう氣のつく家やなア」

只もう何でもおえらう御座います、御道理で御座いますとさへいふて頭下げて居ればよいのだと、私も十分知つて知りぬいて、此頃では餘程悟つたつもりだが時々正直に考へると腹の立つ事もある。

歸つたのが八時皆さんザット一風呂おあびになつて御夕食間もなくお床にお這入りになる、私は例によつてお家さんのお腰をさすり、お休みになるをまちて仲働きに手傳つてもらつてお召物の始末をする。まづまづ今日は平穩無事な一日であつた。

我家の簡易生活

青柳女史

懷しき故郷出でゝ茲幾歳　舅　姑もない　私共都會生活の新家庭では別段取り立てゝ之といふ家風も未だ整調つては居らないので御座います、併し家を持ちまして既に十餘年其間只無意義に暮して參つたのでは決してないので、幾多の失敗もし、經驗も致しまして漸く二三年前より確たる決心を持つて樂しく生活して行く事が出來る樣になりました。それは何かと申しますと「シンプルライフ」即ち簡易生活で御座います、と申しました處で何も九尺二間の長屋に住んで只パンと水だけで生きて居るといふ意味では御座いません、只彼の管らない虚禮虚飾を廢しまして質素簡略なる生活をして參りますので更に平く申しますとつまり世間の「見え」といふものを取り去つて正直に生活して行くので御座います先づ生活の三大要素たる衣食住に就て申しますと

△衣服は實用的

良人が兼てよりの持論は衣服は禮儀を失はぬ程度に於て暖くそして窮屈でなければよいといふ主義で御座いますから和洋服共決して高價な品は用ゐません、夏なぞ地薄なメルトンの學生服の樣なのでつくりまして車掌服と申して愛用致して居ります、して又其型はと申しますと流行など更にお構なしに可成ゆるやかな仕立方で殊に其ヅボンは太いダブ〳〵致しました或る方から、頭陀袋といふ難有い異名を頂戴した程なので御座います其かはり膝頭がくの字になる樣な心配は少しも御座いません、シャツや襟なども特別新案經濟的なソフトを工夫して用ゐて居ります、洗濯だけはよく致しますので外國人に始終應接致して居りますけれど別に恥づかしい事は御座いません、襟などは〇〇式と申しまして同じ會社の方なども重寶がつてお用ゐになる位で御座います、時計は時を知るに足ると申して機械

丈はよろしいのですが外に鐵側です、帽子なども四時手輕なキャップに限られて居ります、其他何によらず此主義で御座いますから私なども萬事質素に或る範圍内にて一定の品を用ゐて居ります始の間は、さすがに厭で御座いましたが慣れて見ますと結句氣樂で外出致しました時など雨が降りましても大きな風呂敷包を持ちましても平氣で御座います、澤山もありませんけれど結婚當時の華美な物は皆思ひ切つて妹や從姉妹に分てやりました、從つて子供等も其通りで女の子が多う御座いますから殊更注意致しまして銘仙より上の品は決して用ゐませぬ、ですから彼の七五三のお祝など曾て行つた事が御座いません、學校に參りますにもちよいちよい洗濯が出來ます樣に何時も紫紺無地セルの上着を着せて置きますので幾分か裁縫の手數が省けます「〇〇さんは何時も同じ着物ね」と笑はれるから厭だと申す事もありましたけれどそれはほんの始の間だけで終にはあの人はあゝいふ主義だといふ事を承知されて仕舞へば何でもないので御座います。

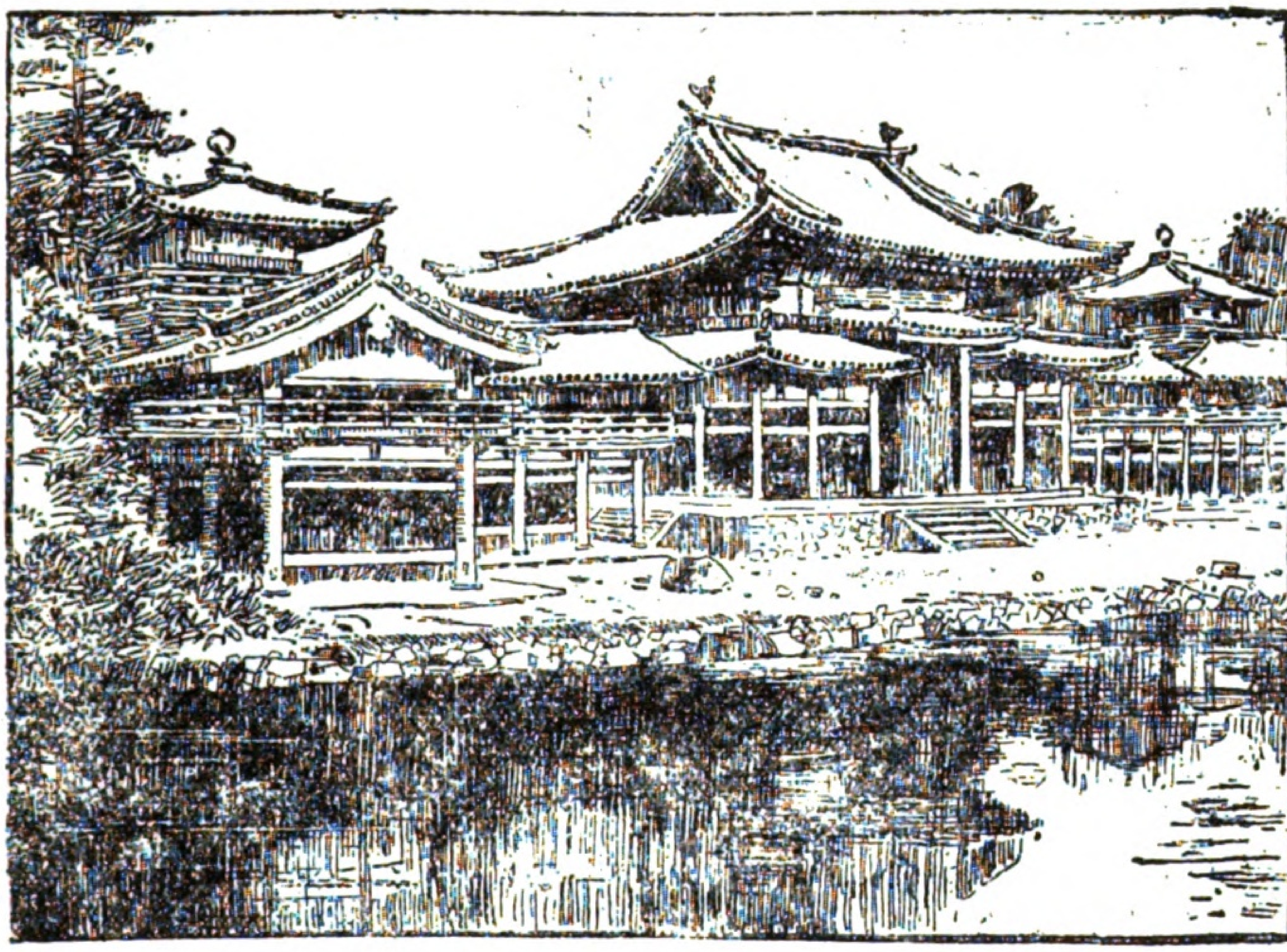
△食事は一品料理

次に食事に就て申しますと土曜日だけは其昔私が寄宿舍時代の樂しかつた思ひ出を實行致しまして特に御馳走を用意して子供等を喜ばせますが常の日は大人本位一品子供本位一品に漬物だけで御座います量を多く致しまして可成衞生に適ふ樣注意致して居ります、但家人の誕生日とか、節句などには前日から考へて置きましてそれ〴〵お友達を招き一寸したお祝を致すので御座います幸に主人始子供等迄家の物が一番美味と申しますから何か珍らしいものを工夫して皆を驚かせやうなど〻樂しみながら割烹講義錄などで研究致して居ります。

△足る事を知る住居

又住居に就て申しますと愈々自分等の住居として新築致します場合には大に理想もあるので御座いますけれど未だ定まらぬ借家住居の間は庭が少し廣くさへあ

宇治鳳凰堂



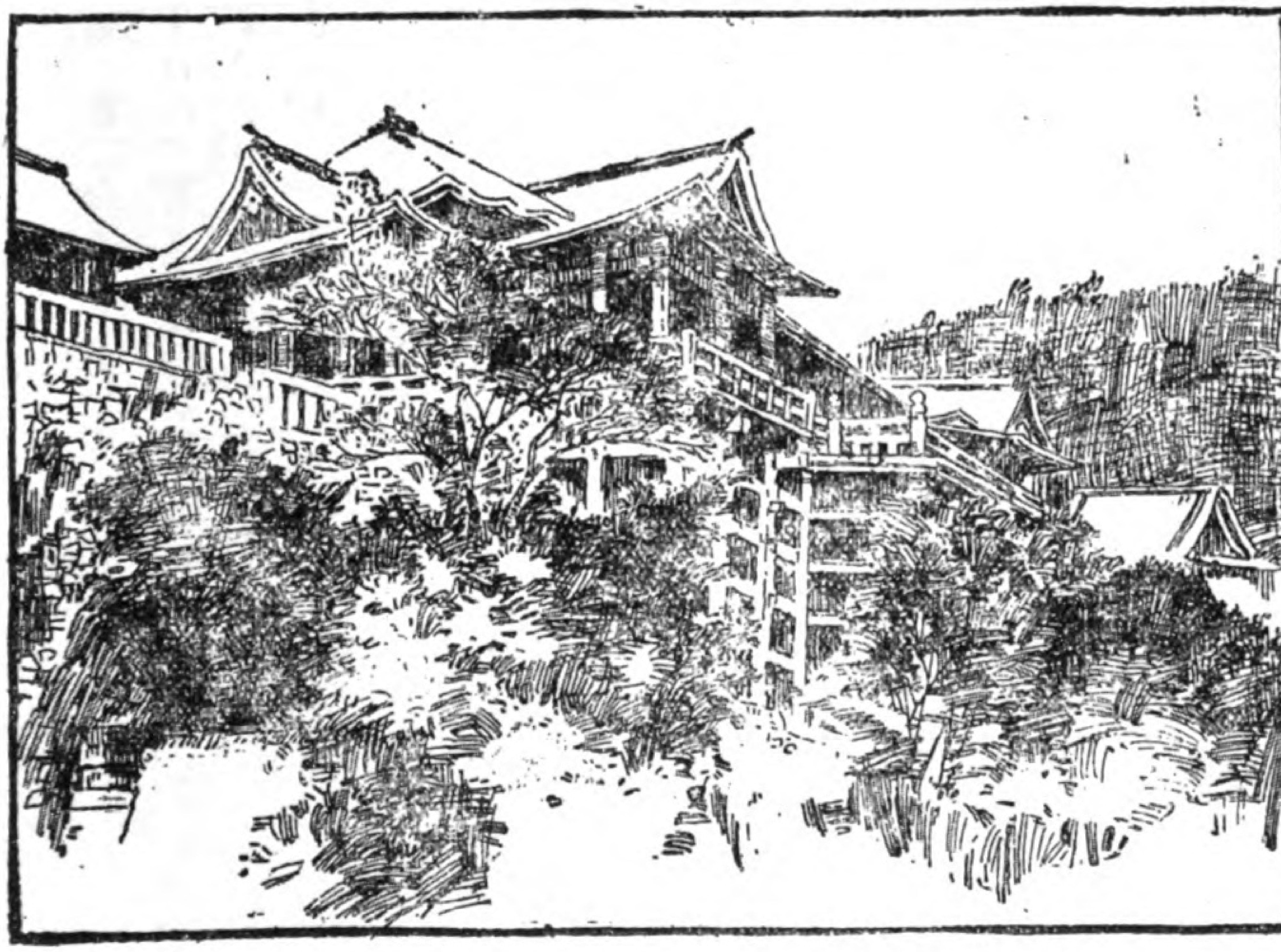
れば家人の用の足りるだけで五間か六間あれば宜しいので御座います、狹ければ自然手が屆きまして隅々迄清潔に致されますし不用の品も置かなくなります從つて道具など差し當り必要でないものは求めない事に致して居ります茶器なども何時も在來の品で間に合せて居ります、庭は樹木など周圍の外は取り除きまして一面に小砂利を敷きつめ子供等が雨上りにも着物を汚損しませぬ樣に致しますブランコを建てゝ置きまして皆の運動を自在にさせて置きます、草花なども子供相手に簡易なものを作つて居りますけれど未だなか／＼理想通りに參りませぬ、其れから家人に就て申しますと名々自分の事は自分でするといふ主義で御座いますから小い子供四人も居りますけれど大抵女中一人で間に合つて居ります、其れはもう主婦たるべき私が靜としては居られません朝は女中と共に起きて働きます子供等も學校に參ります上二人は同時に起こしまして夫々日課を少しづゝでも致させます、宅と同じ家族で女中を二人も三人も使つて被入る方が如何して貴女の處で

は一人の女中で間に合ひますかと仰有いますが實際少しも困る事は御座いません、只病人等の時一寸まごつきますけれど家人が皆働きますので至つい健康で御座います、女中なども盛り立ては仕事が鈍く役に立ちませんでも永く居ります内には立派に役に立つ女となります、で可成取り換へません主義で始め撰擇に注意致します、之ならばと思ひましたのを氣永く仕込みますと果して役に立つ様になりますので十四五年以來只今ので漸く三人目で御座います最も中途にちよい〳〵取り換へましたり手傳や守として雇入れた者もありますけれど、其等は大抵半年位で御座いますから數にも入りません先の二人は何れも緣附き子供を持ちましても始終音信して居ります、私は彼等も家族の一員として出來る丈の自由は與へて置きます併し何事でも身分といふ事を忘れてはならぬ自分の身分を忘れると不平が起り不滿足が起るのですと申し聞けて置きますので何時も不平なしに働いて居ります私は三指ついて遊ばせ言葉を遣ひませんでも影日向のないのを喜んで居ります

△我家の交際

又交際に就て申しますと甚だ手前味噌の樣で御座いますけれど良人は信義厚き至つて穩な人で御座いますから上下の隔てなく交際致して居りますけれど幸に何誰でも信任して下さいます、時によりますと人を信用し過て禍を招く事が度々あるのが缺點で御座います、私は又家事に忙しう御座いますから婦人間の交際は極く淡白に致して居ります、餘り親しく致しますと得て間違の起り安いもので御座いますから親戚間の交際に致しましても主側の係累が多く色々複雜致して居りまして隨分惱う御座いますけれど一々其れを氣に懸て居りましては到底其煩瑣に堪へ切れるものでは御座いません何れにも平等に淡白と交際つて居りますと別に苦情も起りません、又子供等に致しましても女の子は惱う御座いますお友達がどうかうと申しますけれど私は一切取り上げません、まだ〳〵人となるには辛い事や悲い事が澤山あるから何を言はれても構ひません自

京都清水寺



分さへ正直で勉強して居ればよろしいと申して置きます。

私共此樣な生活を人が見て何が希望であんな生活をして居るのかと笑ふ方もあれば感心だと褒めて下さる方もあります、中にはお金が貯るでせうと言ふ方もあります併し私共はそんなことは一向念頭に置かないので御座います、富を得たければ其れ相當の賢い方法によりさへすれば外に色々な道が御座いませう、つまり私共は分相應といふことを忘れぬ樣に致したいので御座います、此間も子供が汽車の一等に乘つた事がないと言つてお友達から笑はれたと申しますから、お前は一等に乘る身分でないでせうけれ共一等に乘る身分でないからさういふ人等と交際することは出來ぬと自分から卑下するには及びません心さへ正しければ、どんな立派な方とでも遊ぶことが出來ますと申しました併し何事でも口では立派な事が言はれますけれど却々實行は六つかしく萬事理想通りに行くものではありません、私共の生活に致しましても未だ〳〵其初歩で御座いますやがて子供等の成長致します頃には幾分か理想の域に達する事が出來るだらうと些か希望を持つて居るので御座います。

仲働の見たる主家の家風

末央棚

山の手の見晴しの好い地面に方二十幾間の板塀を繞らして未だ木の香も新しい二階建の立派な邸宅「見越しの松」つて言つた樣な老松が緑滴る枝を往來に垂れて御影石の門柱に△△△と眞目面な文字の標札がかけてあります、此家は私の御主人の家、私は此家に去年の春から仲働をして居りますので、

御家族は某會社に御在勤の磊落な旦那樣と、其れに目端の届く怜悧の奥樣と、尋常小學に通ひ給ふ孃樣御二人、奥樣の弟樣と其御嫁樣、それに私等女中が三人、弟樣はまだ學校通ひのお坊ちやん、御嫁樣はこの間嫁しつた許、そこでもう御當家の家風だとか家法だとかいふ事は總て奥樣御一人の御意見で左右されてゐるのでございます。

○爪で拾つて箕でこぼす主義

私が初めて御奉公に上つた時この位なお邸だから定めし皆樣が銘仙の御平生着でも召して在らつしやるだらうと思ひましたに來て見ると意外の御質素、旦那樣初め皆樣が地織木綿のゴツ〳〵したのを召して御帶もメリンスと手繻子のをしめてゐらしつたので伊勢崎銘仙の着物に縮緬の帶で罷り出た私は氣恥しく思ひました位。

「私の家では儉約して物品を大切にすると言ふことを一等やかましく言つてるのですからお前も其積りで物を空費にせぬ樣氣をつけて下さい」と奥樣は最初先づ斯樣仰いました。仰られた翌日孃樣の御草紙を五帖許とおて綴ぢた小撚の一寸や五分の切れ端を丸めて屑籠に押し込んだので大變叱られてしまひました「禍も三年たてば役にたつ小撚の屑でも決して捨てる事はなりません、此間もお松がマッチを一本空費にしたから左樣いつたんだがたとひ一本のマッチでも小撚でも天か

ら降つては來ないのだからね、小さい物を粗末にする人は大きい事でもだらしがない以後氣をつけなさい」とあゝこれだけのお家に住んで女中を三人も使つていらつしやる奥樣のこの御心掛けには敬服の外ありませんでした。

大抵のお邸の奥樣は生花でも遊したりお茶でも御たてになるところを、そんな餘裕があらばぬき絲でもつなげ古綿でも延ばせといふ主義でつひぞあのお床に生花のあつた事もなくお茶の香りのした事も有ません。況して絲の音色なんぞ……朝から晩まで足袋繼だとか破れた切の補綴だとかなすつてらつしやる、裁縫遊してもほどき物遊してゐ一寸のぬき絲も捨てないで夜は御新造樣と御二人でせつせとぬき絲つなぎ奢侈で身を亡した叔父樣の御話や儉約して身代をお作りになつた御父上樣の御話を何十遍となく持出してくりかへしくりかへし節儉の貴い所以を御説法遊す。

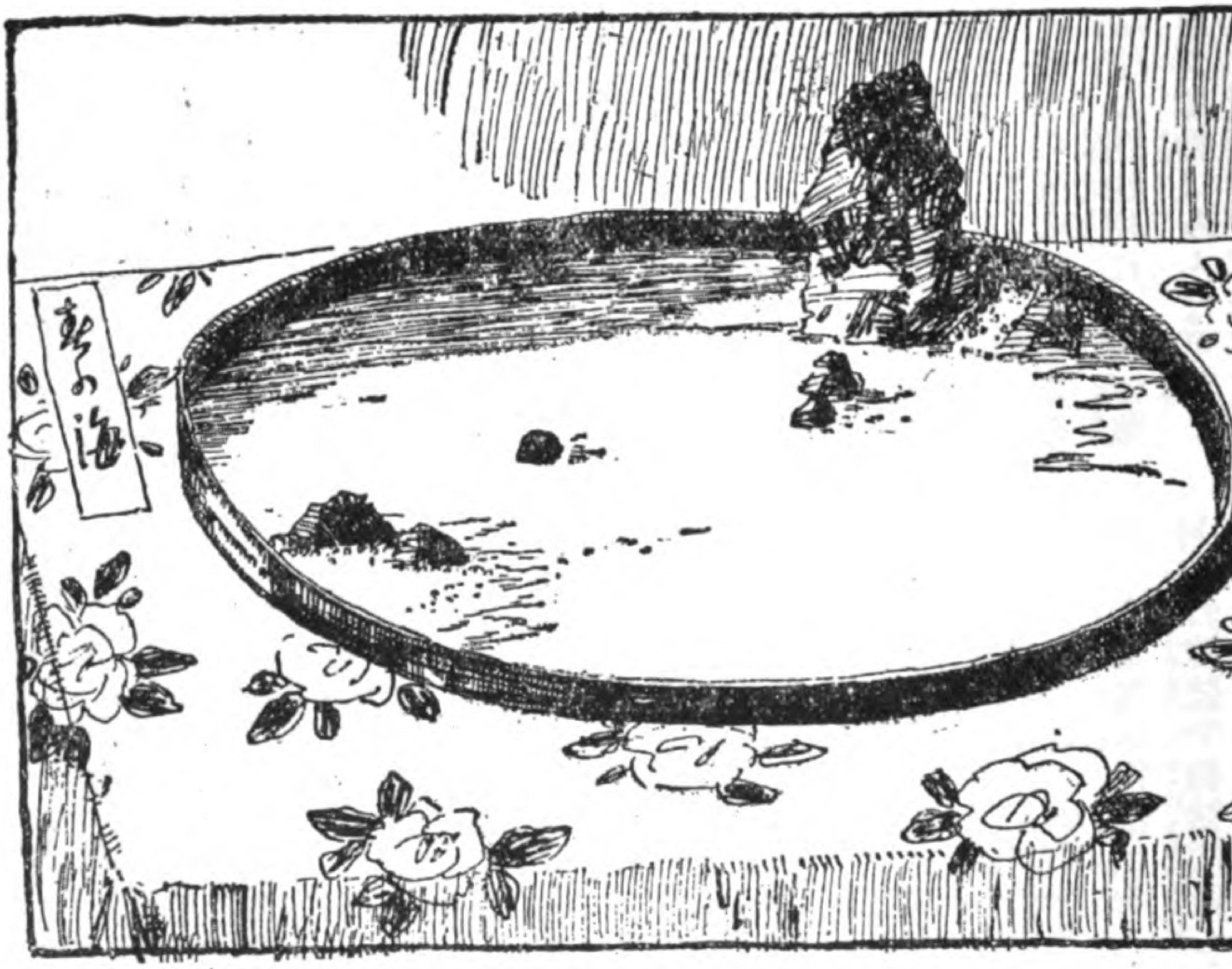
只もう旦那樣はじめ皆樣が物品を大切〳〵と遊す是が家憲の第一ケ條なんでせう一寸唐紙へ手を觸れても火鉢へ水を濡しても大騷ぎ人の爲めの家や道具か道具や家の爲めの人かわからぬ位、されば何十年以降の着物でも御道具でも只今買つて來たかと思はれる樣なもの許。

其代り時には食物もこの筆法で可惜美しい林檎を腐敗らして捨てる樣な事もありますけれど……一方斯樣に一寸の紙切五分の屑絲も惜しみ給ふかと思ふと雛樣の御道具が可愛いからとて莫大の金錢を投じてお揃へになつたり又交際なぞには却々御張りになるんです昨日三越からお取寄になつた上等のフロツクコート地一着と黒襦子丸帶あれは吉田樣へ弟樣の御媒酌の御禮にお贈りになるのだとか、一寸親類知己の往訪にも三十錢の品をよこせは五十錢にしてかへし鮑をよこせば鯛を贈るといつた風で慈善事業やお寺の寄附金なぞうんと奮發遊して特筆大書の貼紙でも出されると大變によろこび皆樣に御吹聽遊すといふ風でかういふ側はすべて豪奢振り、併し今時の女學生にはこの道理は解ります。

○萬事古風で行く主義

世間ではヤレ何が流行るの何がすたれたのつて走馬燈の様な流行を遂つて殆んど其日暮程度の者迄がなほかつ新流行を裝はんと汲々としてゐる今日帝都に在つてそんな風は何處を吹くかと樣に超然として古風を守つてるのは恐く御當家位なものでせう、旦那樣から野暮といつたら眞の野暮今日も奥樣が植村樣の御婚禮に御出掛と伺つたので納戸へ御召更の御手傳に參

盆石の趣



ると丁度御紋附の襟を合せて御在の處黒紋羽二重に茶色で島臺が五寸位の大きさにポタリ〳〵と置いてある御模様それに白無垢二枚重ねで何れも袘が一寸餘も出てゐるんでせう、御み帶は黒襦子丸帶、此召物にこの御帶成程流行の中心たる東京には珍らしいと御見上げ申してゐると、

「ねえ竹、此衣服は私の十六歳位の時のだから今時こんなもの着る人は見たこと無いだらう、けれどね私は昔物が好きで現今の流行は何だか馬鹿に突飛な模樣なぞつけて大嫌です、紋附の

袘でも四分位しか出てゐないんだものね、私等が見ると下品で價値がなく思はれるが何故彼樣のが流行んだか：：：袘は大きい程上品だから人が何といつても不關いから此着物も直さないのオホヽヽヽ」との仰せ、納戸に並ぶ幾棹の簞笥に一ぱいの御衣服も御帶も皆この御持論に叶ふ御品、昔風の糸織や御召縮緬には皆花色裾が附いてゐます、奥樣の縮緬の御被布なぞ私の曾祖母の長襦袢にでも有りさうな柄なんですもの。

旦那樣迄時々縁のついた十八世紀式のモーニングなぞ召して御出勤なんだから一家を擧げて國粹保存(？)に御熱心なんでせういつかも口惡なK樣が來て「奥樣古物展覽會でも開會ませんか」なんぞ仰いましたつけ

勿論御髮は皆樣純日本風が御好、御髮の御道具も昔の物品は品がかたいと殊の外御珍重。

「アノ此頃三越なぞに有る新ダイヤの鬼の齒の樣な髱櫛ね、ほんとに憎らしい形だことね進物用にも買ふ氣になれませんわ、ねえ、ハイカラな物はみんな可愛くありませんね」と昨夜もしきりと旦那樣と御新造樣にお話、御二人とも眞に御同意遊すからをかしくて：：：

御新造樣も此頃は櫛をやめて丸髷に一昔前に流行つた珊瑚の後挿しなぞさしていらつしやる。丸髷が似合ふと云はれた私も銀杏返しが眞に下女風になつてしまいました。

「母が御殿に居たもんですから羽織は失禮だつて着せなかつたので：：：」口ぐせに仰る奥樣は家の内でも滅多に羽織はお着し遊しません御着せにもなりません寒中でも木綿の重ねにキチンと帶を結んで御在、況して外出の折に召したとは未だ嘗て御見受申した事がありません、來た當時私も時々使に行く時着て出て叱られたもんでした。

總べてを水戸樣に御奉公遊したといふ御隱居樣に奥型をとられるのだから古風の禮儀は至つて堅苦しい方去年旦那樣が、其昔の恩人が今は見る影もなく零落して、さる裏店に住はるゝと御聞きになつてフロックコートの禮裝で御訪問遊したこともありました故に初訪問の奥樣が羽織召して御入來だつたり然る學士の君が

暑中見舞に着流しでゐらしつたりした時に後で此失禮を不平してでした。

酒掃應對の作法は勿論起居動作もやかましく御給仕など慣れぬ中は私も時々御飯や御汁の盛方に不合格して一つお椀を持つて茶の間と臺所とを五度も往復してやつと合格したなぞといふ滑稽を演出することもありました。

御孃樣初め私共には化粧は嚴禁されてゐますが洗髮の後には必ず脂粉もて美麗に粧ふべきことと定められてゐます私共が洗濯しても奥樣方が、御目出度うと御丁寧な御言葉賜るので誠に痛み入る次第ですこれも御殿の何とかだとか……。

○行事やら迷信やら

行事といへば仰々しいが御正月や御節句は御郷國風に形の如く行はれますは勿論です。

一體御全家がクリスチャンで日曜日には日曜學校やら安息日禮拜やらに御出掛け遊し時々は牧師の君の御來光があつてバイブルの御講話遊すそれでゐてゝ神棚には天照大神やら成田山やら種々の神樣が齋き祀つて在る毎朝御燈明上げて御茶湯供へるは私の役目、一日十五日には小豆飯炊いて神佛に供へるのが例ですし六十日目に來る甲子樣はもう二三日前から忘れない樣に用心して其日は甲子樣に七色菓子を上げて御膳部を供へます可愛らしい御膳部にはお平に小鯛とごぼう大根にんじん油揚、猪口に大根にんじんの膾、豆腐の白味噌汁、香の物、甲子飯(大豆飯)、これだけを盛つてカチカチ〳〵切火をかけて上げるので、皆樣が御誕生日亡き方々の御命日も必ずこの御膳部但し御誕生は小豆飯御命日はお茶飯、それでお平の大根にんじんごぼうといふ物、これはどうしても是非つけねばならぬのでそれはくいら零落してもこの事を傳へることが出來るやうに又質素を意味するのだとか申す事です。

何誰でも會葬かお悔みから御歸宅の時は浪の花で淸めぬ家は敷居をまたぐと出來ぬ制定、仕立卸しの衣服は夜卸す事を禁せられ土瓶の口は北に向けるを忌まれ爪は土日に切るべきものださうです出世前だからとて御孃樣方にお茶漬お汁かけ飯御嚴禁なさるは衞生の上からでもありませうこんな細い迷信的禁止事項は擧げて數ふるに暇あらずです。

洋風の賓客接待

主人は待合室に於て、豫め食卓の席次表を男子客丈けに示して置き、イザ着席と云ふ段になつても、混雜しない樣にして置かねばなりません。席次表は大概の白紙に記して置くのです。

賓客の中に未知の人のある時には、主人は賓客の希望するのを待たず、直に其人を導いて待合室に至り、「此方は何某氏で、今は何所で何職をなして被居しやる」と、簡單に其履歴を述べて、其人が紹介を希望した旨を附言して引き合すのが禮であります。此の場合に主人は、進んで默禮し、自分よりも高貴の人に對しては、先方より握手せらるゝのを待つて、紹介するのです。

それから前の席次表に據り、自分と並んで、直ぐ隣の賓客、又は又隣に着席してゐる客が、未だ一面の識もない人である時は、豫め主人か友人に頼んで、着席前に折を見て紹介を得て置くことが必要であります。

食堂の準備は、招待狀に記載してある時刻迄に、必ずして置かねばなりません。主人は食堂の準備がキチンと整頓した知らせを得たれば、先づボーイを呼んで食堂の扉を開かせます。而して賓客一同を案內するのですが、其時主人は最高位の人を案內して、食堂に入る前に、待合所で示して置いた順次に一同がズラリと着席したならば、主人は我椅子の後に起立して、一同の客人が殘らず席に落附いたのを見定めて、徐ろに主人席に着くのです。

若し客が男女混合の場合には、主人は最高位の夫人を伴つて宴席に案內する。其他の賓客は其後に附いて、順次其階級に從つて、男子は他人の夫人を同伴して進む。主婦は最後に最高位の男客に伴はれて食堂に入るのが洋風の禮であります。最も此の組み合は、豫め待合室で主人が男客に內意を含んで貰つて置くものであります。若し食堂に行く前に化粧室の設けがある時は、客は鏡臺の前に起つて、ネクタイの歪みや曲りを正し、髮の亂れを調へ、手指を洗滌して食堂に入る準備をして置かなければなりません。



文明國の裏面

◎婦人辯解の新説

從來婦人のお饒舌りなのは心が輕佻浮薄だからだと解せられて居た。處が近頃或る學者は、婦人の饒舌の理由を生理的に解釋して、大に婦人の爲に辯明してゐる。此の學者は妙な實驗を思立つて、會話の際に於ける男女の呼氣量より生ずる結果を比較して見た。處が口中より出づる空氣の壓力を量るに、男子は話をするときに女子よりか四倍餘りも疲れると云ふ新事實を認めた。即ち女子は話をするときに餘り勞力を要せずして、宛も扇を動かす位のものだと云ふ事を發見した。

そこで右の學者は此の實驗に基て、婦人の饒舌の原因は結局其の胸肺の強い爲で此點に於て女子は男子に優つて居ると結論を下してゐる。婦人方のお氣に召す議論である。

◎笑俱樂部の創立

多數の人が神經衰弱に惱める今日に適當な笑俱樂部が一つ出來た。それは笑俱樂部といふものである。曾て記した自殺俱樂部や斷食俱樂部などは餘り好ましいものでないが、笑俱樂部は一寸面白からうと思ふ。設立者は英人トムソン、クロー氏で會員は既に千五百人に達してゐる。

入會者は人生の至苦至痛の場合にも笑て暮すことを宣誓することになつてゐる。入會式はクロー氏が之を指導し一名の代父が侍座して、一名は火箸を持ち一名は鋏を持つてゐる、式の執行中入會者は務めて笑つてゐなければならない、出來る限り大きく笑はなければならない。其間側に居る者が腋下をくすぐつてゐる言ふ迄もなく笑はせる爲である此の俱樂部は急に進歩して醵金もなか〳〵多いのであるが、其の醵金は貧民の子弟を救恤する資に供すると云へば、同俱樂部は啻に會員を慰藉するのみならず、會員以外にも餘澤を及ぼすのである。

妙な俱樂部ではあるが、悲苦の多い人生には、こんなものも要るかも知れぬ。

◎良人表彰會

近頃米國ボストンに開催の良人表彰會に於て、之が選定の任を擔當せる審査員は、候補者の風貌及び精神を詳に審査したのであるが、今回當選して優等賞を受けた良人は、今より十年前に結婚して、當年三十五歳になる某紳士で、其の賞を受けた理由が面白い。

（1）彼は朝餐前にも大層機嫌が好い。

(2)妻に命じて能く生計の費用を節約せしめる。
(3)彼は母よりも妻の方が臺所に慣れて居ると常に言ふ。
(4)食事の時刻に几帳面である。
(5)内に居ても外に出ても善い人である。
(6)廉潔で、性質が洵に善良である。
(7)彼は倶樂部よりも家庭を好く。
(8)滅多に茶屋に行かない。
と云ふのである。

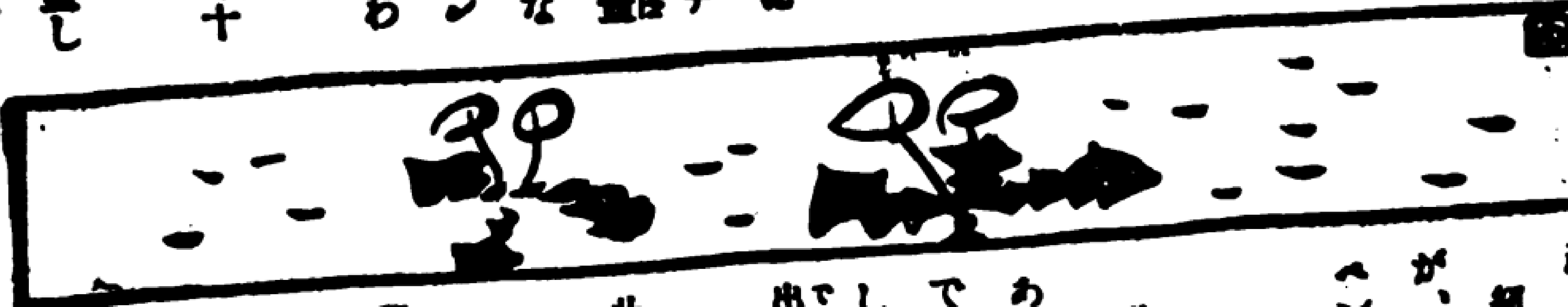
◎名士のペンの價

千古の名文を草した名士のペンを、大金で求めて秘藏してゐる者が、西洋には少くはない。ヴィクトル・ユーゴーは、ラマルチヌ、ジヨルジ・サン、アレキサンドル・ヂュマ等の文豪のインキ壺とペンを机上に裝置して居たさうだけれども、是れは實物ではなかつたから、價をつけることは出來なかつたが、左記名士のペンは實物になつたので、ほゞ價が知れ從つて人々が愛する程度もわかる。

チャーレス・ヂツケンスの使用したペンは氏の死後間もなく十九磅十志（一磅は我十圓、一志は五十錢弱）で賣られた。

ウェリントンが千八百四十四年ヴィクトリア女皇に書を奉呈したときに使用したペンは五ギニア半（一ギニアは凡我五圓）に賣られ、ウォーター・スコットのペンは八ギニアに賣られた。

紐育のアイザク・リード氏は高價のペンを澤山秘藏してゐるが、其中最も高價なのはリンコルンが大統領のとき使用したペンであるさうな。



◎世界最大の臺所

先頃革命のあつた葡萄牙に、曾て有名な修院（僧庵）が一軒あつた。「ツステルシエンセル」派の修道士（行者）が修行した庵で、高さ二十米突、面積三百三十方米突もあつた。其の眞中に恐ろしい大きな臺所があつた、其處では優に四頭の牛肉を煮ることが出來たと云ふ、以て其の如何に大いなるかゞ知られる。曾て修道士の多かつたとき、同院を參觀した文士があつたが、此の大きな臺所を見て、同院を形容するに左の如く記した。

「歐洲最大の饕食寺」

當時修道士は九百六十人居つたと云ふ。此の人數を養ふには恐らく是れ位の臺所は要る。今日では此の修院は兵營となつてゐる。炊事係が炊事兵に臺所を讓つて了つた。

◎婦人一生中の化粧

西洋では隨分面白い統計があるが、婦人のお化粧の度數に關す

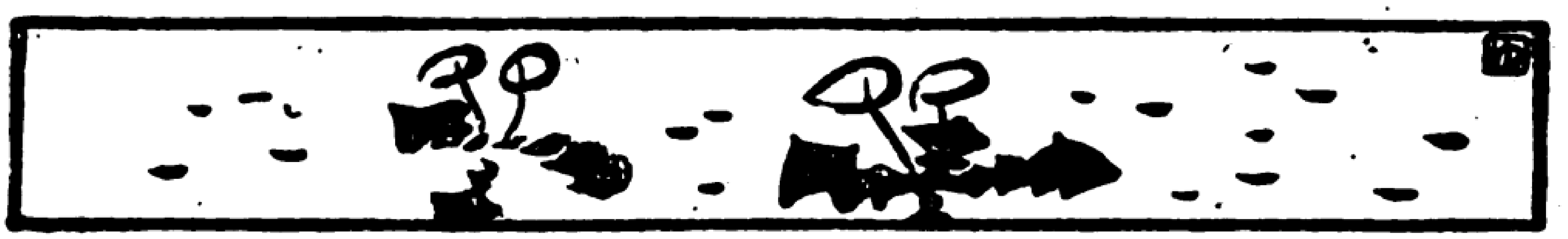
る統計は未だ曾て聞かない。婦人は一生の中に幾回衣裳の取換をなすか、幾回お化粧を施すか、幾回手を洗ひ顔を洗ふかと云ふやうな事を調べた人は我國にも恐くはあるまい。處が今度英國の村婦ロフエーと云ふ婦人が之を調べたことを九十二歳になつて發表した。

お婆さんは九十二回目の誕生祝の日に、大勢の友達を招待したが、來客が長壽を祝するを聞き了つて後、一冊の帳面を出して友達に見せた。其の帳面には珍らしい統計が記してあつた。即ち九十二歳の今日に至るまで上衣を取換へたこと四十五枚下裳を取換へたこと五十枚、前掛は六十枚、靴は百足、靴下は三百足、コルセットは六十九、帽子は百八十入とあつた。又お婆さんが過去を追想して「私は實に質素に暮して來たから、服裝はこれ丈で澤山でしたが、金の要らないお化粧には隨分手をかけました」と言つて示した統計を見ると、手を洗つたこと六萬回顔を洗つたこと六萬回とあつた、

田舍のお婆さんですら既に此の如しとすれば、巴里婦人とか、其他贅を盡す婦人の一生中に於けるお化粧の度數は實に幾百千萬回であるか知れない。

◎世界一の舞踏狂

波蘭人は恐らく世界一の舞踏狂者であらう。同國の習慣として、華燭の典を擧ぐるとき、花嫁は來賓の招請に應じて誰彼の區別なく一緒に手を携へて舞踏しなければならない。而も力の許す限り根氣の續く限り舞踏を繼續する。但し花嫁を招いて舞踏を請ふ男は、舞踏料として應分の金を盆の中に入れるのが例である。それ故來賓の多い時、或は來賓が金滿家である場合には、其の金高は優に花嫁の嫁資を作るに足ると云ふ。



米國セントルイズにある波蘭の殖民地に、近頃結婚があつて、波蘭生れの花嫁は郷國古來の習慣によつて、踊つたりな續け様に三十四時間踊つたと云ふ。即ち約一晝夜半踊り暮した譯である。此の花嫁はフレド・ザポワ夫人といふ名である。

午前九時に結婚式を擧げ、それから踊り始めて三十四時間踊り續けた上、尚進んで舞踏招請者を挑んだとのことであるが、來賓一同疲れ果てゝ誰も應ずることが出來なかつたと云ふ。然しザポワ夫人は長期舞踏のレコードを破つた譯ではない。名は逸したが、矢張り波蘭婦人で、其の結婚の當時、殆ど休息なく三日二夜踊り續けた者がある。

現代婦人評論　號外

天下の好配

鐵拳禪

一

⊙春雨油のやうにしと〱と降る。木の芽は少女の乳に似て膨れ、雫は音もなく煙霧の中に薫る。斯くて半日、春光燦として輝けば、萬象悉く微笑す。

⊙此の晴れたる春の日の心は、即ち新郎新婦の心也。恍として其の心は、永久の新しき、樂しき理想の春に踴躍す。是れ正に、天上天下一家の春。

⊙新家庭に於ける新郎新婦は、實に春の日に傲れる花也。其の若やかなる心と、溫き情とを以て自らの春に醉ひ、自らの理想に憧れ、飽く迄も美しき柔かなる空氣を呼吸せんとす。人生の光榮は、擧げて此の黄道吉日に在り。

⊙土井八枝子は、詩人晩翠が妻也。彼女は高知縣資產家の女、東京音樂學校に學びて、ピアノに長ず。月光洩るゝ綠蔭の夕、さてはコスモスの伏す露の朝、其の紅唇を破れるものは、晩翠の詩也。

⊙晩翠は仙臺富豪の子、少より秀才を以て稱せられ、風丰又群を拔くものあり。良き日は遂に二人の上に環り來りて、佳人才子の緣は確く結ばれぬ。詩人詩を賦し、佳人ピアノを彈ず。是れなん新郎新婦の理想鄉なりける。

⊙吾人仙臺に在るの日、此の理想鄉を驚かして、晩翠を訪ひし事あり。八枝子は洗濯の手を止めて吾人を迎へ、愛想よく晩翠の書齋に請ず。時に彼れ机に凭りて、ペンを紙上に走らせつゝあり。

⊙ピアノを彈ずるの手を以て、時に洗濯をなすは彼女の美點也。家政の餘暇を以て、燈下に良人と額を鳩めて英詩を讀むは彼女の趣味也。而して、此の趣味を解する『晩翠の奧さん』は、仙臺婦人界視線の中心也。

⊙晩翠の歐洲に在るや、纏綿たる情緒常に詩賦の上に溢る。殊に『東海遊子吟』に收めたる、「懷鄉」の一篇は

八枝子夫人を思へるもの、眞情流露惻々人を動す。戀愛の作多からざる、晩翠が詩集の一異彩也。

⊙初め、晩翠の父母は小倉茗園の女を以て、晩翠に娶せんの意あり。許嫁たること幾春秋、緣の絲は遂に二人を捲くに至らずして、プッリと絕えぬ。紅恨紫怨、正に一篇の哀詩ならずんば非ず。

⊙許嫁の中らひ極めて圓滿にして新郎新婦の歡樂に醉へるは大塚保治(文學博士)夫妻也。保治は群馬縣小屋右兵衛の弟、養はれて大塚正男の嗣となり、長女久壽雄と婚を結ぶに至れる也。養父は二十年前聞えし司法官也。

⊙久壽雄とは、即ち閨秀作家大塚楠緒子の事也。美貌にして才名あり。繪畫に巧みに、書又拙からず。所謂才華爛發、藻思奔放の女流也。唯其の缺點とする所は、才氣のあまりに發露すると、自ら標値するのあまりに高きにあり。

⊙新聞記者より難關を以て目さるゝは、彼女の玄關なり。往訪して、首尾よく此の難關を通過し、應接間に引見せらるゝは十中の一人也。多忙は其口實なれど心氣勝れずして新聞記者に會ふの繁に堪へざりし也。

⊙保治博士は美學の星斗、書窓の人にして社交の人に非ず。細君に對して强き事を云ひ得ぬ程の、內氣な人也。之が爲めに、家附の娘なる楠緒子は、擅に自個の小說に逍遙游するを得たり。

⊙小說「空薰」を作れるは彼女也。新體詩「お百度詣」を賦して「ひとあし踏みて夫思ひ、ふたあし國を思へども三足ふたゝび夫おもふ……」と歌へるは彼女也。彼女には與謝野晶子に見る如き鬼才なしと雖も、平安朝の才女を偲ばしむるの面影はあり。

⊙晶子は文壇の鬼才なると共に、生々蕃殖の女也。詩歌文章の才に於て匹儔なきのみならず、婦人の本能を發揮するに於ても亦絕倫也。二個の乳房を以て、雙兒を養ふの婦人也。今玆晶子は再び雙兒を擧げ、家門の繁榮を加ふるの時、才女楠緒子の新墓は、徒らに風雨の襲ふ所となりて、又高韻を聞かず。

二

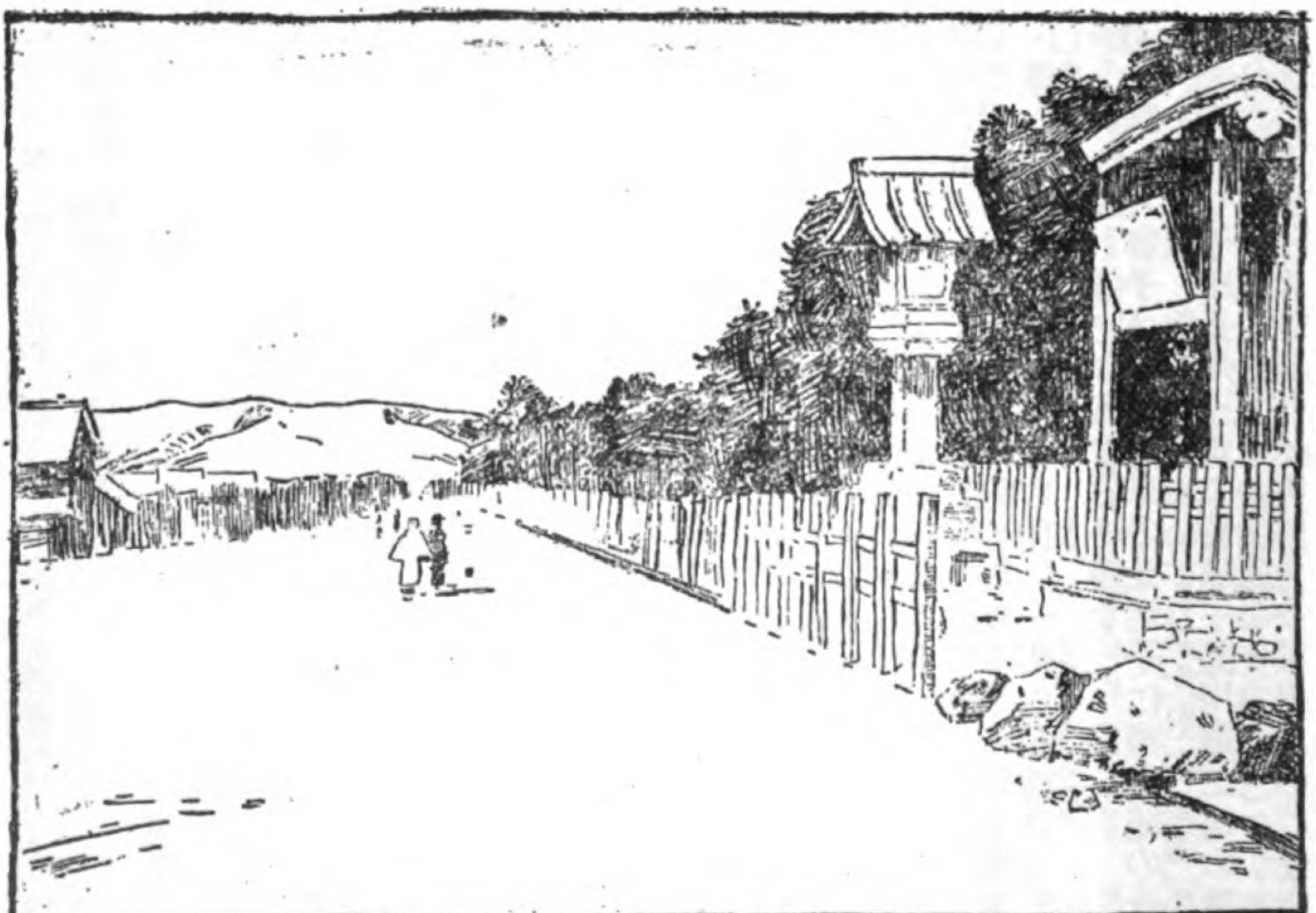
◎法學博士松崎藏之助は、其の年少時代、高津家銃砲師範役たりし野村綱の家に寄食す。野村大に松崎の才を愛し、娶するに愛嬢を以てす。今の夫人悦子は即ち是れ。

◎悦子は女子職業學校の出、暫く母校の造花教師たりき。彼女姿色あり又勝氣あり、藏之助の温柔に配して好偶たり、而して能く家政を處理す、子女を教育すること厳格にして、ハイカラ風を許さず。其の好む處の音楽の如きも、洋楽に非ずして和楽也。晩餐後の團欒には、蓄音機の薩摩琵琶を聽き、以て清興を沾ふを常とす。

◎然れども、彼女のスタイルは飽く迄もハイカラ也、稍ちゞれたる毛髪を廂にし、あつさりと薄化粧を施して、縞模様の衣裳を纏ひたる立姿は、どう見ても二十臺の若奥様也、彼女のスタイルは既に斯の如く、心も亦斯の如く、常に二十臺の若さと矜りとを以て人に接す。

◎大廣間に陣取り、一段高く坐りて來客に對するは、子爵未亡人三好椿子也 如何なる親しき間柄にても、座に數尺の隔りを設け、總ては是れ舞臺面大奥の體也。悦子は男女の親疎の別なく、一個の火鉢に相對して語る。雙手を火鉢に翳すの時、三個の金環紅玉と相映じて人目を眩す。

◎彼女は良人の虚弱なるに反して、活氣横溢す。時に鍬を執りて畑におり立ち、春耕秋収の興に入る事あり。時に水天宮及び琴平に詣でて、家



伊勢山田町

内安全の心願を憑むる事あり。此の『飲』と『心願』とは、能く彼女の性格を語りて餘蘊なきもの。

◎阪谷こと子は、男阪谷芳郎の妻也。男澁澤榮一の二女として、好配の名天下に著聞す。現時住する小石川原町の邸の持参金代りなるも亦世人の知る所也。

◎男阪谷は、岳父の勢望によつて大藏大臣となれるが如くに想像するも其實は矢張一代の駿足たるを失はず。如何に閨閥の勢力あるも、其の器に非ずして國家の重椅に凭る事を得んや。然れども閨閥の出世不出世に關する大なるものあり。

◎彼女の姉宇多子の夫穗積陳重の、法學博士にして帝國大學の教授たるは當然なるも、妹ふみ子の夫尾高次郎の第一銀行監査役たるてる子の夫大川平三郎の東洋汽船副社長たる共に岳父の恩顧に因すんば非ず。

◎男阪谷の家庭は、嚴格なる殿様風にして、主人の送迎には女中及び書生等數人皆玄關に頭を並べて平伏す。頗る古風也。

◎こと子は、斯の家庭の女王として尊敬せられ他のハイカラ夫人の如く來客と喋々せず、又婦人會等に顔を出す事も稀れ也。宇多子は此の妹に似ず、能く社交界に活動す。

◎彼女と同姓のまつ子は、淺野總一郎の女にして、法學博士穗積八束の妻也。其の妹は何れも實業家に嫁し、まん子は東洋汽船取締役白石元治郎やす子は南北石油の專務守田浜一の妻となる。又、實業界の閨閥也。

◎聞說、まつ子は殊の外電話に趣味を有し室内に一脚の臺を設けて之に坐し、喋々喃々の會話を試みること多時、御機嫌麗はしきものありと云ふ。箇中の趣味他人に語るべからず。

三

◎世に閨閥の出世者を以て目せらるゝもの、男阪谷の外に、男平田東助、男齋藤實、男後藤新平、前大臣原敬子末松謙澄等あり。而して、前四人者は何れも東北出身也。

◎維新の東北は賊名を負ひ、新政治下の敗北者たりき。されば、少壯有爲の士の、其の頭を擡げんとすれば、先づ當時の大勢力者たる薩長と握手せざるべからず。

◎握手に二法あり。一は薩長出身の勢力家の乾分たること、一は薩長諸豪の女婿たること、即ち是れ也。而して、後者の關係は、當時に於ける最も熱き握手たりし也。

◎齋藤夫人春子は薩摩海軍の元老子仁禮景範の女、平田夫人たつ子は長州三尊の首唱子品川彌二郎の養女、後藤夫人和子は故の九州探題男安場保和の二女也。就

中、薩の海軍に於ける齋藤の異數なる出世は、其の才幹の秀拔なるに因ると雖、亦岳父の赫々の威光に因らずんばあらず。

⊙原夫人は櫻洲山人故中井弘の娘也、病んで良人と別離す。彼女は結婚の當時、既に强度の神經症に罹り、常規を逸する事屢次也。良人の佛國公使館書記官として任地に赴くや、病弱の身を以て之に隨ひ、ますく健康を害するに至れり。

⊙櫻洲山人は元の滋賀縣知事にして薩摩藩閥の一族なれども、剛骨にして鄕黨出身の元勳に容れられず、不遇坎坷に終りし人なり、彼女はこの人を父とすれども、母なる人は、長閥の大元勳井上馨の妻なるぞ不思議なれ蓋し今の井上夫人武子は、始め櫻洲山人に嫁して一女一男を擧げ夫婦離別して井上家に再醮したるなり、是を以て原前大臣は井上侯爵家の伴隨的女婿たるなり。

⊙財部いね子は、薩府海軍の實權者伯山本權兵衛の長女。良人彪は、現に海軍次官として時めけり。彼れは海相齋藤の智腦として、伯山本の股肱として、海軍を切つて廻す所、宛ら侯西鄕の下に『大臣權兵衛』の名を唄はれたる、岳父の面影を髣髴す。

⊙彪のいね子と結婚するの前、一場の活劇あり。兵學校時代に於て、彼れと義兄弟の契を結べる廣瀨武夫、向山愼吉の二士、彼れの權門と婚を訂するを聞き、憤然として怒り、其宅に推寄せて手詰の談判に及べり。

⊙殊に、廣瀨の如きは兵學校以來の關係を縷述し、『苟も風雲の志あるもの、媚を權門に呈して可ならんや』と怒號したり。流石の財部も暗涙に咽びて一語なく、稍久しうして頭を擡げ、『友よ許せ、我は二君の意に隨ふべし』と、決然として答へぬ。

⊙斯くして一たび破れんとせる緣談を、うまく取り纏めたる勇者あり、是なん、薩摩陸軍の元帥侯野津道貫の女婿たる上原勇作也山本家の媒人某々等この難問題に當惑し一臂の力を藉らん事を上原將軍に依囑せる也上原即ち快諾し、一刀を懷にして、血氣の二士を說破せるによりて纔に事無きを得たり。爾來風雨十有餘年、

苦諫の士は逝きて、才子佳人の交情月の如く圓か也。當時上原が一刀を懷ろにせるといふは其實唯平の忠盛式に威赫せるのみ。

⊙侯大山巖室捨松は男山川浩の妹、藩閥に緣なき會津の產也。官軍の參謀大山格之助と敵軍の勇將山川大藏と奇緣を結ぶ、又明治聖世の餘澤ならずんば非ず。

⊙由來大山家は小說『不如歸』によりて喧傳せらるゝも、浪子は茲に云ふの要なし。二女芙蓉子は男細川潤次郎長男一之助に嫁し、三女留子は子渡邊千秋の息千春に、四女久子は男井田磐楠に嫁せり。

⊙伯東鄕平八郎は海軍大將、今や世界的英雄として何人も疑はざる所。夫人てつ子は子海江田信義の女、賢婦人也。

四

⊙言葉に流行語あり、人物に流行兒あり。流言語はお愛嬌に濫用され流行兒は到る處に持て囃さる。而して、官界の流行兒は、多く名門の女婿也。

⊙現代の流行語中、最も濫用さるゝは『何て間が可いんでせう』也。總ての場合に融通の利く言葉也。朝鮮總督府の成るや、『何て間が可いんでせう』と羨まれしは書記官兒玉秀雄ならずんば非ず。

⊙伯兒玉は、總督寺內の長女さわ子を妻とす。彼れは年の若きに似ず、頭は綺麗に禿げ、眺望宛ら溫乎たる老紳士也。さわ子の明眸、父に似て險あるも、なほ十人並以上の美也。

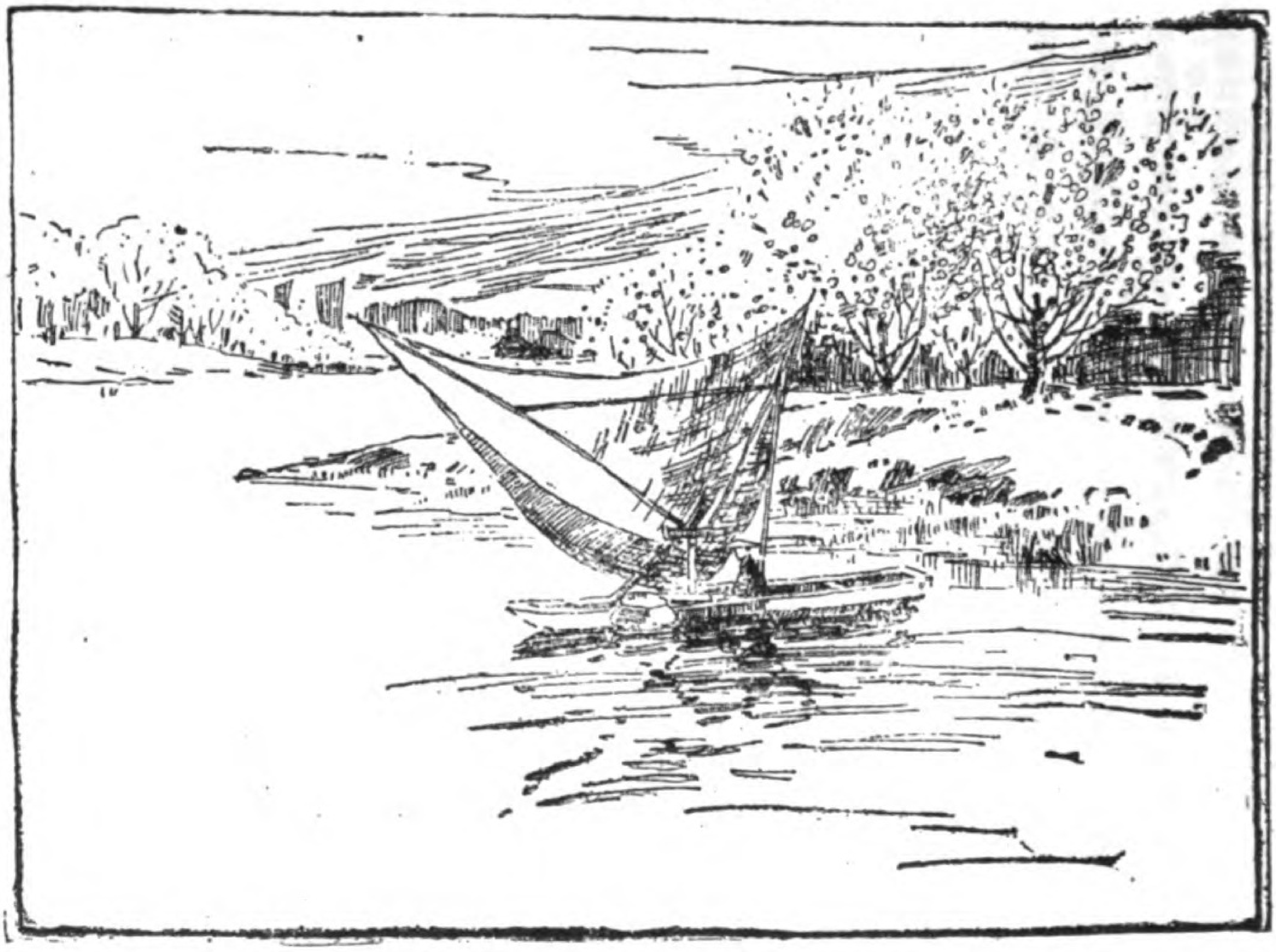
⊙彼女、父の第三旅團長たる時、仙臺高等女學校に入學し、父の轉任と共に他校に去れり。伯兒玉は又第二高等學校出身、當時相知らざるの孃と結婚するに至れるは、長閥の緣故也

⊙河村まつ子は、人も知る宮內次官河村金五郎の妻也。夫人は長閥の先進にして、宮內省に勢力ある子杉孫七郎の女、公山縣の媒酌に依りて花嫁となりしもの。

⊙河村は二十八年の大學卒業の法學士にして、公山縣に信任せらるゝ少壯者の一人也。彼れは妻君に對しては開放主義なるも、政治上に於ては秘密萬能主義を奉ず。辣腕の士に非ずといへども、能く吏務に練達せる官人也。

⊙彼れの好運と得意とを語るものは、其の鼻眼鏡也。彼れと同年の卒業生に、大學總長男濱尾新二女淳子の夫荻原守一（外務省通商局長）、男岩崎久彌の妹雅子の夫幣原喜重郎（外務書記官）等あるも、局長或は知事たるに過ぎず。而して次官に昇進せるは、河村一人のみ。

利根川べりの櫻



⊙文部省參事官黑澤次久は、男周布公平の女婿たるを以て、省中に羽振の利く一人也。然れども、彼れは又有名なるサイノロヂスト也。宴會御免の男也。縱令止むなく宴會に臨む事あるも、倉皇として辭し去る也。

⊙英學者佐川春水も亦、一種のサイノロヂスト也。黑澤の几帳面なるに比すれば、之は又餘りに風流也、彼れは毎朝顏を剃り、香水を振り掛け、白粉を施す程のハイカラ也。

⊙彼れの風流的サイノロヂーを發揮するは、微醉の後にあり。得意の俗謠を低唱して細君に聞かせ、興來禁ずる能はざるに至れば、遂に相携へて神樂坂に遊び人を招きて之を聽かしむ。斯の如きは、實に『さま〴〵の家風』中の最異色ならずんばあらず。

五

⊙富豪大倉の息喜七郎も亦細君に敬意を拂ふの一人也。夫人名は久美子、伯溝口直正の女也。而して、之が媒妁人となりしは故伊藤公爵にして、懇ろに花嫁花婿を

訓戒する所ありき。

◎伯濱口家は、大倉の舊藩主なるを以て、之と婚を結べるは、家門の光榮也。富豪と華族との握手中に於て天下の耳目を新にせるの婚儀也。

◎近時、多少非難の標的となれるは、九州の炭礦王伊藤傳右衛門と伯柳原義光の妹燁子との結婚也。然れども、之を以て不倫となすは、云ふものゝヒガミ也岡燒也。結婚に於ける名と實との抱合は、既に現代の趨勢なれば也。

◎伊藤と伯柳原家との婚儀に類するもの、曩に子勸解由小路資承の姉富久子と千葉縣平民石井千太郎との結婚あり。富久子は華族女學校出身の才媛にして、石井は鑛業家、石井商會主にして、曾ては東京競馬會社の理事たりし也。

◎久美子は演劇に趣味を有し、燁子は詠歌の才あり。而して、富久子は技藝を能くす。此の三夫人は共に上流の家庭に育ちて新時代の教育を受けたるもの、宜しく良人の無味乾燥なる頭腦に一脉の趣味を與へ、以て清新なる家庭を作るの覺悟なかるべからず。

◎姉崎嘲風は、文學博士井上哲次郎の姪婿也、當年の秀才高山樗牛等の博士たらざるに、早く既に學位を得、大學の教授となれるは姻戚關係の然らしむる所とすら傳へられき。眞逆とおもへどこれも亦現代ぶりの一ならん夫人名はます子、溫順にして貞淑也。

◎學界の女婿にして聞ゆるもの、男菊池大麓の二女たみ子の夫に、美濃部達吉（法學博士）あり。醫界の元老三宅秀の長女敬子の夫に、三浦謹之助（醫學博士）あり。男箕作麟祥の女さだ子の夫に、石川千代松（理學博士）あり。今後英才にして、先輩の女婿となりて出世する者、ます〳〵多きを加ふべし。

◎實業界の風雲兒、大田黒重五郎（芝浦製作所取締役）は、惟信の養嗣也。彼れはもと靜岡縣小牧辰雄の二男にして、先代の二女らく子に配せる也。

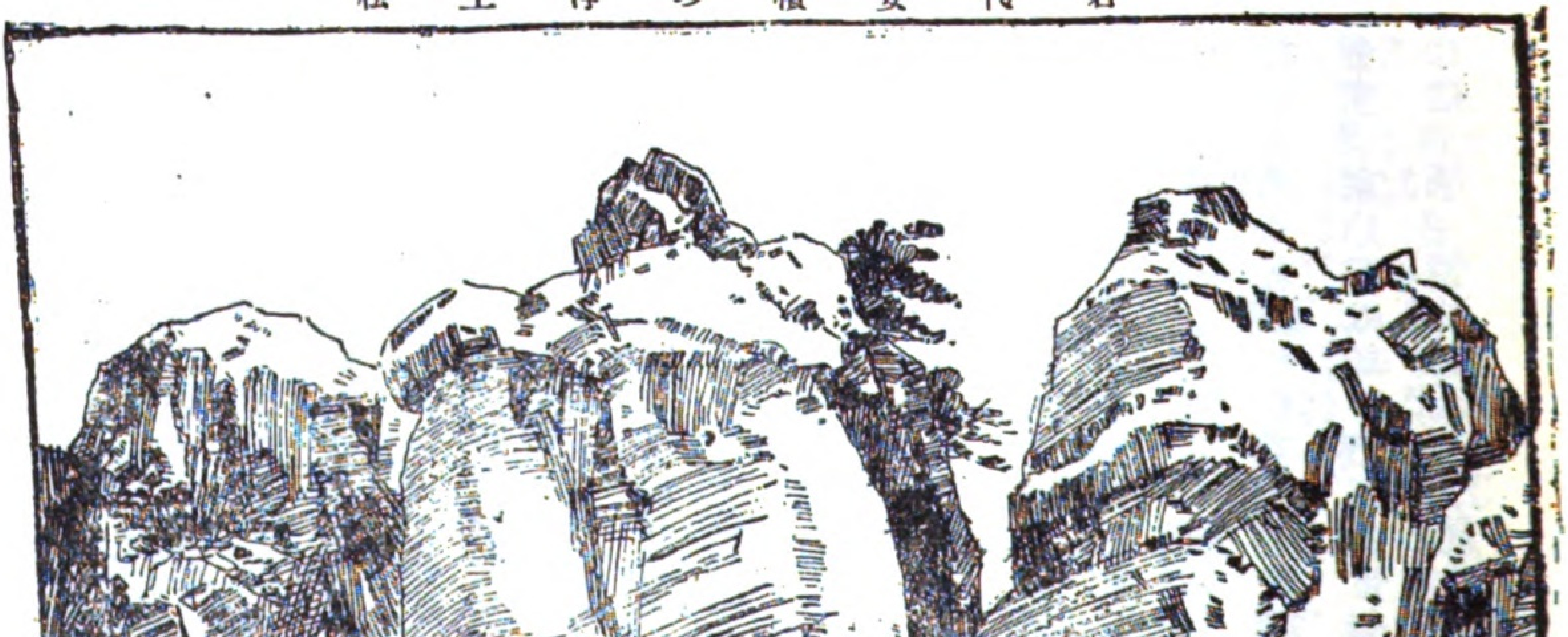
◎惟信女婿を高商の學生中に得んとして、當時の校長矢野二郎に其の選擇を依頼し來る。二郎乃ち重五郎を推す。彼れは校中唯一の選良として芽出度く養嗣となれる也。

◎伯田中のお眼鏡にとまりて、八百八街の美人中より選ばれたるは、神田の小林孝子也。彼女は何等才學の誇るべきなきも、一個妙齡の處女にして滔々たる愚俗を冷眼視するの度胸と意志とを有す。

◎愚俗はいへり伯田中は宮相の位置を捨てゝ戀ひ慕へ

る彼女を娶れる也と。ア、世間の眼といふものはこの如くに淺薄なるこそあさましけれ。人はいふ彼女幸多かるべき花の身を以て鬢髪霜の如き人に後妻となる情に於て淋しかるべきも、虚榮は正に彼女の心頭に輝けるならんと。愚俗の見いよ／＼出ていよ／＼愚也。彼女はこの舊習慣の、俗諺を打破し、舊思想を排除し、⊙鐵拳子說あり、諺に曰く「釣合はぬは不緣の基」と、誰れが、何といふとも、「この不釣合」の三字を飽くまでも實行せんと、欲せしなり。其の決心や盤石の如し、是れ彼女の度胸也又彼女の意志の力也、この度胸と、この意志の力とは、終に官界に名望高く、因緣深く、閱歷久しき老伯爵をして、紫綬金冠を一擲する弊履の如くせしめたる所以也。故に曰く、田中宮相は彼女と結婚したるにあらずして、彼女の意志と度胸とに殉せし也。而して孝子は俗諺の「不釣合」の三字を飽くまでも打破し盡せし意地持女の標本也。翩々たる當世のハイカラ男女、孝子の後塵を拜して可也。爪の垢を煎じて呑むべし。

岩代安積の淨土松



二十五圓で理想の生活

すゝしろ

二十五圓内外の月給で暮して行く方は、市外へ御住ゐになつた方がよう御座います。まして此ごろの物價の高さ、米代から野菜に至るまで市内では却々骨で御座います、私共は此大井へ參りましてから、空氣はよし、閑靜で、氣がのんびりと致しました、一圓に豫算ある如く、一家にも必要と存じて左の通り定めて居ります。

家族は夫と私と小學校に通ふ女の子と三人です。收入廿五圓、貯金三圓、米代四圓、薪炭一圓五十錢家賃三圓五十錢、主人小遣三圓、日々の賄三圓、臨時費二圓、子供敎育費二圓。

貯金は毎月々給を戴いた時に、御初に取て丁ひます殘つたら溜めやうといふのは間違た話で、何でも最初に取るのが一番です、物も暮し様で高が電車の車掌すら暮して行きますもの、私共は夫から見れば結構、家賃は御安いんです、三疊に六疊に四疊半の三間で、庭は廣し、緣からは稻田を見晴し、田植時には五月雨を僅に笠で凌いで、田舍少女が一列々々と植ゑ行く、私に少し畫心か歌心でもあつたらばと思ひます。

薪炭も豫算程には入りません。炭俵や炭の上下になる雜物は必ずこなして生なのは乾して焚付に使ひますから、木葉やそだ等貰ふた事御座いません、炭は炭屋に切らせますと粉許り出しますので、私が切ります、附木でも一枚をあのまゝ使つては損ですから、私は七つにも八つにも割て使ひます、吝な樣でも使ふ味は同じです、賄は朝は味噌汁に佃煮、香の物、おひるは私一人ですから香の物ですまし、晩は良人も疲れて歸つて來るのですから何はなくても煮肴・汁物位はこしらへます、汁の靑味は庭の空地三坪許りの處へ作つたものを直に用ゐますから、新しく丹誠してこれだけに成たかと思ふと嬉しくて今もまだねぎと小かぶが御座います、東京では却々出來ません藝です、六圓の賄の中には、酒、醬油も入つて居ります、御客樣が入らつし

やつても時分時には必ず手料理で御飯さし上ます、臨時は毎月出たがるもので、費し過ぎた時は來月分を繰越ます、子供も今は小學校ですから僅かしきや掛りません、殘金は本人の名にして銀行に積み他日女學校へ入學致す時の足しに致ます、私共で子供一人生れますと何處でも地所を澤山は買へませんが少々求めまして生れた子の名にして人に貸し、生長して嫁ぐ時の仕度費に使ひますれば、親もさして骨も折ず、地價は年々上るものですからこれがよいと考へまして、日曜等には博物館へ連て參り、歴史上の實物を見せ、又は遠足に出て實物寫生をさせます、畫を能して置きますと、無地の半えりをかける時にも畫心あれば一寸思ひついて繪とりをし、上手に出來るものですから十分に勉強させます、私共では月に五度世忘會といふのが御座いまして、都合を見て開く事になつて居ります、この會は私共と同じ俸給の人許り、何れも心の打とけた親友許りで御座います、會を開く家に當つた家では、五目ずしなり、お萩なりこしらへて待て居ります、かうして皆樣と樂しく學生時代の懷舊談や、さては家政の失敗談等致しながら、打とけてお話して居りますと、このうるさい世間を忘れた樣で御座います、いつも文學の話が重で終に出來ない乍ら、俳句を讀みます、子供も夫を眞似て出來ない乍ら、十七文字を並べます、近所の○○樣は私共とは提灯と釣鐘程身分が違ひますが不斷あんなに貧乏して居て、文學だの俳句だのとは生意氣だと仰つてるさうですけど、御自分處のお孃樣四歳で居らつしやり乍ら棚の達磨さんを平氣で歌つてる、金殿玉樓に住つて何不足なくても、主人は妾宅へ入浸つたり、亂れた家庭にいふにいはれぬ苦勞をするより、世間普通に暮して行く方がいくら樂しいか知れません、世間には廿五圓位でやり切れないと仰る奥樣が多い樣ですが、それは御自分のやり樣が惡いからです、物質上の欲望が起りましたら、私は今一文も懷にないのだと思ひますと、自然と欲しいといふ考へがなくなります。

鶯と眼白の飼ひ方

家庭の娯樂として小鳥の飼養も一寸おもしろきものなり。就中鶯、目白の如きは特によろし。今その飼方の一斑を記さんに、鶯は八十八夜過ぎにまだ巢立せざる雛を巢より取り來り、八分位の擂餌を差餌とて細き竹篦の先に少しづゝ附けて其の口に當てがひて養育す。斯くて漸く育ちて自ら餌を喰ふやうになれば、少しく餌を弱くして六七分位のものを與へ、徐々親鳥に附けて法々華經を練習せしむ。その内に塒時代を越して形も出來なば、五分位の餌を與ふやうにすべし。かくして冬至の日よりは夜餌とて其の籠を小桶に入るゝか或は紙もて貼りたる同樣の箱の内に入れ、夜中燈火の前に置きて法々華經の練習をなさしむ。餌は此時より擂餌の外に殺蟲を一日二三疋づゝ與ふべし。又其の間隔日位に日當よき所にて堀井戸の汲み立て水、若しくば微温るき水にて全身に霧を吹きて水浴せしむ。斯くすれば新春早々法法華經の初音を擧ぐるに至るべし。その聲や節廻しは概ね親鳥に似るものなれど、又その內に巧拙ありて、假名のハフホケキヤウを謠ふもあれば、漢字の法々華經を謠ふもあり、節長きもあれば短きも出來て、鳥の價値も定まるなり眼白は鶯の如く差餌より育つるもあれど、多くは拔ツ兒と稱し巢立し間もなきものを捕へ來りて育つるなり。餌は三分四分が普通にて、冬至頃より徐々に殺蟲などを與へ、一日一回缺かさず水に浴せしむれば、一月中旬頃より高音を張り上げて鳴くべし。鶯も眼白も斯くして育てたるものゝみが價値ありて、野にて成長したるものは荒鳥とて役立たず。大抵小兒の玩具となりて終るなり。



昔の遊戯

貝合せの事

△嫁入道具の一種

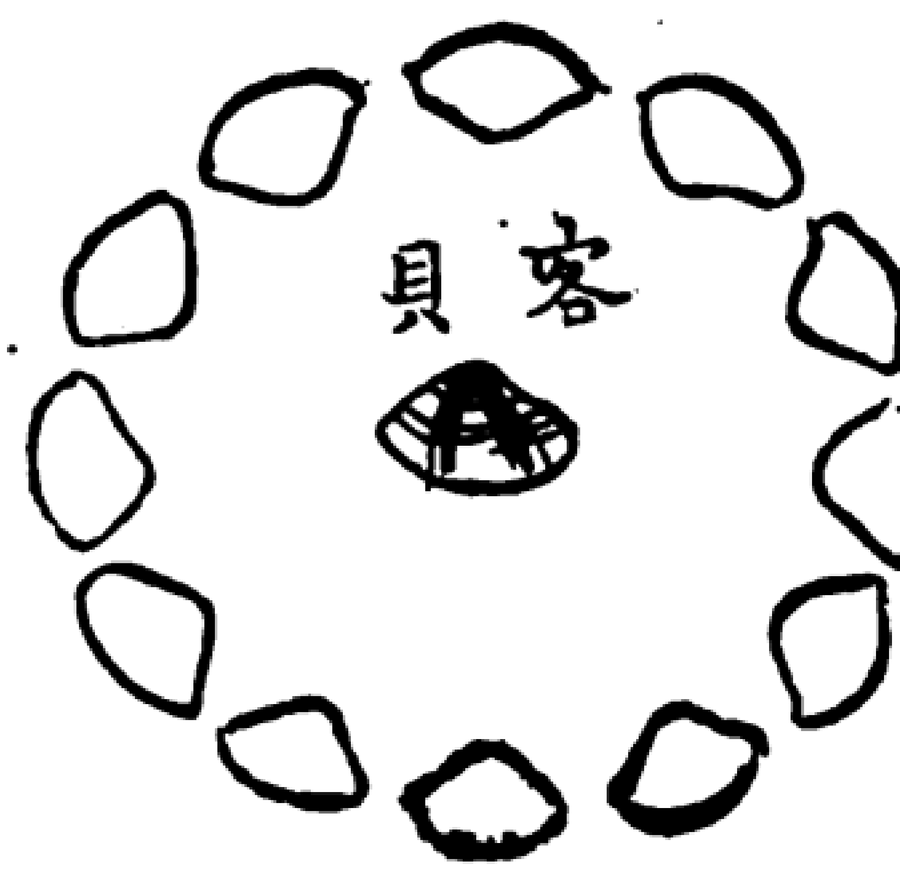
大蛤のよく揃ひたる物を、陰暦一年の日數に象りて三百六十を撰び、中に極彩色の土佐派の源氏繪と花鳥をゑがき、金箔を置き、頗る美麗を盡せる物を左右に分て雌を雄とし客貝とし(出し貝とも云ふ)をとし主貝(地貝とも云ふ)とす。之を納むる器を貝桶と稱して、同じ寸法のもの一對ありて、主客の貝を分ち納む。上等は梨子地蒔繪にて眞紅の太紐厚總附きたるを掛けて美麗を極む。普通品と雖も黒塗紋ちらし等にて眞紅ならざれば必ず萠黄の總附太紐なり。内部は金砂子の鳥子紙を帖る惣體の構造貴族的の美術品なり。維新前には貴人は申す迄もなく、下ざまにても富豪の家には必ず有りて、雙六盤と共に嫁入道具となり居りし中にも貝桶を重んじて目錄書にも第一筆に書くこと〻せり。蛤なる物は同類千萬ありと雖も其の天然配合の雌雄に非ざればシックリと合ふ事なし。故に幼少より貝合せの遊びを爲さしめて、蛤の話を腦漿に染み込ませ、女兒一度男子に配合する上は如何なる場合にも他の男に合はずといふ女德貞操を守るべく貝桶を以て手道具の最なる物とはしたるなり。今にても華族の寳藏又は地方の舊家には秘藏せらる〻も有るべし。都會にては維新の際豪家は大概燒失し、零落して先祖累代の家什も幾度にか賣却し、古美術品は多くは西洋人の手に買ひ取られて海外遠く持去られ、日本には影も止めずなりしが多し。明治となりてはかかる品は再び新に製造する者なければ、前時代に成長したる人ならでは、さる物世に有りとだに知れる者なし。今より廿年ばかり前なりき。或る家の初節句に招かれて行きし時、飾り立てたる雛道具の中に此の物あるを見たり。家内の人々若き者も主人夫婦も其の何なるを知らずといひしより、そゞろに昔の偲ばしくなりて、貝合のはなし〻て聽かし〻事ありしが、其の後は

見し事なし。

△貝合せの仕やう

貝合せはあはすといはずして、掩ひ又はおほふと云ふが古實なりといふ説あれど、西行の歌に「伊勢の海二見のうらの蛤は　貝あはせとて拾ふなりけり」とあるを見れば、早くよりもあはせ、あはすともいひしなるべし。しかいひたりとて何も卑俗の言にも非ざれば妨げなかるべし。

始の並べ法　ぐるり十二、



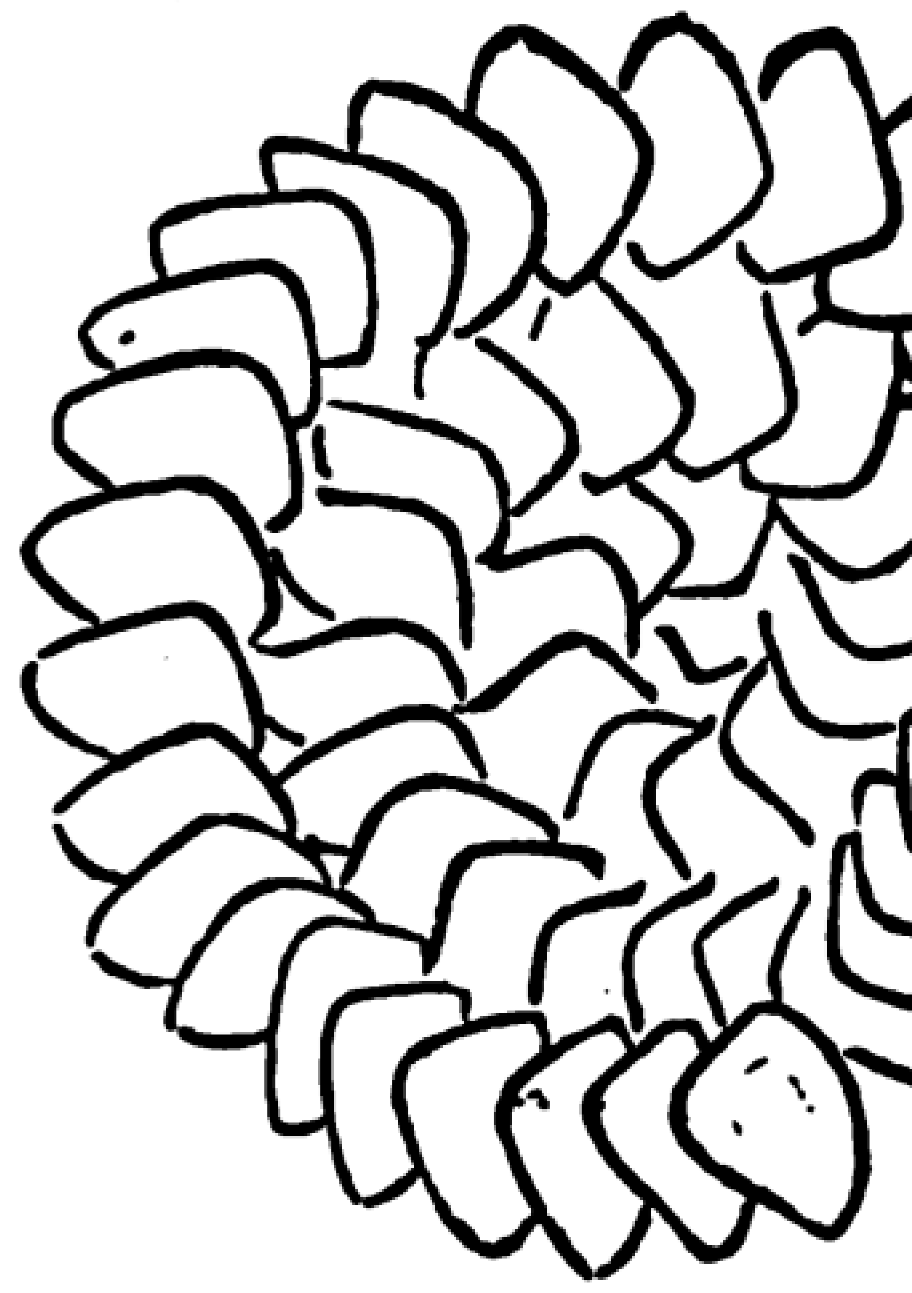
先づ始めに貝の損せぬ爲めに毛氈を敷きて眞中を凡そ差渡し三尺ばかり丸くあけて、一連の人々ぐるりと輪座し、其の中の一人幹事と成りて二ッの貝桶を座の背後に置き、先づ客貝一個を取り出して中央におく。其の時、其の座中の長上の人へ貝の頭の向ふ樣にするを禮式とす。次に主貝十二（閏年なれば十三）を取り出して輪に並ぶる事圖の如し。二段めよりは數に拘はらず只だ重ならぬ程に詰めて並ぶ其の輪と輪の間は凡そ一寸ばかりあけ置く。こは取る時他の輪にふれてくづさぬ爲めなり。輪の數は貝の大小に依つて差あれど、大概三四重も並べば地貝盡くべし。其時幹事は長上の人に向ひて一禮す。其人は次座の人にお先へと一禮して即ちとる。

右にて合せとる手つき

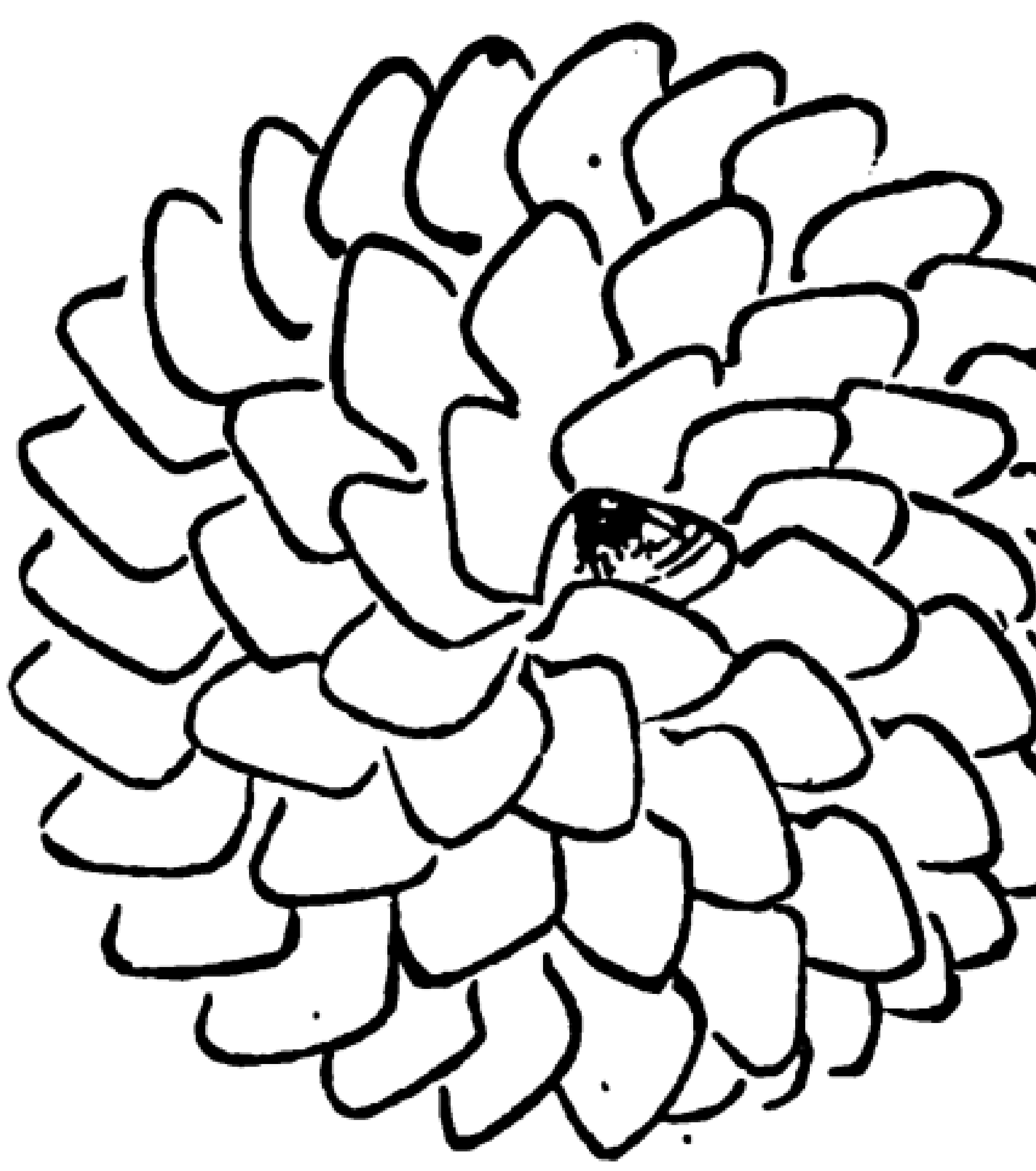


取り樣は、中央なる貝の模樣及び形の大小等をぐるりの地貝に見くらべて是れと思ふを取り上げ、中央の貝頭の處へ突合せ見て、いよいよ違はずと見極めたらば取るなり。似たれど少し違ふと思はゞ、戻して外を求むるも苦しからねど、こは一度に限り二度は許さず。之を取るには右片手にて圖の如く二ッ一同に採り、もし旨く合ひ兼ねたらば左手を袖口の内へ入れ、貝を袖上に受けて右手のみにて合すを本式とす。少しく修練すれば片手ばかりにても取り上ぐる際によく合ふなり。かくて斜に喰違はせ取

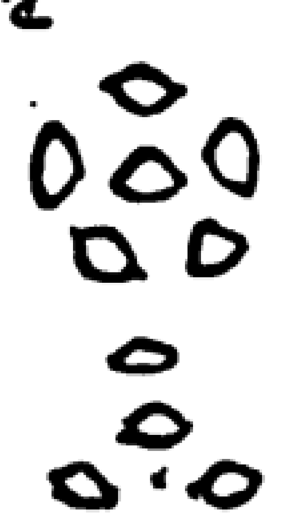
主貝右旋



客貝左旋

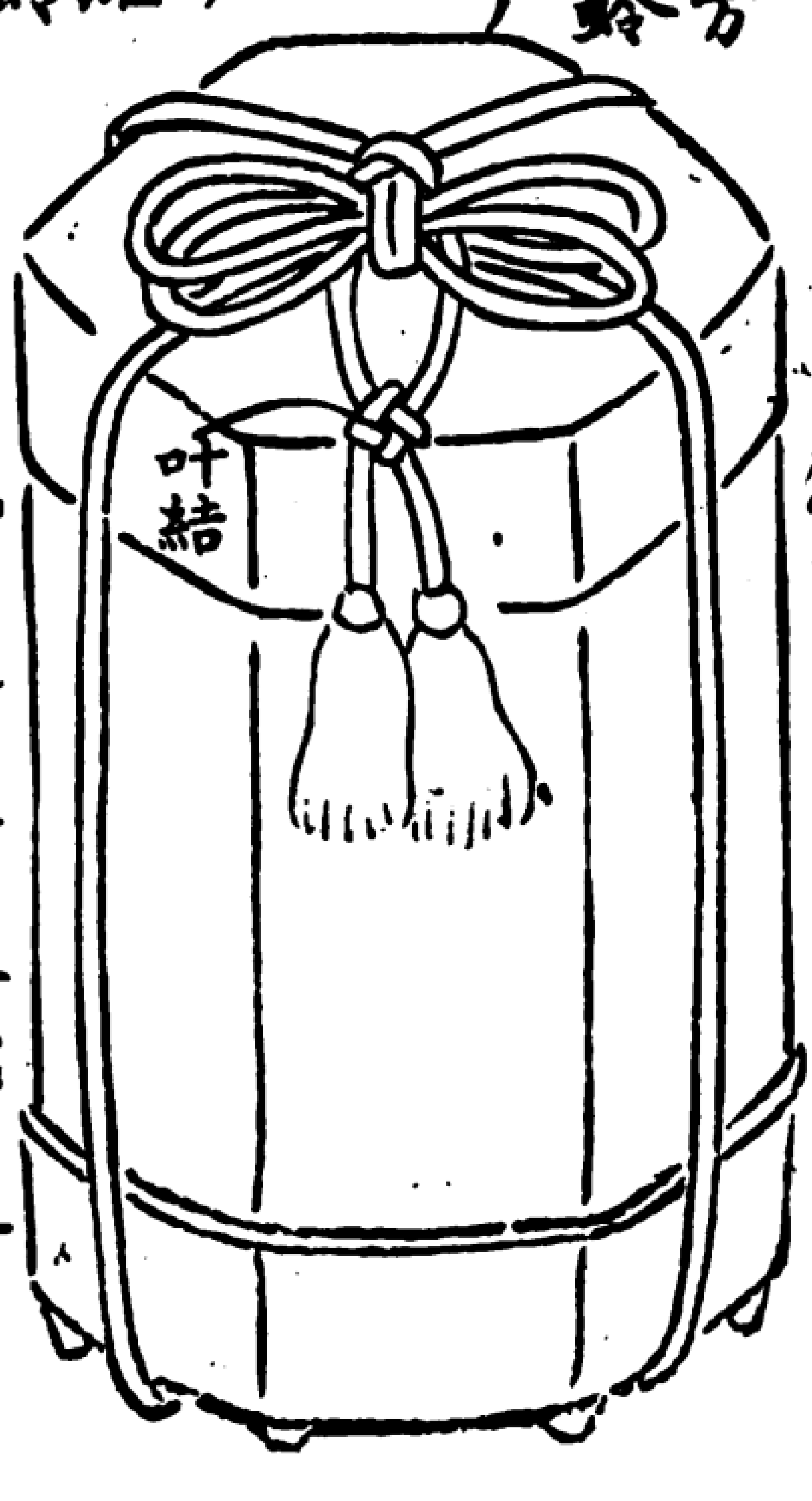


り落す等の誤ちなき様注意す。考違して合はざる時は、二ッ共元の處へ戻し、隣座の人に讓りて、仕直しは許さず。合ひたらば我前に置くなり。其時幹事は又一ッ客貝を出して中に置く。次の人又隣へ一禮してとる。最終の人は禮する人なければ其儘にてよろし。取る度毎に取りたる跡のあかぬ様に誰れにても手近に居る人最終の貝を取りて穴を補ふ。斯して漸々に補へば、輪は追々ちひさく成り、後には輪にならぬ様に減ゆく故、かやうの振合に格合よく其の度毎に形を



なほして取るなり。かくて一ッ殘らず取卒りて各々其の數を計へ、一にても多きを勝とす。是れ貝合の正式にして、幾度も續けてする時には或は地貝を俯向に撒きちらしと爲る事もあれ

貝桶



ど、始め一度は必ず此の本式に行ふを規則とす。

△禁制の事ども

貝合せは、撒にてする時も、之を採るは順番にて、歌かるたの如く取勝にする事なければ、他の合せ中にたとひ其の貝を見附けたりとも指さし眼容に知らせ又隣人と私語などする事を忌む。又始めのうち貝多くある時、遠方なるを取らむと手を延して、袖袂を觸れて並びたる貝を崩す等の事は、甚だ失禮なれば、手の及ばぬものは指さし又は扇などにて貝にさはらぬ程にさし示して其の前の人に取て貰ふべし。



此雌雄の結は貝桶に限らず行器(ホカイ)鬘桶(カツラオケ)其他何にても一對ある物の緒に用ゆ、

幹事は客貝を出す際、此れか彼れかと撰ぶべからず其の爲に始めより桶を背後に置き顧ずして後手に探り當つるに任すなり。又撒の時は中央に置かず其の取る番の人に渡す。其人之を左の掌上に受け、俯に乘せつゝ場中を見渡して取る。此貝はもやう類多くて合せにくしなど云ひて取り替ふるを許さず。

貝の裏面美麗なる繪に指を觸るゝ勿れ。金箔胡粉等は指を觸れて剝脱易ければなり。

大蛤は部の厚き物なれど、其の質脆くして缺けたり破れたり損じ易き物なれば、取扱ひを鄭重にし決して手荒くすべからず。之を桶に納むるには先づ底に綿を敷き其の上へ上圖の如く雄貝は左旋、雌貝は右旋に丸く少し宛重ね掛て、一面詰まりたらば、和らかなる晒木綿の丸巾裂を敷き隔てゝ又並べ、又隔を入れては並ぶべし。斯してあれば持運びに少々搖れても損ずる事なし。只ガラ〱と入れては必ず損じ、一つ損ずれば其の相手も共に用をなさぬ廢物となる譯なり。



剛健なる前田侯爵の家風

▲百數十名の家庭の使用人

前田侯爵家は、御家族といふのは、侯爵御夫婦に、御後室朗子の方、それに令息利建君の四人で、先づ少ない方でありますが、屋敷に事へてゐる役人女中等は非常に多くて、大名華族中でも餘程仕掛の大きい方であります。表向の役人は家令事務取扱の早川千吉郎氏の下に、家扶が二人あつて、一名は會計主任、一名は庶務主任、其の下に又家從が二十幾名、器具寶物等を扱ふ雜具掛といふのが五六名、其他家丁や給仕が十數名居り、又奥向には、老女、役女中を初めとして、公爵、夫人、若君のお側附の女中が幾名かづゝ居り、又呉服の間、御膳所等にも夫れ〳〵專屬の女中が居り、其他表向と奥向との間に立ち働いて居る使番も居れば料理番、飯炊きも居る、乳母も居れば、看護婦も居るといふ風で、此にも三四十名は居るさうで、總てを合せたら百幾十名といふ多人數を使つてあるのです。

▲善美を盡せる邸宅

其の邸宅なども實に立派なもので、西洋館と日本館との兩方ありますが、洋館の方はレネーサンス式とかいふので、建坪が二百幾十坪、地下室ともに三層になつて居て、階下は玄關、應接室、大客室、小客室、廣間、食堂、浴室、化粧室、便所等に分れ、階上には婦人室、婦人客室、書齋、圖書室等の設けがあり、又地下室は球戲場、厨房等に當てられて實に完備して居ます。日本館は總建坪七百餘坪あつて、玄關を入れば先づ左右に長く應接室が九室程あります。それより中庭

京都丸山の新緑



を隔てゝ客間、侯爵及び夫人後室等の奧向に屬する座敷が十六室ばかりあります。其他事務室、女中部屋、臺所に屬する小間等が幾十室かありますが、更に階上には四十九疊敷の大廣間、二十一疊敷の次の間、及び小間が二三室あります。これに附屬する庭園も實に善美を盡したもので、華族中でも之れに越すやうな邸宅は先づ無からうと申します。

▲生活費と使用人の給料

從つて其の生活費などは、なか〳〵小額ではありません。其の經費は年々十四五萬になるさうで、之れは世襲財產の利子で支辨する事になつて居ります。之を月に割り當てると一萬二三千圓、これで役員の給料から、家族の小遣料、交際費、其他家事向一切の費用を辨ずる事になつて居るのですが、それでも月々不足を告げるさうで、屢々豫備財產で補つて居られると聞いて居ります。併し侯爵や夫人等のお上方のお手許金は極く少ないもので、一ヶ月御一人に付百五十圓位のも

のださうであります。尤も被服費や交際費等は此の外です。次に使用人の給料はといふと、家扶は百五十圓内外、家従は最高七十圓、最低が二十圓位、又老女一ヶ月五十圓以上、お役女中、お側附の女中が十圓内外から十四五圓迄、下働きが二三圓位ださうですが、其の薄給の女中でも屡々お下り物が頂けるので、普通の上流に比ぶれば、手當は薄い方ではないと申します。そして家扶以下の役人は、屋敷の中に五六間位もある長屋を貰つて住ゐ、老女以下の女中達も、八疊二間位のお室を戴いて住つて居ります。特に老女の室などはそれに女中室迄も附いて宛然一家庭のやうな趣があります。

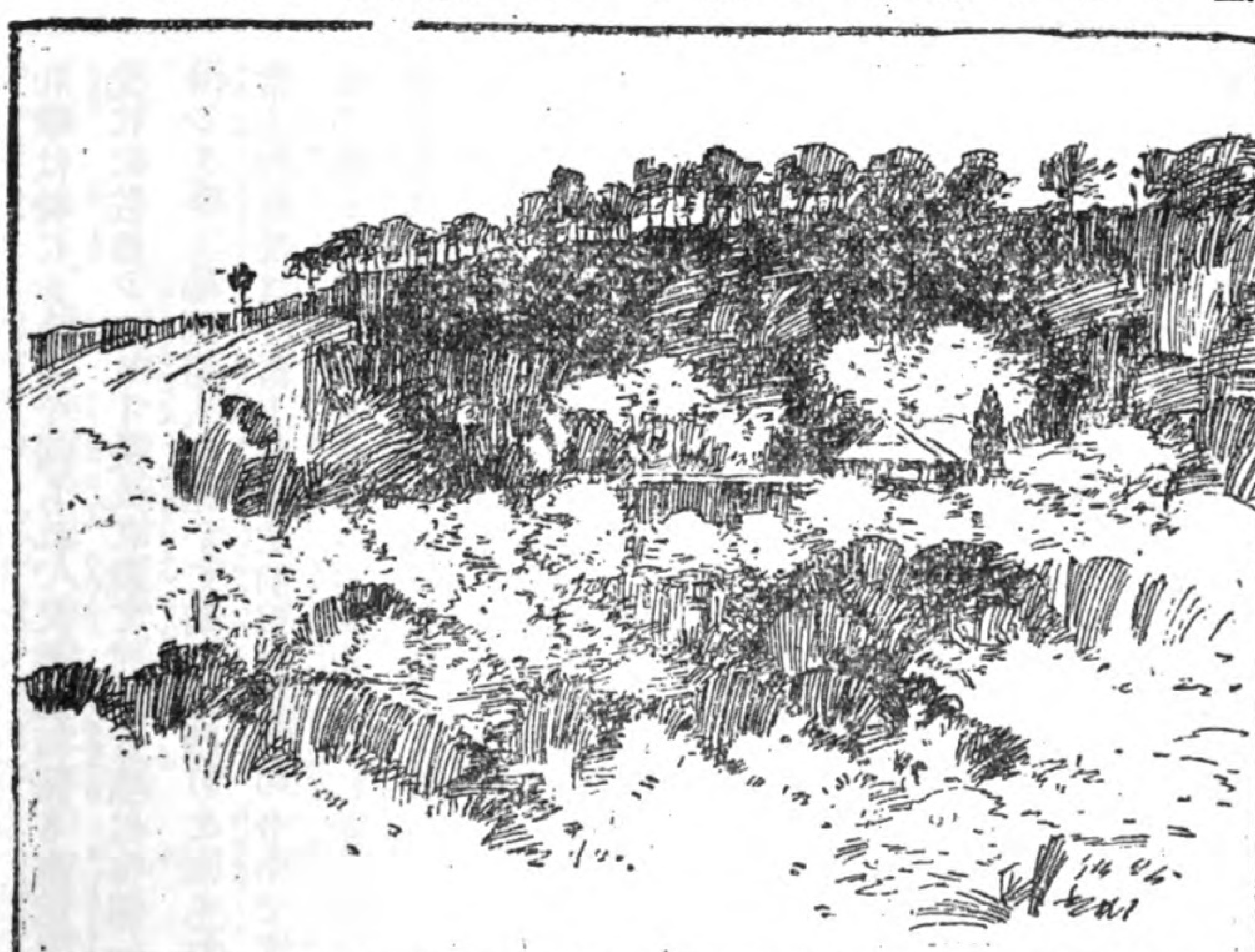
▲「貧しき貴公子」の綽名

夫人洪子の方は、華族女學校在學の頃は、身體が兎角弱かつた爲に、卒業前に學校を退かれたが、それより家庭教師（此の中には細川潤二郎男、故中島歌子女史も居られました）を聘して專心修養に力められたので、婦人の學ぶべき事は總て通じて居られる中にも、和歌は特にお上手で居られ、又佛蘭西語も堪能な方で先には佐藤ソフヒー夫人に就て、又近頃は毎週一回パロンといふ佛國婦人を招いて研究を續けて居られます當主利爲侯は、舊上州藩主前田利定子の令弟ですが、侯の伯父君に當らせらるゝ有栖川宮威仁親王殿下や、故近衛篤麿公などが、利爲には決して奢りを見せるなよと近侍の者に御内意があつた程で、自ら氣風は剛健で居られます。三十三年に利嗣侯が薨去について養嗣子と定まつて本邸に起居する事になられてからも、邸内の學問所のみに起居して只管學業を勵み、少しも邊幅を顧みられないので、これが百萬石の婿殿かと怪しまるゝばかりであつたさうで、學友間でも、「貧しき貴公子」と綽名して居たとか申します。

▲剛健なる公爵と夫人

其後陸軍士官學校に入學されて、大久保の別邸に住はれる事になりましたが、時々本邸へ歸らるゝにも、

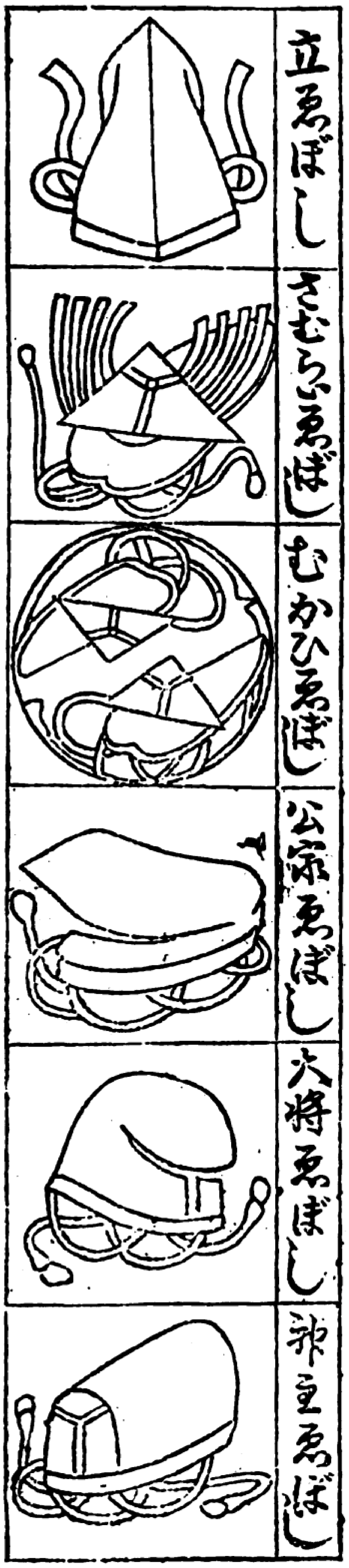
早朝割引電車に乘られるといふ風で、全く平民的の生活でした。次いで三十九年に華燭の典を擧げられてからも、矢張り平日は此の別邸に居られるので、此處には家從二名（内一名は劍客）と書生が五六名、それに金澤の儒者織田某氏が從いて居ります。一兩年前に其の一角に一棟の建築が出來ましたが、これは同族間に有名な女人禁制の敬義塾で、書齋と應接間と食堂との三間で成り立つて居て、陸軍大學に通學中の公爵は此處に書生生活を續けて居られるのです。萬事至らざるなき家庭に於て侯爵の此の剛健な氣風は確に同族間の異彩であらうと思ひます。夫人は御親戚の近衛公爵家、二條公爵家、鍋島侯爵家等を時々訪問なさる外餘り外出なさらぬ方で、多くは家庭に在つて利建君の御養育や、毎週土曜日と日曜日に御歸邸ある侯爵を迎へらるる事、或は物靜かな夕などに時々ピアノを彈くのを樂しみとして居られるといふことですが、公爵の御氣風を考へ合せてます〳〵床しく思ひます。



吉野如意輪堂の楓

▲規律正しき臺所

侯爵が軍人であるだけに、臺所内の事なども萬事規律が立つて居て、且つ一體に質素であります。臺所は日本室の玄關に沿ふて建坪十五坪ばかりの建築で、それに六尺四方位の流し石が附いて、板敷は木の香の高い總檜を用ゐ、此處に銅鐵製の大きな西洋竈が据ゑられて、御家族の食事を、洋食はコックが一人、日本食は女中が四名で調理する事になつて居ります。お食事は大抵晝餐は西洋料理、晩餐は日本料理で、其の材料は附近の魚屋から入りますが、時には日本料理を常盤屋、八百善・紅葉館等から、西洋料理を精養軒、華族會館等から取寄せられる事があります。お菓子は近頃は西洋菓子も入り初めたけれども、矢張り蒸菓子が多いさうで、藤村が主に其の御用を勤めて居ります。尤も使用人の食事の調理は奥向とはすつかり別で、家令以下は多くは三食共辨當で間に合せ、女中達は五人六人づゝ一團になつて下婢を雇ひ入れ、各自の室で三食を調理する事になつて居ります、即ち各自が自分の計算でつくりますから、各自は好きな料理が拵へられると共に、自然に主婦的經濟思想を得、其の上臺所の混雜する事もなく、極めて靜かで清潔であります。



烏帽子の意匠



平民的の徳川公爵家

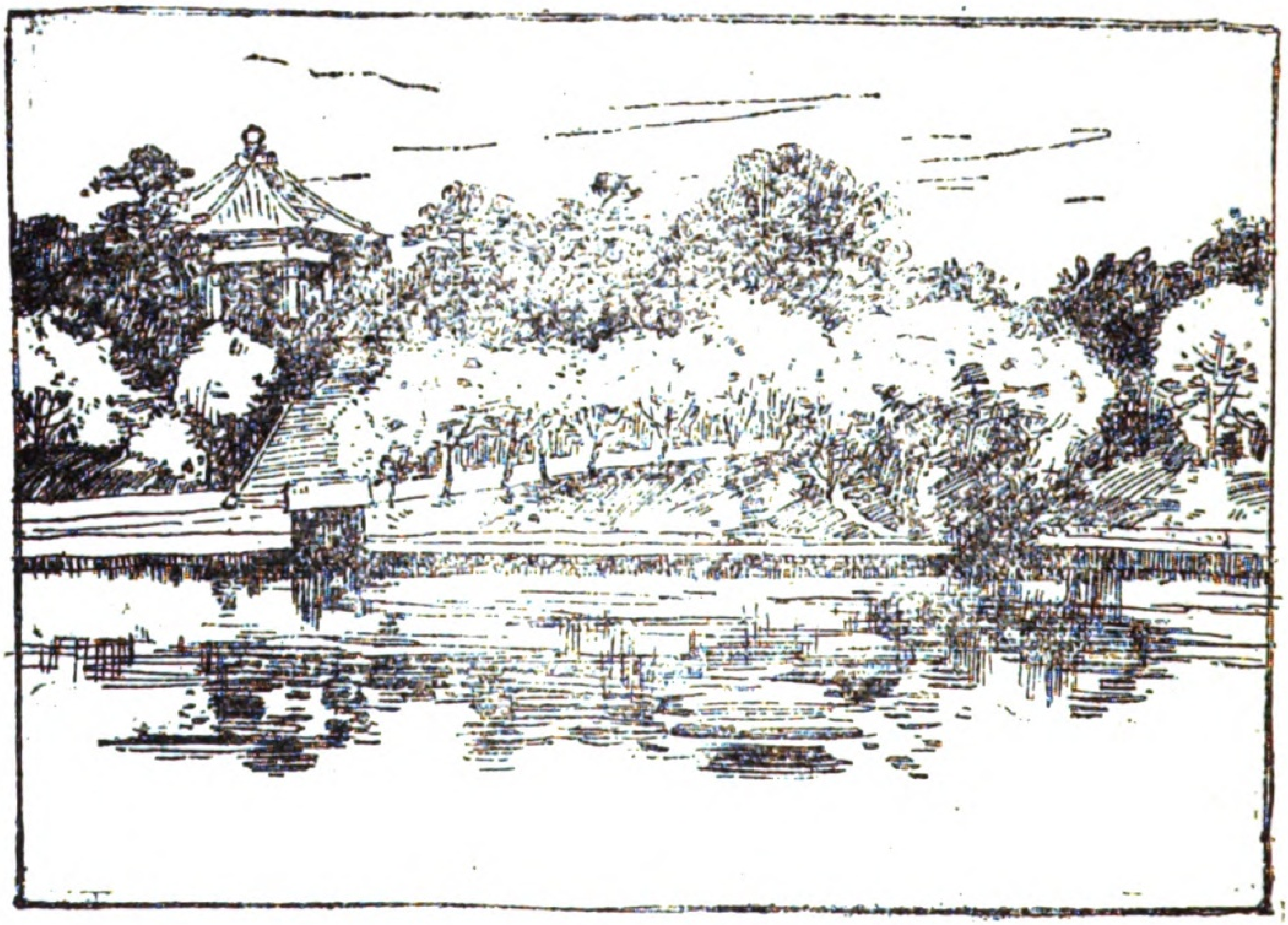
△極めて質素な生活

大名華族の中で、家風の床しい事を申したら、徳川公爵家などは先づ第一でありませう。當主家達公は貴族院議長として國家の重任を帶ばれ、昔は武家の頭領として天下に臨まれた家柄ですから、其の生活の如きも、定めし至つたものであらうとは誰れしも思ひませうが、それが案外で、非常に質素であるから驚きます千駄ヶ谷町の御本邸などは、まことに宏壯なものですけれども、其の經濟などは普通伯爵家位の小規模のもので、毛利家や島津家などの萬事大仕掛であるのに較べて意外に思はぬ者はありません。聞けば其の御生活費は、近年迄一ヶ年一萬二三千圓で濟んださうであります。公爵が貴族院議長になられてからは、其の方面の交際費等がある爲に、此頃は二萬圓近くは要るといふ事ですが、それにしてもお家柄としては決して多いとは申されません。使用人なども極めて少ない方で、表向の家令家扶を初めとし、奥向の女中、下働き等凡てを合せて四五十人を出ないといふ事であります。

△平民的の奥方

公爵夫人泰子の方は、近衞公爵家のお姫樣で、華族女學校出身者中でも殊に才媛で在られるのですが、公卿の司たるお里方の家風と、將軍家の式禮とを兼ねられて、さぞ重々しい方であらうと思はれますが、それが又意外で、極めて平民的の、且つ稀に見る溫雅なお方であります。御夫婦の間柄なども非常に簡易なもので、茶の間に御夫婦お差向ひになり、夫人が「貴君、お茶を召し上りませんか」など申されて手づから茶を煎じて公爵にすゝめらるゝなどは珍らしくないさうで

猿澤の池　（大和名所）



あります。何事も極めてお手輕く爲されるので、維新當時から奉公してゐる老女などが、『御臺樣とした事が、餘りにお輕々しいなされやう、御用があれば妾共をお使ひなされて下さるやう』と三つ指ついてお願ひすれば、夫人は微笑まれながら『皆のやうに昔風の堅苦しい事ばかり言つて居ては困ります。殿樣の御用は妾が手づからするのが勤めですから……』と言つて一向取上げられないさうであります。夫人は文學、書、琴、刺繡等に趣味を御持ちになり、書は殊にお上手だといふ事です娛樂としては歌留多が最もお好きで、お正月になると、女中達は勿論、公爵までもお勸めなされて夜更まで遊ばれますが、興に入ると主從混戰で、女中共が殿樣の手を引搔いたり、御夫婦がお取合ひの大騷ぎもあるので、隨分盛んださうであります。

△家庭に於ける公爵

家庭に於ける公爵は極めてお手の掛らぬ方で、立腹される事もあるけれども、自分の非を覺れば雇人にで

も誰れにでも頭を下げてお詫びをされるさうで、之に就て話があります。或時永年奉公して居るお松といふ女中が、『殿樣は今晩御酒を一升召上りました』といふと、公爵は『ナニ一升飮むものか……』とやゝ御立腹の體だつたが、『でも二合のお德利が五本ですから恰度一升になります』と申上げると、公爵は直ぐに桝を取寄せて自ら試して見て、『成程左樣であつた、之れは私が惡るかつた、謝る〳〵』と言はれたとか。又或時も公爵が强火の火鉢へ土瓶を掛けられたので、女中が破れる事を心配して、『それは奥方御持參の土瓶ですから……』と言つて灰をかけると、公爵は『ナニ大丈夫だ』と强情を張つて灰をかき起されたが、忽ちピチリとヒビが入つたので、『いや閉口〳〵、人の言ふ事は聞くもんぢや』と言つて頭を搔いて笑はれたとか申します。

△臺所は純粹の日本流

次に臺所向の事を一寸記して見ませう。奥向の臺所は邸の西南の方に裏門に向つてあつて、間口五間、奥



庭園の風致

行七間の建物です。其の構造は昔の儘に、御調理控へ板前控へ、洗ひ立、下流しなどあつて、たゞ鏡を敷いた様な板前の上に光を落す瓦斯の裝置丈けが今様です其の管理方も古風を保存して、一切男の手を借らずに女中頭が多くの女中を取り廻して純日本式の料理を献立して居ります。そして當家では殿様の一日の御米高は三升、奥方は一升五合と定まつて居ります。無論さうは食べられませんが、これは主人の威光を附ける爲めと、お末（水仕女）の食料に當てる爲めださうであります。其の炊方は普通と異つて、釜の中で米がプーツと吹き上ると直ぐ大笊へあけ、其の中の極く綺麗な米粒丈けを選つて蒸籠蒸しにするのださうです。又副食物は夫人から其日〳〵の注文をされる事もあれば、或は賄ひ係りに任せ切りの事もありますが、御夫婦ともあまり好き嫌ひをなさらぬ方で、臺所係は非常に樂なさうであります。材料は魚は昔から四谷の武藏屋から入り、米は肥後か越後と限られて直接に取寄せ、野菜は邸内のH香園に絶えず出來る新鮮な青物を用ゐられます。尤も客來の時は、西洋料理は華族會館から、日本料理は赤坂の河八から取寄せられるやうに聞いて居ります。

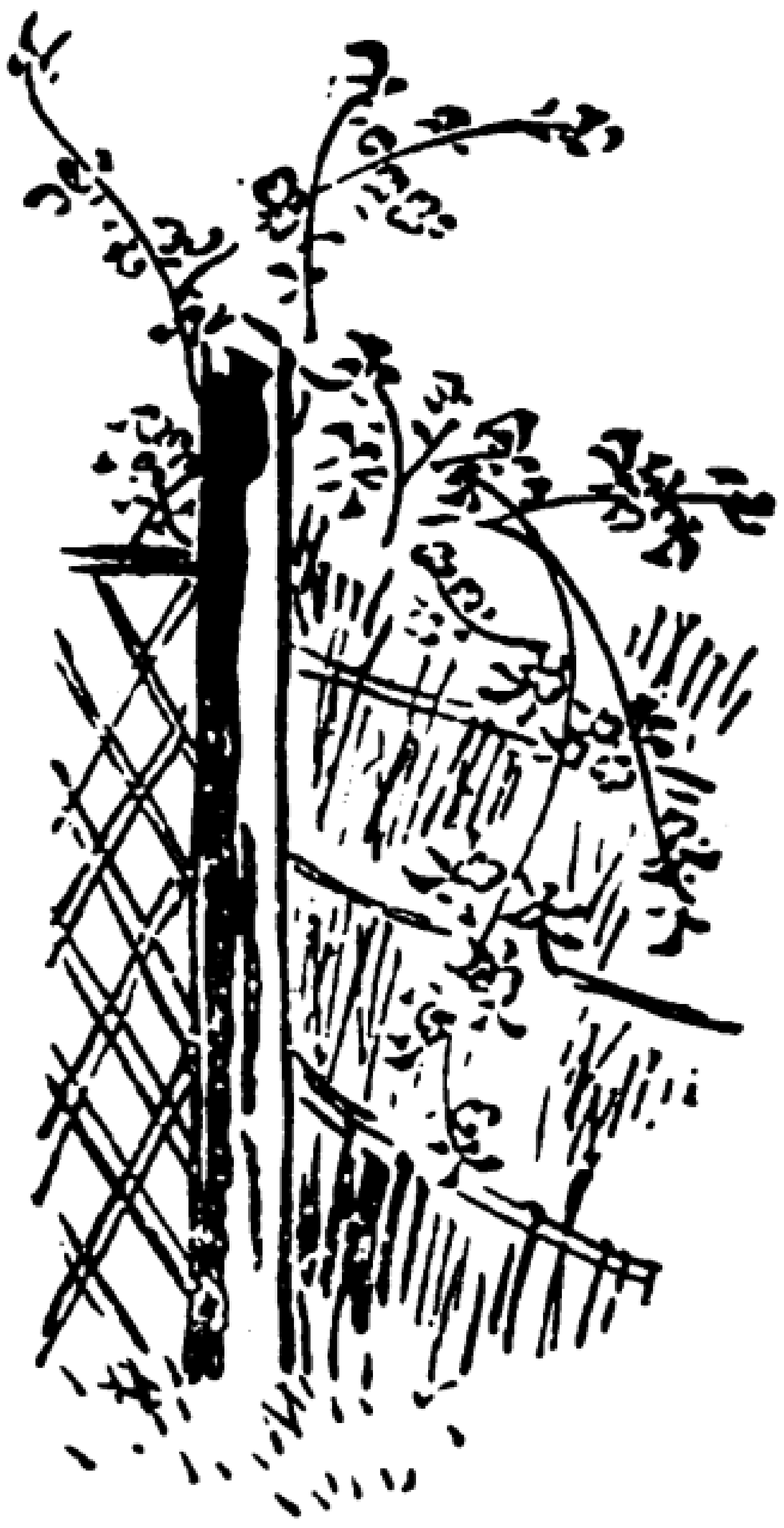
△奥向の女中の生活

奥向の臺所の外に別に女中達の共同臺所が設けてあります。其處に銅壺附の釜が幾つも並べて懸けてあつて、此處で部屋方が女中達の食事を煮炊するのです。奥女中は、老女が一人、お側女中が三四人、お末が矢張りそれ程、それにお側女中の下働きをする部屋方といふのが二三人、都合十八人餘り居るさうです。其の手當は老女が食料十圓、副食代三圓、給料三圓、お心附四五圓、都合二十圓位、お側女中が一切で十五六圓でそれで各自が自活して行く制度になつて居ります。そして部屋方といふのは、お側女中が自分達の勤務上人を使ふ必要があるから雇ひ入れるので其の食料や給金等は皆な自辨ですから、なか〳〵一人で一人の部屋方を使ふわけには行きません。從つて多くは二三人で一

人か二人位を使つて居るとか、此の部屋方はお側女中の生活計向一切を預つて居るのですから、其の經濟の巧拙に依つて女中達に非常の損益があるわけです。奥向の下り物は大抵お末の餘德であるから、これは割合に旨い物が食べられると申します。其の外は女中は各自の懷中次第で何んでも好きな物を食べるので、折々朋輩同士で鮨とか、五もくとか、天ぷらのやうな御馳走を拵へて、互に配り合ふ事も行はれて居るさうで、和氣の滿ちた賑やかな御家庭であります。

日本服と西洋服の比較

歐米の婦人服は勿論、朝鮮の婦人服でも、支那の婦人服でも、皆それ〴〵に特色があつて、實用上體裁上別に非難すべき點はないやうですが、日本の婦人服は隨分非難の餘地があるやうです。頭髮の毛革、羽毛の肩掛と、高い御金を出して上の方にばかり、いろ〳〵の物を卷きつけて、下の方を開放してあるのは何うしたものだと惡口を申す人があります。風が吹けば裾を吹き飛ばし、高い所を登れば脛が出る、こんな服を着て居た日には、成程心遣ひの絶間はありますまい。といつて着ない譯には往かないから不平を言ひながら着ては居りますが、西洋の婦人服にしても、朝鮮の婦人服にしてもこのやうなだらしの無い仕立方にはなつて居ませぬ。日本婦人服が他國の婦人服に比して、十分に美容裝飾を飾るに足るかと申しますと、これ亦た何れの服にも及びませぬ。殊に此頃は澁いのや、くすんだのが好いとか云つて、何でもかでも黑いものばかりを用ゐ、全然色彩の美などゝ云ふものを無視して居りますから、晴れの場所に出て、西洋婦人と肩を並べた日本婦人位みじめなものはありません。西洋服のきらびやかなことは申すまでもなく、支那服にも綺麗な縫ひがあります。朝鮮婦人とても鮮な色の服を着けた所はなか〳〵美しいのです。朝鮮の婦人は支那婦人の服を美しがつて、彼方からも此方からも引張合つて見ますが、日本婦人の裾模樣などは見返る者もありませぬ。鼠つぽいのや黑つぽい色の背中や袖に同じやうな紋があるばかりで、帶に金が懸つて居ると云つても、外國人の盛裝を凌ぐことは出來ませぬ。日本の婦人服は、價格に於ては一番高くて、それで一番見すぼらしいのです。そして一ヶ所糸違ひがあるとか、織違ひがあるとか、素人にはなか〳〵分らぬやうな微かな疵を數へ立てゝ疵物にするから、同じ丈けで同じ反物でも完全なものは非常に高いものになるわけで、何でもない所へ注意してゐる傾があります。



茶席ばなし

猿澤の池

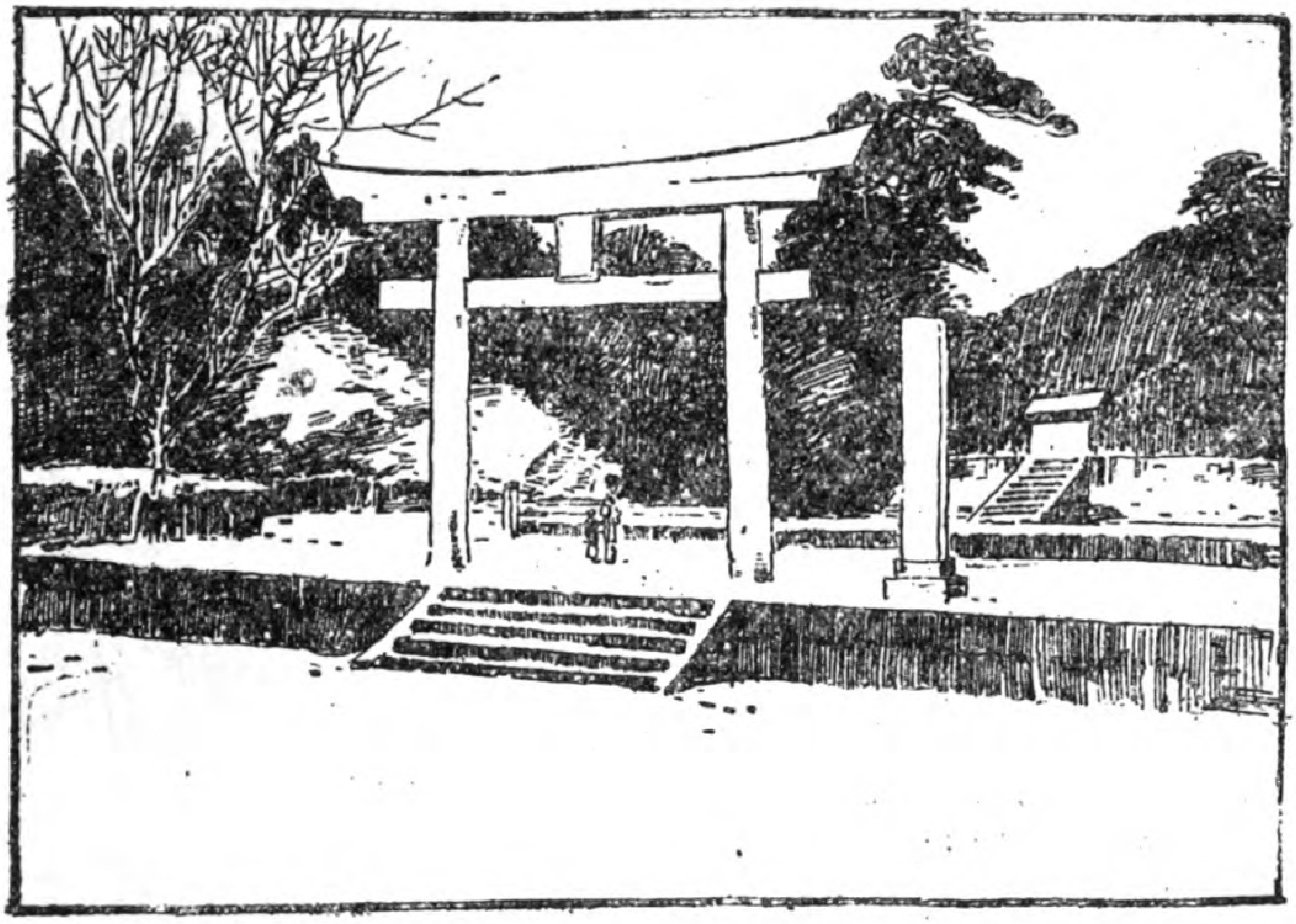
太閤と麥の粥

今はむかし豐臣秀吉公佛事を修め給はんとて、紀州高野山へ詣うで給ひし事あり、其日近侍の者に向ひて今日はチト好みのものあり、引割の粥を調進して來れと仰せられたり、殿下の一言に料理人ども數人打寄りて、早速その粥を調じて奉りければ、秀吉大に御機嫌よく、さて〳〵高野には臼のなきところなるに、早速に調製したる事神妙至極なりとて滿足この上なかりしさて佛事終りて歸路に就かせ給ひし節、途中にて何人が申上たりけん、先日高野にて召上られし引割粥は、臼にて製したるものにてはなく候、あれは早速の御用とありし故御料理人、御賄方、御膳掛の者共、大勢集りて俎板の上にてきざみて差し上げしものなりと言上したりければ、秀吉大に怒り給ひ、不屆至極の者共かな、我等は料理人共臼を持たせ來りしものぞと心得てその用意の程を賞美したるに、さて〳〵案外至極なり、我等今の地位ならば麥一粒づゝ削らせても自由なり、しかし物が勝手になるとても左樣の奢侈はせぬものなりとて、痛く御叱責ありしとなん。

風雅の骨髓

今は昔、茶道の宗師、千利休の子に道安といふ者あり、或る日雪の降りける時、茶會を催ふして父の利休を請じ入れたり、利休は道安が方へ行き、路次入りの時、偶々前栽の方を見れば、蓑を着、竹笠をかぶり、鍬をかたげ、畑に生ふる菜をほりて家に入るものあり

筑前香椎の宮



よく見れば、あるじの道安なり、扨て亭に入りて茶も濟み、料理出でたり、利休もいと機嫌よく箸をとり、吸物椀の蓋をあけて見れば、鱸と若菜なりければ、利休忽ち氣色打ち變りて、これは近頃心得ぬ事共なり、先刻我等路次入りの時佇みて見居たるに、園に出で雪中の菜を鍬にてものし、蓑笠引きかぶりたるさま、さすがに風雅の所作、親切言はん方なく、そゞろに面白く興ありて何とも言はれざりしに、今この鱸の吸物を見るに至りて、興忽ちに失せたり、何等の殺風景ぞ、總て茶は懇切を盡すを以て第一とす、わびたるを以て風流とす、汝我が子にてありながら、かゝる辨へもなきとは不埒至極なりと、散々に叱りければ、道安も大いに迷惑し、さま〴〵に詫言して漸く父の機嫌を直しけるが、是れによりて道安大に悟るところあり、以來茶道の心入、すべて物數寄よくなり、所作皆骨髓に入りて一廉の宗匠となりしとなん。

曾呂利の名言

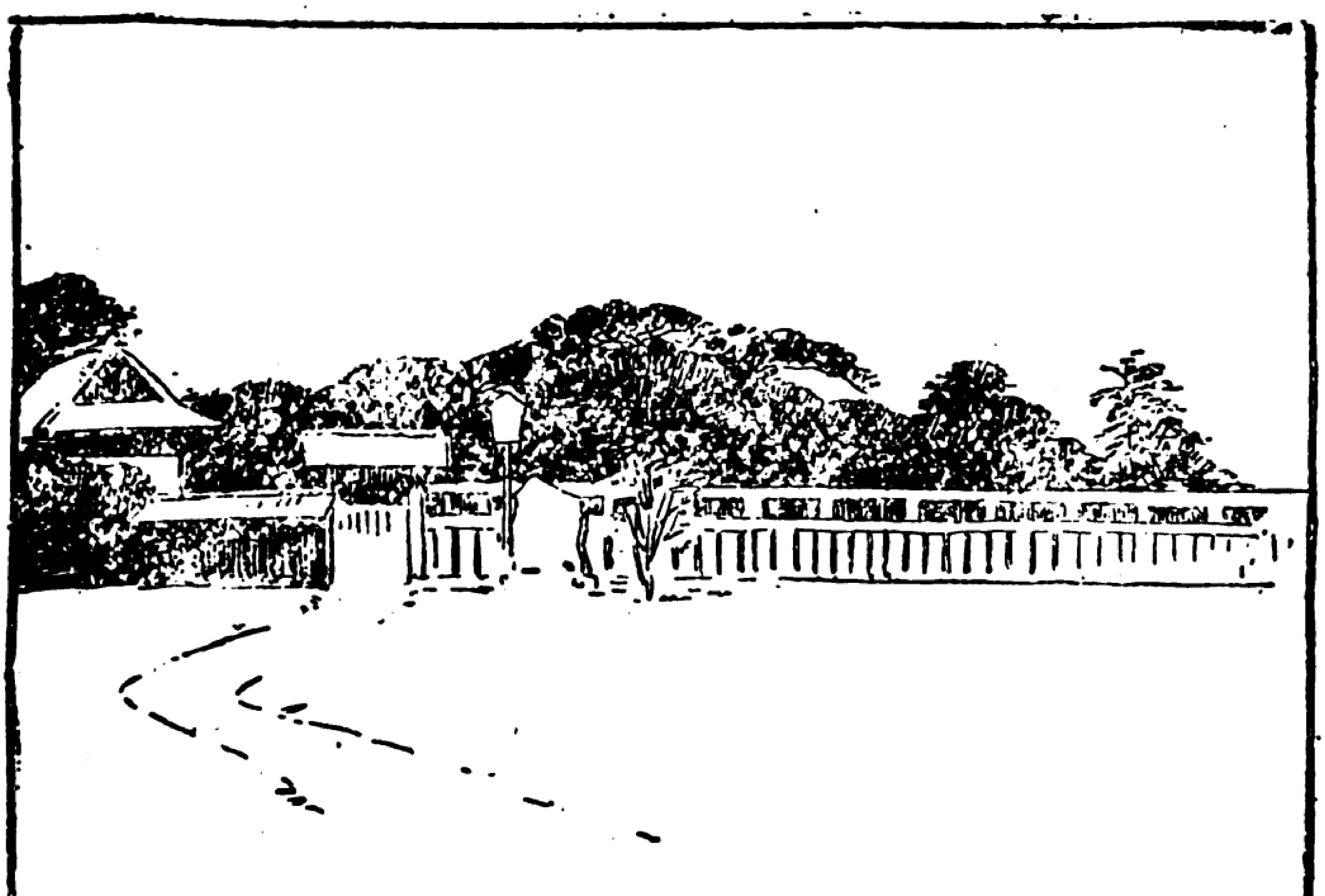
今はむかし、曾呂利新左衛門、頓才を以て太閤秀吉の寵遇を蒙りしが、或時太閤の近侍の輩、曾呂利に向ひ尋ねけるは、御邊事は身卑賤にありながら日夕殿下の御思召に叶ひ、出頭第一の眷遇、我等の羨ましく存するところなり、如何して斯くは御意に入らるゝぞや冀くはその秘術を明かし玉へ、我等は日常御側に勤めながら、やゝもすれば御怒りを蒙る事ありて二六時中胸安からず、何卒貴方の傳授にあづかりたしと言ひければ、曾呂利の曰く、貴君は毎日飯を食ひ玉ふか、飯の風味はどの樣なものに候やと問ふ。彼者曰く飯の味とて別に變りたるものでなし、唯うまきものなりと答ふ、曾呂利又曰く然らば菓子の味は如何なるものに候や、彼者曰く菓子は誠にうまくしてあまき物にて候と答ふ、曾呂利曰く果して然らば、明日より飯をやめて、そのうまき甘き所の菓子ばかり食ひて居給ふべしといふ、彼者聞いて、それは一向にならぬ事なりといふ、こゝに於て曾呂利は大に笑ひ、さればの事なり、貴邊は菓子を以て君に進め、我は飯を以て君にすゝむる故に、いつまでも飽かるゝといふ事なし、甘きものは時宜によりて善惡あり、飯はいつにてもよきものなり、併し何もうまき風味はなし、貴方は心に甘き所を以て君の用ゐ給はん所を期する故に大に了簡違へり我は飯のさまでの風味もなき物なれども、飽き給ふ事なきを心得たるを以て、常にこれを進めまゐらするなり。人間萬事この如しそも〳〵春の寒さと秋の暑さと老人の壯健なると、君の寵愛とは必らず久しからぬものなれば、日常その心を以て媚びず、諂はずして只眞直に奉公し給ふべし、この外に傳授も糸瓜も入らずと申しければ彼の侍大いに感じ得心して歸りけるを、曾呂利門口より呼び返し、かまへて飯の事忘れ給ふな、菓子をな喰はせて蟲を出だし給ひそと申しければ、彼の男腹をかゝへて歸りけるとぞ。

閣老の頓才

今はむかし、三代將軍家光公或る時御城の櫓へ登り玉ひ、御小姓衆に仰せられけるは、誰ぞこの櫓の上よ

り飛び下るものあらば褒美過分に遣はすべしと仰せ出されけるに、何樣數百尺の高所なれば、誰あつて飛ばんといふものなかりけり、將軍大に氣色を損じたまひ、汝等悉く物の役に立つ輩にあらず、左樣なる不心得の者いかで主君に奉公なるべきぞ、速やかに退れ、退つてこの旨阿部豐後守に申すべしとの上意なり、當時豐後守は閣老の主座にして稀代の智慧者なり、此の由聞いて、さて〳〵各方はいづれも揃ふて不調法の事かな、左樣な働らきのない事にて御側御役つとまるべくもあらず、若し重ねて御尋ねあらん時は、傘をさし候はゞ心安く飛び申すべしと答へ申されよとありけるさて其後又々櫓に上り給ひて、汝等この上より飛ぶものあらば何なりと望む物を與へんとの上意ありて御戲れ遊ばしけるを御側衆こゝぞと、傘などさし候はゞ飛び申すべくとありければ、將軍御機嫌殊うるはしくありて面目を施しけり、後日この近習豐後守へ禮ながら參りて、この由申しけるに、それは一段の事なり、しかし以來とても御身近に仕はれては、斯樣の事専ら心

播磨高砂の松



得あるべき事なり、上樣御戯に上意遊ばされ候事は何れにても戯れて御返答申上げられよと申含めけりとなん。

師の篤實門生を化す

今はむかし、伊藤仁齋、京都堀川に帷を下して諸生を教授す、天下その德風を慕ひて隨從する門人夥し其中に兩三人、人柄惡しきものありて、さま／＼の謀計をめぐらし、遊所、芝居などへ出て行くほどに度重りて最早謀計の術も盡きたり、今度は親の病氣にこしらへて、重體の樣につくりなし、扨て一夜暇を賜はりたしとぞ申したり、仁齋これを聞きて、母儀の病氣とあらば早速に行かれよ、樣子を伺ひ申さるべしと許しければ、其者僞り濟して大に歡び、いつもの遊所へ行き、沈醉して歸りけるに、折柄夜も更け渡りたるに仁齋は手燭を携へ、袴を着し、威儀を正して玄關へ出で迎へ、如何にや、歸宅の遲きにより　殊の外案じたり母親の容子はいかゞあるかと尋ねられて、其者甚だ赤面して內心大に恐れ、慚汗を流したりといふ。

總て仁齋翁が平日の行狀、其篤實なる事概ね斯くの如し。されば其門下自然に恥ぢて行狀を改めしとぞ。

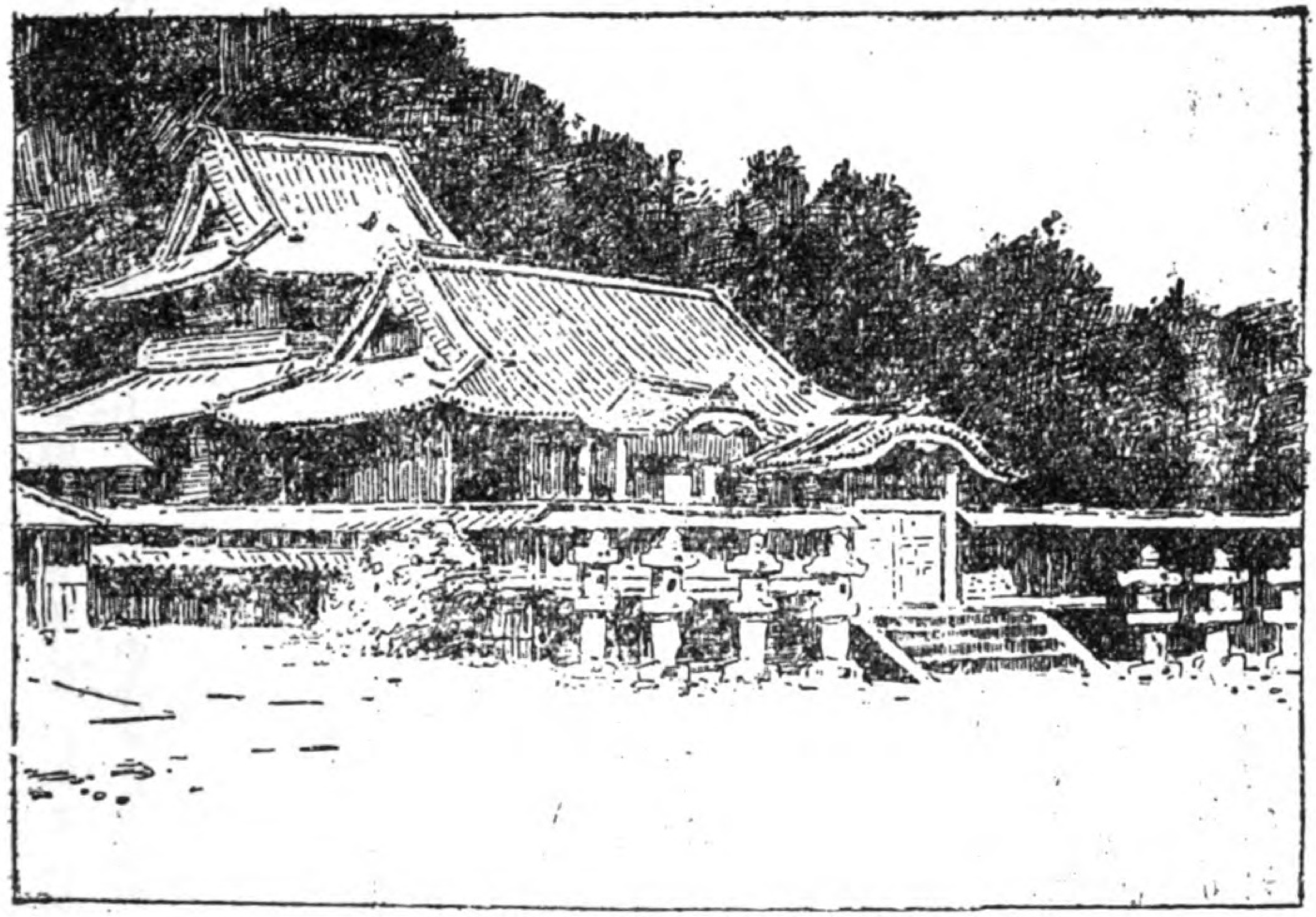
道の譽れ

今はむかし、北村季吟は國學に名高き人なり、或時花の本の宗匠となりて連歌の會を催ふしける、聖靈會の發句に

まざ／＼と在すが如し魂まつり

といふ句を吐出して百韻既に半にも至る頃、季吟が子の湖春其時いまだ十歲の童にて傍に在りしが、頻りに小用を催して坐を立ちけり、季吟の曰く汝は何れに行くやと、湖春小用に立つと答ふ、季吟曰、我倅連歌に身を入れて居ながらしたりと言はんには道に於て規模なるべし、其儘そこにて小便をいたし候へと申しけるとぞ、又儒林の名家林道春が幼少の折も是に似たる事あり、未だ千勝丸といひて家貧しく其上父病衰して居たりけるが、或方より鐘の銘を書き異れよと賴み來る

芝增上寺靈廟



事あり、父は醫者にてありしかば斯樣なる事を作るは家業に似たれど、此程の病氣にてむづかしく思ひ、等閑に打捨置きけるを度々催促申し來れるまゝ千勝丸は心に氣の毒に思ひ、父の服用する藥を煎じながら、火箸にて灰へ何やら書きて居る故、父は怪しみ、何を書きしかと申しければ鐘の銘のあまり遲くなり氣の毒に存じ候故に認めて見候と申ければ、父さらばこの裏に書きて見せよとて反古を出して書かせて見れば、其文章華美にして證意詳明なりければ、父も大に驚ろき讃歎しけるとなん。

下僕の律義

今はむかし、寛永の頃將軍上洛の節、諸大名御供ありし中に薩摩の太守も供に加はりてありしが、太守の旅館に充てられし所飲水殊の外惡しくして用に立難きにより、彼の家中の下隷が、毎日々々遙る〴〵の所へ水を汲みに行きける、或日例の下隷等桶に水汲み入れ、太守の旅館へ歸りがけの途中、一人の若者走り來

り、息を切らして申しけるは、我等只今町にて喧嘩を致し、人を殺して立退くものなり、追手のかゝる身ながら、餘り喉の乾くほどに希くば其水一と口賜はらんと言ひながら卒爾に蓋をあけて、両手をさし入れ水を掬ひて呑みけり、僕隷ども大に驚き、これはと捕押へんとする間もなく、過ぎ行きたり、さて僕隷ども其跡にて十荷ばかりの水をば其儘こぼして又遙る〳〵と一里餘りの所へ汲みに戻る、道行く人、怪しみて尋ぬれば、答へて曰く、人の飲みさしを主人に飲まさん事恐れ多しといひて遠方の所を汲みに戻りしなり其律義いはん方なしとて人々感じ合へりとなん。

古人倹約の事

今はむかし、家光將軍の御伽の衆とて毎度登城して物語申上げ、御夜話など申上げらし諸侯十人あり、皆歴々の諸大名にして、毛利、丹羽、蜂須賀等なり此人人登城の時、いづれも屋敷より辨當参りけるに蔀の間に寄合ひて是を開き喰ひ玉ふ、珍らしき菜などある時は互に取りかはして賞味し玉ひけるとなり毛利公の辨當は菜に干鮭のありければ皆々是れは結構なる菜なり珍らしとて殊の外賞美せられしほどなり、阿部侯は握り飯を紙に包みて袂に入れ、持参ありて中食の時是れを召上られ、其包みたる紙につきたる飯粒を拾ひて食ひ、紙の皺をのばして鼻をかみたまひし事ありしを見たる者もあり、又初代將軍家康公は平日穿き古したる足袋を柳行李の中に納ひ置きて、洗濯させ、地の切れるまで穿きたまひしとなん、寛永の頃までは戰國剛健の風一般に殘りしかば、衣食共に質素を旨として飯は一たいに麥飯、菜は鹽魚、衣は堅固なる木綿物なりしとなん。

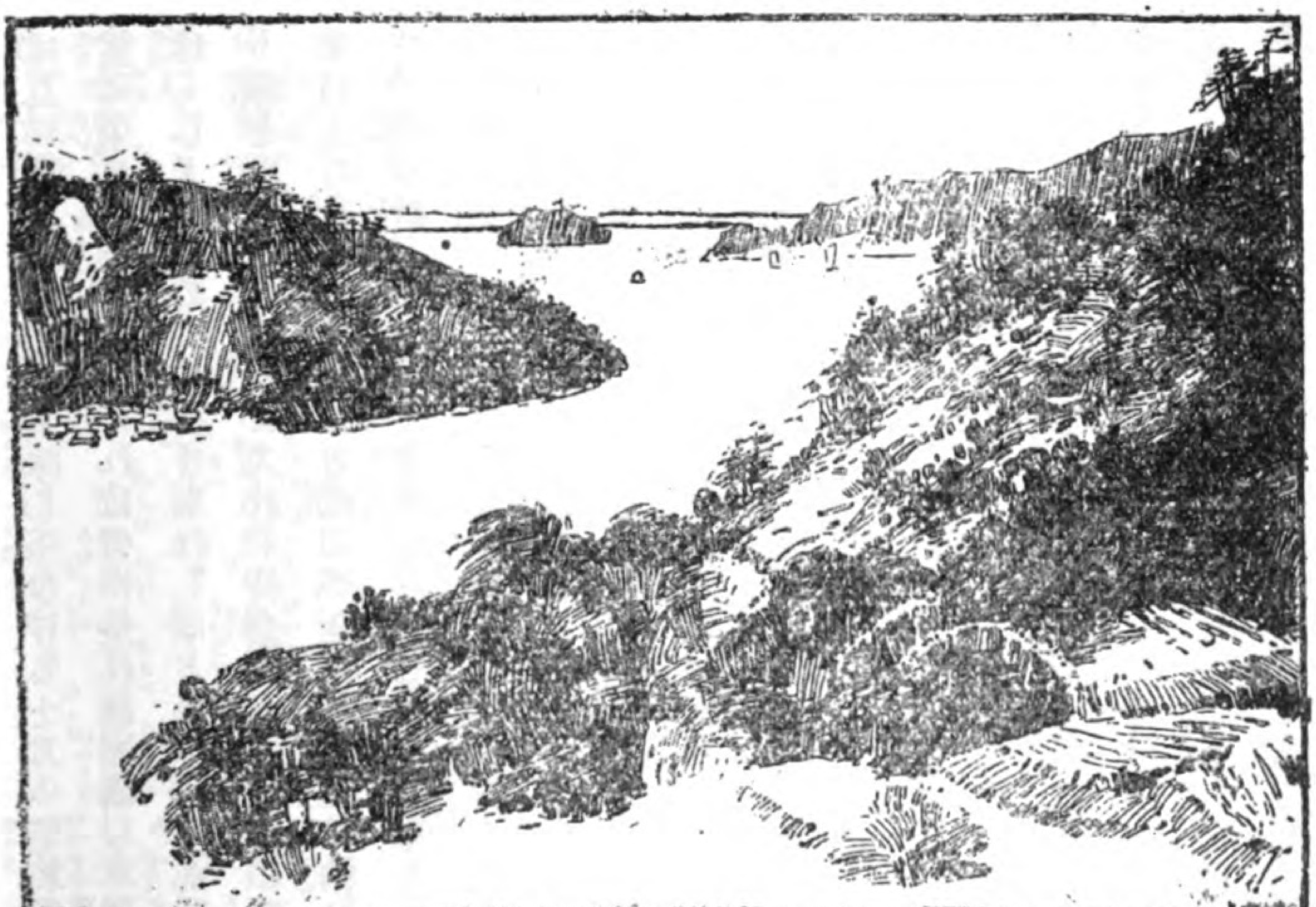
風雅の徳

今はむかし、下總國或宿にて俳諧を好む獨者の方へ盗賊押入りて家内の器財悉く盗み取られたり、その時盗賊は彼の俳諧人を柱に縛りつけて、些とも働らかさず、思ふまゝに奪ひ取りたり、其時俳人のいふ樣、我

今斯の有樣となりては金銀財寶一つとして惜からず、併し唯一つの願あり、それはその笈の內に入置きたる宗祇法師の自筆の伊勢物語と、床の間に置きたる末の松山の文臺をば我にあたへ給へと言ひける、賊の頭これを聞き、さもあらけなく取り出して俳人の前へ投げやり、縛を解して出て行きけり、去りながら多くの金銀財寶を惜しますして洒れたる一物を惜みたるは曰くあるべし、今の書物と文臺は結構なるものにや、立ち歸りて奪ひ取らんとて、戶外にたゝずみ、內の容子を窺ひけるに、俳人は更に屈托の樣子もなく、燈火かきたて筆と紙とを手に持ちながら

ぬす人も跡とざし行く夜寒かな

と、くり返し〳〵ひとり打吟じゐけるに盜賊等此の句にめでゝ大に感じ、いまほど奪ひ取りし道具類を悉く返しあたへ、かゝる無慾なる面白き人とは知らず。狼藉したりとて謝り詫びて出で行きしとなん。又九州の或片山里に貧しく暮らして子一人持てる夫婦有けるが何やらん心に違ふ事ありて、男、彼の女房を離別しけ



長崎高鉾島

れば、女房悲しみ、さま〴〵にわびても聞き入れざりしかば、止む事を得ず、家を立ち出づる時

すれ〴〵の中に花咲く木賊かな

といふ句をいひ出だしゝかば夫感得して女房を呼び戻しけり。

又先年江戸の乞食頭なる車善七と穢多の頭團左衛門と爭論の事ありて、善七落度になりて所刑さるべきをいまだ幼少なりければ其家隷七兵衛といへる者代りて討首にあふ、折しも夏の眞盛りなりければ

地獄にも木陰があるか夏の暮

と辭世の一句を殘して逝けり、匹夫の身にして其情をよくいひ叶へたるは奇特なりとて人々感じ合へりとなん。

歌人の即興

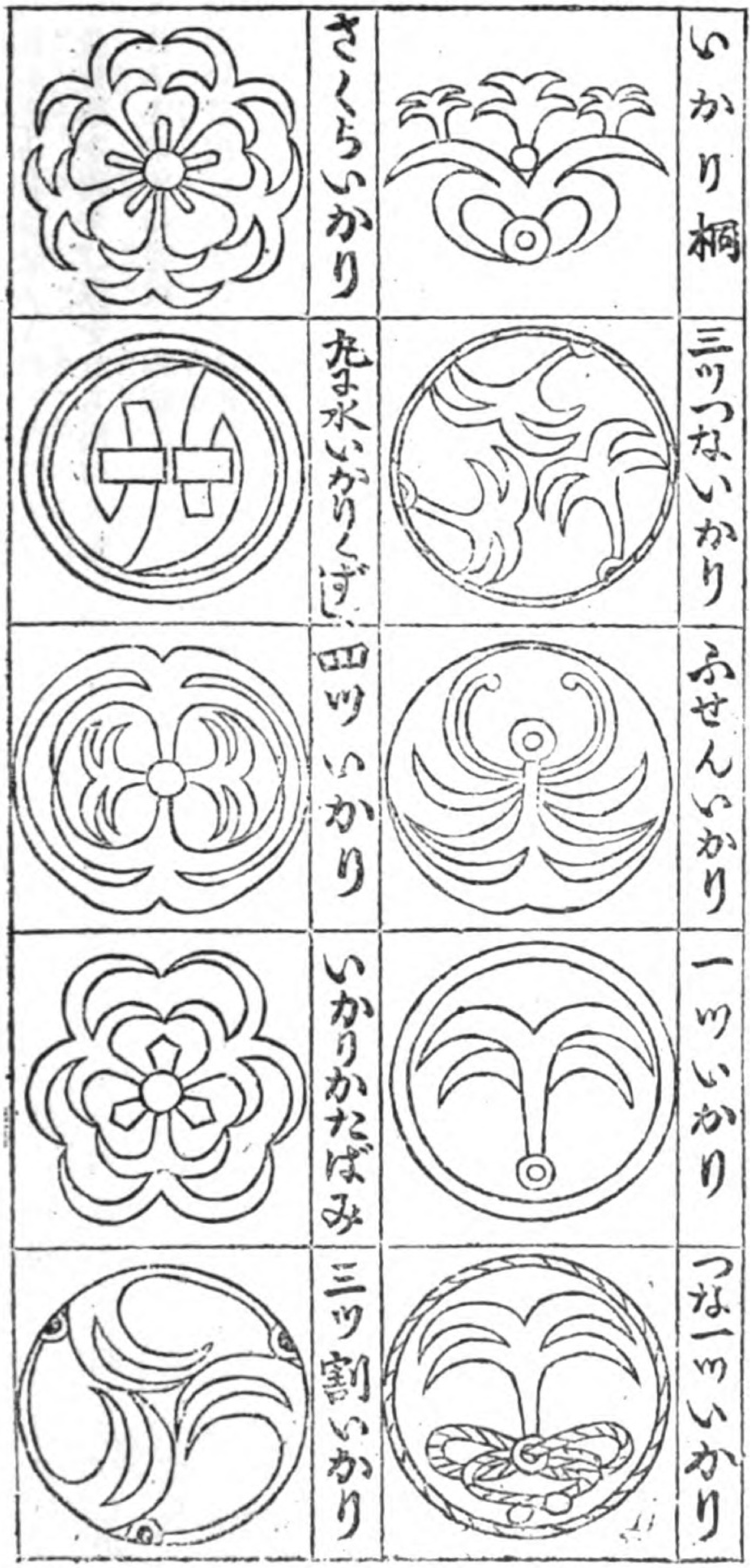
今はむかし、細川幽齋の和歌の門人に斧木縫殿助といふ侍あり、年若き時は小身にて貧窮なれども和歌の道には堪能の者なりしが、妻を定めんとするに、歌に志ある者を迎へんとて、様々に求めけるに、其節古田織部正の妹、歌に志厚きよし聞き及びしかば、媒して縁を結びけり、或日和歌の會を催ふすに、其連中はいづれも當時の高名の武士なり、亭主は未だ貧窮なれども、流石に座定まりて、側を見れば、翠簾の掛りたる所ありてさも雲上めきたるさまなり、人々不審におもはれけるに、亭主縫殿助の云けるは愚妻儀も御會に連り申し度由申すに付、この如くしつらひて、翠簾の中に罷り在り候、あはれ御連中に加へられ給はれかしと申しける、程なく歌始まりて、食事時分になりしかば、年の頃四十ばかりの女、さもけなげなるが簾の外に手をつかへ、今日の御來客に饗應たてまつるべき品なし、如何計らひ申さんやとありければ、妻女取りあへず、短冊に歌をかきて出だされけり折節春雨の降りければ

月さへも漏る宿なれば春雨の
ふるまふ物もなかりける哉

やゝありて、黒く焼きこがしたる餅を反故につゝみ

杉箸を添へて引かれしとぞ、古風にして其道に志深く、即興の詠歌感ずるに餘りあり、貧窮を屈托せずして風流に心を馳する事又ありがたし、總じて昔は歌の會に餅を出だして勝劣の賞にあたへしにより、歌賃といふなりとぞ、又むかし内裡の式微にましませし頃褐色の袴着たる男子、小豆餅を箱に入れて、築地の邊を賣りありきけるに女房達これを呼びて褐々と言ひしより餅をかちんともいへるなりとぞ。

錨の意匠





珍らしき遊牧人種

戈壁

△草原三百里の天地

遊牧人種といへばまづ蒙古の特稱となつてゐるが、こゝに説く遊牧者は、蒙古より遙か西方で、裏海の北烏剌爾の南に當る一大草原地で、キルギスと呼ぶ遊牧人種である。土地は露西亞の領分であるけれども人種は矢張り土耳古人で、古しから遊牧をつゞけて來た種族である。

政治は酋長政治で、幾つかの部落に一人の酋長があつて、其部落の生命財産を保護する規約になつてゐる、そしてその酋長は皆露西亞の皇帝の支配の下に在るのであるその人口は凡二百萬人。

草原の廣さは東西約三百里、南北二百里の間山もなければ岡もなく、一望曠漠たる草原で、恰も繭のやうな綺麗な草が生えてゐる。この草には莖の中に乳のやうな澱粉の汁を含んでゐる、それが羊や馬の糧秣となつて家畜がよく肥えるので遊牧には至極適した土地である。キルギス人の財産といへば、重に羊、馬、駱駝、綿羊の類である。部落の中で富める者は、綿羊野羊三四百頭、馬、五六十頭以上も所有してゐる、その中綿羊は毛を刈つて露西亞の商人に賣り、野羊は乳を搾り、肉を食ひ、駱駝と馬は、運搬用・乘用に使ふのであるが春秋に開ける市に遠く持ち出して貿易するのである。

斯うしてキルギス人は平素、羊を飼ひ、馬を牧し、乳を搾り乾酪を製し、毛を刈り、皮を晒して露西亞の商人に賣り、その金で生活用の物品器具、鍋釜、刀劍、衣服、裝飾品、玩具、煙草、麥粉、酒、菓子、其他種

種の人工品を仕入れて歸つて各自の生活を面白くし、且つ賑はすのである。

△キルギスの風俗

こゝで一寸キルギス人の風俗の大要を申すと、彼等は多く中背で、且つ體軀頗る巖丈である、頸は短かく、顏は平たく、頰骨が出張つて、そして鼻が低く眼が釣つてゐる、一體の色は黃色に少し茶色を帶びて、髯は少く始終馬にばかり乘つてゐる所爲か脚が少し曲つて居て隨つて歩き方は極く下手である、衣服の好みは、未開人一般の好尙で、赤い物や、光る物を澤山衣服につけ、邊幅を飾る事を第一とする、男は凡て毛皮の帽子を被つて居るが、富める者はそれに、絹片や南京玉を附けてゐる、夏はその帽子の上に白い毛氈の高い被をし、又冬は羊や狐の皮で兜の錣のやうなものを附けて頸の邊まで掩さるやうになつてゐる。靴は大抵獸皮製のもので、內地の雪沓のやうな仕立になつてゐるが冬はその中に羊毛を詰めて、防寒の用意をする。祝宴などに被る富人の晴衣には樣々の刺繡をして、緣に金銀、珠玉を鏤ばめて光り輝やかすのである。

△帳幕生活の奇觀

キルギス人の住家は帳幕である、帳幕といつても我等の日常見る天幕とは別種なもので、遊牧地方に特有の鼠色の毛氈（それは駱駝の毛を糊で固着させたもので非常に厚い）を以て造つたもので其形は丁度腰の高い饅頭を伏た樣な半圓形で天井に當るところに大きな穴が開いて居る其穴が空氣拔にもなれば明取りにもなり、又煙出にもなるといふやうな重寶な穴である、扉も大抵は毛氈であるが中には木で作つたものもある。且つ是の帳幕は常住一所にあるといふのでなく、所謂水草を逐ふて轉々するのであるから、移轉に便利な樣に拵へられてある。處でその引越しといふのが、單に一家一族といふのでなく、槪ね一村落を舉げて移轉するが一部落の規則、風習であつて、此の際には却々風變りなお祭り騷ぎをやるのである。

草原生活も同じ處ろに永住して居ると其の附近の草が漸々尠くなつて牛や羊が飢渇にせまる、縦しや草に不足はなくとも飲用水が欠乏することか、水の質が變つたとかいふ場合には村中相談の上で移轉を行ふ、此時は男女老幼は元より家畜の馬も羊も出來るだけ綺麗に着飾つて更に村中で一番美しい娘を出してそれを先登に旗を持たせ、其後ろに若い男女がすべて馬に乗つて、各自に歌をうたひ、樂器を鳴らし、其外さまざまの藝を競ひながら行く、其の後ろから老人や子供がぞろ〳〵と牧羊者や犬などに保護されながら、或は駱駝に乗り、馬に乗つて羊の群とともに練りに練つて行く、



其様は實に奇觀である。草原生活の外には決して見る事の出來ぬ一種の奇觀である。

斯うして一群の移轉者は手を拍つたり、歌を謡つたりして賑やかなお祭り騒ぎをして行くうちに、適當な有望な場所を撿出してそこに止まつて各自に自分自分の住居を占ひ定めて帳幕を結ぶのである、この移轉の際若い美麗な娘を先登にするのは、新たに移住する土地が、彼の娘の如く、草麗はしく榮え、水清く迸ばしるべく幸先を祝ふたものである。

斯くて帳幕を結び、住居を造つて自分自分の財産を整頓するが、馬や羊をそれ〴〵世話して、瞬く間に村が出來ると、さあそれからは移

轉祝といふので、若い者は酒を飲み、歌を謠つて盛んにこの新牧地を祝ふ、何も向ふ三軒兩隣りといふ樣な都會生活とは違ふが、まづ一村一部落で、平素別懇にした間ではお互にいろ／＼の食物を拵らへ、それをお彼岸のお萩式に配り合ふのであるが、これが又重箱一重といふ簡單式ではなくて、素燒の壺に滿盛した馬乳酒大きな手籠に盛つた乾酪、美味さうに揚げた麥粉の饅頭、色々に彩色した麥粉落雁のやうな菓子、或は衣服の飾りになる樣な種々な布片、或は珍らしい玩具、羊肉の蒸燒、仔羊の油揚、仔馬の鹽漬など樣々の珍味で、形容していへば丁度田舍の普請祝ひや、火事見舞に人夫に擔がして遣る、料理品の進物のやうな形である。

斯くして二日も三日も時によつてこの新牧地が非常に有望な土地を見定められた時には一週間以上も飲み且つ食ひ、騷ぎ立てゝ盛んに新牧地の幸榮を壽ぐのである。恰も、內地の農家が豐年滿作を祝ふが如くに。

△遊惰な日常生活

キルギス人の日常生活は牧畜、搾乳等が其重なるものですが、富めるものは牧羊者を使ふてそれに世話をさせますから、格別その方に用事はない、どちらかといへばまづ閑散の方で、暇さへあれば馬に乘つて部落から部落へ出掛て行つて、いろ／＼の娛樂をやります、其重なるものは競馬、賭博などであります。馬に乘る事は却々達者で、どんな女でも子供でも實に驚くほどの名人揃です、何にせよ、生れ落つると直ぐに馬に乘せる樣な具合ですから、五六歲の小兒が曲乘をするなどは當り前です、それから此の部落には郵便もなければ、無論新聞などのある筈はないけれども、事柄の報道は案外に早くて、五十里、七十里の遠方で起つた事變が、數時間經たぬ內に直ぐ一般に知れ渡つてしまふ。これは、自然的の交通機關ともいふべき馬の脚が早い所爲である。キルギス人は今見た事、聞いた事を直ぐに馬上で傳へる習慣を持つてゐるから、一人の閑人が部落を音づれると、直ぐにそこら中に起つた事柄が大小となく總ての人の耳に入る、やれ何處そこの誰

れの娘が今日結婚した、誰れの親が今亡つた、露西亜から旅商人の群が何日に來る、どこの部落では羊が狼に襲はれた、何處に競馬があるさうだ、三十里西の何の部落では大風が吹いて天幕を破られた、かういふ新聞は皆馬上で傳へ、馬上で取次ぐのであるから、陰鬱な天幕の裡にあつても世間の事は天眼通の樣に皆が知つてゐるのである。



△結婚の風習

キルギス草原部落では結婚は通例許婚である。新郎新婦は丁年以前に双方の親同士がほゞ約束を極める、此際結婚とは言はず嫁を買ひ取るといふ事になつてゐる、それは馬とか、羊とか、又は金錢などを遣つて取極めるからである。若しも其男がまだ結婚しない前に死んだ時は其女は男の兄弟か、兄弟がなければ其近親の者の誰かに娶はせるといふ定めである、若し又女の方が先に死んだ場合には前に貰つた色々のものを返す事になつてゐる。縦へ死なくとも、其兩親が都合によつて其女を

他へ嫁るとか、又は内に婿を迎へるとかいふ場合には凡て前に貰つた物を返す事になつてゐる。でその買取料は無論貧富によつて相違はあるが、富める者は羊百頭、又は馬二十頭などいふのもある。が、通例のところで、馬ならば三頭、羊二十頭位の相場である。

さていよ／＼結婚するといふ場合には男の方の親から女の親に向けて使者を出す、（この使者に當るものは大抵近親の者で、一寸仲人のやうな役目を務めるのである、すると女の方では大いにこれを歡待して其者に嫁の價、即ち買ひ取り料、（假りに結納品として置く）の羊とか、馬とか、金とかの料を量つて相談を取きめるのである。でいよ／＼相談がまとまると、女の方からも又近親の一人が使者となつて男の方へ行き、話のまとまつた事を報告するのが例である、此際男の方でもこの使者を大いに歡待して御馳走をなし、同時に結納品を貰つて歸へるのである。貰つて歸るといつてもその品が、帶地や小袖や目錄のやうなものでなく、活きた馬や羊の群であるから、牧羊者や犬に保護させて首尾よく嫁の里へ輸送するまでには大分手數がかゝる事である。

それが濟むと新郎になるべき當人が嫁の親を見舞ふべく、他の帳幕を訪問して其の小屋に一夜泊り込んでしまふ、この泊り込みといふのが、まづ見合といつたやうなもので、嫁の親が、婿の人品、骨格、氣風、態度、賢愚、才鈍、即ち人物の鑑定をするのである。（勿論許婚の約束が成立する前に一と通り人物は見定めてあるから今更見合する必要もないが、いよ／＼といふ間際に臨んでの樣子、素振を見る爲めに、且つ又婿の方でも里方の家風や人々の氣質や生活向の大體を知る爲めにこの泊り込をするのである。

けれどもいよ／＼結婚の式を擧げる時までは婿は決して嫁の顏を見る事は出來ないのである。

斯うして男が宿り込んで二日目に嫁は日頃の友達や近隣の若者に打圍まれて馬に乘りて親類知己へ一々暇乞に出掛ける、すると親類の方ではいづれも其嫁を始め附添人一同を饗應する、それから嫁は家へ歸つて來

ると婿の方からの贈り物が山を成して居るといふ段取りになる、そこで嫁は直ぐに仕度をして、男の方へ出掛けるのである。此際嫁の持參物として天幕、寢道具、衣服、其外いろ／＼の器物や裝飾品を携へて行くのである。

斯うして輿入をするや、持つて來た、帳幕を結んいろ／＼の道具を飾り立て、そこへ、白布を被らせた花嫁を連れて來てこゝに嚴肅なる式を行ふのであるが、この式は回々教の儀式に據つたもので、僧侶が來て讀經をする、新婦新郎は式によつて誓ひをする、それが濟むと新婦は新郎の父母や家族や親戚の者にそれぞれ會見して挨拶をのべる、斯うして式が終ると、まづ餘興といつた格で、集つて來た親戚知音の若者が、競馬や、力競べ其他いろ／＼の伎をして其場を賑はすのである。

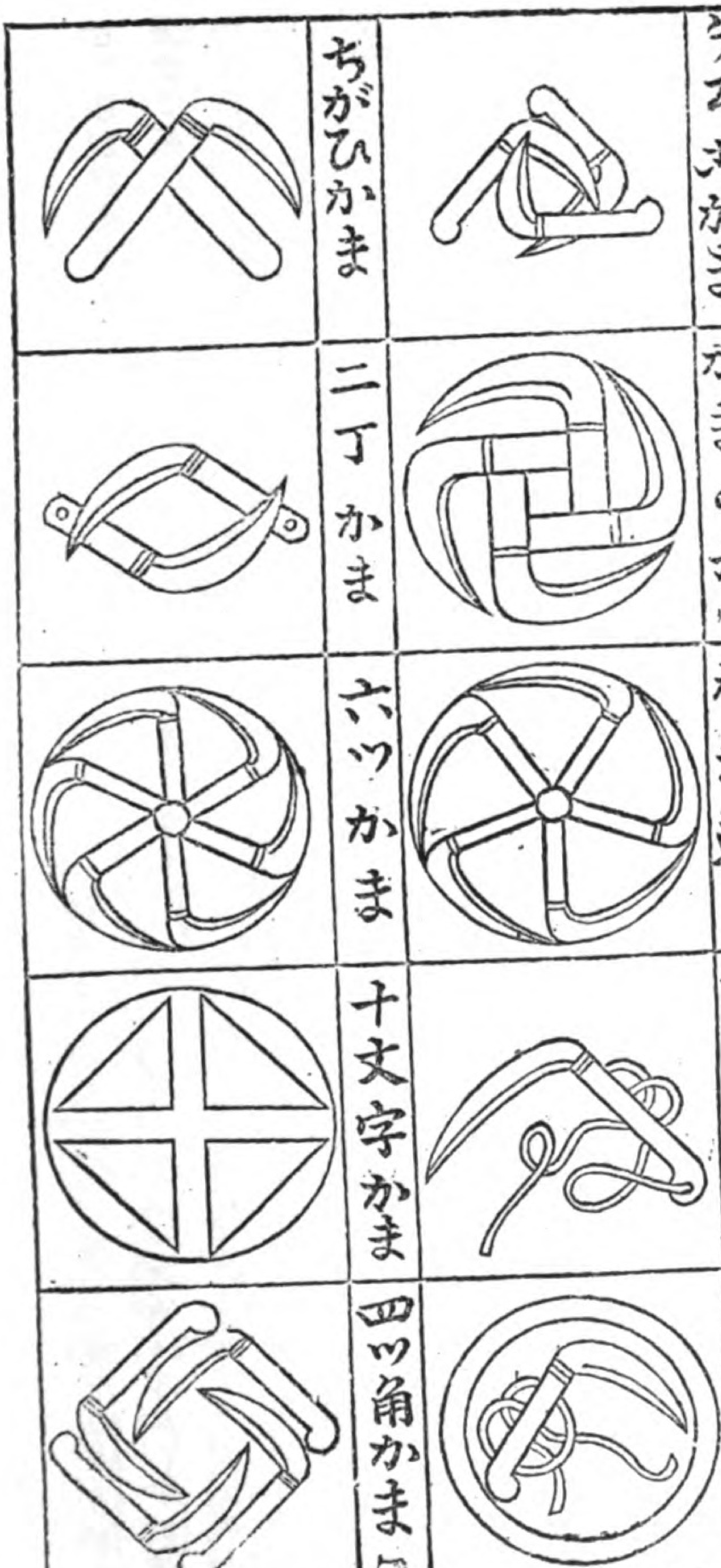


△出産と葬式

出産、結婚、葬式は人生の三大禮で、如何なる未開の國民にもそれ／＼儀式様のものが行はれてゐるが、この草原部落にも葬式には相應の禮がある。若し一家の長とも言はるゝ様な人が死ぬると家族は直ぐに其死人を綺麗に洗つて、毛織の布に包んで他の小屋に移して殯禮を行ひ、それから順々に親類知人のところへ喪を告げる、招かれた人々は直ぐに死骸を拜みにやつて來る。僧侶が來て祈禱をして墓所へ持つて行く

その行列は僧侶から近親、知己、一般會葬者といふ順序は何處でも同じいものと見える、死骸は毛布に包んだまゝ墓地の穴に埋めるのであるが、その時は必つと寢かした儘にして入れて、上より土をかけて側には色色の食物を籠へ入れて供へる、それが終ると一般會葬人は墓の圍りに坐つて各自に祈禱を捧げる、此時親戚の一人が生前着て居た死人の衣服を持つて來て、それを小さく切ツて人々に形見として渡す、斯うして一同は墓場を引あげて殯室に充てた小屋に歸ると、そこには親戚が待受けて居て、會葬者にいろ〳〵の御馳走をして飲食を薦むるのが葬式の禮としてある。

鎌の意匠



庭園の風致

古竹園

△假山水と平庭

庭園の趣は、室内の裝飾などゝ同じく、其の家の主人の心を能く表はすものである上に、家と庭とは車の兩輪の如く相俟つもので、家が良ければ庭もよく見え、庭が良ければ家も引き立つといふやうに非常に關係の深いものであるから、庭を造るには却々注意を要します。古來日本の庭の樣式には大體二樣あります。一つは假山水と稱して、山を築き、水を引き、或は山間の趣等を移したもので、庭地の廣い田舍家の庭園などに適します、又一つは平庭と稱して、平坦な地に、石組を主とし、樹木は成るべく省き、專ら海邊島嶼等の趣を移したもので、庭地の狹い都會の家の庭園などに適します。そして此れには各々眞行草三種の方式があります。其の外に尚ほ以上の樣式を基礎として場所に應じて樣々に風致を添へ趣を變へたもので路次庭、茶庭、乃至は文人庭など云ふ樣なものがあります。理窟から言へば、庭を造るのは恰も畵家が筆を持つて繪を畵くやうなもので、結局其れが美術的であれば宜しい、何も斯んな樣式に拘らなくとも可いのですが、古來傳つてゐる造庭法には又捨て難い所があるから、少しく茲に記して見ませう。

△築山の造り方

眞の樣式の假山水の廣大な庭には、築山は普通、庭中の主山と、之れに伴ひ互に谷をなして瀧の上流を作るものと、主山に連つて丘を爲すもの（此の山と主山の間に亭などを立てます）と、水邊に近く築いて水畔の路を山麓を廻らすやうにするものと、又主山と主山に伴ふ山との間に容を現はしてやゝ嶮岨の風致を添ゆるものとの五つ位あります、そして山水の正面には必ず三尊石と言つて庭中の主眼となり庭全體を統括する氣持の大きい石を立て、之れと相對する手前に禮拜石

と言つて低く平たい石を置きます。此の三尊石の數は一定しては居りませんが、頭が大きくて据りの危く見えるものを置かぬとか、面の缺けた石を用ゐぬとか、色々忌むべき事があります。

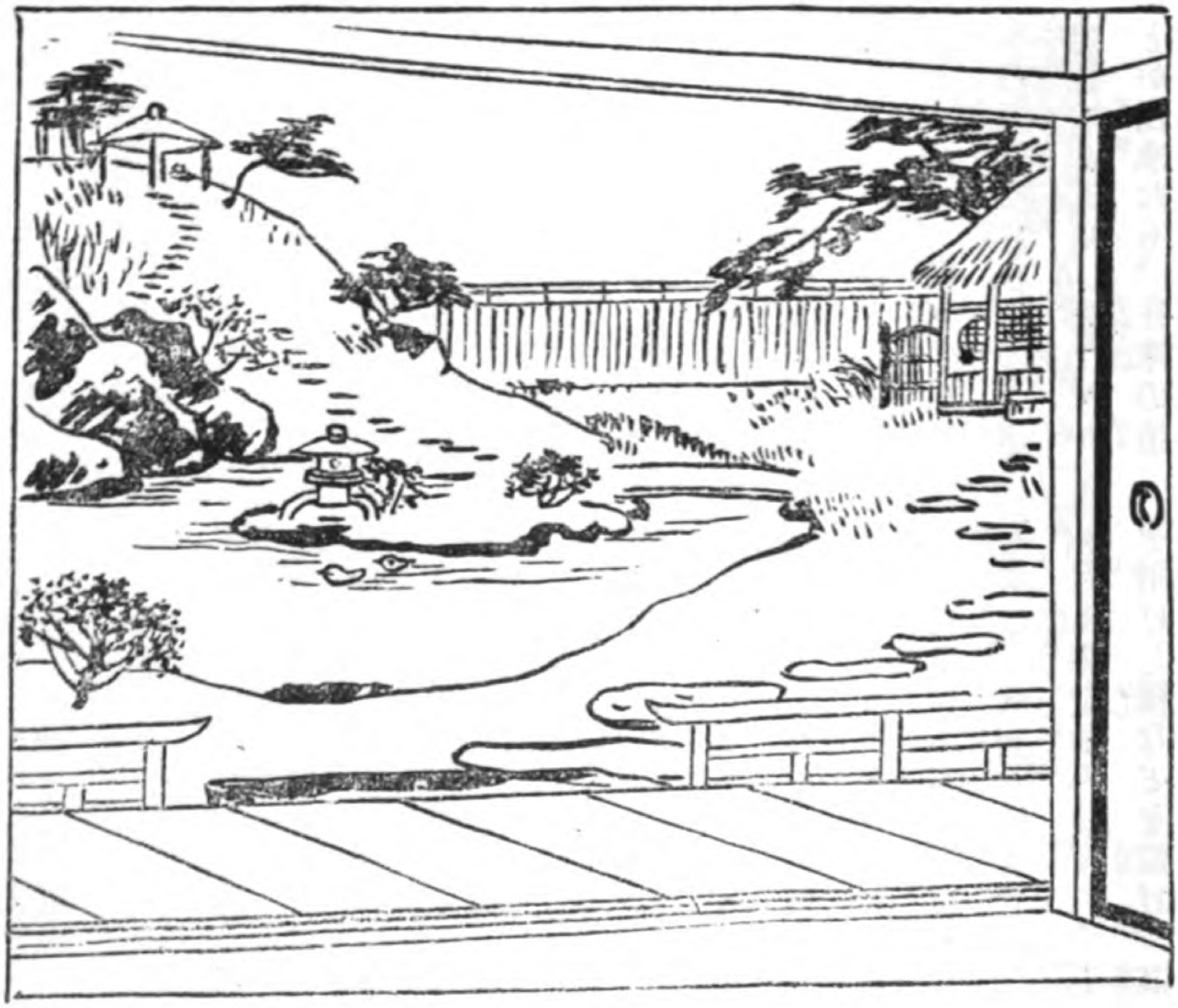
△瀧の景趣

瀧も廣大な庭には必ずあるべき景勝の一つです。これは其の勢ひを助ける爲に其の上方に常磐木の鬱蒼たるものを植ゑ、中央を岩石或は繁つた楓などで隠します。其の落し方には、離れ落とて水勢を強く瀧口を離れしめて前方へ落すもの、糸落とて水落に頭を差出した石を澤山立てゝ水を幾條にもなして落しさながら糸を繰りかけたやうに見せるもの、重落とて水落を二重或は三重に造つて水を重ねて落すもの、左右落とて瀧口を左右に分けて落すもの、其他片落、傳落、布落等色々あるが、雄壯な庭には離落、重落等の勇ましいものが適し、幽靜な庭には糸落、傳落などの如き優しいものが適するのは言ふ迄もありません。「瀧のおとに松のあらしもうづもれぬなちのをやまのあきの夕暮」の趣は前者にあり、「まつの音をことにしらぶる山風は瀧のいとをやすけてひくらん」の趣は後者にあります。そして瀧には必ず不動石或は瀧副石といふものを左右に添へ、其の水落には水受石、波分石を置くなどして風致を造ります。

△庭樹の撰擇

瀧に配した木の外に、正眞木と稱して庭中で一番重きをなす樹木を、主山の瀧に寄つて適當な處に植ゑます。これは松、柏などを二三本用ゐて、他の樹に優れて立派な趣のあるものを選びます。此の外夕陽木、流枝松、寂然木、見越松、景養木等と稱して花物或は紅葉の類、或は白槇、磯馴松などの風情あるものを夫れ夫れ一定の處へ植ゑるべき事になつて居るが、つまり景趣を造る爲に色々案出した規則に過ぎません。從つて庭の廣狹其他の都合によつて勿論取捨いたします。たゞ山中に生ずる木を水邊に植ゑたり、水邊に生

ずる木を山上に植ゑたりすることは、明かに風趣を害するのみならず、たとへ植ゑても木が育たぬから、此等は十分注意を要します。そして四季の氣候の變化の爲に甚だしく景色を左右せられぬ爲に庭の樹は、花物や果實物を避けて、成るべく常磐木を選びます。特に庭の前面には冬枯のする木は用ゐません。尚ほ其の外に庭樹に就て注意すべき事は、山路の腰掛又は亭などのある處には、庵添の木と言つて松の風情あるものなどを必ず植ゑます。又土手見越の木といふ



のがあつて、これは土手の内側へ植ゑるもので、多く松、樫、栂、樅などを用ゐ、塀の内三分、外七分位の眺めを持たせます、又垣の端の留りの杭に添ふて垣留の木といふものを植ゑ、樹の種類は何でもよいが、垣よりもやゝ高い位なのを用ゐます。又袖垣の前面には、袖ケ香といつて、枝數の少ない梅を一株植ゑ、燈籠の後か傍には燈障の木と稱し二三株の樹を植ゑて幽邃の趣を造り、手水鉢の前面には鉢控の木と稱し南天、錦木等を植ゑ其の影を水面に映ぜしめて風

情を增すなどいろ〳〵工夫を凝らします。

△あしらひの草物

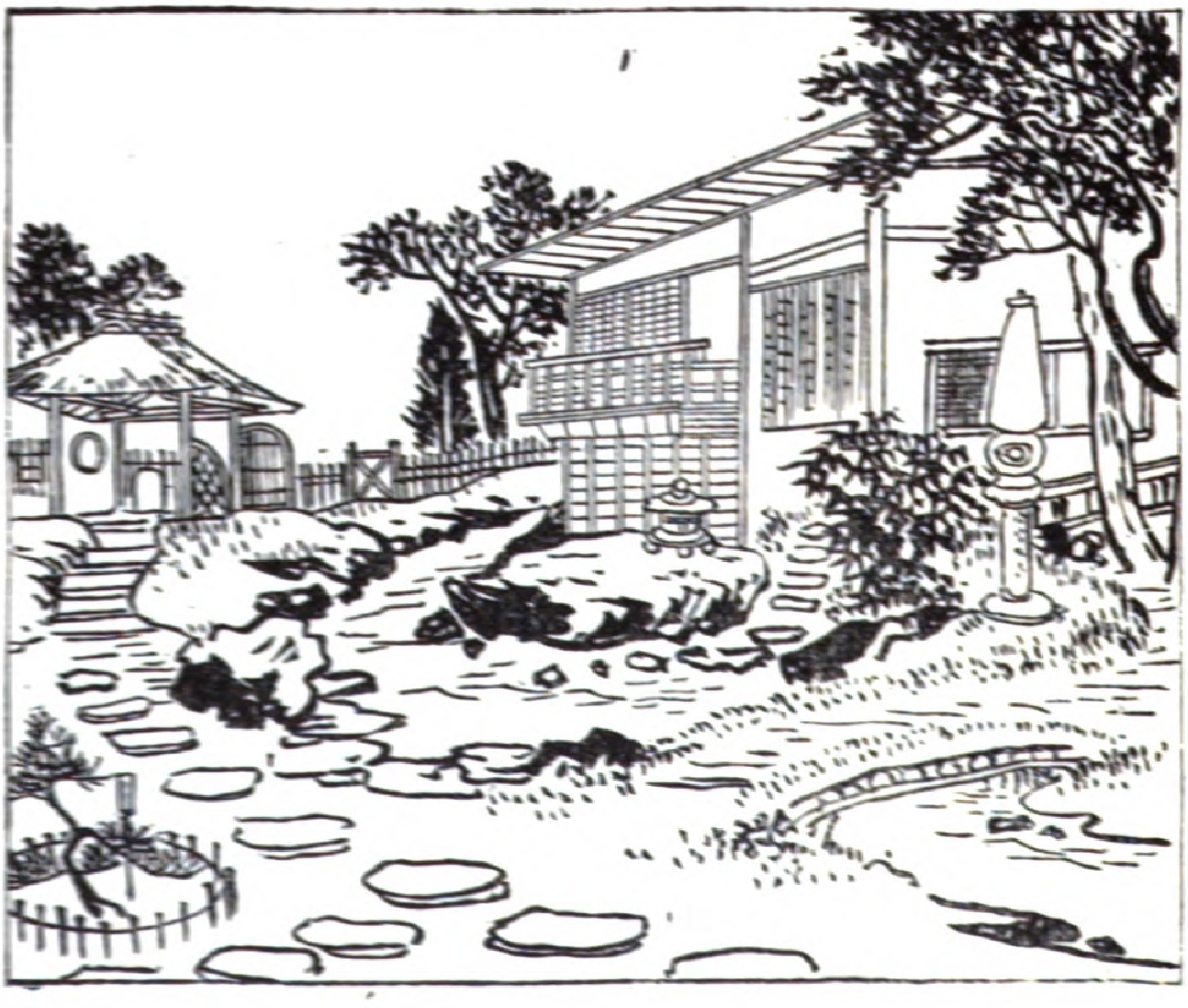
草物に就て言へば、芭蕉などは非常に葉が破れ易いから、庭の要所には置かず、軒近くに片側に寄せて植ゑるのが普通で、又此の方が雨にも風にも趣がります。其他葉蘭をあしらふとか、丸葉物を添へるとか、一山には女郎花、野には萬年青、澤には蓮・菖蒲など夫れ夫れ場所に應じ物を選んで植ゑるけれども、たゞ毒ある草は決して置いてはなりません。又芝生は多く高麗芝、野芝、或は天鵞絨芝等を用ゐます。たゞ此の芝は夏の間は青々として美しいけれども、冬になると枯れて仕舞ひます。其の爲にも庭樹は特に常盤木を選ぶ必要があるのです。西洋では芝生にはローンといふ四季青々としてゐる草を用ゐて居るさうで、自然庭樹には落葉欅、栃、楡のやうな四季の變化に富むものを選ぶので、庭は一層天然の趣を發揮するといふ事ですが日本にも其んな草を用ゐることが出來たら、在來の造庭法に大なる變化を來すかも知れません。

△池と橋の風致

「さほ姫のすがたのいけの朝ねがみきしの柳にみだれてぞほす。」池にも相當の曲折がなければ、こんな趣を見る事は出來ません。池の中には大抵島を造ります。其の島は大きい池なれば山、野原、杜などの景を模し、さもなければ洲濱・干潟などの趣を現はします。其の外蓬萊島といつて龜の形の島を造る事もあつて、それには枝振りのよい松を植ゑて、尚ほ其の島は海中の島なれば、これには橋を架けぬことになつて居ります。又陸續きに雙方から半島を造つて、一方を主人島と稱し、他方を客人島と稱して、池には重要なものとなつて居ります。又池といへば昔は多く水鳥を飼つたやうで、古歌にも多く現はれて居ますが、今はそんな贅澤も言つては居られません。橋は、座敷の眞中に當つて架ける事を忌みます。そして大きい庭には反橋、欄干を附けし橋などを設け、其他は柴橋、石橋、八ツ橋、

丸木橋などを、設けますが、幾ケ所にも設ける時には、成るべく風の變つたのを架けます。又反橋などの裏の見えるのは見苦しいから、さういふ時には岩石をあしらふとか、樹を植ゑるとかして其處を隱すやうにいたします、其の上橋狹石を橋の雨袂に置き、添ふるに橋本の木といつて、橋の上へ枝を出して影を水上に映すやうなものを以てすれば、先づ申分がありません。

△手水鉢と燈籠



手水鉢の置きやうも却却難かしいもので、落緣に餘り近く置いては密着したのが目障りだし、遠く離しては實用にならず、よく／＼風致を見た上で据ゑなければなりません。尤も大書院の緣先などに單に庭中の裝飾として置く事もあり、或は狹い庭などにては只だ手水鉢のみを置いて趣致を凝らすこともあるが、これは例外で、多くは雪隱の近くに設けます。從つて袖垣を立てるとか、又前に述べたやうに鉢の側に木を植ゑるとかして其

處を隠すやうにいたします。そして其の側に必ず燈籠を置きます。燈籠は勿論其他の場所にも置くので、其の場合には、火影の池水に映ずる工合、或は林間に燿く風情等に就て十分工夫を凝らす事が肝腎です。其の置き方は、後に反るよりも前にかゝる方がよろしく、四角の燈籠ならば少しく斜に置く方が風情があると言はれて居ますが、やはり正しく置く方が正式です。

△圍垣と袖垣

圍垣には色々あるが、普通には建仁寺、四ッ目、大徳寺などが能く似合ひます。垣の高さは建物及び庭の割合に應ずべきで、一定しては居りませんが、垣の押への一番下の段は土より七寸上にあるを定法としてあります。そして其の押へを、三段四段五段と同じ間隔を置くものと、中間の一段のみをやゝ狭くするものとあるが、最上段から垣の頂點までは寸法を少しく延して、他の間隔が一尺なれば一尺三四寸位に、他が一尺三四寸なれば一尺五六寸位にするのが普通です、杭は垣よりも先づ二三寸位長くすれば恰好が好く見えます。其他竹垣は節の並ばぬやうに互ひ違ひに作るとか、庭の中の垣は曲者の忍ばないやうに透し垣にするとか、これにも色々注意が要ります。又袖垣には隨分精巧なものがあつて、普通には鶯、網代、圓窓菱、茶筌、高麗等を用ゐます。

△庭全體の配置

更に庭園全體に就て申せば、如何なる様式の庭園でも、總て眺めは奥を主とし、前を客と心得、且つ主景を四分、客景を六分位にする方式になつて居ります。又山を築くには地を掘りて池を造り其の土を其處へ持つて行くのですが、池より掘り上げた土は少なく、山を築く土は多いものと定まつてゐるから、其の不足の土の積りの附かない中は、池の積りはなさない事になつて居ります。池に水を入れない中は山は可なりに高く見えるけれども、いよ／＼水を引き入れると、意外に低くなるものですから、豫じめ其の加減が大切です。

又雨水の吐口は庭の廣狹に應じて二三ヶ所或は四五ヶ所位設け、池水に混ぜざるやうにして池水の吐口へ注がせる事が肝腎です。又樹を植ゑるには先づ石を据ゑて道をつけた後にしなければ十分好位置を取る事が出來ません。そして遠景を庭内に造らうと思はゞ、高い樹を前に、それより段々向ふの方へ小さい木を植ゑます。又一體に木でも竹でも植ゑるには、三つ一つ、一つ二つ、五つ三つといふ風に植ゑるべきで、正しく整列させたり重複させたりすると少なからず風致を害します。其他色々あるけれども、又筆を改めて記します。

亀の意匠



さまぐの奥樣

今井田彌生

△

實業二百萬圓、御年は三十路に近けれど伸びやかな眉のあたり、濃い生え際のあたり、山で二十四、五とお見受申上げられますの。お定まりの燃る手柄に翡翠の玉簪、心持拔いた襟足から採上げがクッキリ際立つて、天晴素封家の奥方。けれど昔紅の双頰に微に寂しいやつれの影が閃いて事情を知つたものには、またなく傷々し氣に見えますの。

淑徳の名を、蛇蝎の如く忌て、凡の爲に自我を沒却して迄も服從仕なくちやならない、一般婦人の悲慘な境遇と、不利益な位置とを代表してる御方と謂つても差支はないんだらうと、或る人が申してました。

＊　＊　＊　＊

「奥樣、先達の割烹會の方は如何遊しまして」

「奈何つて貴女、途々赤出損なつて終ひましてねえ、ほんとに洵々情無くなつちまひますよ」

「ぢや矢張旦那樣が……」

「ヘア、もうすつかり支度仕てたんでございますよ、其れにねえ歸ると突然、何處へ行くんだ馬鹿！出る事あならないつて怒鳴付けるんでございますもの、奉公人の手前も有りますしねえ、口惜くつて。でも最う斯うなつちや仕方がございませんから途々涙を呑んで了ひましたんですよ。其癖にねえ幼稚園なんかの會と來ちや少々體の具合が惡いたつて無理無體に出させられるんでございますよ、例のほら文子ねえ」

「あの、お美代さん〇〇町の彼方のお子なんですか」

「エヽ、あれのねえ隨行員といつた側でホヽヽヽ全く厄介なお役目なんですよ、貴女のお子樣でなんて謂れますともう顔から火の出る思ひますかそれとも云ひ兼まして……」

△

眼科醫で名の高い織田樣の奥樣、お齢は三十路に一つ脂粉の氣のないお頸筋から拔ける程な膚の白さ、紫紺縮緬の半襟が際立つて艶とならず亂た鬢が一層床しい奥樣振りを忍ばせます。大塚楠緒子女史に髣髴とは我のみの眼のわざか。詩趣の溢れたそして才氣の充實した、ご婦人のお方でも獨立獨行のご勇氣だけは望ましう存じます、とよく仰有るお方でございますの。

＊　＊　＊

「園藝にも近頃は少し宛趣味が出て參りまして……」

「ご結構でございますねえ、ほんとに萬能博士にホヽヽヽ」

「イヽエもう趣味なんて口幅つたく謂ふ程ぢやございませんけれどねえ主人が鳥渡々々あんなものを弄り出したものですから途釣込まれましたのでホヽヽヽヽ」

「ホヽヽヽ其れはさうと先達の心の花如何で被居いました」

「まあ眞實結構でございましたよ、佐々木先生の枯木立むく〳〵の趣たる二人は沿て道を歩めり、あれ、なんていふんでございませう白眉ですわれえ……

大競の分れまた子供騒かし付ける間に一つ宛書き付けましたのよ、どうせ駄目なんですけれど、土なんて課題が難かしくつてホヽヽヽ和歌つては先頃私面白い滑稽を演じましてね何ですのお風呂につかつてましてね遠ふといふ句が出て參りましたの、もう忘れちやいけないと思つて碌々洗ひもしないでお襦袢だけ引掛ると早速這ひ出して子供の鉛筆でつけ木に書き付けましたんですよホヽヽヽ」

「ホヽヽヽまあお熱心で被入いますわれえ」

「熱心つてぢや有りませんけれど忘れつぽいものですから……でもまあ主人に見つからなかつたから幸だつたんでございますよ」

△

お勤先は中學、月收七十圓とは奥様のお言葉、三割丈は掛價ですよ、とそつと耳打して呉れた者がございました。どつちかといへば丸ぼちやの表情の鈍い、取り立てゝ印象を殘すやうな顏立でも有りませんが、それかといつて、滿更捨てたものでもございませぬ。諸襲法に手腕の妙を以て鳴つて被入いますの。

＊　＊　＊　＊

「まあ何といふ宜お色氣でございませう」

「イーエ最う少時うつろひませんで、けれど宅が大變此色を好みますものですから嫌々乍でございますよホヽヽヽ」

「でも全くよくお似合で被入いますよ」

「イーエホヽヽヽそれより貴女ご存じ割烹會の奇聞欄記者を」

「鳥渡も存じませんの」

「あの高西様の奥様なんですよ、其の熊手見たいなものは何ですかつてねホヽヽヽ今時ねえフォーク知らないなんて洋食なんか召上つた事が無いんでございませうか宅の四つになる美までが最うもとらぬ口にフォーク〳〵なんて申しますのにねえ旦那様のご體面にも……何ですわ懸わりますからねえホヽヽヽ」





一生一度の我慢

園の若竹

嫁入當坐

人生婦人の身となる勿れ、百年の苦樂他人に依るつて、昔の人はよく云うてますね、全くですよ、此大御代に生れ而も新教育を受けた私がこんな事を申したらきつと世の人は不思議がりませうけれど女權擴張だの男女同權だのつて、いつた所で、そりや東京あたりの都のすまゐや、御夫婦差むかいの新世帶の家では、間に合ふことも御座いませうが、こんな田舍の況して私共の家庭では全く用なしの詞ですよ。

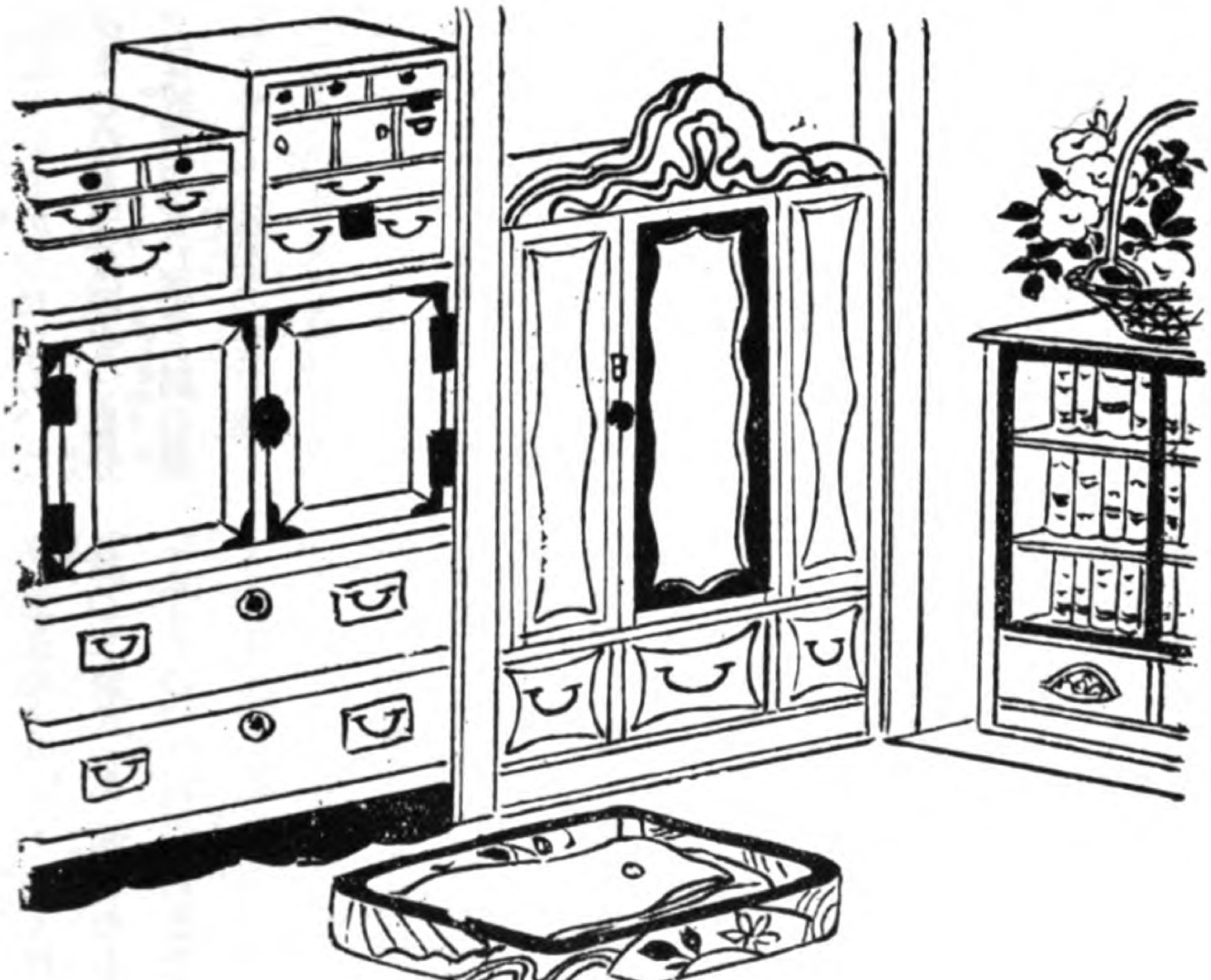
何私方の家風？、お聞き遊ばしてどうなさるの――あら御參考――恐れ入りますこと、それでは申上て見ませうか、併しまだ嫁いで間のない私、よくは別りませんのよ、けれどね却々六づかしいのですよ、つまりあの久しい間の風習ですね、それは一朝一夕にとりのぞく譯にはまいりますまいが、衛生上にも風儀上にも宜しくないと別つてる事まで、祖先のしきたりだからとて又其まゝ子孫に傳へるといふことは、文明の敎育をうけた私共には、どうしても忍びない事柄でせう、けれどあなた、そんなことはとてもだめですの、一家の中で地位の低い嫁の身では、まだ〳〵どうすることも出來ません、何事でも唯ハイ〳〵と丸で機械みたいに命令通り動いてるといふ丈のことですの、

凡そ世に花嫁樣が明暮に、此家風といふ詞で以て、いじめられる事はどれ程でせう？、それはあなた二十年來住みなれた生家を去て、突然他家の家族となつたのですもの、それそよくも敎へないで、いじめる方が無理ですわね、

私とても、今少し美貌に生れついて居つたなら、こんな苦しい思ひもせずにすみましたらうものを、自分でさへも鏡にむかふ時のいやな感じ、まして人様の眼にはどんなにみにくゝも見えませう、妙齢の年に達してもついぞ一度の縁談もかゝらず、明けても暮れても、御両親はこの事ばかり御心配に遊ばして、いつそ當時流行の女事務員とやらにでもしやうか、高等師範に入れて女教師にしてやらうか、とはいへ、弟四人もある身のゆく／＼は、養子も出來ず、やはり此上年のゆきすぎぬ間にと、それは／＼御心盡しの上、漸う一軒口のかゝたのを、取にがしてはと、姑様の一方ならぬ六ケしいのも、旦那様のまた親孝行といふ世間の噂も、前の奥様が家風に合はないからとて、廿世紀の今日御離縁したといふのも承知でこゝにまゐつた私、假令どの様な目に逢ふとも、一旦嫁いだからには立派に辛抱して、此上御両親に心配はかけますまいと、堅く決心して居りますが、やはり凡人の悲しさ度々人しれぬ涙に不運をかこつ時も御座います。此田舎ではまあ指をりの財産家、しかも先々代の不運で、大かた傾きかけて居つた身代を、姑様のお力で、取返したといふ位の方ですもの、何から何まで家風づくめ、一寸お大根を切るのでも、お葱を煮るのでも、お尋ねしなかつたならば最後、そんな切りやうをするのぢやない、お前の里はさうかもしれないが、こゝへ來た以上は家風通りして貰はねばと、一時間以上も御説法、朝から晩迄何から何までのお切まはし、お茶碗やお箸の置き様から、下駄のぬぎ場所、お肴や青物の洗ひ場所、神様を拜むかしわ手の打ちやうから、お漬物のよそひ方迄、一々定まつてあるのださうです、一寸うつかりして左の手で柄杓でも持たうものならそれこそ大變、

昔支那の何とかいふ人、まきぞへの罪で入獄して居る時に、或日差入物を手に取りて、番卒に母が來たのになぜ逢はせてくれなかつたといつて泣いたさうですお前の母は來やしないのになぜお前はそんな事をいふかと尋ねた所が、私の母は肉を切るに必ず方にし、ねぎを切るに一寸を法とします、今此食物を見るのに其

母の料理と寸分も違ひませぬからきつと母が來たといふことを知りましたと申しましたら其樣な嚴格な母の子が罪を犯す道理がないとて、忽ち許された、是れはかつて小學校で習つた談ですが、そんな遠い支那でなく現在日本の目の前に此樣な人もあるのだと感心しました、一人娘の殊にふびんな醜い私ゆゑ、兩親の寵愛も一しほ、氣儘といふ程でなくとも、大切に育てられた身の、最初はあれも之もと規則づくめの樣な感じがして、あの樣



納戸の一部

に仰しやらずともとお恨み申上たこともあり、此樣な六ケしい家で、私は辛抱出來るのかしらと人しれず涙にむせんだ事も幾度でしたらう、此節では少しなれましたし、夫が始終蔭にまはつて、慰めてくれますので、どうかこうか、暮らして居ますが、大家だからつて一錢二錢のお金でも、自由になるといふぢやなし、皆一々姑樣のおさしづを受けねばならず、人樣からは、おそこはお金持なり、小姑や厄介の親類とてはなし、あの嫁樣こそ

幸福者よと羨まれて居ますけれど、よく考へて御覧遊ばせ、明日をもしれぬ人の命です、強ら老人から先に死ぬるとも定まつて居ませぬから、もしか私が長命を得しなかつたら、ほんとに何しに生れて來たのか、全く苦勞のし損ですよ、習つた家政學でも料理法でもほんとの寶のもちぐされで、毎日かうしてお金の番をしてるようなもの、こんな境遇の私、思はず人生婦人の身となる勿れつて申すのも、さら〳〵無理はありますまい、と氣兼と苦勞とに、おもやつれしたお顏に淋しい笑をお洩らしになる、あゝ之が、嘗て校庭で手をとりあつて、行末長く姉妹の交りしませうと誓つたあの活潑の友の身の上であらうかと私は驚きました、ほんにこんな事を伺つて見れば誰やらの高等下女とおさけびになるのも無理はない、此過渡時代の私共はなまなか、新らしい教育をうけた丈、倘々つらひ思ひもせねばならぬのかしら、一層昔の何も知らない無邪氣一點張の娘の身に生れて居つた方が幸福ではないかとも思はれました。

一ケ年後

其後私は九州の任地へ赴いて、心にかゝりながら、御無沙汰に打すぎましたが丁度一年振に、歸省して再び御尋ねいたしました。あの六ケしい家風でどんなにやつれてお出だらうと御目にかゝつて二度びつくり、いつかのやうなしづんだ面影は更になく、いき〳〵とした見るから丈夫さうな御元氣私は誠にうれしう感じました。いろ〳〵と御談を伺つて見ますと、今は御人格も高くなり、お世帶振もお上手になつて、あの六ケしいと仰つた姑樣さへ、嫁が〳〵つて却々のお氣に入り樣而して近々に、赤ちやまもお出來遊ばすといふさわぎ。

登志さんしばらくでしたね、私もあれから毎日姑樣の訓育をうけ、教へられもし、いぢめられもしたお陰ですつかり御氣質ものみこみ、漸う眞の家風といふものも解つて來ました今日、私はそゞろにお恨み申上た昔を後悔せずには居られませんと仰しやる、なれぬ嫁

の身には、六ケしいと思つた風習も、日に月に眼にふれ手にふるゝにつれ一寸した事にまでも、我家の歴史を語りゆくやうな、床しい心もして、姑樣が長い間の經驗から割り出された此家風、私は失敗といふ報償をせずに手に入るゝうれしさ、今は一家むつまじく此貴い風習の許に幸福なる生活をつゞけて居ます、かうなつては以前は邪魔だと思つた家風も今はほこるべき我家の寶だと思ひます。よそ樣ではよく何々は先達て澤山買つて置い



四季の花鳥屏風

たが、どこかへしまひ込んで別らないからと亦更に買ひ求めたり或物の必要に際して座敷一ぱいひろげたてゝ押入を引返したりするさうですが、私の家は何十年といふ長い間此品はこゝ之は彼所と置場所が定めてあるお蔭で姑樣のお留守に其物が入用でも、すぐそこをあければ何番目の棚には何何右のくぎには何と規則づくめに並べてあるのでよく別り、殊に佛事や何かの混雜の折、古い女中が手傳ひに來ても皆昔からの場所を知つてゝくれ

るので、どれ丈便利か知れません、朝は五時に起きて食事は十二時と七時とにすませ、夜は九時迄仕事して十時に臥床する、何を煮てる間に何を洗つて次へかける用意をして火をむだに費さぬやうに、お風呂の水は幾杯入れて何時からわかせるといふ具合ですから運動も自然規則立つて此通り丈夫になつたのです、併しまた困ることもないことは御座いません、昔誰々の婚禮にあの親類からは何々を祝つてくれた、だから今度もそれと同じ品をやればいゝと申されるのは一番閉口します、世の中は之丈進んでお金の價が之丈低くなつたのですからと申上ても却々お聞入はなく私のいふ通りにしなさいお前なんかまだ〳〵若いからだめだよと御取上げになりません、而してこんなお使はいつも私にきまつてますので、先方にいつて極りの惡るい思をするのが誠につらふ御座います、それとお宮樣の寄附となるとそれは〳〵は氣の毒な斷り樣をされますのは困ります、尤も今の神主樣は大酒飲で寄附のお金を飲んでしまつた例はあるのださうですがね、其代り姑樣は大の佛教信者ですから本願寺樣やお寺の寄附はどれ丈でもよろこんで出してくれますし、秋の報恩講は年中行事の尤も大切なる一つになつてますの、それから毎年四月のいゝ時候には、かゝさずに本願寺樣へおまゐりをされます、今年はあの名高い親鸞上人樣の六百五十年忌で、京都はそれは〳〵にぎやかだと申こと、私も姑樣と御一緒におまゐりをする筈でしたが、こんな身體になりましたのでと仰しやる、

　登志さんにはいつか私の至らぬため、愚痴な事を申上げて御心配をかけましたけれど、あの時は私まだまだ若かつたのですわね、之位の境遇に滿足が出來なかつたら、假令どんな結構な身分になつても、不足のたえない淺ましい女となる所でした、だから私は思ひますね、どんな六ケしい家風の處へ嫁いでも、自分勝手といふ事をすてゝしまつて、姑樣や夫の趣味に同化し、只家の爲にと務めましたなら、おしまひにはきつと幸福に暮らせる時期があり、又今迄の苦しいと思つた務をも樂しく愉快に出來る樣になるのですね、今私が生

家に歸つて弟達のして居る事を見ますと、何だか極りのつかぬ時間をむだにして勿體ないやうな感じがしますの、ほんに、習慣は第二の天性つてよくいつた詞です、私もまあ此分でしたら、二十年後には亦六ケしい姑となる部でせうかつてお笑ひになる。

あゝ美事なる友の成功よ、六ケしい家風も嚴格なる姑も今は心のまゝにあやつつて常に和氣靄々、一家ますます榮えゆく心地よさ、日毎に此樣を見給ふ脊の君の如何ばかり滿足に思すらん、あはれとこしへに、友の身に幸多かれといのりました。

髪の洗ひ方

皆様お髪をお洗ひなさいましたら、最後にゆすぐ時必ず水油を一二滴づゝたらしてゆすぎますと、かわいてから惡くばさ〳〵致しませんで、しつとりと艶も好くなります。祖母より聞きまして私初め宅の下女まで斯う致して居りますが、別に油をつけませんで流行の水髪に致しても、決して毛の赤くなるやうな事は御座いません。（みつ子）



秋ならぬ霧島山の岩つゝじもみぢ葉よりも照り増りけり　眞好

女教員の待遇

小學校の女教員は、今や全國を通じ、大體に於て非常に缺乏して居るので、是非共是れはモッと殖やして往かねばなりませぬ。併しながら之が待遇勤務の上には、大に研究を要することがあると思ひます。今日は女教員の待遇勤務と云ふことに就いては、外國に於ても種々の研究して居るので、結婚の年齢に制限を設くとか、結婚をすれば教員の職に就けぬとか、いろ／＼のことを遣りつゝあるのです。

日本の現在の女教員は、男子と全く同じ仕事をして居るものが一面にあります。そして他方では成るべく結婚の時機の遅れぬやう、相當の時機には結婚させ、なほ又人の妻となり、家を持つて後も、完全に教員の職務を取らせたいと云ふ考へを持つて居るのであるけれども、今日のやうな有様では、宜しきを得て居るとは言はれません。近頃は外國に於いても教育に從事する婦人が、一身の自由と云ふ上からは、結婚年齢を制限され、義務年限を置かれ、而も仕事は男子と殆ど同じことをしながら、待遇だけを低くゝされる理由はないではないかと云ふやうな、議論を主張して居ります。是れは婦人の身になつて見れば尤のことで、理窟のあることゝ思ひます。或は今後左う云ふ理窟が實現される時があるかも知れませぬが、併し今日のところでは何處の國でも、婦人は男子より待遇が低くなつて居ります。

此世の中の仕事で、男子がしても女子がしても、宜いやうな仕事は成るべく婦人に讓り、男子は男子でなければ何うしても出來ないところの仕事に力を盡し、殊に海外に發展すべき種類の事業に專ら力を注ぐやうにして往きたい。さう云ふ關係上、私は成るべく女教員の數が、日本には多くありたいと願ふのですが、其待遇は外國の女教員が主張するやうでなく、矢張男子よりも一段下つた待遇を受くること、さうして其代りに勤務方は短くし得るやうな制度が何とかして立たぬものであらうかと多年考へて居るのであります。例へば男子なら十人で足りるところを、婦人ならば十五人遣ふ。さうして男子十人分の俸給を十五人に配當すると云ふやうにしたならば、仕事の上に猶豫が出來て、教員をするのに差支ないかと思ふ。元々男子が社會の表面に立つて働くと同一の事業に、女子もたづさはつて、而も一面には、一家を完全に整理すると云ふ事は、到底不可能の事であります。それが假令出來ても私は左う云ふ風なことは希望いたしませぬ。

（女子高等師範學校長中川謙二郎氏）



監獄内の禮儀作法

罪を犯して監獄に送らるゝほどの者にも精神を正しくせしむるは勿論禮儀作法の形ちをも整へしむるやうに仕付くるは流石に文明の獄制なりといたく感ぜらるゝなり、先年或る罪を犯して數年間八王寺の女監房に在りたる女囚の出獄せるものあり、就て獄中の生活を聞くがまゝに記さん。

この女囚は博徒の妻にして其身も賭博罪により入監せるものなるが年齢は四十餘け、氣快肌の辯舌鋭どく、態度はこの社會に有觸れた僞懐なところも見え色淺黒くして肥滿せる大柄の女子なり、髮は銀杏返しを根下りに結び、荒き銘仙の廣袖を着て言葉なども思ひ切つて野卑の方なり。

△お仕事

監内の仕事ですか、それは麥稈眞田、羽織の紐打、鉄盤機織等大抵極つたものです窃盗や、故買犯で行く様なものは、いつれも只居て樂をする事ばかりを考へて居るんですから碌なものは居りません、随つて纏まつた仕事か出來ませんから、大力は雜役に追遣されるのです、其内にも一番厭なものは便所を掃除です、それは二人で桶を擔ぐのですが、其時平常憎まれてゐる取締が付添になつた日にはたまりません、一寸足許を見計らつて過まつて躓ついた振りをしてよろめき倒れるのでございます、其時思ふ様桶の中の汚物を其の取締りに打掛るのですが、過失ですから別に罰にはなりませんが、打掛られた取締はたまつたものではございませんまア一寸一例がこんな工合なもので根性の曲つたものばかりですから碌な事は考へません。

△身じまひ

獄中では朝起ると直ぐに帯を締直して彼是する内に蒲團番が蒲團を四つに折つて番號のある所を出して重ね、薄べりも疊んで重ねるのです、この蒲團番大抵新參の役目です、其れから二側に並んで坐りますと、取締が來て監房の戸を開けて一人々々の番號を呼んで人員を調べ、それから工場へ連れて行くのです、工場へ行くとと顔を洗ひ髪を梳き工場着に着かへて食事をするのですが、こゝに一寸難儀な事と申すのは工場着に着かへる時に身體檢査をするのですそれは裸の上に着物を被つたまゝで、取締の前に立つと着物から帯から何から何までですつかり丁寧に檢査をするのでございます、相應に年を取つた者でも随分厭なものですもの、若い人は随分身を切られるやうなものおもひでせう。殊に冬などは全身中に胼が切れることがあります。

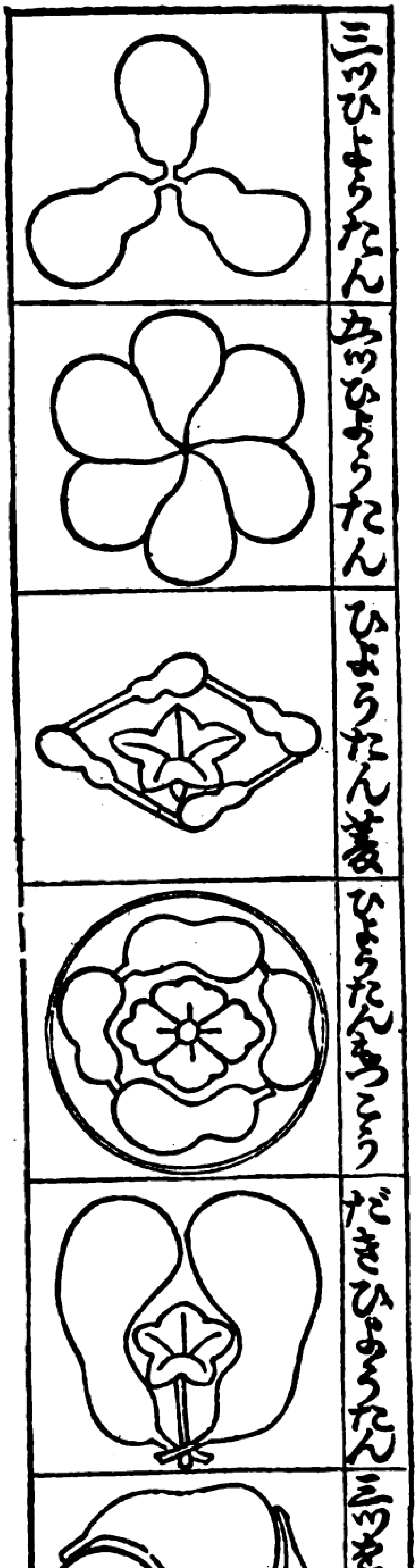
△お食事

檢査が濟むと工場にはちやんと御膳立がしてありますが、食事は作法があつて却々やかましいのです、各膳には一人前のお櫃と汁に香の物お茶碗

に箸か行儀よく並で居ますがお鉢から茶碗に飯を盛るにも二杓子とちやんと定まつて居まして御飯を盛りますとそれを下に置きお箸を取つて押し頂き「いたゞきます」と挨拶して食事に取かゝるのですが、二口御飯をたべては一口御汁を吸ひ其都度に箸を下に置くので、お汁を吸ひ切つても御飯をたべる間は吸ふ眞似をするのです。香の物はいくら食ひたくつてもお湯の時にしか食ふ事は出來ません。どうも却々面倒な、手數のかゝる食ひ方です。まご〳〵して様ものなら食べ終らない内に時間が來るのですから年中お腹を減らして居る者もございます。いづれ監獄に行く者などは平常ぞんざいな暮らしをして居たものばかりですから飯に汁をぶつかけて掻込みたい連中ばかりですもの、いづれもこの小笠原流には實に閉口仕切つて居ります。中にも手早いものは何時の間にか自分御飯は食ひ切つて自分の空の御椀を人のと掏りかへて人の分までも食ふのがございますが、これが發覺して減食されるものも隨分ございます。

△茶の湯の稽古

獄内ではいくら嚴しくされても其の上を超して悪い事を考へるのですから、嚴しいのには困りませんが、善い眞似をさせられるのには一番閉口致します。晝の食事後一時間の休みの間も茶の湯や禮儀の稽古があります。これには皆が弱り切つて居ります。あの赤い着物で巾の狭い帶をして大きなお臀を出しては御茶の稽古も禮式も何もあつたものではございません。此時一人がお客で、一人は主人、今一人は御給仕ですが、此時ばかりは前垂を取り短い着物を長く見せ様とするので、膝を曲げて摺り足で歩くのです。坐るにも前を一寸端折つて坐り、主人と客が對ひ合つて六かしい手つきをして挨拶が濟むと、給仕が眞面目な顔をして盆の上に茶碗を並べたゝのを持つて摺足で運ぶ所などをやりましては、元々腹の中にそういふ心持のない連中ばかりですから何だか可笑しい様で眞面目でして居られません。



近時の醜い習慣

今日の若い男子や、婦人の爲しつゝある動作で、見て醜く、聞いていかゞはしいと思ふやうなこと、而も西洋のそれに比して劣つて居るやうなことは、何れも皆日本在來の風俗ではなく、明治の世になつてから亂れて來たのであります。

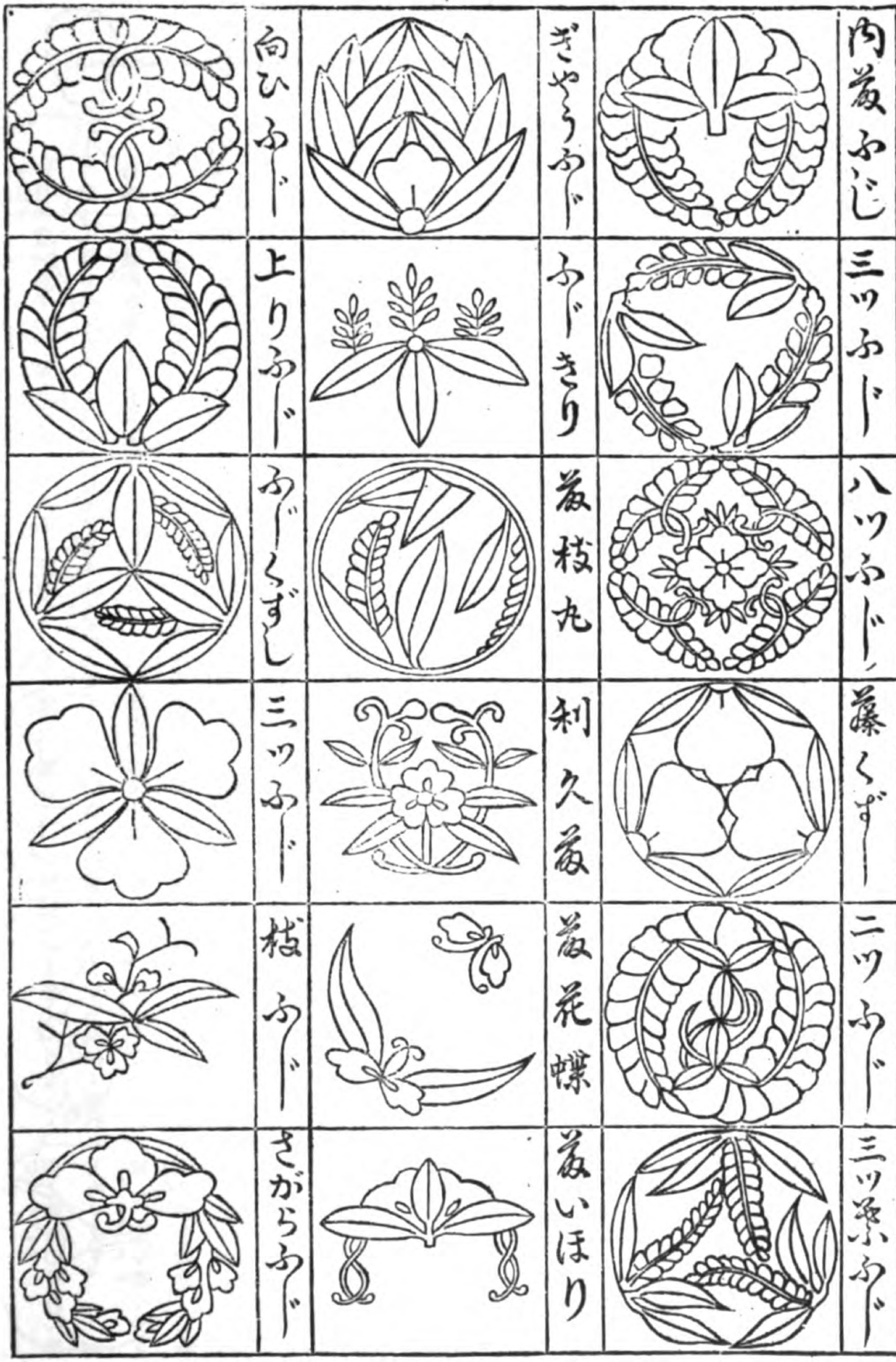
日本人は羞恥を感ずると頭を掻く。或は之れが一種の謙遜の態度のやうになつて、痒くもないのに、殊更頭を掻くやうなことをする人が少なくない。斯う云ふことは、西洋の男子には決してしない許りが、日本でも昔武士道の盛な時分、結髮の時は、濫りに頭を掻くと云ふやうな卑劣な擧動はしなかつた。是れは全く斷髮以來の惡い習慣であります。

日本の若い婦人の中には、人の前で懷中鏡を出して見ることを何とも思はない人が澤山あります。汽車などに乘つて居りますと、風采賤からぬ同車の婦人が、衆目の注す集るにも頓着なく、平氣で懷中から小さい鏡を出して、手巾で鼻の尖の方から額、口の邊、頭の方まで撫でゝ、撫でゝ撫で廻はして居るものを見ることが少なくない。是れも昔の婦人にはないことで、又同時に西洋の婦人にも見ない處であります。

日本の婦人は、動もすれば頭に手を遣る。これは元日本婦人の頭髮は、西洋婦人の頭の毛よりも硬く、其の上に束髮にすると油氣が少ないから、何うしても頭髮が亂れ易い。それ故に少し經つと鬢の毛がぶらさがり、少し強い動作をすると壞れずかゝる。そこで毛がさがりはしないか、ピンが拔けやしないか、リボンが取れやしないかと、始終氣にするので、知らず識ら頭髮に手が往くのであります。これも好く注意して見ますと、西洋の婦人は決してないことで、而も昔の日本の婦人にも無論なかつたことであります。

日本の男子に直きに髭を撫でる。高襟の人ほど餘計に髭を捻ります。然るに西洋人は人の見て居る前などで、決して口髭に手を遣りませぬ。日本の男子も昔は決して髭をいぢるなどと云ふ不行儀なことはしなかつた。顏や頭に手を觸れば、人に對して失禮であると云つて。直ぐに手を浄めた位のものです。況んや堂々たる紳士にして、人の前で小楊枝を遣ふなどゝ云ふ擧動に至つては、論外であります。併しながらその論外の事が、日常我々の目に觸るゝ中流社會に、甚だ少なくないのは恥しくも亦歎はしい次第であります。（三輪田元道氏）

藤の意匠


内藤ふじ
ぎやうふじ
向ひふじ
三ツふじ
ふじきり
上りふじ
八ツふじ
藤枝丸
ふじくずし
藤くずし
利久藤
三ツふじ
二ツふじ
藤花蝶
枝ふじ
三ツ巻ふじ
藤いほり
さがらふじ

東京の臺所に消費さるゝ物資の數量

△水道の水の需要

我が東京市は、人口二百萬、世界中でも倫敦、紐育、巴里に次ぐの大都會である程あつて、其の飲食物などを調べて見ますと、其の高の非常に大きいのに驚きます。先づ市民の水道の水の使用高を見るに最も水使ひの少ない寒中でも一日八九十萬石を下らず、七八月の盛夏の頃になると、それが増して百四五十萬石に上ると申します。月々一人の使用する標準高は、六升と定めてあるさうで、之を二百萬の人口に見積ると、合計百二十萬石になるわけですが、盛夏には何時でもそれが標準高よりも非常に多くなると申します。之を供給する淀橋の淨水場では、通常三臺の機關を用ゐて居るが、使用量が多くなると、それでは間に合はなくて、四臺も使ふことがあります。淨水工場のメートルに現はれる一日中の市民の水の使ひ方を言つて見ると、其のメートルを見て居れば精確に時刻が知られる位なさうで、氣候の暖い時分なれば、晩の四時頃になるとそろ〳〵メートルが昇り出して八時より九時の間が其の絶頂に達し、午後二三時頃一旦下つて、五時から六時の間に又ずつと昇るさうであります。火事の時などは、消火栓から非常の水を使ふけれども、これはほんの一局部丈であるから、水元へは左程の影響はないけれども、家々の女中などが一杯二杯と餘計に汲み取るのは非常な高だと申します。其の證據には、例年七月十四日十五日の兩日は、盂蘭盆がある上に、續いて藪入などがあつて、洗濯物などが多くなる爲めに、メキ〳〵と使用高が増して一年中の最高度を示し、之に反して十六日は著しく減じ、十七日は其の反動で又著しく増すといふことであります。試みに昨年七月の其頃の使用高を見ると左の通りであります。

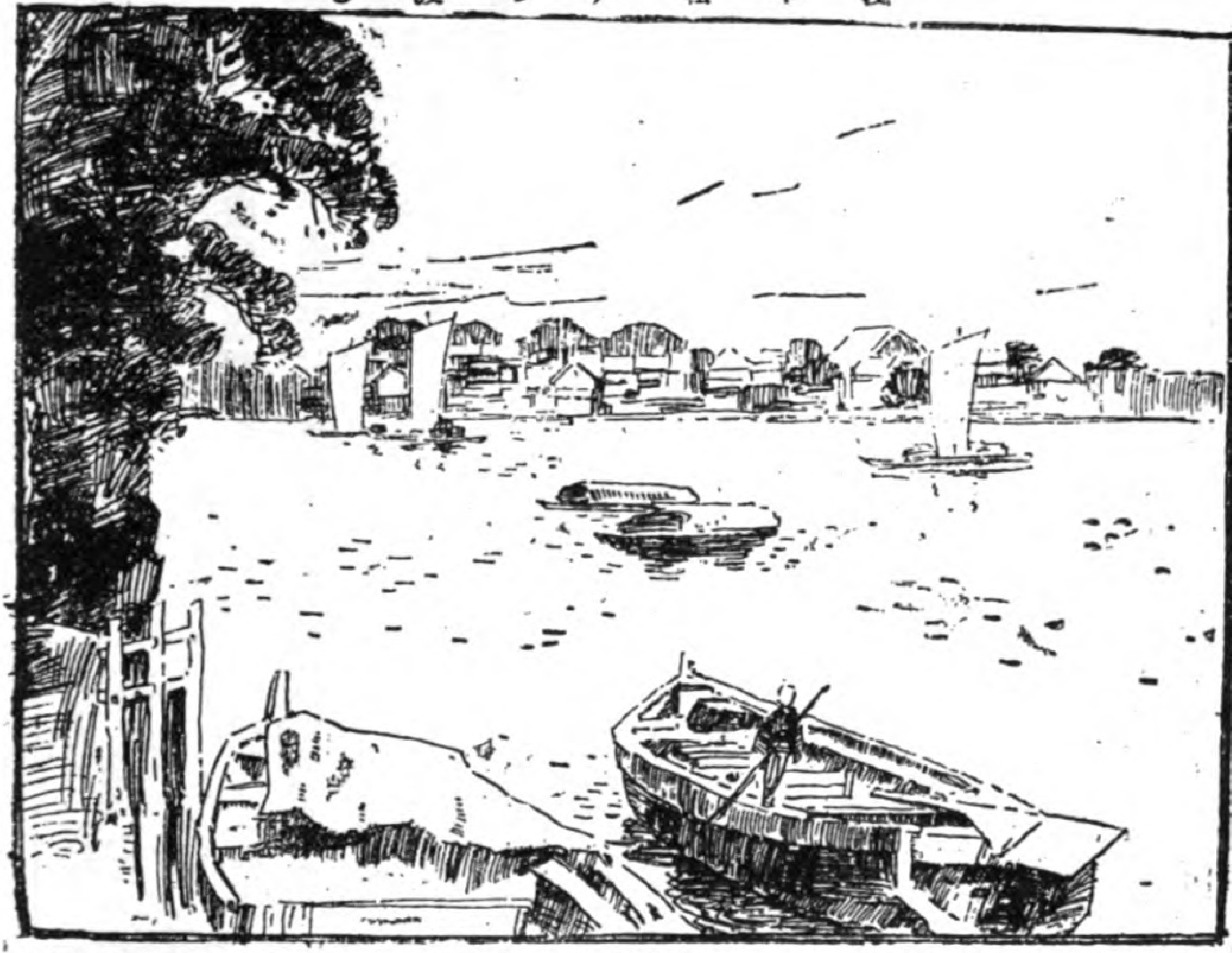
十三日	六百四十四萬八千二百四十四立方尺
十四日	七百十九萬〇九百〇四立方尺
十五日	七百五十二萬千九百〇八立方尺
十六日	五百六十三萬八千八百四十八立方尺
十七日	七百十萬二千五百六十八立方尺

右の數日間の比例は例年餘り變らないと申します。

△日本橋魚河岸の盛況

次に市民の食する魚類に就て見るに、之を扱ふ魚河岸は、問屋が六百軒ばかり之に附屬する飲食店、八百屋、妻屋等が百五六十軒あつて、毎朝此處へ入り込む人數が、市中の魚屋、料理屋、其他の者を合せて少くとも一萬人、其の買つて行く金高は日々七萬圓を下らないさうで、之を一ケ年に積もると、二千四五百萬圓の多額に上ると申します。其の魚類は近くは房總近海、伊豆、相模、駿河灣等で獲れたもの、遠く

淺草松月の渡し



は東は三陸、新潟地方、北海道邊、西は鹿兒島、朝鮮より輸入せられますが、其の中東京で最も賞味せらるゝのは、謂ゆる江戸前とて東京近海で漁れたものです。けれど東京近海の魚類が勝ち美味いと定つて居るのではありません。魚の美味い不味いは、產地の如何よりも寧ろ其の新鮮と否とにあるので、東京近海のが美味いといふのは、つまり東京で其の溌剌たる所を食することが出來るからであります。

△東京の鮮魚の產地

此頃は冷藏方法が進んで、東京へ遠方から輸入する魚類は、多く冷藏貨車で送つて來ます。其の主もなるものは、鯛、鮪、鰤、鯖、鰈、鰹等の大物で、鰯、鯵、鰶等の小魚は絶えて遠方から來ることなく、大抵東京灣、銚子近海で漁れたものが多いさうであります。此等の魚類の產地を調べて見るに、鮪は東京近海では上總の勝浦から興津附近がメジ鮪の本場で、就中銚子で漁れたものが最も新鮮なものとしてある。其他は三陸地方の仙臺鮪、北海道のシビ鮪朝鮮近海のカジキ鮪などであります。鯛は東京で本場物と稱して味ひの最も佳いのは、相州から伊豆、駿河の間で漁れるもので、其他勝浦邊で漁れるものも少くありません。鰈は北海道から來るのが重もで、東京近海で漁れるものは極く少ないやうであります。鯖や鰤は關西其他の地方から送つて來るが、これは近來は東京近海でも漁れるといひます。其外北陸地方から鰤鹿兒島地方から車海老など諸地方から色々の魚類が輸入されます。

△養魚池で育てる魚類

右は主として海で漁れた魚の事ですが、更に現今東京で行はれて居る池中で育つる養魚の有様を見ると、是れ又なか／＼大きいものであります。東京市内にある養魚池は、最近の概算によれば、百五十萬坪の多きに達し、毎年一坪から金高五十錢位づゝの割に魚介を産して、年々七十五萬圓位の物を市民の食膳に上せて居るのであります。今日は鰻、鯉、小鯔、鼈などの養成法は殆ど申分なき迄に成功し、目下尚ほ試験中のものは、車海老、鮎、鱒、鮭などで、車海老などは略成功に近いと云ふことですが、其の中今日最も多く産出するのは鰻で、次は小鯔、之れに次いでは鯉、鼈、とふ順であります。養魚池で育てた魚介の價は時々高低はありますが、普通鯉一貫目一圓、小鯔、鰡一圓、鰻三圓より四圓位、鼈百目二圓位であるさうで、其の飼育費用は、假五十錢の魚類を産出するには、一ヶ年に原料の兒魚代が十五錢、餌代其他が十五錢、合計三十錢位で、差引二十錢の利益があるから、此の事業は年々進んで行くといふことであります。

△めき／＼と成長する

序に其の養魚の育つ模樣を一寸述べませう。鯉は五六歳位になると、養魚池で春産卵して、其卵は五六日位で孵り、其の秋には既う六七寸に成長し、翌年の秋には身丈一尺前後、目方百五十目より二百目位の鯉こくや洗ひなどに恰度適當の大さのものになります。これより大きくなつては、謂ゆる大味と稱して味が落ちて參ります。鰻は春孵化後間もない白魚大のものを川から漁つて來て養魚池に入れるので、其の秋には中串といふ五十目位の大さになり翌年には大串の物に成長します。餌は貝類の磨り潰したのや蠶の蛹などを與へるが、初めは水底で喰つて居るけれども、段々馴れてくると金魚の樣に浮び出て餌を爭ふ樣になります。鯔は四五月頃七八分位の子が川の落口に游んで居るのを捕つて來て池に入れて餌を與へて置くと、秋には八九寸から一尺位に成長します。これ位の時を小鯔といひ今一年位經つて又大きくなると鯔といふのです。鼈は五歳位より卵を産みますが、數は至つて少ない方です七八歳で十個から十五個位、十歳以上になつてやつと二十四から三十個位産みます。之を産むには池の周圍に匍つて出て土を掘り、其處へ卵を産んで上へ土を覆ふて行くので、それが四五十日も經つと孵ります。其の成長はなか／＼遲いもので、二年目で徑一寸位、五六年目には五寸位、一尺以上になるには十三四年を要すると申します。

△賞味せらるゝ牛豚肉

東京市民の牛豚肉の需要の高は是れ又頗る大きいもので東京市へ入るものは、大崎町の中央屠殺場を始めとして、三輪、深川、西新井、寺島、八王子、國分寺、田谷、西多摩郡田村の九ヶ所で屠殺するが、其の食牛の數は明治三十七年には三萬六千餘頭といふ大數を示して

居ります。尤もこれは特別に多いので、日露戰爭中人氣が引き立つて居つたからだといふことで、其の後は年々二萬二三千頭に減して居ますが、他方では、豚肉の需要が非常に增して、四十年には三萬七千餘頭、四十一年には四萬八千二百餘頭といふ大數を示して居ります。此の牛豚は何處から來るかといふに、食牛は多く四國、廣島、尾ノ道、播州、九州の產で、南部邊の產も幾分かあります、併しこれは牛肉としてはあまり佳い方ではありません。最も賞味せらるゝのは神戶牛であるがこれは至つて少ないさうです。此の神戶牛といふのは實は但馬、丹波、丹後、近江邊の產で、これが特に佳いといふのは、一は水と糧秣が善いからでもあるが、今一つは此の地方の人々が牛を非常に可愛がつて飼ふからだと申します。此の地方の人々は、宛も牛の喜び食ふものと見れば、手數勞力を厭はずに持つて歸つて與へるといふ風に非常に愛情が深いので、毛色肉付などが他地方の產牛に比べて非常に優つて居ります。豚の產出は千葉、茨城が七分、東京府下の三多摩郡、神奈川縣下、及び[illegible]岡等が合して三分で、就中千葉が一番多いやうであります。之れは維新當時豚が甚しく流行した時に千葉地方で盛んに之を飼育した其の遺習のあるのと、一つには東京橫濱に接近して居るのと、且つは醬油製造所を控へて居て豚の食料たる製造粕が多い爲めであるといふことです。

△十萬圓の掃除料

東京市十五區四十萬戶から日々掃き出される食物の切りはしや塵芥、これが又非常な高であります。明治三十二年頃迄は、其の掃除は、家主又は差配人が勝手に受負人を選み、若干の金を與へて受負はせたもので、其の頃の受負人は各區を通じて數百人あつたさうですが、これでは仕事に統一がなくて餘程不都合であつたから、三十三年から之を市の直轄に移して、一區每に一人の受負人を定め、相當の掃除料を拂つて、一月元旦の休日の外は晴雨に拘らず一定の人夫を出して五日目每には必ず各戶漏れなく掃除せしむることになし、其の監督の爲めに各區役所から十人餘の巡視員、市役所から十五人の監督者を派遣することにしました。其の塵芥掃除の受負額は區に依て等差があつて、淺草區の月に八千六百十四圓が最高、四谷區の四千七百六十圓が最低ですが、十五區から受負人へ支拂ふ總金額は每年九萬餘圓あると申します。そして受負人の手前をいふと、千葉縣邊の肥料組合と肥料買込の特約が結んであつて、肥料になりさうな塵芥を其處へ賣つて、それから上る代金が、十五區を通じて年に五千圓位のものが手に入り、尙ほ塵芥の中から出る木片類を湯屋へ賣附けて、それからも年に千五百圓位は上るさうであります。

△塵芥の高は六千萬貫目

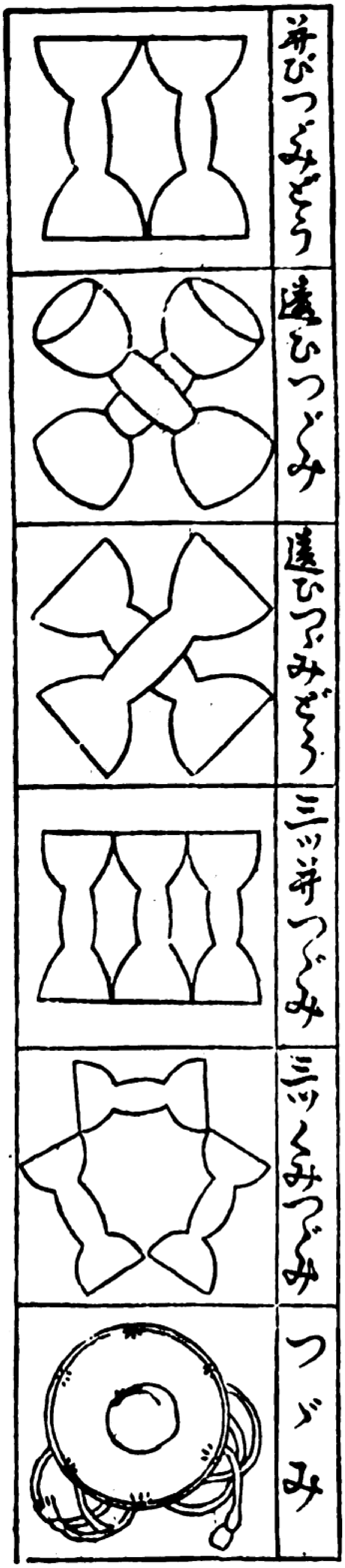
塵芥の仕末方は、市內各所の河岸に都合四十一ヶ所の扱所があつて、每日人夫等が自分の受持區から塵芥を此處へ持込むと扱所には三四人

の區分掛が締切つて居て、肥料にならない炭俵、藁、繩、木片、瓦礫等を選り除け、殘つた物を其處に待構へて居る船夫へ渡し、船夫は船へ積込んで千葉へ運び、又選り除けた炭俵、繩等は荷車で深川の海面埋立地へ運んで燒却し、其の灰は埋立用に供する事にしてゐますが、山の手邊からは埋立地迄運び切れないので、之れは近年新築家屋の續出する市外附近の宅地埋立の希望者に與へて、相互の便を圖つて居るといふ事です。で此の十五區から掃出す塵芥の數量は何程かといふに、一ケ年大抵六千百萬貫目位で、八噸積の貨車に積込むとすれば約三萬三千臺位を要するといふことです。

△人夫の生活

其の掃除人夫の生活を一寸記して見ると、人夫の手當は月平均七圓五十錢即ち二十五錢の日給に當るので、何んな勞働者でもこれで妻子を養へる筈がないが、而かもなか〳〵餘德があるのです。それは自分が受持の塵芥箱から襤褸・空瓶、硝子片、金物類を拾ひ上げて貯めて置き、之を買集める事を專業として居る商人に賣ると、之れが一人一日の平均二十錢内外になる。其の上、料理店、旅人宿などは日々掃出す塵芥が非常に多いので、毎月相當の心附を人夫に與へ、又日本橋邊の商店など裝を飾る營業者も毎月夫れ〳〵手當を與へる。これが一ケ月少くも三圓以上になるので、結局人夫の常收入は一日平均五十錢餘りになると申します。餘德の多いのは日本橋、京橋の兩區で、大商人が住んで居る丈け總ての事が大まかで、塵芥の中にもなか〳〵値打のあるものがあるが、之れに引きかへ山の手は、家屋も清潔なれば塵芥も少なく、なかなか其れがないといふことです。其處へ來ると本所、深川等は一種特別で、塵芥の中から襤褸なぞの出る事が非常に多く、これが又人夫等の樂みにする所得なので、何れも競ふて日本橋、京橋に次いでは本所、深川區の受持を望むといふ事であります。

紋の意匠



日用惣菜 料理の秘傳

△長芋の纖打方──これは甚だ折れ易きものなれば、まづそれに鹽をぬりつけて打つべし、亦結ぶには鹽水につけ置くをよしとす、さすれば如何樣にも意の如く結ばるゝものなり。

△豆腐の細打法──豆腐を結ばんとするに、打ちたる豆腐を煮へ湯の中へ入れ、其湯の手のつけらるゝほど冷めたる時、湯の中にて結ぶべし。

△梅干の纖打法──これはまづ肉を取り、擂鉢にてよく擂り、裏ごしにて漉し、これを板につけ延ばし、如炭に入れて乾かし纖にうち取り放つ時は酢にて濕し取るべし。

△黒胡麻の皮むき法──これは白胡麻よりは一層味よきものなり、其法まづ、胡麻を煎りて煮立たせたる茶の中へ投ずべし、さすれば胡麻忽ち、迸せて甘皮は上へ浮くべし。

△胡桃の甘皮むき法──まづ殼を去りたる胡桃を熱湯の中へ投じ、一ツづゝ、取出し、濡りたる、布片の上へ取あげ、拭きながら小楊枝の先にて剝くべし。

△蠶豆の皮むき樣──これは、蕎麥殼の煮汁にて豆を煮、未だよく煮へざる前に底深き桶の中へ豆を入れ、棒二本を揃へて中ほどを細にてゆるく括り、左右へ押し開きて棒の端を握り芋を洗ふ樣にして揉み洗ふべし。何度にても見る間に皮をむき去らるゝを得べし。

△初茸の砂取り樣──初茸の笠の中に入りたる砂を去るには塗の皿を箸にて挾み又、別の箸にて笠の上を叩けばよく落つるものなり。すべての茸も開きたるものは何によらず、斯の如くすれば砂取るゝものなり。

△鹽松茸の鹽ぬき樣──鹽松茸又は鹽筍の鹽をぬくには生大根を小口より切りて水につけ、其水に入るれば鹽ぬけること妙なり。

△筍の苦味を拔く法──筍の苦味又はゑがらさを拔くには丸の唐辛を入れて煠でるをよしとす。

△蕨のあく拔き樣──蕨の根本を切り桶に入れて灰をかけ、湯を滾ぎ替へして引あげ、水にて晒すべし。

△蓮根を白くゆでる法──蓮根を白くゆでるには一番の白水を取りそれにて煠でるべし。但し蓮根の水より上に出でたる處は黒くなるものなれば、上には張木して（横に木を渡す事）蓮根の浮かぬ樣にすべし。

△もくずの洗ひ方──鹽もくずにても生にてもぬる湯に灰をもみつけて洗ふべし。ぬめり氣よく取れてよし。

△荒布を柔かに煮る法──まづ其ゆでんとする時酢を少しさしてゆでるべし。極めて柔らかになるものなり。

△油に入りたる火を消す法──油を煮返す時まゝ火入りて困るものなり、其時には直ぐに青菜のもの、何にても投げ入るべし。忽ち

に火消ゆるものなり、若しあわてゝ水などをさせば火勢増々強くなりて大事に至ることあり注意すべし、

△固め物の法――胡桃、榧、豆其他何にても固めんとするには、たんきり飴を加へよく煮、器に壓しつけ置くべし。

△鯡の澁味取り様――まづ其煠でる時、鐵の火箸を五六本燒きて入るべし、又炭酸ソーダを入るゝも可なり。

△蛸の煠で様――蛸をやはらかにゆでるには、まづ蛸の足を鹽にてよく揉み、ぬめりをよく去り、白水をよく沸立せて其中に投ずべし、其ゆで加減を見るには太きところを竹串にさし、こゝろみ柔かに通るを度として引きぐべし。

△魚鳥の鹽ぬき様――魚鳥などの鹽づけにしたる其鹽氣をぬくには藁一つかみを一束に切りよくもみて水の中に入れ置くべし。



△鳥の脂を取る法――まづ鳥の脂を鍋の中に入れ、水をさし、その溶けたるところへ南瓜の切を身の方を鍋につくる様にして置くべし。かくすれば其浮きあがりたる脂は皆南瓜の中に入るを取出して置けばよく固るものなり。

△鷄卵を殼ながら輪切にする法――卵を皮ながら輪切にするにはまづ其まで湯の中へ酢をさすべし、そしてこれを切る時にも庖丁の刄に酢を少しをぬるべし、皮ながら切りたるは、野がけなどの辨當に用ゐて可なり。

四季御用 菜果の貯藏法

◎薑は生のまゝにて皮を剝き、薑の末は擂鉢にてすり、皮むきたる莖を鹽漬にし、青汁をそゝぎ入れ、重石を置くべし、これを使ふ時は鹽出して煮れば生の物に異ならず。

◎蕗の薹の若みたる中に取り、あらきだといふ土をよくふるひ、もみ糠をまぜて箱に入れ、その中に埋めて器に目張し置くべし。

◎蕨はまづ灰に鹽をまぜて、漬け込み、重石を置くなり、さて使ふ時に灰を洗ひ落すべし。又鹽ばかりにして漬け、蕗の如く鹽出して用ふるも可なり。

◎筍はまづ皮をむき、よきほどに切り、日に乾しあげて壷の類に入れ、よく目張すべし。又細く切りたるを鹽煮にしてさまし、節と節との間へ鹽をつめ、幾つも〳〵重ねて桶の中へ漬け込むべし。

◎茄子は豆腐の粕一升に鹽三合をまぜて漬込むべし。又乾きたる砂と鹽とを等分にまぜて漬け密封し置くも可なり但し茄子は疵なきものを撰ぶべし。

◎十六角豆は夏の頃出盛りの時採りて煠で、よき天氣に二三日干あげ置くべし冬の寒き時節に煮〆などにして使ふもよし。

◎里芋はよく地を掘りて籾をまぜ埋め置くべし、但し雨露のかゝらぬ樣にする事肝要なり。

◎慈姑は掘取りて土を去り、晴天の日六時間ほど地上に置きて乾かせ、日陰なる床下に乾きたる砂を敷きて埋め置くべし。よく久しきを保つものなり。

◎松茸は石突を去り、莖を糸にて透し、日に乾して圍ひ置くべし、又松茸の莖ばかりを五つ六つに割きて鹽の空俵の中にならべ置き其上より鹽をふりかけて檐下へ吊し置くべし。

◎初茸は鹽にても漬くれども味ひわろし、松脂を粉にし、鹽水に和して漬くるをよしとす。

◎松露も初茸と同じ漬方にて可なり。

◎蓼は陰干にして貯へ置くべし、枝豆は若くして莢の青き中に採りさつと煠で鹽と明礬とを少し加へて輕き壓石をかけ置き其使ふ時一夜鹽出して煠でるなり色何時までも變らずして取立のごとし。

◎薩摩芋は疵なきものを撰り、土を掘りて砂を敷き薩摩芋を入れ、又其上に砂をかけ、よく空氣の入らぬ樣に埋め置くべし、桃は、未だ熟せざる中に取りて生麩を柔かに煮てよく冷まし、鹽を和したる中に入れ、壷につめて密封し置くべし。

◎葡萄はまだ十分に熟さぬ中に取り、乾きたる土に竹簀を渡し、それに一と房づゝ、並べて其上へ板を置き土をかぶせ置くべし。

◎林檎は疵なきものを撰びよく乾きたる、細かき砂を桶の底に敷き、林檎をならべ、又砂を敷きては幾個も積み重ね桶の口を密封すべし。

◎梨は疵なきものを澁紙にて包み藁苞に入れ乾きたる砂の中に埋め置くべし、鹽煮返してよく冷まし、青梅を其中に入れて壷につめ、密封し

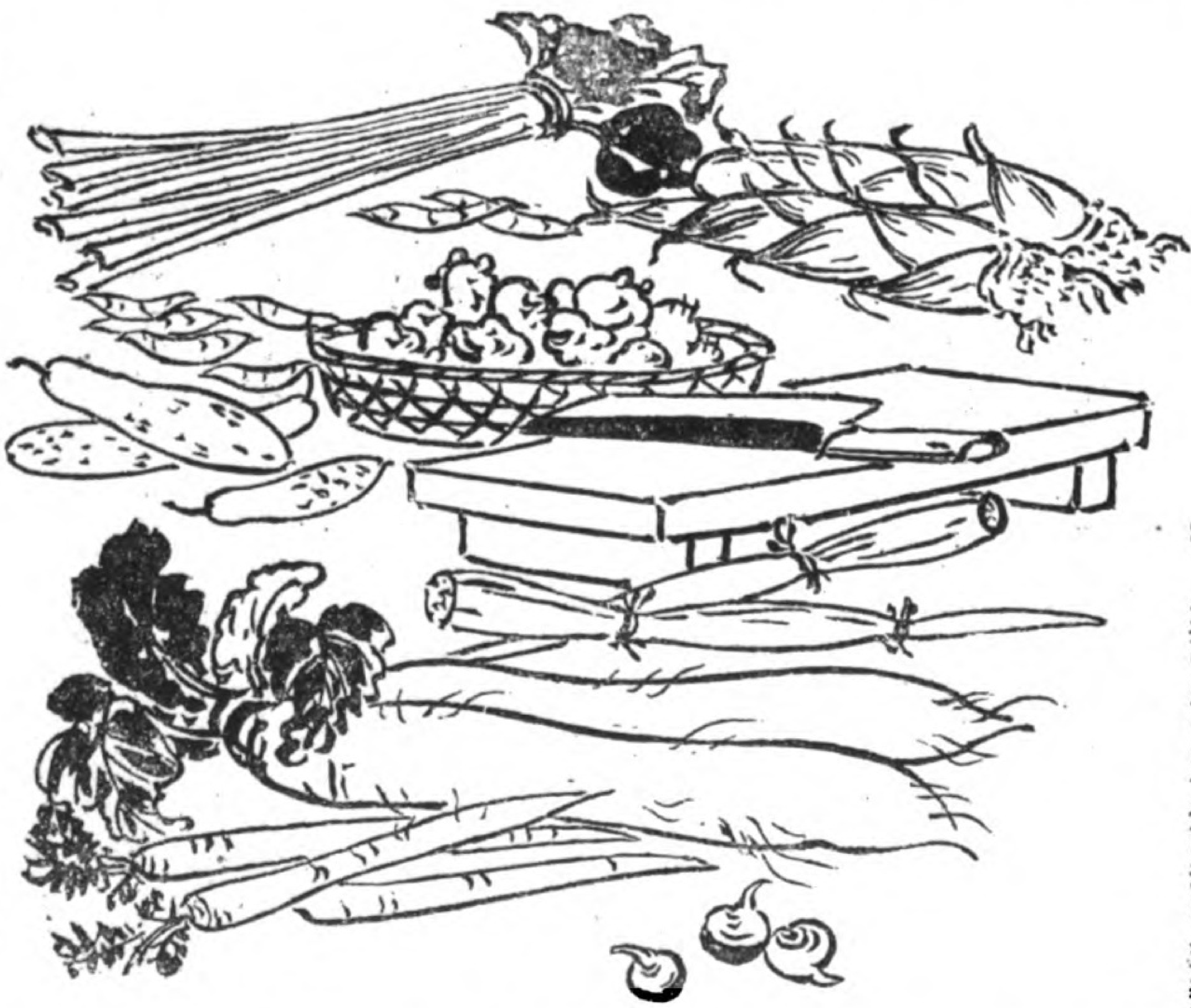
てよし。

◎よき蜜柑に藁灰をかけ其上より湯をそゝぎ、乾かして桶につめ、密封すべし。

◎蔬菜にても、果實にてもよきほどに熟したるを採り、ブリツキの罐に入れ、其中に清き水を十分に湛へ、蓋を閉ぢ、ハンダにて密封し釜に湯を沸かして其の中へ投じ二時間ほど煮て取出し、罐に錐にて小孔を穿ち中の空氣を發散せしめて後更に其孔を鉛蠟にて塞ぎ冷室に置く時は數年間貯ふることを得べし。

朝夕應用　漬物の仕方

大根、人參、牛蒡、蕪、獨活、筍の如き土中に埋れて出來るものは、其根に直接に肥料の注がるゝものなれば、これを漬物とする時には、なるべく注意をせねばならぬ、まづ大根、人參の如きは十分に洗ひ、天氣なれば、二時間ほど日光に晒らして漬くるをよしとす、若し又雨天等にて晒すのが面倒なれば、なるべく皮剝にて薄く皮を剝きて漬くべし、斯くすれば清潔でもあり又上品でもあり、又小蕪や細根大根の如きは、根は元より葉や莖を十分にあらひ、小桶に鹽水をこしらへ、暫時漬け置いてから、後十分水を絞り、漬くるをよしとす、又小松菜、唐菜、三河島菜、京菜のやうなものは其の莖と莖の間に肥料のとどこほるものなれば、少々手數はかかるとも、莖の根元を切り放して十分に洗ひ、漬け込むべし、さて、これをつけるに糠づけなれば其儘でもよけれども、鹽づけなれば、其中に味噌を加ふれば、一層味よくなるものなり、地方によりては味噌を長き糠袋につめて漬ける處あり、斯くすれば味噌



がとけて染み込み出す時にも菜に味噌がつかずして至極よろし又夏季に漬たる茄子、胡瓜、鉈豆等は枝や蔓になるものにて土中に埋もれしものほどに不潔ならねど、是等もなるべくはよく洗ひ、手の掌に鹽を摑みて、それを茄子なり瓜なりへ十分に擂りつけて俎板の上に暫時置き糠味噌をよく、かき交ぜて漬くるべし。

すべて野菜を鹽づけとなすは、野菜其物に附着せる普通の黴菌や、小蟲類は皆この鹽の爲めに殺菌されるものなれば、漬物としての野菜は食物として無害なるものなり、されどこれを洗ふ水、又は俎板、庖丁の不潔なるよりして、折角の漬物を不潔物とすることあれば、漬物を出す時、切る時は十分注意すること肝要なり。

鹽魚干魚の料理法

◎棒鱈の料理法　まづ水につけ置き小さく切りて、細かき刻み昆布を短かく切り、共に交ぜて煮、棒が香を澤山にかける、これを鱈でんぶといふ。

◎鹽鱈の料理法　まづ魚をよく洗ひ、水につけ置き鹽を出す、但し、鹽出過ぎれば風味よからず、出し鹽氣の殘りたるほどをよしとす。

△吸物又は平皿は鱈を筒切にし、これに松葉昆布をあしらひ吸口は胡椒粉。

△煮ぬき味噌吸物は鱈の皮をむき薄く筒切になし、これに丸むき人參、花かつを取合せ、薬味は橙陳皮せん、唐がらし。

△丼物は鱈を賽の目に切り、酒醤油にて煮つけ、胡麻の油少し、落し、千山椒の粉をふりかける。

◎鹽サハラの料理法　甘鹽上品なり、ざつと鹽を出して用ふれば生に劣らず、調理方にて却つてよし。

△吸物はうすすまし魚を身どりて花かつをかける。

△丼は燒目をつけ、蒸して胡麻鹽をかける、取合せは新生姜、つけ紫蘇の實、小茄子の酢づけ、其他見合せ。

△燒物又は向ふづけは、鹽のまゝ大きく身どり燒きて湯に投じ、搾りて煎酒をかける附合せ小蕪薄へぎ、蓮根などよし。

◎鹽鱈の料理法　丹後鰤の上等品を用ふ。

△酒づけ・鹽ぶりを水にて洗ひ、刺身よりやゝ厚く切り置き、別に酒一升砂糖半斤位の割合なる酒汁を作りこれを瓶などに入れ、肉を燒きつゝ次第に其の瓶中に入れて殆んど一杯になりたる後、密封し數月の後に用ふべし。

△鉢魚、又は長皿物、魚を角に身どり湯煮し、白酒をかけて出す、附合せは蜜漬茄子、柚子熨斗など。

△大鉢もの、魚を大きく身どりて鹽煮出し、少し燒目をつけ、酒澤山に醤油少し加へ煮つけて出す、附合せは大根甘煮、唐芋、などよし。

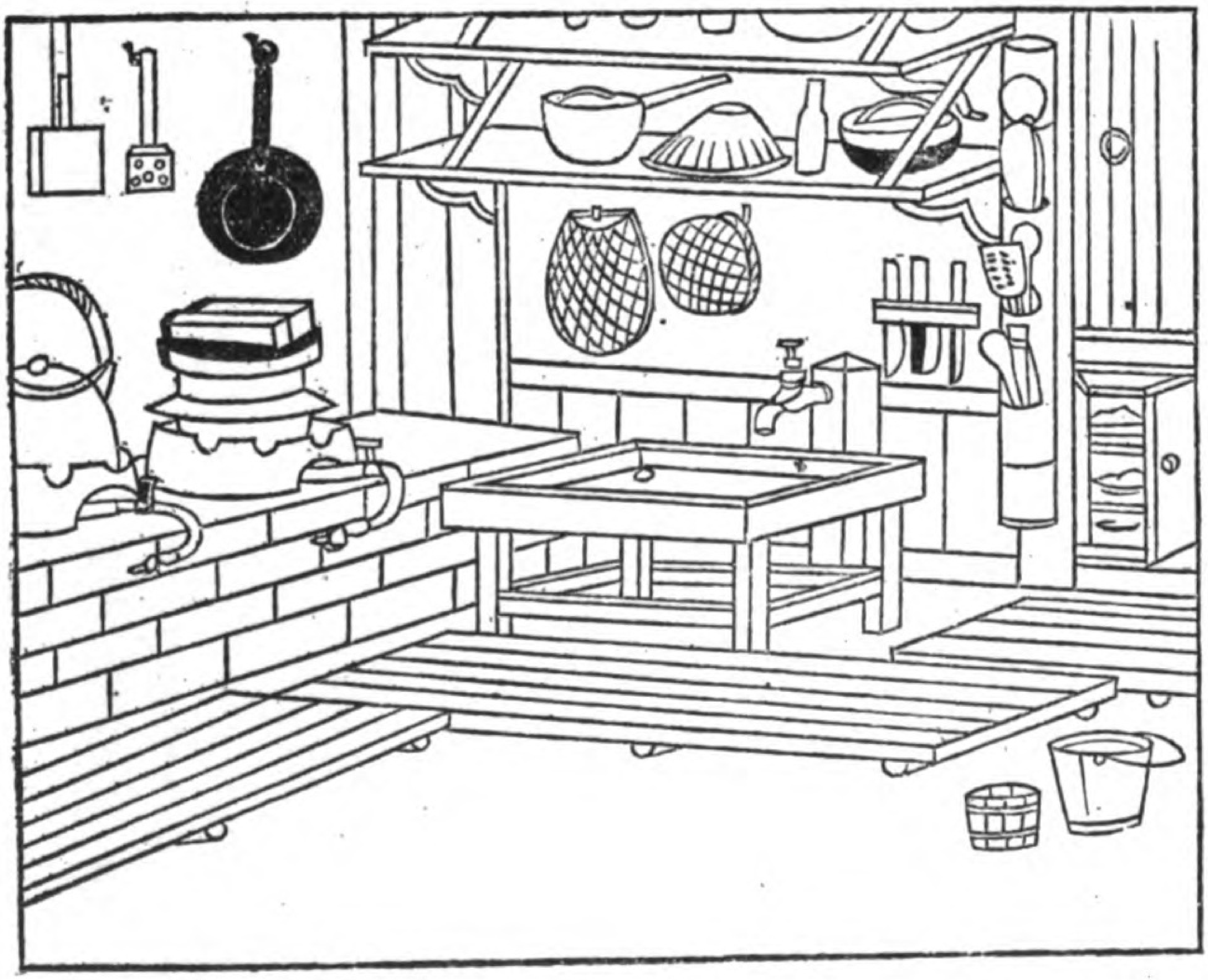
◎鹽鮭料理法　焙烙燒、鹽鮭を其まゝ大きな賽の目に切り、焙烙に入れ、酒ばかりにて煮出し、玉子を上にかけてとぢるなり。

△糀づけ、皮を去り、肉のよき處ろを細かく引きつくりて、糀を酒にてとき、一日ほどこれにつけ置きて、糀のまゝ用ふ、但し硯蓋などには笹の葉に包み合せるなどおもしろし。

△猪口又は小丼ものは鮭の皮ばかりよく水に浸し置き鱗を去り、しぼりて水氣を去り、胡麻の油にてあげ、人參のしぼり汁に醤油を合せてかけろ、つけ合せは零餘子の油あけなどよし。

◎鹽鯖の料理法　鹽を少し出し、水氣をぬぐひ肉をおろし、骨をすき取り、酢につけ置き、よきほどに搾りあげ、飯に燒鹽を加へ、箱に平におしつけ、よきほどに角に切る豆腐粕を煎りてつけろもよし、これを一夜つけといふ。

◎サシ鯖料理法　生鯖を背開きにして、鹽にしたろもの、これを手鹽皿ものにするには、よく洗ひ骨を取り、薄く小口より切りて、蓼酢



をかける。サシ鯖の仕方なれども鹽合よく生の如く見へて風味も輕くしてよし。

◎鹽鰹魚の料理法　よく湯煮にして酒醤油を少し加へ鹽梅するなり、照合せは大根薄へぎ、これをせんは煮といふ。又これを茶碗ものにして出すには湯煮して少し鹽を出しよきほどに切り、蒸して長芋の餡をかけろなり。

◎干鯛の料理法　しろ水に四五日つけ置き。十分ふやけたろほどに引あげよく水氣を去り、半日ほど日にあて、それよりいろ〳〵に使ふなり。これを赤味噌汁にするには、右の如くしたろ鯛を皮つきの儘、八分四方ほどに切り兩面よくこがし燒きて、青干の菜をよく下にして置き赤味噌の本汁に盛りて右の鯛高入にして出す、又これを鉢肴にするにはよきほどに切り、味淋と燒鹽ばかりにて煮て、器に盛りて梅が香をかけ

るなり。次にこれを鍋か香にするには、肉ばかりを如炭にかけてよく乾かし、石臼にてつけば細かになるなりこれを梅ヶ香の如く酒と醤油とにて甘味をつけるなり。

◎干鱈の料理法　これを小丼でんぶにするには干鱈を背骨ばかり骨の香ひより切れば、細さき輪になる、これに味噌豆と鰹節沢山入れて味淋と醤油加減して煮る。次に干鹽物は干鱈を切りよく洗ひ、小さき短冊ほどに切り、壺に酒を入れてこの内につけ、よく目張りして數日を經て用ふ。

◎疊み鰯料理法　たゝみいわしは鰯を煮て、薄く簀にたてゝこに並べて乾かし、固めて帖としたるものをいふ。普通には炒りて醤油なふりて焼くなり、もしこれを吸物に仕立つるには、疊み鰯を水に二日ほどつけ置けば生の色にもどり一ッ／＼ほぐれるなり、生の白魚の代りに椀など入れ、吸口は乾乾苔をもみて使ふ。

色彩と感情

日光の七色並に黒白二色と人の精神上に及ぼす感情との關係を見るに、黒色は何處までも嚴肅、眞面目であります。それに反して白色は爽快、淸朗、喜悅の情が表はされます。紅色は人の心を興奮させます。紅の度の濃くなるほど、其興奮性も增すのでございます。なほ紅の色が非常に强くて暗紅色になると、嚴肅の意が加はり、紅が淡くなると、興奮性も次第に柔げられ、喜悅の情はこんこんと湧き起ります。

橙色、これも矢張興奮性を表はします。併しながら之に暗色が加つて褐色になりますと、殆ど無我を表はすに至り、至つて目立たない色になります。黄色は溫色とも稱へ、矢張り陽氣な興奮性を表はします。黄菊の喜ばるゝも、菜花のなつかしげなるも、皆此色あるが爲めです。若し之に白色を加味すると、更に愉快な感情を加へます。

綠色、これは平和と喜悅の表情と申して宜しい。我々の目は常に此綠色に慰められて居るのであります。併し其濃度を減ずれば、綠色の特性なる平和は興奮性の色に變つて來ます。又之に反して之れに黒色を加へ、暗綠色となりますと、中性の色となり、遂に灰色となるのであります。灰色は無我の色で、殆ど何等の表情がないのであります。故に灰色とか褐色とか云ふ色合は、他の主なる目の色を美しく、或は嚴しく見せやうと云ふときは、配色上最も必要であります。

靑色は一に寒色と言ひ、極めて冷靜な色であります。併し之が淡くなつて空色となると、平和な喜ばしい色となります。紫色これは嚴肅の中にも何となく憂鬱の情を表して居るのですが、これも白色が加つて藤色になると、柔和な情が表はれて來ます。又紫色から紅色に移り往く間の色の紫紅色には、複雑な烈しい色が籠つて居ります。

和洋の室内装飾

桃李園

△正格の床飾り

日本室の床の間の置物は、五具足飾或は三ッ具足飾が最も正格なものとなつて居ります。寺院の佛殿の須彌壇の上の装飾が其れで、臺の上に、中央に香爐一つ其の左右に燭臺二つ、又其の左右に花瓶一對置くのを五具足飾と言ひ、中央に香爐、其の左右に燭と花とを一つ宛設くのを三ッ具足飾と申します。此の飾りは眞の装飾であるだけに、極く眞面目であります。從つて餘り變化はありませんが、而かも器物を選擇して配合すれば、上品で非常に風韻があります。香爐は青磁燒に銀か金の罩のかゝつたもの、花瓶は古銅器の熨斗形か砧式のもの、燭臺は蒔繪物か染付に銀金具を銜したものなどを配合すれば、なか〳〵盡きぬ趣があります

△床飾りの略式

此の五具足飾には變格はありませんが、三ッ具足飾は其れを色々に變化せしめて、極めて略して配列する事があります。即ち花瓶を一方に置き、掛物の前に別に一基の机を飾つて其の上に燭と香爐を陳列する事もあれば、或は花瓶は臺に載せて左側に、香爐は香盆に載せて中央に、燭臺を其の右方にと各々別々に置き、然かも其の器物の大さなども正式の装飾のやうに形を揃へるでもなく、長短大小を極めて不揃に配合する事がありますが、其の變化のある所に又妙味があります。

△餘情ある装飾

床の間の装飾は、古來の方式に從へば、右のやうに飾りますが、今日は高尚な趣味に背かぬ限りは、時候の關係、或は器物と器物との配合等を見計ふて其他色々の物を飾ります。例へば一月なれば破魔矢、破魔弓など、三月なれば雛の節句に應ずるもの、七月なれば七夕の調度といふやうに、其の季節に應はしいものを装飾に用ゐます。けれども彼れもこれもと數の限りを

盡して陳べ立てるのは極めて拙ない仕方で、多いよりも寡い方が却て趣が深くて何處となく餘情があります。床の間の廣狹にも依りませうが、多くとも四五點出來得るならば二三點位に止めた方が好いやうであります。掛物に花、それに香爐か硯箱位があれば十分で、それ以上は濃厚く見えます、尙ほ床の間に盆栽を置く事は、人によつては非常に嫌ふやうですが、畏き邊りの御床の装飾にさへ置かせらるゝ程ですから、これは差支はなからうと思ひます。

△季節と掛幅の變化

掛幅は四季折々に相應した書畫を選ぶことが大切です。又婚禮等の祝事、其他神祭佛事等の儀式にも夫れ夫れ應はしいものを用ゐます。例へば新年には蓬萊の圖とか、日の出、松竹梅、鶴龜の圖等總て目出度いものを掛け、婚禮の宴席なれば以上の如きものか其他高砂のやうな圖柄を選び、三月の節句には多くは雛の畫幅、五月端午には武將の英姿又は鍾馗の圖等、九月重陽には菊花の圖等を用ゐます。又春は花鳥、梅花山水、桃李園の圖等總て麗はしきもの、夏は綠蔭、或は雨後山水の圖、秋は秀景山水、人物畫では陶淵明の圖、冬は雪景山水、寒江獨釣の圖等が好いやうであります。たゞ其の中花卉類の畫幅は、其の花の盛りが過ぎて後掛けるのは甚だ趣を缺き、又庭に牡丹が滿開なのに床にも牡丹の幅を掛けるなどは重複の嫌ひがあるから此等に成るべく避けるやうにいたします。

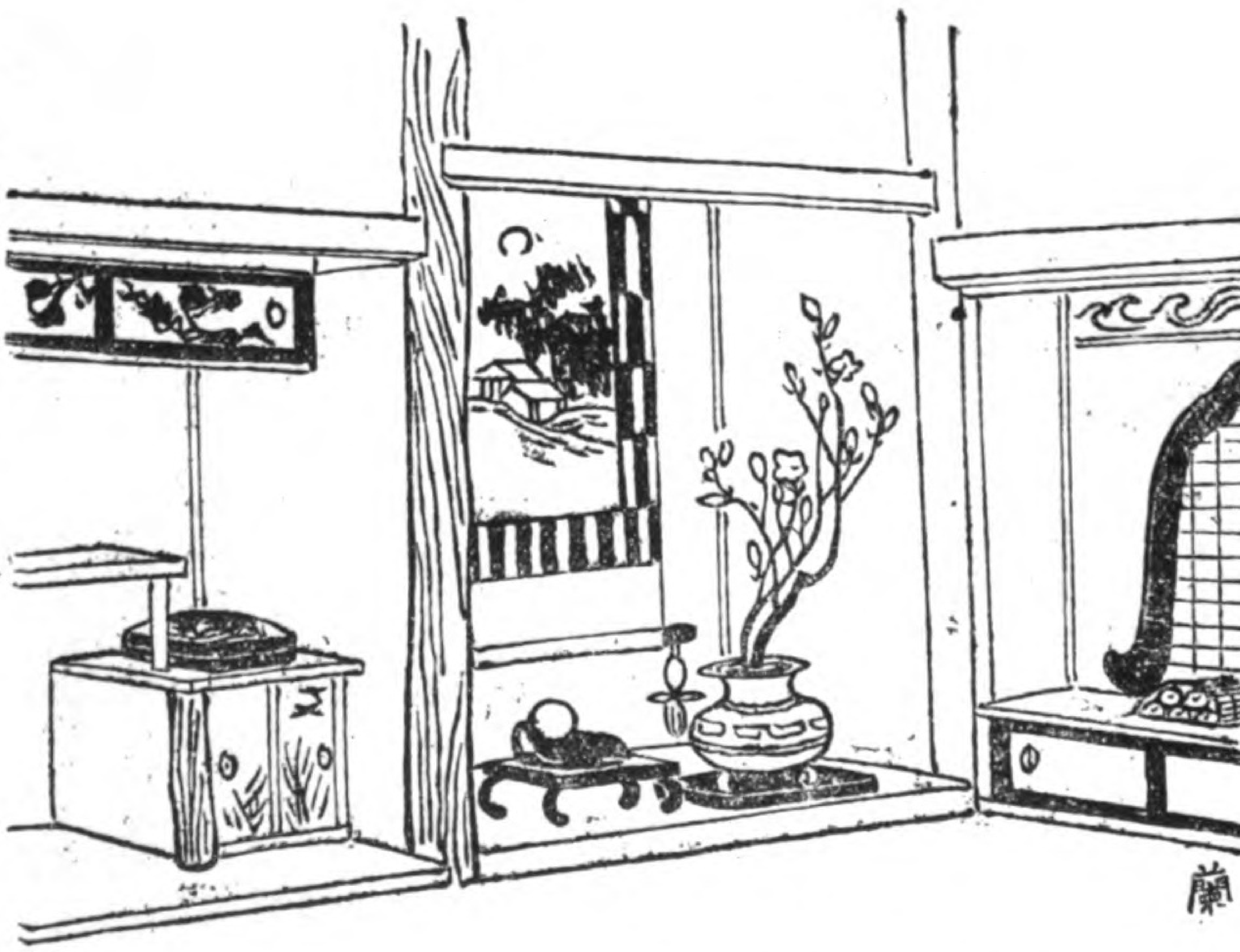
△香爐と一輪ざし

今日、床の間に香爐を飾るには、普通、四方盆か長盆に載せて、床の眞中か、又は他の置物との配置の工合に依て右へ片寄せたり左へ片寄せたりして置きます或は香爐を中央卓の上に置いて其の下に一輪花瓶の花を飾るやうな事もあつて、一寸風韻のあるものです。これは香爐と花瓶と燭臺の三つ具足を一つ臺の上に陳列するのを燭を略して香爐と花瓶とを上下に分つて置く趣向なさうで、普通の装飾としては三つ具足飾りよ

りも却つて氣が利いて見えます。

△違ひ棚と地袋棚

床脇の違ひ棚や地袋棚の裝飾は、上の方に手箱、或は巻物の類、下の方に料紙硯箱、文庫の類を程好く飾ります。或は香道具一式を取り揃へて飾るのも風雅です。其他古鏡、一輪花瓶、彫刻物、塑像等も、他との配合を見て適當に飾りますけれども之れも餘り數の多くない方が奥床しく、夏季は特に少ない方が好いやうです。そして違ひ棚や地袋棚は其れ自身が臺の代りをして居るから、其の上に飾る器物は、特に其の物の爲に造られた臺の外は別に臺には載せません。たゞ一輪花瓶に附屬する薄手の臺、神佛の像などは此の例外です。又違ひ棚の上に盆栽を置くなどは、少し可笑しいかも知れぬけれども、室にテーブルなどを置いて和洋折衷に裝飾した場合などは惡るくないかと思ひます。



略式の床飾り

△附書院の裝飾

附書院は、床の間の貴人の座の日受けの好い一方へ張り出して巾一尺乃至一尺五寸、長さ四尺五寸乃至五

尺位の松板を渡して造り、向ふへ小障子を四枚立てゝあるのが定規で、其の高さは疊の上から凡そ一尺二三寸位であります。これは貴人の文机に代用せしむる積りで出來たものなれば、此處へ飾るものは、文房具呼鈴、卷物などを選ぶのが正式ですが、他の裝飾との調和を考へて其他の器物を飾つても差支はありません。

△文机と書棚

右の外、室に依つては文机、書棚などを置く事があります。文机には蠟色に金蒔繪をしたやうなものもあれば、朱檀、鐵刀木などの唐木で作つた風雅なものもあつて、其の上に置く器物は夫れ〴〵其れに調和するものを選びます。即ち金蒔繪の優美なものなれば料紙硯箱、短丹箱の類か或は一二の物語か歌集など、唐木で作つた風雅なものなれば硯箱と香爐、それに線香筒などを添へて飾ります。其他印材を飾つたり、卷物盆に二三の卷物を載せて置いたり、或は一輪花瓶に一寸とした草花を挿して置いたりする事があります。但し之れも品數の餘り多くない方が好いやうです。又書棚は勿論書籍を飾る棚だけれども、之れも一の裝飾なれば、書籍と共に他の文房具、瓶花などをも併せて飾り書齋に置く實用の本箱とは大分趣が異ひます。假りに三重の開き戸付きの書棚とすれば、上段に卷物盆に卷物二三卷と一輪花瓶、中段に硯箱に書畫帖と香爐、下段に書籍數種を三所位に置くか、或は上段に寫眞帖と一輪花瓶、中段に新刊冊子數種並に硯箱、下段に二三の和洋の詩集を置くなどして飾ります。

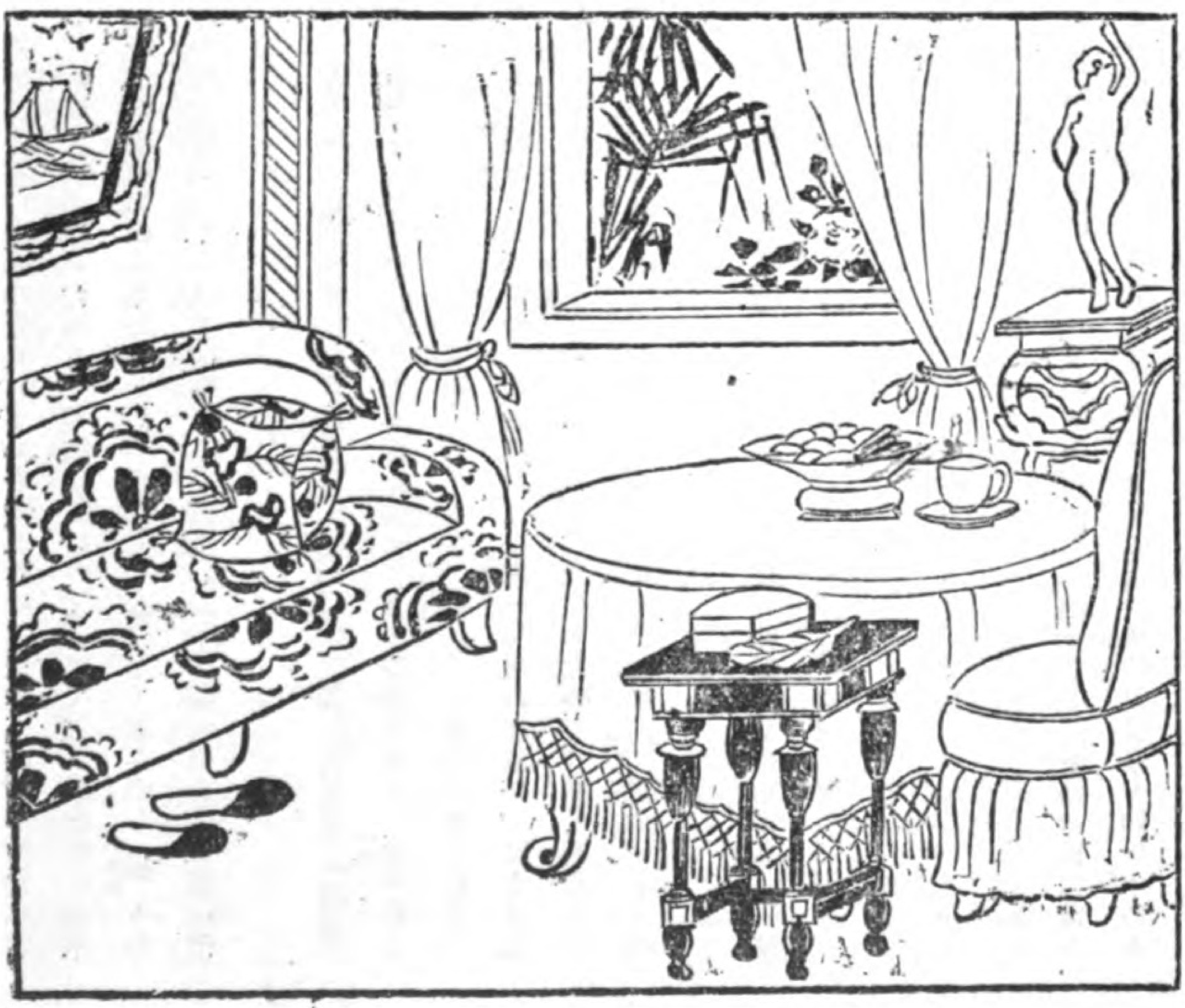
△洋風の室飾り

次に洋風の裝飾に就ていへば、テーブルの上は成るべく簡素なのが宜しく、通常の應接間ならば、煙草盆灰皿位を置けば十分です。盆栽を置くには成るべく別に小形なテーブルの上に其ればかりを飾ります。けれどもテーブルが大きいとか、又小さくても他に置場所がないとか、又は配合の都合がよいとかいふ場合には

テーブルの上に置くのも若しくはありません。又テーブルの上には、華奢な薄盆の上にインキ壺、ペン、封筒、洋紙などを載せて飾ることもあります。又暖爐の上は恰も日本室の床の間のやうに壁に繪畫を張り込んだり額を掛けたりします。そして其の前に燭臺を置けば、花瓶も置き、又其れに一對づゝ飾ることもあれば一瓶一燭と恰も三ッ具足飾のやうに置くこともあつて能く日本の風と似て居ます。これが正格な暖爐上の飾り方ですが、其他或は盆栽を列べたり、時としては盛花を置いたりすることがあります。

白いもの丶洗ひ方

洗濯するに白い物等は殊に骨が折れます。私は此頃白い物にはカルキを用ゐます。カルキは白色粉狀の物で、藥屋にあります。(一ポンド十錢位)。先づ汚れた物を洗つて油氣やあかを落して置き別に糠袋様の物にカルキを少し包み、水の中でよく振り出し、しろ水の樣な色になつた頃、右の切を入れ、一晝夜程浸しておきます。時々はむらの出來ない樣にまぜます。其後水でよく滌ぎますと、眞白くなりますが、此れは毛織物や絹物にはきつくて用ゐられません。又餘り濃いのも地質を痛めます。又解いた水に手をつけたりしますと、非常に荒れますから、カルキをつけた物は竹切か何かでいらはなければ可ません。(名なし草)



洋風の室飾

チブスの要愼

▲チブスには眞症とパラチブスの二種がある、病氣の兆候は最初に惡寒を覺え、夫から毎日續いて發熱する、一寸俗に云ふオコリに似て居るので、最初は感冒か胃位に考へるが、次第に熱が冷めぬのと、規則正しいので、始て夫と氣が付く元來腸窒扶斯は手當さへ能くすれば決して死ぬる病氣でない、傳染病と云ふ名を恐しがつて醫者に診察して貰ふのを厭るのは、却て病を重ならしめ、死を招く事になるから、チブスの兆候があつたら決して隱さずに醫者に診せて醫者の命ずる儘に治療を加へしめなければならぬ。

▲チブス患者の經過は原則として三週間の發熱である、即ち第一期は次第に熱が高まる一週間、第二期は高い熱の一週間、第三期は次第に熱が下る一週間で、此の三週間の後は即ち豫後と云つて衰弱した身體を回復する時期である、病中最も愼むべきは食物で、此チブスは物を食はずにさへ居れば癒るとさへ言はるゝ程であるから、病中の食物は最も注意を要する、固形物は一切與へぬやうにして、牛乳とかソツプとか鷄卵とか云ふやうな物ばかりを與へて居れば宜い、若し主婦が夫の愛に引かれ又は子の可愛さにツイ惡いと知りながら食物を與へるやうな事があつたら、夫こそ大變で、却て此食物の爲めに病氣を新にする事になるから、看護の任に當る婦人は、心を鬼にして夫が如何に叱らうとも子が如何に泣かうとも決して醫者の命に反いて食物を與へてはならぬ。

▲斯くて病氣は經過さへ宜ければ一ケ月も經過すれば屹度熱も平常に復する、只病後困るのは、熱が平常に復すると、患者の食慾が著るしく増して、何でも食べたくなるので有る、此食慾の激しくいぢの汚くなるのは患者自身も呆れる程で、何しても堪へ切ない、で有るから患者の前で物を食べて見せるは、勿論患者の傍には決して食物を置いてはならぬ、或患者は避病院にて折角熱が下つたに拘らず食慾を押へ切れず、一夜窓を越えて梅の實を盜み食つたゝめ、再び病氣をブリ返して死んだとも傳へられてる、若し病後に食物の攝生を怠る時には病は再び襲ひ來り、以前よりは更に重く、其結果は腸出血となり、遂に死の不幸を見る、要するに一家にチブス患者が出來たらば、直に之を病院に送ること、看護の任に當るものは心を鬼にして一切患者の懇願を聞き容れぬようにする事、之れ實に患者に對する眞の親切で又最も効果のある看護である。

見榮坊の失敗

花あやめ

○

看板主義

高等科へ行つて居る娘を其處に置いて、よく女學校へ遣る遣らぬの話が出ました。

「未だ二月先の事ぢやないか」と晩酌で顔を紅らめた父親が揚枝を使ひ乍ら申しますと。

「二月と言へば直。もう何方なりと定めといてやらねばねえ」と母が言ふ。

「それも左樣だが……」父が一寸默ると母親はさもさも忌々し相に。

「まあ面倒な事になつて來た。今の世の中は猫も杓子も學問々々と言ふ物だから家の子迄如何かしなきやならぬ樣になる。妾の子供の時なんか女には學問さすと惡いと云つて武士の娘は算盤なんか習はなんだものだ讀本と言つても國盡し、女大學位だつたのに今は……」

「そりや時世が異ふ」と父が一喝して終ふと。

「お前、如何しても學問がしたいかい」と母は鋒先を娘の方へ向けて、分り切つた事を訊くのでせう。娘の方では別に學問がしたいとも何とも思つて居ぬ、いえそれ處か此上嫌な歷史から裁縫で苛められるのは溜らぬと思つてたのですが、唯、今迄のお友達が大抵行くから何かなしに自分も行つて見たい、無論母親に斯うきかれて首を横に振る筈はありませぬ。

「木村さんは？」

「木村さんも入來るの、此間左樣云つてらしたわ」

「ふん、木村さんも入來るのかい。木村樣が遣れるものなら、ねえ貴方、家だつて……」母の心の中には木村樣が會社では主人より下役であると云ふ事を思つてゐました。

「他人の事は如何でも良い、たがそんなに言ふのなら卒業さす、さゝぬは別として入學てやればいゝ」

「さうですとも。家のなんか別に教員をさそうと云ふのではなし、卒業せぬ内でも良い處があれば遣るのですから……兎に角今の御時世は女學校へでも行つて居ぬと嫁にも貰つて呉れませんからねえ。ですが行くとすればどれが良いかしら（一寸考へて見て、娘の方を向いて）……お前「淑德」にしては如何？　あすこなら入れるに定つてるし、なあに男と逢つて帽子の徽章があるではなしさ。女學校と言へば世間體に變りは無いよ」

……是は此間さる家で聞きました問答でございましたが、世間には子供の教育迄世間體でする家がございますのねえ。何處の家も何處の家も表面は皆綺麗に見えても一寸裏へ廻つてお勝手元拜見となると種々な可笑しな事があるのです。

こんな話がございます。或知り合の身分のある人の息子樣を中學の試驗を受ける間、預つた事がありました。もうそろ〱暖くなる時分だつたので蚊帳を買はうと思つて蚊帳屋を呼んで、見て居りますと其處へ其子が遣つて來るのでせう。そして暫く應對の樣を見て居りましたが頻に自分の袂を引きますの。其時は何の積か分りませんでしたが、何かの序に席を立つと自分も尾いて來て

「あの蚊帳買ふのお止しなさいよ」と鹿爪らしく言ふのです。「何故？」と訝かると「自家なんか質屋から買ふんだけど、質屋からだと半價で買へるとお母樣が云つてたから」と言ふのでせう！。

又或時も、「貴女のお父樣は何時もモーニングを召してられるのね」と何氣なしに云ふと、

「お父樣はモーニングしか着られないの。」と得意になつて「洋袴のお臀につぎが當つてるから……」是には私も顏から火が出ました。其處に此方の下女等が居るのにねえ。下女は「まあ面白い坊樣！」と笑つて居ました……

これから思ふと外での金の吸口の卷莨を口にしてた方がお宅では國粹保存で、「埃及」を「大和」にしたり乃至は「富士」の袋から「朝日」が出たりするのは未

だ罪の輕い方。他人には可成的よく見えたいと云ふので、一人でも廻り切れるのに下女を置いたり、住む家も門構丈なりと大きいのをと、より好んで、俎板の様な標札に何々寓としたのは、これより大きい御本宅が無いでも無さゝうな謎。慈善音樂會は白劵でなければ行かぬ、汽車は二等でなければ嫌、見送人でもある時は猶更と、種々な苦心をする人もあるのですからねえ。

「良いんですよ。女中はあゝして置けば」或奥樣が召使を連れて旅館へお泊りなすつた時斯う仰つたのを聞いた事がございます。



「何處の國に女中が主人と同じ物を喰べる處があるものですか」

それが唯一晩のお泊りでした。平生ならば兎に角たつた一晩の事を：…と何だか淺ましくなりましたが是も御家風とあらば是非もない事でせう。

○

間口主義と奥行主義。

町家へ物を買ひに行く時、間口がうんと廣くてスヨ

りと並んで居る番頭や小僧が「入來！」と言ふと、ドクリとする樣な店がありますね。處が直其處が奧庭なのですよ。かと思ふと薄暗い鍵の穴の樣な店で注文すると品物を幾らでも奧の方から擔ぎ出す店がございます。又懸を取りに來るお上さん達の一人に「此頃の御景氣は如何です」と訊くと
「いえもう相變らずの不印でございます」と濕つぽく言ふので世間馴れぬ妾等は「氣の毒な事だ」と氣を揉んでゐると、よく〳〵聞いて見れば、どうして〳〵、裏の方にこつそり地所を買つて居るとの事。また中には
「はい、お蔭樣で追々と繁昌いたしまして」と云ふので、誠に結構でと他人の事乍ら悦んで居ると暫くして店が閉つて居るのでせう。
「はあ、あの家は手狹になつたと見える」と聞いて見れば月夜の晩に明家となつて居たとの話。曰不可解と言ふ理でもありませぬが、ほんとに分らぬ物は雙六の骰子と家の中ですねえ。

○

規律主義

こんなお宅もございました。奧樣は或學校の家政科をお出なすつた方なのですが、御伺すると先目につくのは玄關脇の極に小さい奉書の紙が張つてあつて「御用の御方は此釦御押被下」と女文字美はしく書いてあるのでした。鈴がいる程廣いお宅でもないがと怪しみつゝ案內を乞ふと出て來たお女中が、
「今日は生憎御主人はお留守で。あの毎週水曜日はお宅で入來います」と暗に訪問日をほのめかした體。爲事が規則正しい性の、綺麗に取片附けた茶の間には、其日の行事を碁盤の目の樣に時間割に割つて、お惣菜何々と寄宿の賄表の樣にして、偶々臨時の來客がある時でも大抵の折は有合せの材料が間に合ふのでした例へば燒肴になる魚肉が二人分の吸物に分れたり、カツレツになる筈の肉が玉子をお嫁にして二皿のオムレツになる等は有勝の事で其が奧樣の御得意なのです。かと思ふと或雜誌に深呼吸が良いと書いてあつたと

言ふので六時が鳴ると先お子樣から引起し一列に庭先に立たせて、東を向いて、お母樣雙共にはあ〳〵ぱくぱくと鯉が上水でも飲む樣、こんな風なものですから何から何迄奥樣一人で切廻して、八百屋が來れば先御自身御出馬に相成つて「此お茄子幾ら？」と價を尋ねて置いて「選つても良いのね」と否應なしの高手的にお出なさるのです。ですからお出入の評判は大變惡いのでしたが、商人に受の惡いのはそれ丈此方の家政の巧な處と少しも氣になさいませんの。勿論何でも帳簿にお控へになるのですよ。偶僅の物でも書き忘れたとなると、さあ大變。考へて考へて考へて寢所へ入つてからでも暗闇にお目をパチクリさせて考へられるのでせう。そして「アヽ一錢で膠を買つたのだつた」と思ひ出すと今迄張詰めて居た氣が一時に弛んで、ずつとお休になるか如何か保證の限ではありませんが、兎に角一種の家風ですね。



こんなに規則づくめと言ふのも見樣に依つては隨分滑稽で、氣心を知り合つた者許居る、高が家一軒治めるのに……と笑つた人もありましたが、笑ふ方が正しいのか、笑はれる方が進んで居るのか一寸見分がつき兼ます。

丸出し主義 ○

妾の從姉の家ですが……餘り有福な方でもないのですが家族と言へば祖母と夫婦と娘二人……さる夫人等に見せたら嘸不規律な家庭とお愕きなさるでせうが、それでも野性を帶びた妾達には口に言へぬ面白味があると思はれますの。萬事が丸出し主義、つまり家の中の事と外見との區別を出來る丈少くせうと云ふ遣方でまあ是丈で處世の上の煩悶の六分は除ける理ですね。—光つた絹よりも暖い木綿を着やう。門口は狹くても日常の良い家をとの調子で、例へば「御免なさい」と言つて來客があれば、主人でも誰でも其儘の風で出て來て「さあお上り」と眞奧へ通すのですが時には着物の綿等を入れて居て取亂してる時なれば

「ホヽヽお通し申しましたが此有樣で坐る處も御座いません。一寸お待ち遊ばして」とお客の前で片附けるといふ有樣。凡て平民的に家の底をも人に見せるので、御飯を出すにしても有の儘の手製を、家族と一緒に食べるので、初の者は少からず愕かされるのでした

而し來客の方からすれば、斯うしてもらう方が幾ら親し味があつて良いか知れぬので、「ハイ」との返辭許りあつて玄關へ却々取次が出なかつたり、乃至は御飯前になると下女が、こつそり手提を下げて歸つて來たりするより心持がよいのでした。

と云つて萬事此調子で行けば、それは不都合もありませうが、併し誰に向つてゝも眞心さへ以てやれば：……ホヽヽ、妾とした事は急に道學先生の樣な事を云ひ出して。まあ是位にして置きませう。





下婢の目に映じた様々の家風

田舍娘

下女風情の私が彼れ是れ主家の批評めいた事を申ますのは身の程知らぬ事ながら、初奉公の十七の春から二十の春迄丁度只今の御家が三度目、いづれも海軍士官のお宅許りで、大抵はお國許に兩親を殘して新家庭のまゝ軍港に出て居られます、それも二年と同じ港に居らるゝ方は少ないのですから自然お家の風も簡易に、大名華族の奥向きや地方の舊家の臺所の樣に代々に傳へて行かれば成らぬ格式のむづかしさも、將官以上の處は知らず佐官尉官の方々では先づ無いと申してよろしく其上御主人はお留守勝ちの事故何としても奥樣の氣風が其儘家風と成るので御座います。

初めて見習ひの名の許に連れられて上りましたのがA小佐のお家、御夫婦にお子樣二人東京からお供して參つた婆やが萬事切り盛りを致して居りました。武士的家庭とでも申しませうか朝は御夫婦共夏は四時冬は五時起床、十二の孃樣から八つの坊ちやん迄霜置く冬の朝も短夜の明け易い夏の朝でも少しの容捨無く同時にお起しに成ります上、お召し換へに少しでも手間が取れますと嚴しいお呵り、お午も召さないのにと お可哀相にも成ります、お子樣方が食事の時も副食物は別に致し御飯のお代りも幾つと定めて あります間食も午後の三時に分量を計つてお上げに成ります、幼ないながらも家風を飲み込んでよく命令をお守りに成りますが其處は子供の事ですから他家で變つたお菓子でも頂きますとすぐお腹をこはしてしまはれるのです。

御主人から召し使ひ、お子供樣に迄一々時間割が書き付けてありまして一の手をぬく事も一分のごまかしをする事も出來ません。宅でお湯を立てましても雇人ははいろ事が出來ません、洗濯盥から物乾竿迄區別を立てゝ置處も別に爲つて居ります。旦那樣にはめつたに女中より物を申上ぐる事は無く一々奥樣が御前に手をついて取り次がれます。來客がありましてもお招き申したので無ければ御膳を出す事は御座いません。旦那樣も奥樣も外出の時何時に歸ると仰しやれば五分とちがつた事は御座いません。慣れませぬ内は軍隊にでもはいつた樣で窮屈に感じましたがそれでも一年辛抱しましたお蔭で何事も手早くきまりよく出來る樣に成りまして賞められて居りますのも其感化と今に難有く存じて居ります。

冬の或る日の事　お庭を掃いて居りますと奥様がお呼びに成りますのでお緣近く參りますと、私の羽織の紐をお持ち上げに成つて、此帶の結び方は何ですいつ人様が來られても見い樣に　なぜきちんとして置きませぬ、羽織の下だからと好い加減に結んで居る樣な横着氣が有つては成りませぬとお叱りを受けました。

其方が旅順に御轉任後或米屋の世話で參りましたのはB機關大尉の宅、奥様御出勤の旦那様を玄關にお見送り遊ばしてもA夫人ならば三指ついて御挨拶あるべき處も立ちながら握手をしてのけてお早くと許り、A様とは打つて變つた放任主義のハイカラ家風。旦那様は家事一切申迄も無く奥様任せ、御自分のお身の廻り迄春の袷を秋仕立て直してお被せ申しても又新調したのかと仰しやり奥様の庇髮が丸髷に變つても一向氣が付かない月給は袋の儘なげ出して、オイ煙草が無いから買つてくれと仰しやる風な方、似た者夫婦とはよく云つた物で奥様が又細かい事にコセ〳〵するのがお嫌で魚屋は魚屋まかせ青物は八百屋まかせ、臺所はめつたに覗きも成さらない御器量の見いのに念入りのお化粧で水のたれる樣なお美しさ。赤い手柄に鴇紅色のお髷羅しも似合しく是れが九つの嬢様持つた三十に近い方とはどうして見えませう、流行物は三越メイムスで研究して新物はお見のがしに成りません月々の婦人會に出席のB婦人の御服裝で最新流行の相場が定まると申程同僚夫人方の羨望の的に成つて居らるゝのもお國に大した財産がお在り遊ばせばこそ、然し女は何處迄も虚榮の固まりでありますっ此帶も此小袖もと我物のみならず嬢様の迄新調の度に實家の仕送りと誰れにでも御自慢が出來ますのでいかにも旦那様意氣地無しの樣聞こえお氣の毒に存じます。

何の夫人會何の集まりと毎日のお出かけで嬢様も家も女中任せ食事も起床も何も日々時間はまち〳〵なので働き見い樣で一向働きばえが致しませぬ自慢ではありませんが私が居ります間は箸一本もむだにせぬ樣、嬢様の上も及ばずながら御注意申して居りましたが病氣でお暇を頂きましてからは心掛の惡い女が來てお臺所をかき廻して居なければよいがと餘計な心配をして居ります。

只今お世話に成つて居りますのは、大佐のお家、旦那様は〇〇艦長で遠洋航海の御留守、御隱様奥様外にお子様は十六と十四のお嬢様の下に十三を頭に五つ近の坊ちやんが四人賑はしい御家庭であります、雇人は小女と私の二人、皆様お心の美しい方許りで正しい規律を供へて而も厳に過ぎず上下の隔て無く打とけて而も長幼の序を亂さず和氣滿ちて春の樣な中に寒月梅花を照らすと申す樣な凛とした氣風を混へた奥ゆかしい御家庭であります。奥様が姑に當る御隱居様に對しての御孝心の厚さと御隱居が奥様に對しての敬愛の深さがやがて此美風の源を成して居るのは申迄もありませぬ。只一方は篤志の佛教信者で一方は熱心な基督教信者でありながら、心より打とけて信仰を尊敬しあうて居らるゝのはお珍らしい事であります。二人の嬢様は女學校に通學の傍ら母上を助けて家事の練習に餘念も無く晩餐のお料理はお二方交代でお露とお皿を受け持たれ學校の料理法を實地に應用されて居ります。奥様の外は

御隱居樣もお子樣方も下女を呼捨てに成さらずさん付けに遊ばして下さいます、お五つの坊樣が誰れも敎へませぬのに毎朝目上には申迄も無く臺所へ迄はざ〳〵見えて私共にも可愛いお手をついてお花お早うと仰せられますので勿體無くて難有涙がこぼれます。見識高い軍人の家庭では他に無い事でありませう。凡て少さい方も自分の事は自分で處置する樣に成つて居りますが洗濯物や雜物は奧樣先きに立つて嬢樣や女中を指圖遊ばし手早く形付けて仕まはれ仕立屋に出す事はありません。私共も自分の物を人に頼まれば成らぬ樣では他日世帶が持てぬからと常に敎へられて居ります。

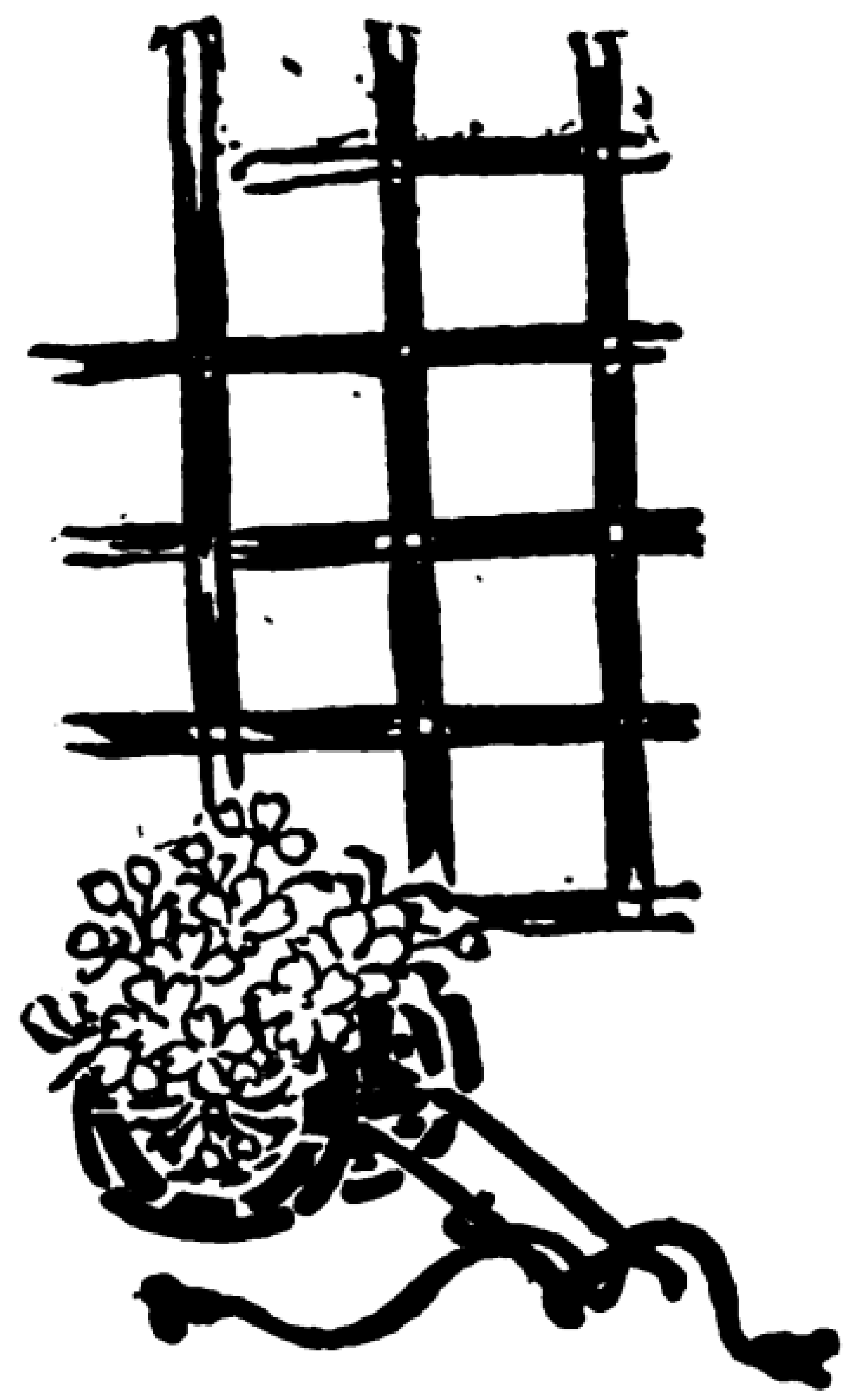
夜は皆樣修養上の讀書を遊ばし私共も同室で力相當の學問を敎はります。娯樂の方は御家族が多いので毎月一回は何誰かの誕生日を祝ひます又病人の無かつた月は末の日にお祝ひの集まりを致します、是等の日は一切無禮講で御隱居樣にも御同席を願ひ初めに奧樣の修身談がありまして次に五つの坊樣から始めて私共迄種々日頃の感想を述べあひ批評をして頂きます、それからお臺所で出來ました海苔卷やお菓子を頂きながら籤引でかくし藝を致します、當日の樂しさは言葉にも盡せませぬ私で此樣な催があればこそ日頃一々時間割で縛られて居るのでも重箱の隅を楊枝でせゝる樣に細かしい事に迄お小言を頂くのでもありませんが、自然と一分間もあだには費さぬ樣炭一片も捨てられぬ樣成るので御座いませう、御隱居樣は家事向きにお係り無く無邪氣なお孫樣のお相手を成りつたり一週に一度のお寺參りがお樂しみ、奧樣は敎會行とお務の交際や婦人會にお出ましの外格別氣保養らしい事も遊ばさず御子樣方の成人をのみひたすら樂しんで居らるゝ樣に見受けます。

日曜等には六人のお子樣の友達がそれ〴〵三人五人づゝ集まりおあばれに成ります事も隨分烈しく天井も床板もぬける程の騷も奧樣は煩くも思し召さず子供の嬉びさうな御馳走をしてお待遇に成ります、先日も或方が見えて私共では二人の子供が一日宅に居りますのでさへ煩くもあり用事も十分出來ませぬ故日曜には辨當でも拵へて遊びに出す事に致して居ります、お宅樣では大勢のお友達迄一緒に遊ばしておわづらはしくお在りに成りませぬかと申しました時、奧樣は子供が外に出して居ります間は行く先きが知れて居りましても、どの樣な惡戲をして居るか惡るい感化を受けてはないかと誠に心配で御座いますが、家に居ります間はよそながら見てやる事が出來ますので誠に安心で御座います、それを思ひますと少々手のかゝります位は何でもありませんと笑つて居られました。

此樣に家の中に行き届いて居らるゝ許りで無く、外に對しても實に思ひやり深く同僚の方や部下の方の家族に吉凶の出來事のありました時等、我家の事の樣に出來る限りの世話を成さいますので 實家の樣に便りにして何事が在つても相談に來らるゝ方も少なくはありませぬ、先日もお濟さんの申します事にはこんなお家に奉公して居りますと私の樣な我儘者でもいつの間にか温順らしく利口に成つて行く樣に思ひます、御隱居樣から小さい坊樣迄始終ニコ〳〵して居られますからニコニコ風とでも云ふのでせうかと、實に其通りで當家の家風を一言に申惡くせばニコ〳〵、主義に外ならぬので御座います、私も今に痩世帶でも持つ樣に成ましたらたとへ十分の一でも御家風に習ひ度いと存じて居ります。

涙のひそめる家庭

花筏



「果報を取り越さぬ」、とは此家の祖父なる人が口癖の様に日々繰り返される言葉で御座います。と云ふ譯は先づ春ならば花見に人が出かけ様と云ふ日でも自分がそれだけの餘裕が有り乍ら例の果報を取り越さぬ趣意から、今樂しみを取つては後々の報いも恐ろしと許り終日家に燻つて居られるんで御座いますよ。

家は可なりの商家で御座いますから、隨分出入りの人も多う御座いますが、「何てまアお固いんでせう」と噂せぬ人はない位なものなのですよ。ですから店の小僧たちは「また天保錢が」と笑つても居ませうが、自分はどこ迄も謹厳身を持する、とでも申しませうか、雨の日も風の日も八十の老軀を店の片隅にちやんと端座して居るんで御坐いますよ。

「お祖父さんの坐つて入らつしやる疊が朽つてよく床が拔けない事」と子供達が笑ひましたが、はんとにそんなに思はれますよ。善く云へば嚴格な人、惡しく言へば頑固な人、それで居て自負心が强いものですから家督は息子に讓り乍ら、自分が居なくては店の監督が出來ないと言ふので早朝から出張せられるんで御座いますよ、それぢや自分に何が樂しみ、と申せば、衣食住に不自由なく今日の一日を事なく暮れゝば、物見遊散等とは贅澤の沙汰と許り、何處迄も「吾れ唯足るを知る、」の消極主義を實行しられるので御座いますよ。自分一人は夫れで滿足で御座いませうが、現今の若い者が奈うして其樣な主義に屈服して居りませう。ですから店の者だつて一人として勤めあげた者は無いんで

すよ、で無くとも自由と快樂を希ふ青春の時代の人達に新聞紙の閲覽さへも禁じるといふのですもの、何故かと申せば小說や雜報を見るからですつて、あんまりで御座いませう。

あゝ此父に朝夕睨まれて居つた息子は十七の年に家出致しました、そして年と共に立派な放蕩兒と成つて終ひました、其れは何をお隱し申しませう、私の實の父なので御座いますよ。で私の母といふのはほんとに氣の毒な人なので御座いますよ、世間によくある嫁持たせれば放蕩が止むかと、いふ親心から迎へられた人なのです。母の嫁つた時は姑と名のつく人は早世して居りませんでしたが、其頑固な舅と其養母に當る人が居られました、嫁の罪でせうか、親の罪でせうか、當人は無論いけないので御座いますが、私は餘りに自由を束縛された、餘りに嚴しい敎の反動として遂に斯樣な放蕩兒を出した家庭に矢張り罪の有る事と思ひます。

悲惨なのは私の母で御座いませう、嫁いで後も放埓に身を持ち崩した父の不品行が奈うして更まりませう、嫁つて半年ならぬに夫は家を外に遊び歩くでせう、自分は其六づかしい舅に仕へて幾夜空閨を守つたでせう、嫉妬は女の謹むべき道と女子自らの口から仰しやる方があれば、獨身か、でなくば夫の愛を自分一人で占めて入らつしやる幸福な方だらうと思ひます。寢られぬまゝに車の音を若しやお歸りと洋燈片手にいそ〳〵と立ちかけた時、それも其まゝ空しく行き過ぎたと知つた時、其淋しさと悲しさは、その憂目を味つた方はお察し下さるでせう、更にまた燭ともるもとに藝者と戯れつゝ有る良人の姿を思ひ浮べたら、それでも無念の涙を落さない人は御座んすまい、良人を愛すれば愛する程恨みと愚痴の零れるはまア人情で御座いませう。

私しの母はこんなにして子供でも出來ればと空しき頼みに、三年程暮しました。そして生れましたのが私で御座います。

思へば私しも不幸な子で御座います、人の顏見ては

ほ笑む頃に成つても父の手に抱かれた日は御座いませんでした。少し物心つく樣に成りましてはたゞ恐ろしい父樣と許り、愛しても下さらねば慕ひもせぬまア何といふ情の無い父と子で御座いませう。藝者つれて今日は名所見物、明日は温泉行と自分一人は樂しまれても愛さるべき妻と子は例も留守中は頑固な老人の不興の顔を見て、父がたま〳〵歸られば反つて妙に威張り散らすんですものほんとに男と言ふものは、どこ迄我儘なのでせう。忘れもせぬ十四の春で御座いました、三晩許りも家



を明けて歸りませんので父の迎ひに私しが參りましたまだ世慣れぬ少女で御座いますから、胸に波打たせ乍ら父に逢つたら、あゝもかうも謂はんと車の上で考へ乍ら目的の家に着き父の居る座敷に通りました。藝者は二人許り居りました。あの其時です、父は恐ろしい顔をして私しが坐るや否や「歸れ歸れ」と嚙みつく樣に申すんですもの、私はわつと許りに泣き伏しました。其時こそ、最う死なうあゝ死にたい生きて居て世の中に何の樂しみが御座いませう。私しも女に生れました、また母の樣な境遇にならねばな

らぬかと思ひますと、全く悲觀の子と成つて終ひました、宅に歸りますと母は悄然とうす暗い燈火の前に坐つて居りました。私しのひとり歸つたのを見て、其時の母の胸中は奈んなで御座いましたでせう。其夜は母子互に泣き明かしました。

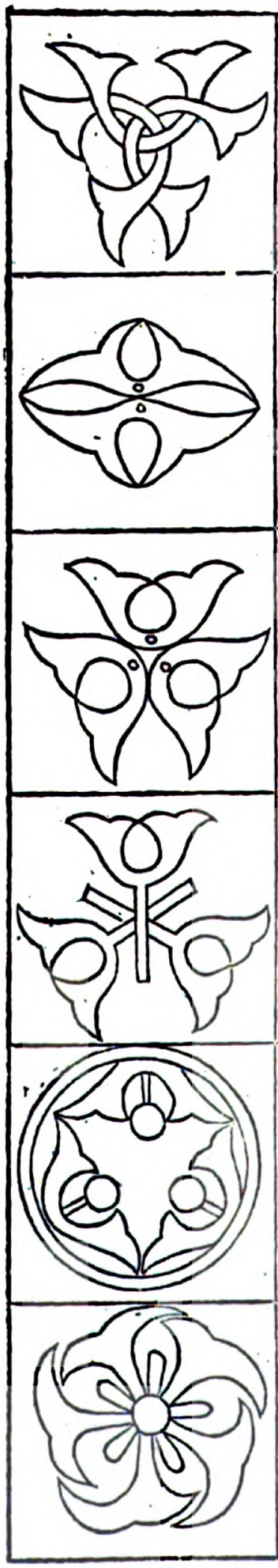
我家には此樣な悲劇が度々御座いました。

其度に祖父はいよ〳〵苦々しい顏しますし、母は子供の行末を案じわづらつて悲歎の涙にくれますから家庭はいよ〳〵濕つぽく成ばかりで御座います。でもまア商賣の方は、奈うかかうか續けて只今でも不自由なく暮して居りますが、お恥かしい事には五十路に近い父の放埒はまだ止まないので御座います。

私しの弟は目下中學に在校して居りますが、父が小遣もろく〳〵與へませんので、友達とも自然交際もしにくいものですから、たゞ自分一人樂しまうと近頃尺八で千鳥の曲など奏して居ますと、例の祖父なる人が男子の身で音樂などゝは以ての外と許り禁じて終ひました。

あゝまた弟も私しと同じ樣に悲觀に陷るか、でなくばまた、父の轍を踏む事もやと私しは寒心に堪へないので御座います。

それにつけても樂しい家庭に規律の有る中の自由を得てのび〳〵と成人せられる方を見ますと羨ましくて成らないので御座います。



三ツ鍬形　鍬形菱　尻合せ鍬形　三ツちがひ鍬形　細わ割鍬形　鍬形車

料理と趣味

美味しく食する趣意

大抵の人は、飲食をすると云へば、必ず口許りで飲食する樣に思ふでありませうが、飲食は決して口許りでするのではありません。眼と鼻と而して口の三箇所で飲食するので、先づ飲食物が出ますと、第一番に眼で見て、鼻で嗅いで、然る後口にするのですから、不潔な器へ入れてある物は、眼に不快を感じますから、決して美味くはありません。夫れから綺麗な皿に盛つてあつても、若し厭やな香ひがしたならば夫れも食べる氣にはなれますまい。眼に美味を覺え、鼻に香芬を感じて、それから後始めて口にしてこそ、美味く食べる事が出來るのです。

そこで大切なのは調理法で、同じ煮たものでも、不味く煮たものは食慾を起しません。食慾を起さないものを無理に食べますと、消化が惡いのです。夫れから調理に次いでは、食器で、食器の綺麗なのと不潔なのとは飲食をします上に非常な關係があります。眼に見て不快を覺え、鼻に嗅いで不快を感じつゝ食べた食物は、必らず消化が惡く、往々食傷する事があります食傷は全く消化不良に原因するのです。斯う云ふ次第ですから、飲食をするに當つては、何物を食するにも、之れは美味いと思つて食べなければ不可ません。若し少しでも之は不味いとか、此の食物は食傷りはしまいかと云ふ不安の念が起つたならば、決して食してはなりませぬ。その不安の念の起つた丈けで、既に消化不良となるのです。

又食物の消化に大關係を持つて居りますのは、精神作用であります。快活に衆人と會食する時は、比較的消化力の弱い人でも、不消化に堪へる事が出來ます。それに反して何にか不快な時に、一人でこそ〳〵食事をする時は、非常に消化力が弱いのであります。其證據には親が死んだとか、子供が病氣だとか云つて、非常に心痛をして居ります時は、全く食慾が起りません。其

の食慾の起らない時に強いて食事をすれば、食物は容易に消化しません。夫れから人間の胃袋は一度食事をして約六時間の後に再び食慾が起るので、間食しますと胃を休息させる時がありませんから、例へお茶一杯でも胃の活動を害します。然ればお茶や水でも、渇を覺えない以上は、飲まない方がよいのであります。

饗應の趣旨に適ふ料理

料理と云へば、むかしは總て酒を出すのが御馳走の主位になつて居たので、引渡しと云つて、吸物膳を先に出し、後に饗の膳を出した。その饗の膳には七五三とか、五五三とか云ふような盛方もありますが、漸々時勢が變つて、引渡を出すと云ふことは徒らに繁雑でもあり、且つ折角御馳走の趣意の料理が全然形式になつて仕舞ふやうな姿である處から、帛紗料理と云ふものが出來ました。帛紗と云ふのは總て略すと云ふ意味ですから、婦人のお客なら甘口に





するとか、男子のお客なら鹹口にするとか、成るべく客の氣に入るやうにするのが、主人の好意であります。然るに近年は口取物などを大きは皿にこてりと盛り、箸も立てられぬやうな大きな蒲鉾を飾り付け、刺身なども澤山に盛りますが、斯うなると、詰り見たばかりの膳になつて、御馳走の趣意が、何處に在るのか解らなくなつて了ひます。食べられもせぬ物をそんなに澤山盛つたから、只形式のみに流れて遂にお土産と云ふやうなことも起つて來たのです。日本式の料理屋では、何ぞと云ふと直ぐにお土産〳〵と申します。それだからいよ〳〵をかしなことになつて來た、お客に行つても、料理屋に往つても、汁物ばから食べて、後は見たばかり、お土産に貰つて歸ることは始めから胸算用して居ると云ふやうな、滑稽なことになつて了ひました。

これは畢竟人を饗應する趣意が間違つたのと、世の中が贅澤になつたのとが相待つて、かやうな習慣を造ッたのでせう、口取物は硯蓋に、刺身は大きな皿に、

鉢肴も大きなものに盛つて、それ〴〵お客の前に持ち出し、四寸位の小皿に取分けて御馳走をする風習であつたのです。ですからお客も皆おいしく食べられたのです。處が今日のやうにあんな澤山の口取では、手を附ける人も滅多にありますまい。刺身にしても其通りで、折角料理した魚肉も、頃合に切つてあつてこそ箸も附けられますが、大きな切身が澤山列べられてあつては、何うも殺風景で食べて見やうと云ふ氣にもなれません。お土産にしても、折の中にギシ〴〵詰め立てれば、折角の味も惡くなります。或西洋人が日本料理の御馳走になつて、これは何ですと云つたら、それは食べては可けないものですと答へたので、日本の料理法では、食べられないものを出して置くのですかと問ふたと云ふ奇談もあります。

趣味と衛生と料理

夏のお料理は衛生と涼味とこの二つを主眼として按排せなければなりませぬ、まづ衛生の方から申しますと、腐敗したもの、不熟なもの、生のもの、發黴たものなどを堅く避けなくてはなりませぬ。其所で、此腐敗といふのは肉類でも野菜でも、變色したり、酸くなつたりしますれば、誰にでも腐敗といふ事が直く分りますが、實際はどんな新らしい品物でも、餘程手際よく迅速に遣りませぬと目に見えぬ間に立派に腐つてしまひます、例へば魚など焼くのにも夏は他の季節よりも、ズッと火力を強くして、手早く兩面共焼いて了はないと一面を焼いて居る中に早や上部は腐つて味が零ちて了ひます、又肉類や野菜などを始末するのにも匆匆と手早くせなければ庖丁の温味や手の温味の爲めに直ぐに變化を來します。それ故市内の上等の料理店や魚屋になると料理人が傍へ氷を置いて絶えず手や庖丁を冷やして仕事をします。

それから又未熟な果物などは餘程危險なものですがこれは今頃大抵の人も知つて居ますから悉くは申しませぬが、あの東京の料理店などでよく出す生貝だの、酢貝、などは料理店としては、よく吟味をして出す

もの丶普通の家庭で、迂濶あの眞似をして魚屋に生貝などを拵らへさせるのは、ちと考へものです、腐敗に近づいたものを知らずに食べる事がまゝあります、殊に場末の天麩羅屋で使ふ様な海老や、貝の柱などは尤も注意して食はぬやうにしなければなりません。

次に涼味の方から申すと、是は見て涼しく食べて淡白したものが好いのですが、それには濃厚もの、脂肪の勝つた物や、拵らへ置のものなどは大禁物です、分量は尠くとも品數を多くし、又朝、晝、晩によつてそれぞれ手加減すれば、養分も十分に採る事が出來ます又御馳走の場合なども夏には客の顔を見てから直ぐ出來る樣な献立を主婦は常に心得て置くべきです。

夏の料理は概して和洋折衷の方がよろしいと思ひます、殊にゼリー類は味も外見も大層よく、果實では苺に李、林檎、夏蜜柑、など皆ゼリーにして食べますと至極結構です、あの夏蜜柑のジャミなどは至極簡單なもので、中實を丼に採つてそれと同量の砂糖を加へ弱い火で水から煮詰めれば直ぐによいジャミが出來ます、更にこれをゼラチン即ち食用の膠で寄せれば、オレンヂゼリーが出來ます、是を氷で冷して食べますと實に爽快で結構な風味がするばかりでなく、腸をとゝのへるのに大層よろしいと申します、その外何の果實でもその方法でジャミや、ゼレーが造作もなく出來ます。

一例を申しますと玉子のゼリー、これはまづゼラチン六枚砂糖大匙四杯半、玉子四個、水一合半、レモン汁少々を用意して置き、水につけて置いたゼラチンをむしつて、この一合五勺の水と共に鍋に入れて煮溶かし、砂糖を入れ、更に一寸煮て水嚢でこし、人肌位の温度にまで冷めた時、レモン汁を適宜におとし（香氣をつける爲め故少々）玉子の白身を泡立てた中にあけざつと掻きまはし器に入れて冷し、黄身の方もこれと同じ仕方にして、前の白身のやゝ固まりかけた時、その上に流し込み、十分に冷へた時羊羹のやうに切つて出します、これは夏向の料理としては上品で、且つ至つて爽快なものでござりいます。

流行の美顔術と化粧法

雪月花

△基礎となる自然の美

美顔術や化粧法は、人間の自然の美の上に、更に人工を加へて一層美しく見えるやうにするもので、何よりも其の基礎となる自然の美が大切ですから、先づ此の方法から述べて見ませう。これは主として飲食物の力、及び日常の規律習慣等に俟つのです。先づ習慣の事から言つて見ますと、毎日朝夕の二回に十分間位づつ深呼吸を行ひ、日常の遊戯運動にも意を用ゐ、體操もすればテニスもやるといふ風にして絶えず身體の均衡をはかる事が第一です。次に飲料は、平常牛乳やスープを十分に取り、茶、珈琲の如き刺戟性の物は皮膚を蒼白くする恐れがあるから、多く用ゐぬやうになし又酒類は一切厳禁すべきであります。果物は、林檎、バナヽ、葡萄、パインナップル、苺、無花果、蜜柑等は折々食べる方がよろしく、野菜は菠薐草や鹿尾菜などを多く取り、其他牛肉、鳥肉、魚肉などを適度に取る事が肝腎です。

△肥えた人と痩せた人の心得

婦人にはよく肥つて困るといふ人があるが、之を直すにも習慣を改めて規則正しい生活を為す事が一番宜しいやうであります。先づ朝早く起きる習慣をつけて終日何か用事を作つて立働らくやうにし決して時間を徒費してはなりません。そして朝起きたらば直ぐに三十分位散歩を試み、夕方にも食前に、同樣に散歩して血液の循環をたすけ、且つ朝飯前には必ず少量の果物を食べ、飯は朝は輕く二椀位、晝と晩は餘計食べても其の上に尚ほ一椀位のところで止めて食事を控目になし、水、酒、牛乳等の飲料は成るべく節し、牛豚肉を避けて魚肉の淡白な物を選び、野菜は茄子、葱、菜、

大根等を用ゐるやうになせば、餘程効驗が現はれます尙ほ暫々入浴して脂肪を洗ひ落し、便秘を整へ、午睡や居睡を禁ずる事も大切です。之れに反して瘦せて困るといふ人ならば、氣を穩かにして癇癪を起したり取越苦勞をしたりせぬ事が肝腎で、さうするには一日に少くも八時間以上眠らねばなりません。そして餘り過度の勞働をせぬやうになし、食物は前と反對に、牛乳スープ、味噌汁、牛肉、馬鈴薯、鷄卵、其他魚肉類を多く用ゐ、飲料は茶、珈琲、チヨコレート、辛子、カレー等の刺戟物を禁じ、酸味の物を避け、入浴は夏なれば毎日一回、冬なれば三日に一日位と定め、且つ晝飯後毎日一時間位の午睡を爲すやうにすると効があります。

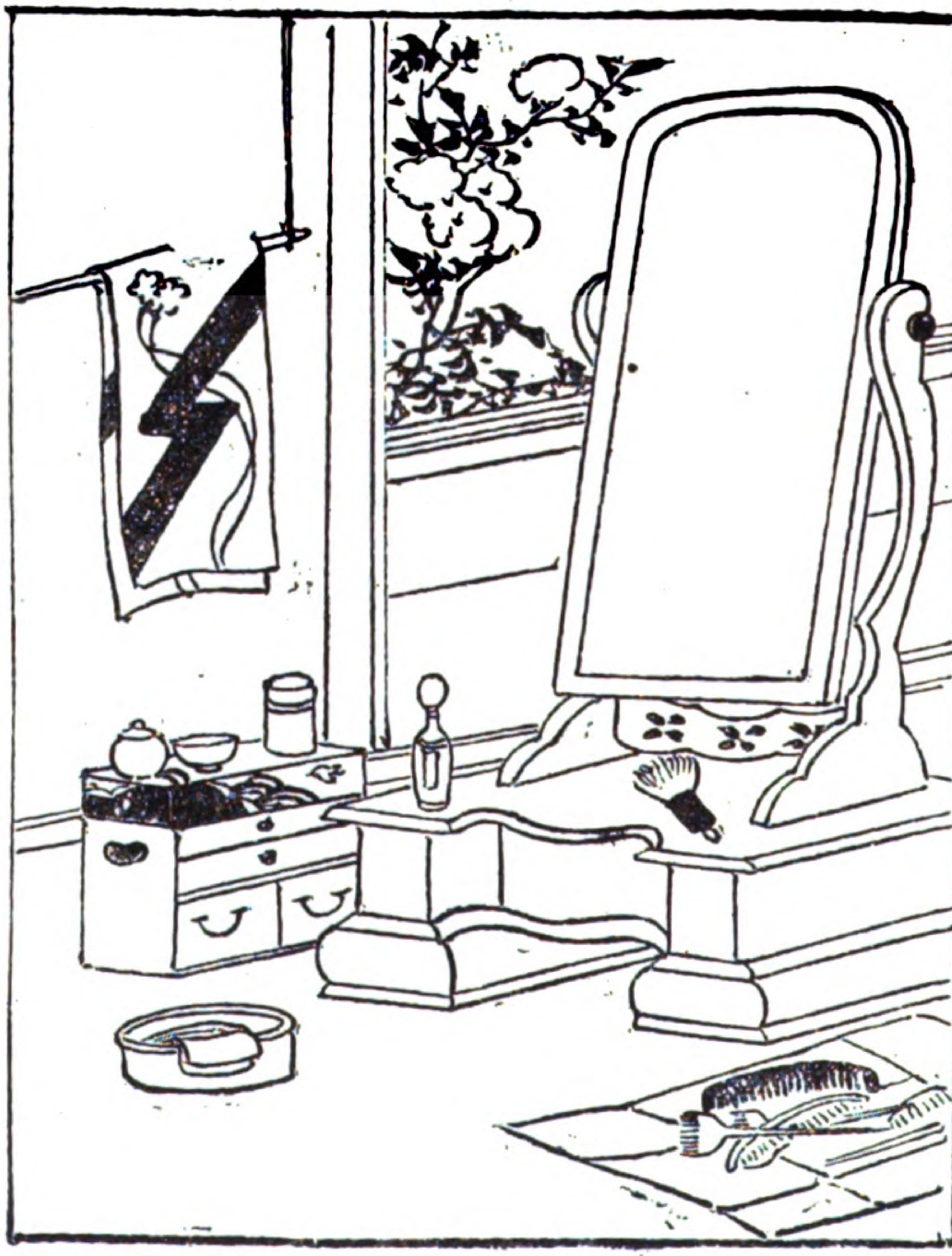
△美顏術の効用

此の樣にして自然の美を保たせた上に尙ほ美しくしやうといふのが美顏術や化粧法であります。美顏術といふのは、先づ電氣を用ゐて顏の皮膚にマッサージを施し、次で蒸氣を應用して氣孔を擴張せしめ、其處へクリームを塗つて皮膚に吸收されてゐる不潔物を溶解せしめ、後ち吸子器を用ゐて其の溶解物を吸ひ取り此の樣にして顏面の淸潔法の終つた處へ脂肪劑を施し冷水に浸したタオルで一旦其れを拭ひ去つて、更に化粧水を塗るので、言はゞ顏の皮膚の掃除をするのです從つて之を行へば面皰其他の一寸した皮膚病も癒り、又一方、皮膚を强壯ならしめ、血液の循環を好くするので、輕い痘痕などは見違へる程に美しくなると言はれて居ります。併し美顏術とは實際何んな事をするものかをまだ知らぬ人もありませうから、一寸其の行り方を記して見ませう。器械さへ求めれば誰れにでも行はれる樣な簡易な方法です。

△お顏の下掃除

身體を施術臺に凭たせかけて都合よく顏を向けると最初に電氣の通じてゐる球子で顏中を摩擦し、それから蒸氣で蒸したタオルを竪に二つに折つて其の中程を

顋に當て、左右兩端を折返して鼻だけ出るやうに三角の穴を拵へて兩頬から額へかけて被ぶせ、此の樣にしてタオルの熱が冷めると熱いのと取り換へ取り換へして十分に顔を蒸して氣孔を開かせ、それが濟むと氣孔内の汚物を浮き出させる爲に、先づハイジエニツククリームといふのを擦り込み其が皮膚に吸收された頃スポイトの樣な護謨の吸子器を用ゐて其の汚物と混和したクリームをすつかり吸ひ出し、更に吸子器や、或は一面に蛸魚のいぼの樣な物が付いて居て顔へ當てゝ動かすと其の一つ〳〵が皮膚に吸ひつく器械などを用ゐて綺麗に掃除をします。以上が言はば下掃除で、此等の方法を行ふた丈けでも面皰や雀斑は勿論病後に生じた斑點や怪我の爲めの斑點、又出産の際額や頬などに出來た斑點などを容易に拔き取る事が出來ると言はれて居ります。



△美顔術の仕上げ

それが終るとポンピアンマツサージクリームといふのを額に塗りつけ、先づ顳顬部の邊から顔の中央へかけてやゝ力を入れて指頭で十五分間位繰

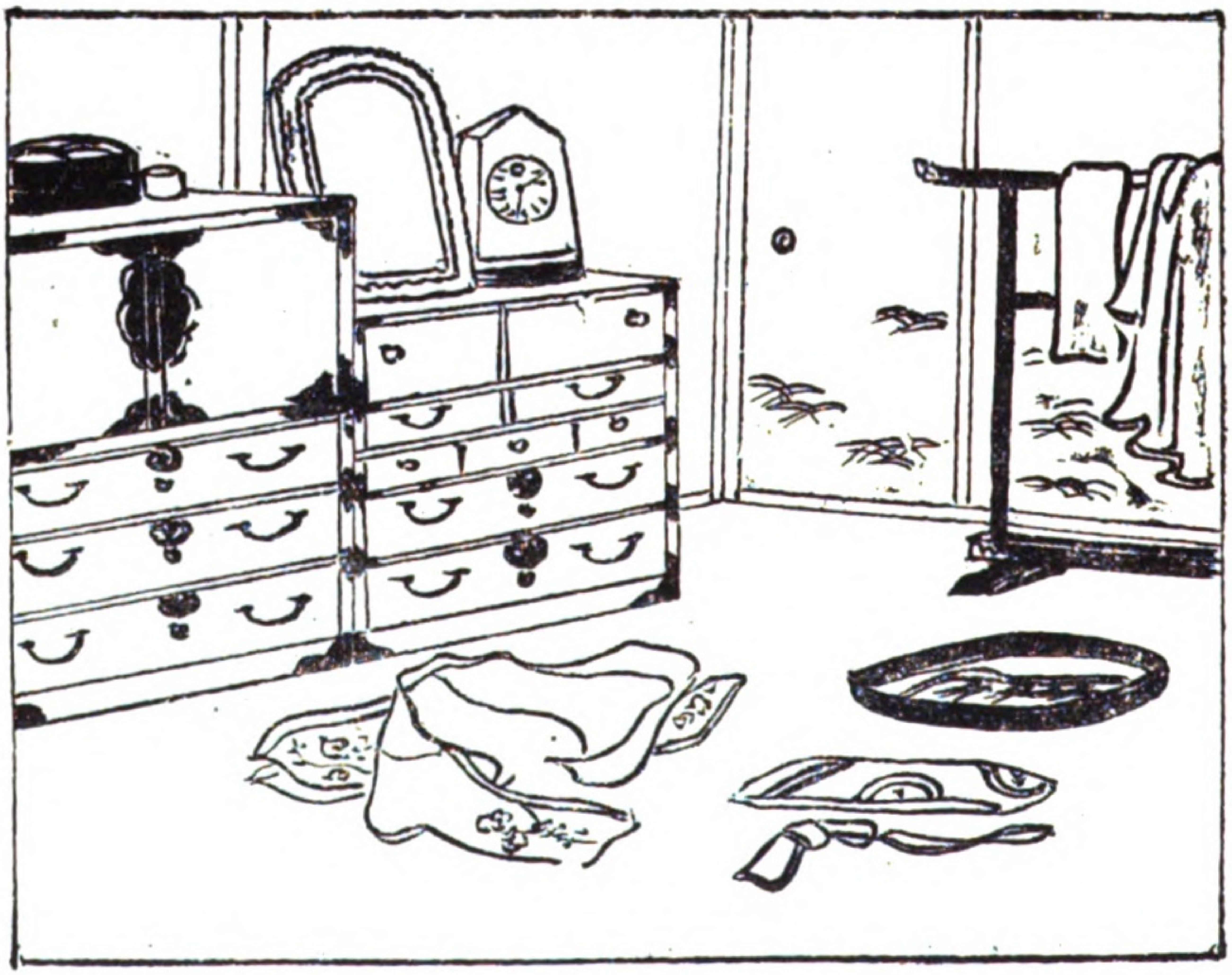
り返して摩擦し、次で眼尾の笑皺を去る爲に其處を又十分間位摩擦し、次に上眼瞼の皺を去る爲に其處を眼首から眼尾へ向けて又十五分間ばかり擦り、更に眼下の皺をも治す爲に又そこを二十分間位さすり、最後に兩頰の皺を去る爲に指頭や掌で唇の邊から上へ眼の下の所まで擦り上げ、外へ耳の附け根の下の所迄掌を送つて擦る事二十分間ばかり、斯くて顏の全部をマッサージし終つたら、脂肪劑を顏に塗り、暫く其れを指頭で擦り込んだ後、冷水で絞つたタオルで冷しつゝ拭き取り其の上へライラック水といふのを塗つて、又其れを丁寧に拭き、最後に揉皮で摩擦しながら眉や髮の生際を整理するので、これで全體の術を終るのです。

△佛蘭西流の化粧法

化粧法には色々ありますが、此頃の時世ならば先づ自然に適つた方法が一番よいと言はねばならないでせう。此の點に於ては佛蘭西が最も進歩して居ると言はれて居ります。彼地の婦人は非常に化粧はして居るけれども、少しも其の痕跡を現はさないで美しく見せてゐるといふ事で、其の方法は斯うであります。最初に極く新しい牛乳を溫くして其れで顏をよく洗ひます。これは皮膚を清潔にし、且つ濃やかにする爲です。それより化粧水を入れた微溫湯で更に丁寧に顏を洗ひ、それが濟んだらクリームを塗りつけ、後ち水白粉或は煉白粉等各自好みのものを用ゐるのですが、其の白粉は各自の肌の色合と一致したものを選びます。其の爲に彼地の化粧品店には幾百種の色の白粉を取揃へてあるといふことで、實に進歩して居ります。で斯うして化粧をした後に、いよ〳〵外出するとか、人に接見するとかいふ時には、その白粉もクリームもすつかり洗ひ落して了ひます。此の樣にすれば最う素顏になる譯だけれども、而かも最初の素顏とはすつかり異つて非常に美しく見えるのです。化粧も斯うあつてこそ眞に化粧といふべきで、無暗に白粉を塗りつけるのは、謂ゆる牛蒡の白あへに過ぎますまい。

△白粉の選擇と塗り方

折角の化粧を洗ひ落して了はない迄も成るべく自身の肌色に近い白粉を用ゐる事が化粧法の極意です。白粉には白、黄、桃、肉色等種々ありますが、日本人にはやゝ黄色がゝつたもの、或はそれに肉色白粉を加減したものが好くうつります之を用ゐるには、先づクリームを掌で一面に濃淡なく塗り、白粉をフランネルの毛の密なのにつけて指頭で徐かに皮膚へ押込むやうにつけ、浮いて居る粉は揉革で丁寧に拭き取り、眼瞼



と眉は濡手拭で拭き、毛生際や眉毛等を化粧鉛筆などで好いやうに直せば、先づ申分のない美しい化粧が出來ます。

△白粉ののりを好くする注意

平常顏の洗ひ方などに就ても大に注意が要ります。能く外出でもしやうといふ際に當つて急に石鹼や洗粉などを使つて日頃に倍した磨方をする人があるが、これは餘程害を爲すから、入念の化粧を要する時は成るべく前夜にゆる〳〵洗ふて置く事が肝腎です。若し止むを得ず化粧前に洗ふ必要

があるならば微温湯で徐かに拭ひ、脂肪分の多い人は糠の液を掌に絞り、それで力を籠めずに擦り、左程脂肪の多くない人は、石鹼の液を附けて掌で徐かに擦るやうにし、決して手拭又は洗料を包んだ布片などで力限り擦するやうな事をしてはなりません。又顔を洗ふ場合に、熱湯や冷水を用ゐる事も、日を經るに從つて皮膚を非常に荒らすから、これは必ず微温湯に限ります。此等の點を常に注意をして居らぬと、まだ三十にもならない内から、既う白粉の塗りが惡るくなるといふやうな結果を見ます。

△手の手當

終りにも一つ大切なのは、手の手當です。手を常に美しくして居やうといふには、入浴の時も洗面の時もやはり微温湯を用ゐて、熱湯や冷水に浸さぬやうに心懸け、手拭も成るべく布理の細かいのを選び、且つ平常折々手を輕く摩擦してマッサージを行ひ、其他手を洗ふ時少量の硼砂とアンモニアを微温湯に加へて用ゐるなど、孰れも効能があります。又手を洗ふた後へ、グリスリン一、五、ボラックス一、七五、卵黄一個、を混和して塗りつけ、柔かい手拭で丁寧に拭ひ去つて置く事も、皮理を細かにする効があります。又近頃爪磨術といふものが出來ましたが、これも手を美しくする一法でせう。其の方法は、百倍の石炭酸水で指頭を丁寧に洗ひ、後ち十分間位温湯に浸たし、それよりオレンジ水を附けて更に皮膚を軟らかになし、此の術を行ふ爲に特に製つた小刀で爪際の皮膚を剝がし、其の皮膚を又特製の爪鋏で綺麗に切りとり、次にネールイナメルといふ粉末を爪の表へ塗りつけて十分にブラッシユでこすり、後ち肉色のロースネールクリームといふのを附けて光澤の出る迄よく磨くのです。本職の者にさせると斯んな事をするのですが、何も難づかしい事ではなく、ナイフ一本あれば誰れにでも出來るやうな事であります。

社會觀察

開港地婦人の風俗

觀風子

△ハイカラ髪よりも丸髷

或る實業家が言ひました。東京人は紙幣を丁寧に疊んで仕舞つてゐるが、横濱人は其れをくしや〳〵にして推し込んでゐると。又官廳會社等に勤める人で、横濱は住ふ處ではないと言つて、宅を東京に置いて毎日遠方を汽車で通つてゐる人が少なくありません。此等の言葉や事實によつても略々東京人と横濱人との氣質の相違が知られますが、更に細かく觀察すると、其の風俗の上などに著しい相違を見ます。先づ第一に女の風が違つて居ります。東京では奥様は申す迄もなく、下お三どんに至る迄、ハイカラ髪でなければ時勢後れのやうに思はれてゐるが、横濱は夫のある婦人で丸髷に結はぬ者は殆んどなく、そして皆な粹につくつて居ります。娘もハイカラ流は少なくて、島田や銀杏が多く見えます。屢々横濱を見てゐる或る東京人がこんな事を言つたさうです。横濱は實に藝者の多い處で、何處へ行つても必ずゐるが、奥床しい奥様や令孃達には容易にお目にかゝられないと。成程さう見えたかも知れないが、其の中には恐らく立派な奥様や令孃達が澤山居たらうと思ひます。つまり横濱婦人はハイカラ流は却つて活計の不自由を示すものだ位に思つてゐるのです。

△奢つた服裝

次に男の風はと見ると、流石に開港地丈けに横濱は東京以上に洋服が流行し、役所や會社勤めの者は申すに及ばす、本通りに店を張つてゐる商人を始めとし、東京ならば素肌に袷でゲンコを固めて居る筈の者迄も洋服でなければ通らないといふ有様で、立派な紳士風をして居り乍らベランメイを使つてゐる者も珍らしく

ありません。和服でも横濱の方が一般に奢つて居て、東京ならば二子木綿の羽織を着る格の者でも、横濱は銘仙の羽織位を着流してしやんとすまして居ります。下級官吏でも、黒木綿の紋付や紺飛白を着る者は殆んどなく、まして外人相手の商人などは、一寸した者でも必ず絲織位を用ゐます。つまり横濱は何れの社會でも金ピカでなくては通らず、書生流は全く禁物なのです。男の髪の樣子などでも、東京ならばいが栗頭でまだ何處へでも通るやうですが、横濱では大抵コスメチツクの難題になります。

△一奇觀

車夫などに就て見ても、又餘程進つた處があります。客待しながら車屋さんが英語の書物を開いて研究してゐるなどは、外では一寸見られない事でせう。つまり外國人をお客にする事が多くて、洋語が少し話せないと何かにつけて不便だからこんな風もあるので、波止場や居留地邊に働らく者は、大抵市中見物の案内をして一寸した說明位は出來ます。併し其の服裝は稱々雜多で東京よりはやゝ見劣りがします。車夫の服裝は筒袖又は法被、パッチ若くは股引、冠物は帽子か饅頭笠と規則には定めてあるさうですけれども、法被やパッチを着た者は誠に少なうございます。黒や焦茶の毛絲の襯衣ばかりを着て居る者があるかと思へば、腹掛をして居る者、古いズボンの上に法被を着て居る者、兵隊の古外套を短く切つて着て居る者もあり、帽子なども鳥打もあれば大黒帽もあり、又麥藁を冠つて居る者もあるといふ風で、全く一定して居りません。

△護謨輪の元祖

横濱市内には電車は運轉して居ても、頻々往復するのは神奈川西ノ橋間のみですから、今日は人力車が唯一の交通機關で、從つて人口に比例すると東京よりも車の數も車夫の數も多いといふ事です。車には、東京でも冬は勿論、夏でも其の季節相應の膝掛が備へてあつて、中には隨分金を掛けたものもありますが、横濱

上野不忍池畔



はこれは如何にも冷淡で、婦人は兎も角、男子は冬でも之を掛けない者があり、殊に洋裝の者は絶對に之を用ゐないといふ風です。これは初め外國人が之を用ゐなかつたのを眞似て一の習慣になつたのと、一つは車に乘り下りするのにも、繁劇の身には之れが無い方が便利であるといふハイカラ式から來たのだらうです、しかも東京でハイカラとして頻りと流行つてゐる護謨輪は、一體が横濱が元祖で、外國人が自轉車に倣つて初めて作つたものであるのに、今は反つて東京の流行を眞似て漸く流行りかけてゐるといふのは妙ではありませんか。

△花卉に對する趣味

話は飛々ですが、忙はしさうな横濱には珍らしい現象だと思はれるのは、東京よりも遥かに花卉の趣味の多い事で、市中を歩いて見ると大抵の家に植木の一鉢位は必ず置いてあります。見世飾りにも勿論之を配合します。これは西洋館の装飾を眞似たのだらうといふ

人がありますが、兎に角盆栽類の需要の多い事は、吉田橋邊に年中毎日植木屋の夜店が出て、其れが東京などのものよりは一層繁昌するのを見ても分ります。此の種の趣味は非常に深い方で、裏長屋のこんな家に花を生けてあるとは意外に思ふやうなこともあります。

△料理店の繁昌

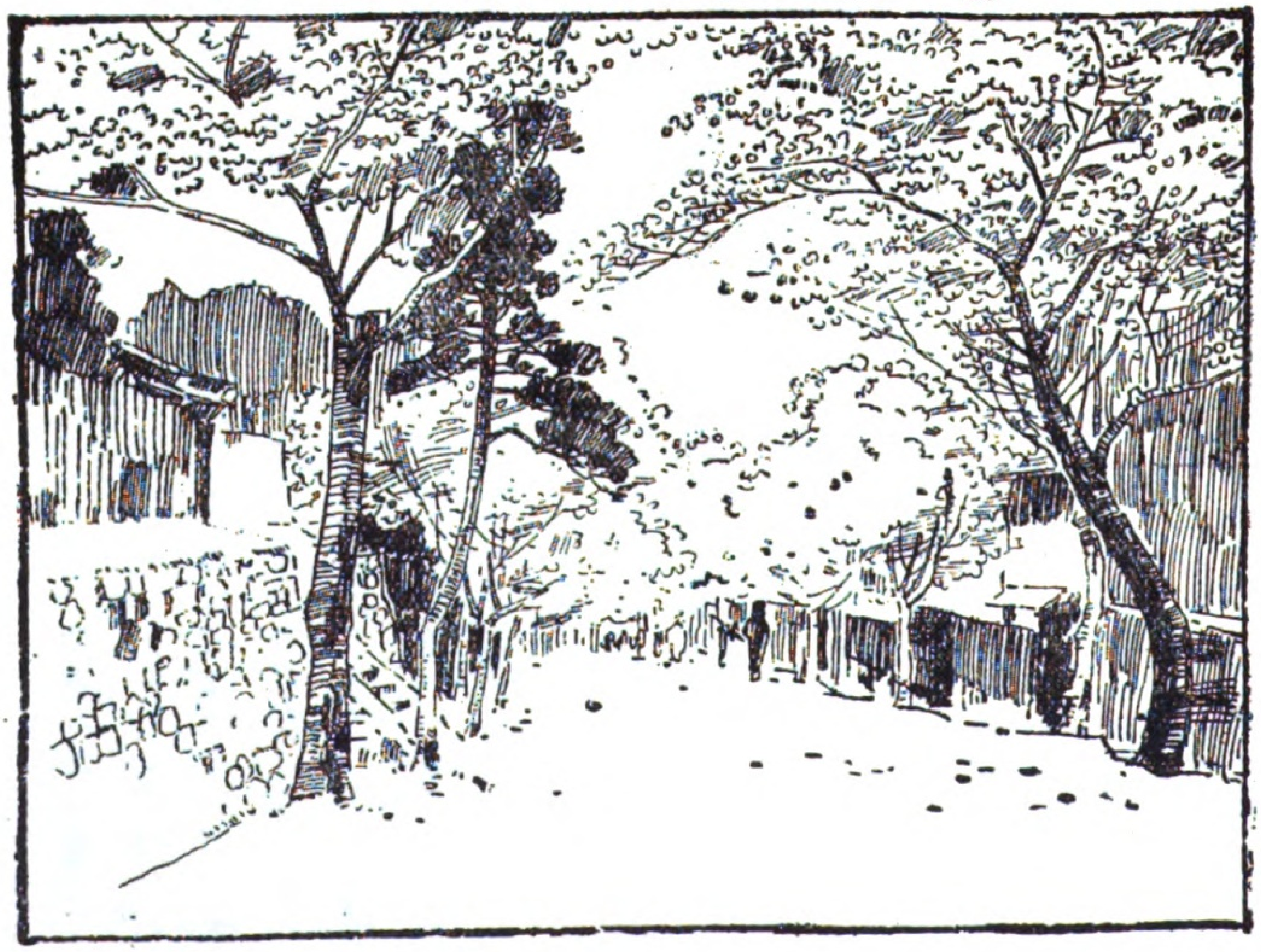
南京料理屋は室へはいるにしても穿物を脱ぐ手數は要らず下駄でも草履でも其の儘で通られるといふ便利もあり、それにお誂ひは大抵の者は點心餅食がお極りで、其他は云呑か叉燒麵、精々奮發した處で古鹵肉位で、僅か二三十錢位の散財で濟むといふ至極輕便な爲に、之れは非常に繁昌して、小さい西洋料理店を壓倒して居ります。紳士もはいれば職人もはいり、婦人も小兒も此處へ入るといふ風で、恰度東京の蕎麥屋のやうでございます。そしてこれは常見世ばかりでなく、夜になると行商をやりますが、車をひいて支那笛をピイ〳〵吹いて歩くところは、東京の鍋燒饂飩のやうであります。併し行商としてはこんなのは珍らしくはありません。たゞ大工の行商に至つては恐らく横濱專賣であらうといふ事です。東京には桶屋の行商はあるが大工のはありません。荷車に短い材木と道具を載せて『繕ひは御座いませんか』と呼んで歩くのを、一寸呼び止めて、戸が一寸損じたとか、障子の具合が惡いとか、流しが損じたとか言つて直させるので、至極重寶なものであります。

△無理算段の外見

横濱人は服裝に奢る事は先に述べましたが、歩くのにもなか〳〵外見をはります。けれど其の裏面にはなかなか滑稽がございます。商館の番頭といふと世間では非常に收入のある者と思つてゐるし、御本人も亦た世間への外見を裝ふ爲に少し毛が生えて來るとお抱車かなんかで通勤します。然るに近頃は護謨輪の車が流行つて、之れにしなければ世間體が惡いといふの

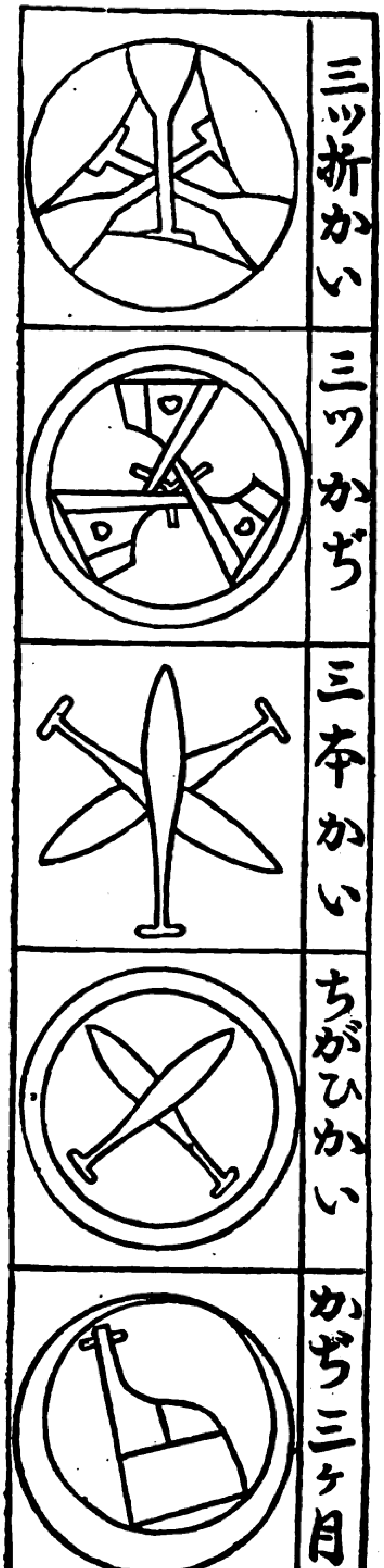
で、無理算段をして之を作つた所が、費用が二三割高く掛るので、朝丈けはそれに召して夕にはお徒歩で歸られるので、人は之を綽名して朝ゴロ夕テクの君と言つてゐるとか。けれども横濱には謂ゆる腰辨なるものはなく、從つてお辨當のはいつた鞄を電車に置き忘れて人を驚かすやうな滑稽もありません。横濱へ行くと四角な箱の前後を斜に切つた箱車を引いて居る者を見ますが、これが辨當を運んで呉れるので、自分で持つて出勤する者はありません。廣い東京などでは到底出來ない事ですが、横濱は土地が狹い上に、月給取の通ふ所は大抵固つて居りますから、頗る都合がよいのです。運び料は月卅錢といふ廉價ゆゑ、殆ど之を使用せぬ者はありません。運ぶ者は早朝各戸を廻つて集めて、屆先へ行く前に毎日一定の場所に集り、それより屆先の都合の好い樣に互に辨當の交換をして屆先を成るべく接近させて屆けるのです。此の商賣をする者は近頃追々殖えて、今は二十幾軒の多數に及び、一軒に少なくも三四人宛の男を使つてゐるさうであります。

横濱紅葉坂の圖



△異樣に見ゆるもの

市中を歩いて一寸目につき容いのは軒下の代書人でございます。見世を持つには家賃は高し、さりとて路次の中では商賣が利かず、といつたやうな人々が軒下に軒を出して見世を作るのを床見世といふと説明するには及びませんが、横濱は商賣の利く場所になると土地を得る事が非常に困難で、其の難かしい事は遙に東京以上です。それゆゑ隨分窮屈な店が澤山ありますが、其の中にも他から行つて一番目に付くのは代書業でありませう。東京の代書は區役所や警察の前に立派な店を構へて居るが、横濱では迚もそんな事は出來ぬから、他人の見世先を借りたり、又は軒下に我身と机だけを置く一寸した場所を作つたりして、此處へ毎日通つて代書業を營むのです。湯屋の構造は東京程に立派でないが、流しを取る者の多いのには驚きます。殊に女はさうで、流しを取らねば氣恥しいと言つて居ります。こんな風ですから釣錢を取る積りで五錢白銅を一つ出すと、番臺では流しを取るものと心得、東京のやうにお流しですかと別段尋ねもせずにちよんと拍子木を打つて了ひます。此等も一寸東京と違つた所で、こんな商賣の上にも、横濱なるもの、又横濱人なるもの〻俤が見えるやうであります。



紋の意匠



若葉日記

野菊

なんぼ留守居に慣れてる私だつて、ひとりぼつちの夜は聊か氣味が惡い。洋燈を思ひきり明るくして、火鉢の前に坐つて見ると、妙に向側のメリンス友禪の座蒲團が氣になつて物足りない。

堀田の家でも、今頃はもう皆入浴も濟むで、空氣ランプ花やかな、あの中の間に、お姑樣を中心に、七人の兄妹達が集まつて、亡くなられたお舅樣のお噂やらあす七々日の法要の手順やら、內輪同志の心安く、それからそれと種々のこと、言交して居なさる事だらう兄妹の多い方はほんとに羨ましいつて、いつも儂がいふと「いゝぢやないか僕の姉妹は矢張お前の姉妹ぢやないか……、お前はさう水臭いからいかん」と良人は仰しやる。水臭いんかしらないが、どうしたつて根が他人の義姉妹なんてものはいゝ時にはいゝけれども、少しでも氣不味くなつたらをしまひ、人前はどんなに美しくでも、優しくでも出來やうが、眞から心の解合つて事は却々容易ぢやなからうと私は思ふ。

ふつと向を見ると、おや、座ぶとんの小菊模樣が動く、動くむく〳〵と……。ぎよつとして見つめると、あらいや！　蜘蛛！　小さい蜘蛛が一匹、何か考へてる、「貴郎、蜘蛛ですよ」と思はず言つてしまつて、自分ながらをかしくなつたから、聲を立てゝ笑つて見た

夜蜘蛛は親に見えても殺すものだつて、小さい時、祖母から聞かされた事を思ひ出して、火箸をとるなり發矢一撃……狼狽た樣子して、さつさつと壁の方に向つて疾走する、追かけて又一うち今度はちつと足を縮めて死んでしまつたやうだ。紙で撮まうとすると、意

外！　又さつさと走りだした。五分にも足りない蟲の小智慧が面白いから、今夜は助けて遣はす。格子がちりちりんとあいて、誰か靜かにはいつてきた。默つてゐるから、きつと光夫さんだらうと思つて、「光ちやんですか」といふと、「ハ、さうです」

「今夜はね、先生は不在なんですがね、折角いらしつたんだから、わたし、おさらひして上げませう」中の間に洋燈を移して、机に向つた光夫さん、ことし尋六を卒業して、中學へはいつたばつかし、十四といつても年弱の暮生れで、男の子には惜しいやうな容貌美しさすがに大家の長男と生れただけに、何所となくしつとりと鷹揚なものごし、それでゝほんとに無邪氣な、快活な可愛い人、此間なんかも「今晩は」と叩頭をする、紺がすりの筒袖の脊中に、何だか赤い十文字が見えるから、何だらうと思つてよく見ると、まあ……鎖編にした赤い毛糸の紐を、かう襷十字にあやどつて得意げに、すまあしてゐるんだもの、私、失笑してしまひましたわ、良人が「光ちやん何をそんなに働いてきたの」つて仰しやつたら、始めて氣がついたと見えて、「やあゝ」と大きな聲だして、いきなり兩手を胸に高く交叉して、肩のあたりをかくしたつもり……、眞赤になつてゐるんだもの、もう可笑しくて〳〵……。

男の子には、白すぎると思つた顔色が、近頃は一里半の田舍道を通學するので、大變日にやけて、頬の色なんか林檎のやう、却て雄々しげな美少年になつた。帽子の眉庇にかくれて、やけ殘つた、白玉をのべたやうな額を少し伏せて、ビーイーエヌ＝ベン、ビイ、アイエヌ＝ビンと、覺束ない發音で、スペルを復習する、うら若い聲のあや……。こんなまあ可愛い少年があと四五年も經つと、もう華美な洋傘に、見ぬ振の瞳をなげたり、得ならぬ香水の香に憧れたり、はては金縁眼鏡かけて、勿體らしく八の字髭なんか生やして……、此子も矢張お親父のあとついで、紅燈綠酒にしたしむ的の、天晴紳士になりすまし、生存競爭の巴渦の中に卷込まれてしまうのかと思ふと、もう〳〵惜しくて惜しくて堪らない。いつそ今の、淸い美しい姿も心も此

儘に、浮世の風の通はない仙境へでも連れていつて、白羽二重にそつと包んで、銀の筥へでも、大切に藏つて置きたいやうな氣がする。

總じて、少年の愛らしいのは、精精十五六までが限りだ、早熟の者はもう十六位になると、顏がいやに汚ならしく、脂ぎつてきて、ニキビなんて厭らしい吹出物がでたりする。儂、あの頃の男の子、ほんとに大嫌ひ！　ちやうど家鴨が、咽喉病にでも罹つたやうに、妙な濁つた、そして底響きのする聲で、物なんか言ひ



かけられると、もう、ぞつとてしまふ……

そこへいくと、女はどうしても美の權化ね、天にありては星、地にありては花、人にありては我等女性の身……ほ、、、、でも、ヴイナスの神に憎まれた、私なんかは例外として……、とに角、女には、男のやうに、著しく醜惡の狀を發現する時代はないやうだ、鬼も十八といふ頃の女子は、ほんとに人をチャームする、一種の魔力を有してゐて、實に艶艶しい。まあ、女の生涯の中で、私のきらひのは、妻

君の盛りもすぎた五十代の、老の山路にそろ〳〵踏み入らうといふ頃の人、たるんだ筋肉の溝は深いながらも、まだ殘りの色香を見せたいと、いつた風な野心のほのめきが、油の匂ふ小さな丸髷に見えてるやうな人は、何だかいやらしい……、きつと、お嫁さんいびりするのも、此時代の人に多いんだよ、きつと……

もしも儂に長生のできるものなら、女房盛りといはれる年配から、一足飛に、みつはぐむといふ老の群に入つて、いつもにこ〳〵した、いゝお媼さんになつてしまひたいと思つて見る。けれども、石女のうら淋しく、年老つてから、優しく慰めてくれる人もない身なら、いつそ、三十前後の……、まあ惜しい人をと言はれて死ぬ方が、死栄えがすると思ふ。おやまた、こんなくだらない……。氣がついて見ると、光夫さんは、もうとつくに豫習を終つて、歸つていつたあとの机の前に、兀座する私の姿……ま、あの影の淋しげな……今夜だけは、軒燈を消して寢やうと思つて、戸外にでる。月はない……、あ、ほとゝぎす――、もう毎晩聞慣れて居ても、折からとて、「なきつとも誰にかいはん杜鵑、影より外に人しなければ……」思ひだして口ずさんで見る。

四邊はもう、じつと靜まり返つて、今を我世と、蛙のこゑばかり。

＊　＊　＊　＊　＊

パチッ、パチパチッ―物音、すは事こそと、むくりと起上つた。騷騷しいのも道理、もう七時になるんだもの、まあ何て朝寢坊しちまつたのだらう。大急ぎで雨戸を繰つて掃除にかゝる。

裏口の方が、大分賑やかだから出て見ると、すぐうちの水口についてる、大屋さんの物置の廂下に、焙爐二つ並べて、眞赤に熾つた堅炭。折々パチパチッと、火花を散らしてる。自園の製茶を始めるのだといふ。赤い手拭に、白モスの太襷かけたお嫁さんが、美しい顔を眞赤に染めて、青葉を蒸籠に入れて、せはしげに攪まはしてゐる。垣の外を何かぺちや〳〵喋りながら茶摘女の一群が通る。茶摘女なんていふと、かう色白の美しい娘さん達が、お揃ひの手拭、蝶々にかぶつて、燃えるやうな紅襷、友染の前掛でもして、花のやうな脣から、鈴を振るやうな唄でも轉しながら、青々とした茶園の中に立つて居るやうに、思はれるけれど、此邊の茶摘女つては、まあ大抵、垢だらけの着物の裾高く端折つた下から、中形木綿の汚ならしい腰巻と、紺の股引よ

お見せて、十が十、裸足のまゝ……、背にはベソかく子を十文字に……中には三四人もぞろ／＼と、小さいのを引連れて、大きな竹籠を提げた、といふ風のが多いんだから、根つから詩にも歌にもなりやしない。

が、よしや詩にも歌にもならなくとも、彼等には彼等のライフがある、一日の勞働に得る所の賃錢は、やつと卅錢内外であらうけれども、それは可愛い子供の學資金ともならうし、夫が終日の勞を慰する一合の濁酒ともなる、さては一家が、數日の生命を支ふべき、挽割麥とも、更へられるのだから頼母しい……。あゝ私も良人の不在を、のんきらしく戸外ばかりながめてちやいけなかつた。

すが／＼しい柿の青葉が・軒を覆つてる南の窓の下、良人の綿入羽織の手入れを始める。



トン／＼と焙爐を叩く手拍子——唄聲——

「茶師いなー、殺すにやー、刄物はいーらーぬー、エー、八十八夜のー別れーじーもー、ほい／＼ほい、しつしつし」そゝるやうな新茶の香が、四邊に漂つてきた。

柿の花がちる、三つ四つ五つ……「さあ／＼みんなきてキンパが拾つてくんなよ、間に合はなくなるよ、急かなくちやあ」と、甲高いおかみさんの聲が手にとるやうに。儂等もこゝに、新婚の居を卜してから六年目、大屋さん大屋さんとこちらでいへば向でも。店子といへば子も同様と、よく世話をしてくれる。忙しがるのをみてゐられないから「私にも出來るんなら、お手傳ひいたしませうか」つていふと、「奥さんにお賴みしちやすみませんね」といひ／＼、お内儀さんは箕ぶきに忙しい。蒸方を終へたお嫁さ

んを大將にして、小僧一人と女中とで、悪い葉をえりだしてゐるんだけれど、青葉の茂つてゆく此頃を、ぢつとかう坐つてゐての仕事だから、ともすればコクリ／＼と、下手なポートレースを始めるんだもの……、ちつとも埒があきやしない。

これも少々感染たかして、眼をとろんこさんにしたお嫁さんが、「奥さん、何か面白い歌でも御存じなら敎へて下さいませんか」といひ／＼大儀相に坐りなほす、「さうれ」とはいつたが、まさか此人達に、私の大好きな、あの「雪山の牛、牛滿し」も、向かなさうだから、いつぞや岡田さんから聞覺えの「奥山に、雉子と狐と猫と犬とが集まつて、何といつてないた、雉子はケン／＼、コン／＼ニヤン／＼ワン／＼、ケンコンニヤンワン……」。

小聲でうたふと、私より一つ年下のお嫁さん、ケ、ココニヤ／＼ワンが出來ないとつて大さわぎ……。皆の眼が、やつと人間らしくなつてきて、トコトツトなんて、うなりながら、活溌に手を動かし初めた。

お茶師は、二人共褌一つの裸體一貫、ぢやない廿貫もあらうやうな立派な體格、勞働に鍛へ上げた筋肉は隆々として、血氣は溢れさう、焙爐の前に立ちはだかつた姿は、まるで仁王樣のやうだ。今渾身の力を、双腕に集注して、茶の精練に曳々聲を出してゐる。赤銅色の額に胸に、流汗淋漓……、はら／＼落れて焙爐の中に音がする。

茶にふり注ぐ汗の雫、それはすぐに蒸發もしやうし消毒もできやう程の、焙爐の熱さぢやあらうが……、あらあら、落ちるわ／＼汗が！ 汗が！ まあいやだと横を向くとたん、練の手をとめた一人が、チーンと手洟かんで、平手の横なぐり……、其手はすぐにお茶の中、しつ／＼／＼と仕上げにかゝる。

見ぬもの淸しとやら、世の中の事一切これ、とは思つても、艶麗花のやうな、姫君樣に扮した俳優が、毛脛まくつて駈け出しなんぞする、樂屋の裡なんか覗いて見ちや、折角の興もさめますわ。練り上げて、篩にかけて火入れした、針のやうな、深緑色の新茶の香――、南部の鐵瓶に、松風の音をたぎらして、藤むらの羊羹に、山吹色の苦茗なんて、素敵だけれど、あの赤銅色の皮膚を……、なんて考へて見ちや、いさゝかねえ……。けれども、淸濁樣々の、浮世の波に漂ふ凡

夫の身、そんなことばかり言つちやゐられない、世間には、他人の踵をねらつて、舐りつく人さへ居るつてもの、堅い勞働の汗によつて、練り上げられた國產物粗末にしちや勿體ない……。

「奥さん……何考へてゐらつしやるの……奥さん！」

「あゝびつくりした、ナーニお松さん（お嫁さんの名）」

「なにつて……お客さんのやうですよ」

美しい目元に、それと知らせる水口の外：

「あら杉浦さん!?」襪のさきへ、より緒の水下駄を、危なつかしさうに、つゝかけた洋服姿……。



「よくまあ……」白前掛の塵を拂ひ〳〵家へはいつて見ると、小川さんも御一緒だ。

「おや御揃ひで……。道理こそ、けふは南風だと思ひましたよ、おほゝゝゝようこそ、いつもお機嫌よう……」

「こんな大男二人、吹送るせいかして、往來の塵埃つてなかつたのですよ」と、杉浦さんは、机の上の刷子とつて、ごし〳〵服をこすつてる、あゝ又初夏服を新調したのれ、どうしたんだらう杉浦さんは、隨分お洒落になつたこと……、小川さんは、相も替らぬ詰襟の制服で、窮屈相に坐つてにこ〳〵してる、色は黒いけれど、眼がきりつとして、口元が可愛らしい、先生が不在ときいて、落膽したお顏を

なさる。

「小川さんは何お好き？　杉浦さん、男のくせにね、南瓜とおさつ………」

「奥さんつ。」杉浦さん大喝一聲、「僕だつて、いつまでそんなもの……好きなものですか」だつて、おほゝゝゝ。

「ぢや、けふは、何、御馳走しませうね、お誂へは……」

「いや、先生がおるすなら、もう歸ります。汽車に遅れるといかんから……」

「馬車は六時まで出ますのよ、私ばかりだつて、そんな逃腰なさらないつていゝでせう。さう〱お二人に、今できたての、醉蜜な汗の雫を飲まして上げますよ。」

お茶のしたくしてゐると、二人で何かしきりに、小聲で相談してゐ、

「何でムいますの？　お二人で內密噺なんかして……私の惡口なんか仰しやると、ごちそうしてあげませんよ。」

「惡口ぢやないですよ……、奥さんこそ、そんなに僕等をいぢめると、『マダム振られの記』を書きますぞ」「あら……」「アハゝゝ、オホゝゝハゝゝ、まあ、小川さんも平生に似合はない、けふは大分はしやぐこと……。杉浦さんてば、おさつなんかもう喰べやせんと、いつた口の乾かない今もう、川越名産の初雁燒、むしや〱たべてゐらつしやる、おのぞみにより、おすしとつて、サイダーに夏蜜柑、野菊自慢の辛子漬だしたら、「奥さん、意地の惡い人の製へた辛子はよくきくさうですね」だつて。隨分ね……。いやに、もじ〱してゐると思つた小川さんが突然に、「奥さん、杉浦君も愈々、今度約婚しました！」と、ぶつきらぼう……

「あら、ほんと？　まあ、それはおめでたいんですね、どこの方、矢張お茶の水？」

「イヤ、地方の師範出の人ですが……」と、杉浦さんより、二つも年下な小川さん、自分の事でもあるやうに、一生懸命、汗をふき〱、友が縁談の徑路を談しなさる。御自分では氣まりがわるいものだから、初心な小川さんの口をかりて……づるいのね杉浦さんは……、やつと「僕はまだ早いとも、思ふんですが、どうも若い婦人ばかりの學校に奉職してゐるのには、なるべく妻帯者がいゝといふ、校長の意見でして……先生には、どうぞ貴姉から宜しく……」

「宿人でもね、始終お噂してましたから、きつと喜ぶでムんせうよ、ま、何しても結構ね、貴人の夫人になる方ぢや、きつと才色兼備でいらつしやるでせうね。」

「冷評ちやいかんですよ、そんな……どうせ僕等にくるんだから、大した代物ぢやないです……小川君も知つてますがまあ女として普通……」と、言かけるのを引とつて、

「以上でいらつしやるんでせう、許婚の方を嫉つてまで、貴君に許すなんて……おやすくありませんのね、杉浦さん！　ナニ奢つて下さるの？　おほゝゝゝお羨やましいことね、あさう〱、あの、お父さんね、あ

の方も今度いよ〳〵若い士官さんとこそ、嫁くことにきまりましたの」

「ナ、さうですか……」ともじ〳〵。

都育ちの優しく美しい、お文さんを嫌つたくせに、もうそんな田舎の方なんかと、婚約しなすつたなんて、あんまりだ……

初戀の、清い血汐を渦と沸して、此君ばかりとふり注いだ處女の涙も、△十日で固めあげた理性の人は、何所の里の村時雨と、憎らしい程平氣なもの……強情者の標本てのは貴君のことよ、といつてあげたかつた程のこの人に、熱烈な戀情を味はせたといふ、民子さんとやらは、どんな方かしら……、妬ましいのは其人……、憎らしいは杉浦さんぢつと睨ると、さすがに耳の根まで赤くして、てれかくしに、空皿になつたおすもじの皿から、熊笹の葉を、とつては引さき、とつては引さき……。小川さんはくすぐつたいやうな顔をして、巻煙草の煙をふつと吹出す。

ならば、きのふ手にしたお文さんからの「義理の柵、打やぶらんすべもなく、思はぬ人に囚はれの身……、姉様さつして下さいよ」と、あの手紙つきつけて、恨みの數々、お文さんに代つて言つてあげたいけれど……、弱い悲しい女性の本心はかうしたものと、明白に見てとれるのも、口惜しいがら……。

午後五時、お二人が歸られたあとで、お文さんへ返事をかく。

どうぞお文さん！　しつかりして、意地にも民子さんに負けないやう立派な幸福な家庭をつくつて下さいよ……」とかいて、筆を擱く、もう其人もお歸りなさりさうなもの……、濡縁に立つて見渡せば、世は青葉あゝ、今夜も不如歸がなきしきるであらう。

受賞目録

甲の部

△冷い目で見た人の家	玉露
△女天下の家庭	紅梅
△囚はれたる下町娘	すゞしろ
△時勢に伴ふ家風の變遷	淡雪
△我家の簡易生活	青柳女史
△見榮坊の失敗	花あやめ
△仲働の見た主家の家風	未央柳
△若葉日記（選外）	野菊
△一生一度の我慢	園の若竹
△封建時代の夢語り	白桃

乙の部

△樓上の實	野末庵子
△昔を偲ぶ武士氣質	吉野の里
△現代に取殘された女	若葉
△下婢の目に映じたさま〴〵の家風	田舎娘
△涙のひそめる家庭	花いかだ
△書物に囚はれた人	薄雲
△非常の時に際して發現せし武士魂・	田鶴子
△嫁いて來た我家の家風	露草
△覆面したる主婦	高松みさ子
△日記の中より	百合香

募集（五月八日〆切）

●特別寄書

（主として人事、人情の委曲を寫し、又時の社會百般の事柄を捉へ、時勢の變化を知るに足るべきもの△紙數は原稿紙十枚以内の事）

〔報酬＝五圓以上拾圓迄、現金贈呈〕

▲端書文（一人一種）

▲和歌（一人一首）

▲俳句（一人一句）

▲誌友倶樂部

△端書文以下三種共用紙は端書の事　△字體は楷書にて正しく書く事、不分明の字又は亂れたる書體は沒書とす　△名宛は博文館内女學世界行とし　△特別寄書の原稿には住所氏名を明記する事

賞品

△端書文

天賞壹圓、地賞七拾錢、人賞五拾錢

△和歌△俳句

天賞壹圓、地賞五拾錢、人賞參拾錢

每月一回一日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢	郵稅
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢	一冊
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢	二錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢	

内｛定刊數十二冊　增刊四回…一、五、九、十一月價格同一

廣告料

廿四字詰	一行	四半頁	半頁（卅三行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	……	五十五圓
一等	……	……	廿三圓	四十五圓
二等	……	十圓	十九圓	三十八圓
三等	五十錢	七圓五十錢	十四圓	二十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文略規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず

●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す

●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治四十四年四月十二日印刷納本　第拾壹卷第六號

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　東京日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番
　　　千十八番

本局　二千六百二十番
　　　三千二百二十九番

通信販賣 博通社特賣品

●流行の魁で而かも着實なるは當社の本領!!!

最新流行帶留

本年流行の魁で粋好上品好等あらゆる柄合があります地は京都本場繻珍厚板織の極めて優等品を用ひ金具の優秀技術の精巧なるは言ふ迄もなく信用を重んずる弊社の保證する處で有ます

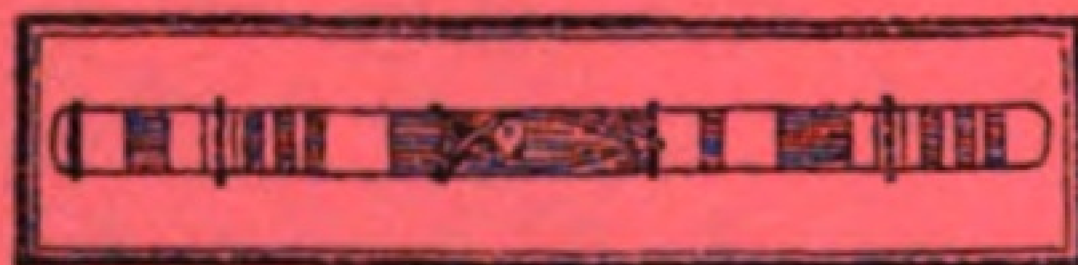
(1)



(2)



(3)



●注意● 御注文の節は年齢及御望み柄合御記入なし乞ふ

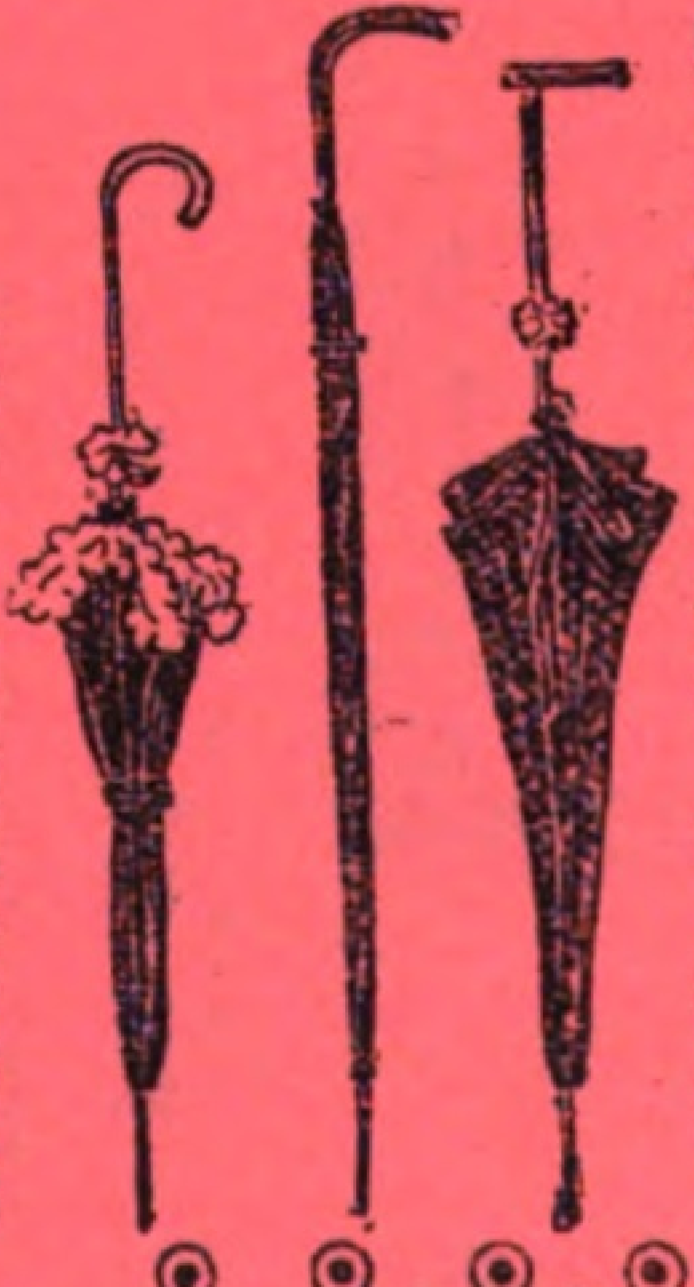
◎繻珍厚板織純銀赤銅金具付 美麗函入 特製 特價一圓五拾錢

◎繻珍厚板織純銀赤銅金具付 美麗函入 上製 特價九拾錢

▲送料内地八錢 海外卅錢

●最新流行洋傘

染色の確實・體裁の優美・組立の堅牢なるは勿論價格も實質と對照して廉價なるは本品の最も特色とする處であります



▲送料内地廿五錢海外四拾五錢

◎男持絹ガス上等皮サック入 細卷 特價三圓二拾錢

◎男持絹ガス上等皮サック入 細卷 特價二圓五拾錢

◎婦人持上等絹コハク 特價三圓五拾錢

◎婦人持コハク絹 特價二圓八拾錢

（御注文の節は御望の色合柄合御書添ありたし）

●最新流行千代田袋

家庭又は旅行用として行李及鞄より便利且重寶なる本品に優る物なし



●一號特製尺五寸疊込市價三・五〇〇 特價三圓

●二號最上製尺五寸疊込市價二・五〇〇 特價二圓

●三號上製尺五寸疊込市價二・〇〇〇 特價一圓五拾錢

●四號並製尺五寸疊込市價一・六〇〇 特價一圓二拾錢

▲送料内地十二錢海外卅錢

●精良品を最廉價に提供するは當社の本領!!!

（後付の二）

大橋メール、オーダー、ビジネス

東京日本橋區本町一丁目

博通社

振替口座東京五十番
電話本局六百四十番

女（後付の二）

前田晁君譯

短篇十種

モウパッサン集

全一冊

洋装四六判

三百餘頁

正價金四十五錢

郵税六錢

モウパッサンは世界第一、古今獨歩の短篇作家として天下に名聲の響いてゐるフランスの小説家である本書は彼が僅々十年の間に絶倫の精力を揮つて世に公けにした二百餘の長短篇の中から、偉大なる文學者としての彼の健全なる各方面を優に代表し得る作品十篇を選んで忠實に翻譯したものである。近代文學の集大成者にして、兼ねて現代日本の新興文學に最も多くの影響を與へた彼の嚴肅なる主觀と、精透なる觀察と、誠實沒私念の態度と、直截にして明快なる文章とは、悉く此一卷の中にこれを窺ふことが出來る。其の名は我が國人の耳に久しく熟してゐながら、其の作品の完全に傳へられなかつた文豪の面目に親しく接せんとす。江湖の諸賢は、冀くは本書を熟讀玩味せられよ。

成女學校校長 宮田脩君序

日本女學校教頭 豐岡茂夫君著

女氣質と修養

全一冊洋装

菊半截美本

紙數三百頁

正價廿五錢

郵税四錢

感觸に捉はれ、欲の奴隷となるは女性なり、情火燃えて、盲目なるも女性なり、意馬脆く、躓き易きも女性なり、女性の修養は、高く聖き絶對の靈光に觸れしむる、と同時に、其の天職に闘する日常の智能に富ましめざるべからず、本書の説く所は、理想と與に現實あり、靈輝き肉躍る、女は自ら省み、男も讀みて、他山の石とせよ。

東京本町 博文館 振替口座東京二四〇番

星野麥人君編

類題百家俳句全集

全四册

洋裝四六判紙數各約七百五十頁毎卷故人筆蹟數葉挿入 各一册正價六十五錢 郵税八錢

俳句の天地拓けてより三百年、此間に輩出せる大家名人百家を選んで彪然たる此の句集は成れり。守武宗鑑以降、芭蕉の元祿、蕪村の天明を經て近く明治に及ぶ。之れに依て各家の特長を窺ふべく、時代の風調を悟るべく、かれて又俳壇の歷史を說かずして語るものたるべし、即ち謂ふ俳人の座右常に必須必要の書と。

□春之部 □夏之部

全部完成

□秋之部 □冬之部

今井柏浦君選

榊原蕉園女史口繪

古今女流俳句集

女流の俳句は、男子の俳句に較べて放膽豪宕の氣に乏しいが、纖細、優婉、溫情自然に溢る、天眞流露の趣は、到底男子の遠く及ばぬ處がある、畢竟女子は男子に比べて、思想の緻密なると共に、感情の溫柔なる處が多いから、俳句なり歌なり、女性的と男性的とは、歷然した區劃があつて、其觀察點も抒情の徑路も違つてゐる、即ち女性的俳句の特色は、男性的よりも多く同情に富める點にある。この書に蒐めた俳句は、古今を通じて女流の佳吟名什約三千其秀逸なるものに至つては優に男子を凌駕するものがある、俳句を學ばんとする婦女諸君は固より女性の俳句を究めんとする人は是非一本を備へねばならぬ。

全壹册
菊半截美本
貳百五十頁
正價卅五錢
郵税四錢

東京本町 博文館

女(後付の四)

第壹卷以下數版重ぬ

名家小

（裝釘……洋裝菊判總

露伴叢書

前編（紙數九百七十餘頁）正價金貳圓　小包料拾貳錢

後編（紙數九百九十餘頁）正價金貳圓　小包料拾貳錢

前編目次

▼自像　▼二日物語　▼夜の雪　▼僥倖　▼緣の緣　▼休暇傳　▼毒朱唇

▼ひげ男　▼新學士　▼迷霧　▼和合樂　▼川舟　▼人[illegible]話　▼緣外緣

▼夢がたり　▼足ばく　▼醉鄉記　▼珍饌會　▼獅子庵　▼伊能忠敬　▼まき筆日記

▼客舍雜筆　▼地獄谷日記　▼將棊雜考　▼將棊雜話　▼元祿時代の雜劇　▼折々草

後編目次

▼椀久物語　▼春の山　▼當世外道の面　▼封じ文　▼鉄三鍛　▼白[illegible]白縮　▼[illegible]

▼冷干氷　▼箱根草　▼銃獵孝行　▼夢日記　▼ひとよ草　▼新浦島　▼[illegible]

▼日蓮上人　▼二宮尊德　▼突貫紀行　▼醉興記　▼易心後語　▼春の一日　▼文明の庫

▼うつしゑ日記　▼遊行雜記　▼旅の心得　▼知々夫紀行

澁柿叢書

全一冊（紙數壹千餘頁）正價金貳圓　小包料拾貳錢

本編目次

▼釜斎　▼[illegible]の心　▼猿冠　▼鐵火　▼聚樂殿　▼島勘左衛門　▼是非もなき　▼不老術　▼新紙法

▼夢と夢　▼眞の武士　▼親の面　▼五月女坂　▼三千石　▼男の面　▼油井正雪　▼大石内藏之助

▼碧玉盤　▼大鳳乾之介　▼他流試合　▼脱走兵　▼振武軍　▼密告　▼此の戀

柳浪叢書

前編（紙數壹千餘頁）正價金貳圓　小包料拾貳錢

後編（紙數壹千餘頁）正價金貳圓　小包料拾貳錢

前編目次

▼おもかげ　▼昇降　▼青ねずみ　▼妾　▼今戸心中　▼隅田の夜路　▼罪の闇　▼變目傳

▼都の夢　▼狂言娘　▼畜生腹　▼重づま　▼貯金玉　▼花ぐるひ　▼幼時

後編目次

▼非國民　▼松原饅頭　▼[illegible]歌留多　▼黒蜴蜒　▼兄の煩悶　▼七騎落　▼紫被布　▼二人やもめ

▼女夫心中　▼八幡の狂女　▼親ごゝろ　▼そまる糸　▼座敷牢　▼中川心中　▼淺瀬の波

花袋叢書

全一冊（紙數壹千餘頁）正價金貳圓　小包料拾貳錢

說文庫

東京本町 博文館發行

(クロース特製紙函入)

本編目次

▼名張少女 ▼畫家の日記(アルフオンス・ドオデエ) ▼一家の妻 ▼不慮の出來事(フランソア・コツペエ) ▼思ふどち ▼孤島 ▼女敎師 ▼初戀の人 ▼澤山窮谷 ▼島の心中 ▼老僧 ▼老夫婦 ▼令妹 ▼無卒(モウクス・メーテルリンク) ▼二人 ▼小桃源 ▲新築の家 ▼浪花節の名手 ▼山小屋 ▼みやま鷲 ▼春の別墅 ▼寫生の花 ▼憶梅記 ▼悲劇

水蔭叢書

全一册 (紙數壹千餘頁) 正價金貳圓 小包料拾貳錢

本編目次

▼女房殺し ▼地底の人 ▼つぎ紙子 ▼新潮來曲 ▼軒下の家 ▼石地藏 ▼旅役者 ▼髭 ▼濁流 ▼林間の高塔 ▼水樓記 ▼海上の饑渇 ▼湖心の誓 ▼別莊守 ▼惡道路 ▼紫海苔 ▼紙子くらべ ▼花井お梅

小波叢書

全一册 (紙數壹千餘頁) 正價金貳圓 小包料拾貳錢

本編目次

▼あゝ京都 ▼男の心 ▼血 ▼かつら川 ▲軍國女氣質

秋聲叢書

全一册 (紙數壹千餘頁) 正價金貳圓 小包料拾貳錢

本編目次

●氣まぐれもの ●春の月 ●見え坊 ●學士の戀 ●觀海寺の五日 ●戀物 ●みだれ心 ●老骨 ●狂學士 ●危機 ●ひとり樓 ●里の女 ●愚はぬ罪 ●一念 ●濁らぬ水 ●藪かうじ ●逐譯官 ●肖像畫 ●みち芝 ●お靜 ●古巣 ●花園

(續刊) ▽鏡花叢書 ▽美妙叢書

宮本桂仙君著

西洋男女交際法

全一册 紬珍美本 紙數三百三十頁 正價金廿五錢 郵稅六錢

我國由來禮儀の國と稱するも唯從來の作法を其儘今日應用すべきにあらず須らく日進の文化に伴ふて必要の變化を加へざるべからず著者久しく歐米の禮式を研究し其實驗に基き今後日本社會に必要なる日常の作法を青年士女に懸示し併せて日本禮式と交際法の連絡を適融す實に新日本人士が必ず一本を机右に備ふる要書といふべし。

東京美術學校教授 白井雨山君校閲
同校得業士鈴木、森田、牧野、三君合著

應用家庭美術

全一册洋裝中判並製三百廿六頁 正價金四拾錢 郵稅六錢

◉緒言研究の順序◉日本畫△沿革△畫筆及刷毛の種類外九目◉西洋畫△沿革△研究の順序△鉛筆畫の用器外二十二目◉彫刻△沿革△木彫の用具外八目◉象牙彫刻△用具△象牙の種類外二目◉彫金△鏨の製作法△象眼の方法外二目◉大理石彫刻△用具△錐揉の方法△大理石彫刻の應用◉塑像△油土と用具△塑像の用具△陶土原型の作法外九目◉鑄金△型土の製法△挽型の作法外八目◉蒔繪△沿革△用具△材料外九目◉陶磁器△沿革△陶土の製法外十目◉造花△用具△材料△順序外二目

近藤正一君著

女子職業案内

全一册三六判洋裝並製紙數四百五十八頁 正價四拾五錢 郵稅六錢

女子の生活●女子の獨立●女子の職業●小學校教員●中等教員●家庭教師●保姆●●閨秀文學家●女記者●閨秀畫家●音樂家●寫眞師●割烹教師●茶道教師●挿花の指範●女醫●看護婦●產婆●東京郵便局の事務員●電話交換手●日本銀行女子事務員●通信局電務課員●女子の商店員●三越呉服店の女店員●速記業●婦人の諸曲師範●編物師と編物教師●裁縫教師と裁縫師●繡工●女工

東京本町 博文館 振替口座東京二百四十番

女（後付の八）

●注意すべき入浴

=入浴の利害=
=身體の洗ひ方=
=湯上りの注意=



○湯上りの心地が爽やかなことは言ふまでもなく、衞生の上からいつて、非常な効能があるといふのは、血液の循環を盛にして、停滯する血液を緩和するから、身體の爲めには、此の上もない健康法になるのである。

○湯上りの心地、湯上りの容貌、此の利益を見て、入浴の害を認むるものはあるまい、否、入浴に害はないけれども、入浴によつて得べき利益を、入浴によつて失ふことがある、それは入浴の罪ではなく、入浴して身體を洗ふとき、その方法を誤まるからである。

○多くの人は、垢を落す爲めに入浴するのである、血液の循環は入浴の目的ではないやうに思つて居る、湯に入れば、垢を落さねば、湯に入つたものでないと思つて居るらしい。

○そこで垢すりなどで、無理に擦つて居ると鼠糞みたいなものが、出る、それが垢だと思つて居るが、それは垢ではなくて、皮膚の表皮である、皮を剝いて垢が落ちたと思つて居る、女房の惚れる姿の湯上りが、皮剝のした顔になる、これで湯上りの心地、湯上りの姿に誇らうといふのは、間違つて居る。

○入浴は衞生上、美容上の必要な行事である、附着した垢を去り、血液の循環を能くするのが目的であるから、無理に皮を剝いて、バチルスの侵入を導くやうなことをするのは、入浴の法に背いたものである。

○入浴の注意は、身體を溫めて、表面の垢を緩和に落して、皮膚を傷めないで、美しい皮膚の艶を出し、其の艶を一層よくして、永く失はないやうにするのが肝腎なことである。

○先づ入浴したら、ザツと洗ひ、垢の落た處で、湯から上り、綺麗に拭ひ、肌がガサついたと思つたなら、クレームレートを塗け、別に變りもないと思へば乳白化粧水レートをつけて置けば、湯上りの美しい色彩を保つことが出來るのである。

○倘御婦人方は、クレームレートをつけて、今度出來たレート白粉を塗れば、薄化粧も、濃化粧も思ひの儘所謂理想的お化粧が出來上るのである、此のレート白粉は、最新最善の無鉛白粉で、襟の汚れるやうな事もなく、第一長時間何んの變退もなく美しい色艶を保つから、一度此品を使へば、他の無鉛白粉の缺點が自然了解つて來るのである。

定價金貳拾錢●郵稅貳錢

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊸
明治44年4月（第11巻第5号、第11巻第6号）

2010年12月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社マイトベーシックサービス
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3906-4